

早稲田大学大学院教育学研究科
博士学位審査論文

夏目漱石を中心とする小説テクストの語りの表現特性

2012年2月

石 出 靖 雄

目 次

序章	1
1 論文の目的と射程	1
2 使用テキスト	2
3 先行研究と本研究の概要	2
第1章 語りの様相の考察	12
1 地の文（語り）を分類する意味	12
2 先行研究（直接話法・間接話法・自由間接話法）	13
3 語りの様相	24
3.1 テキストによる違い	24
3.2 地の文（語り）の分類	26
4 三種類の語りの使われ方	33
4.1 Aの語りとBの語りが関係している場合	33
4.2 作中人物の知覚を利用した語りが単独で現れる場合	37
4.3 語り手の立場での語りが単独で現れる場合	37
5 作中人物の知覚を利用して説明する場合ー過去の用例	39
6 語りの様相と文末表現のかかわり	40
7 感情・感覚の表現の様相	44
8 語りの様相から見る小説ごとの特徴	46
8.1 冒頭部、中間部、終末部の調査	46
8.2 冒頭15%の調査	59
9 むすび	60
第2章 動詞文・テイル文・デアル文（タ形と非タ形）が語りの表現に与える影響	62
1 地の文における文末形式「タ」の働き	62
1.1 「タ」の先行研究	62
1.2 本稿の立場	64
1.3 地の文におけるタ形文末の特徴	65
1.4 タ形と非タ形のまとめ	75
2 小説テキストにおける、文末形式による表現効果	75
2.1 動詞文末の使用による表現効果	76
2.2 テイル文末とテイタ文末の使用による文章特性	85
2.3 デアル・デアッタ文末の小説テキストでの使われ方	94
2.4 動詞文・テイル文・デアル文からみた『三四郎』と『道草』の特徴	100
2.5 推量系文末のタ形と非タ形の使用による文章特性	100
3 小説テキストにおいて、タ形文末と非タ形文末がどのように語りを構成しているか	111
3.1 『三四郎』におけるタ形と非タ形	111

3.2 『道草』におけるタ形の使われ方	115
3.3 『三四郎』『道草』におけるタ形・非タ形の使われ方のまとめ	119
4 むすび	119
 第3章 「のだ」文の使用のされ方がテキストに与える影響	122
1 「のである」「のであった」の使用による表現特性	122
1.1 「のだ」文の特徴	122
1.2 タ形と非タ形に注目する	122
2 テキストにおける「のだ」文の使われ方	138
2.1 小説における「のだ」文	138
2.2 「のだ」文の特徴	139
2.3 よく使われる形式	140
2.4 共起関係と指標	144
2.5 テキストにおける「のだ」文の使用法の傾向と、テキストによる特徴	146
3 むすび	147
 第4章 地の文と発言との関係	149
1 発言挿入の諸相	149
1.1 独立発言と引用構文発言	149
1.2 発言挿入の形式	150
2 引用構文発言	151
2.1 改行の方法	151
2.2 引用構文発言の特徴	153
2.3 どのようなとき引用構文になるのか	153
2.4 引用構文発言の特徴	156
3 独立発言	157
3.1 独立発言で、発言挿入の指標のある場合	157
3.2 発言挿入を示す指標がない場合	161
4 発言挿入法から見た『道草』の表現特徴	165
5 発言挿入法から見た『三四郎』の表現特徴	169
6 むすび	171
 第5章 物語場面と語りの機能	173
1 物語場面そのものの語りと物語場面そのものでない語りの特徴	173
1.1 対象とした用例	173
1.2 物語場面の先行研究	173
1.3 物語場面設定の提案	174
1.4 物語場面の認定基準	175
1.5 物語場面そのものを語らない語り	176
1.6 物語場面そのものを語る語り	177

1.7 物語場面そのものの語りはどのように語られるか	178
1.8 物語場面そのものを語らない語りはどのように語られるか	180
1.9 『三四郎』と『道草』における、 物語場面そのものを語る語りと物語場面そのものを語らない語り	184
2 『それから』における物語場面	194
2.1 物語場面そのものでない語りの挿入	194
2.2 物語場面そのものの語り	199
2.3 物語の時間的展開と物語場面	203
2.4 前半と後半の差異	203
2.5 『それから』の語りの特徴のまとめ	204
3 『彼岸過迄』における特徴	205
3.1 本節の目的	205
3.2 調査対象	206
3.3 『彼岸過迄』の章立てと時間	206
3.4 『彼岸過迄』において詳しく語られる部分	217
4 まとめ	217
 第6章 一人称小説『坊っちゃん』の表現特性	220
1 『坊っちゃん』の設定	220
2 『坊っちゃん』における語りの様相	220
3 具体的場面における様相	224
4 『坊っちゃん』における現在の設定の変化	227
5 『坊っちゃん』の語り手と聞き手（受信者）の設定を推測する	228
6 一人称小説と書簡の比較（『こころ』下との比較）	229
7 『坊っちゃん』の語りの特徴（むすび）	230
 結語	232
【補遺】テキストの校異について	234
【テキスト】	236
【既出論文との関係】	237
【参考文献】	239

序章

1 論文の目的と射程

小説の地の文を、語り手が聞き手に対して語る言語表現ととらえ、その言語表現の特徴を分析することを本稿の目的とする。小説の表現分析の観点として、以下の(1)語りの様相、(2)文末表現と語りの関わり、(3)地の文と発言の関わり、(4)物語場面、を設定し、その観点から個々のテキストを分析した。そのような小説テキストの表現の分析によって、小説テキストが日常の言語と異なる特性をもつことを論証する。そのうえで、個々の小説テキストにおける表現上の特徴を明確にする。

題材は、夏目漱石を中心とする小説テキストである。夏目漱石の『三四郎』『道草』を中心に、同じく夏目漱石の『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『虞美人草』『それから』『彼岸過迄』、森鷗外『青年』、芥川龍之介『羅生門』、川端康成『雪国』、三島由紀夫『潮騒』を対象とした。夏目漱石のテキストはバリエーションに富んでおり種々の表現を収集でき、また夏目漱石と他の少数のテキストに絞ることによって、ひとつひとつのテキスト全体の構造も視野に入れて考察できるためである。

日本語学の中の表現分野を射程としているが、近代文学と物語論の研究の成果も参照し利用している。ただし、語学的立場での表現研究であるので、文学的解釈の追究はしていない。

(1) 語りの様相

語り手は、物語世界や作中人物とどのような関係にあり、どのような立場で語っているのか。

いわゆる三人称小説を読むと、語り手は特定の作中人物に寄り添うような立場で語っていたり、作中人物を客観的に語ったり、作中人物の誰も知らないことを語ったりと、種々の様相で語っていることに気づく。語り手の語りが、作中人物の知覚・認識と混ざっているような語りもある。このような語りの種々の様相は、どのように分類されるべきで、それぞれどのように関連しているのか、検討する必要がある。従来、これらのことは、自由間接話法などの話法の問題としてとらえられたり、どのような視点から表現されているかという視点の問題としてとらえられたりしてきたが、確固とした理論は構築されていない。語りの問題として、捉え直す必要がある。

(2) 文末表現と語りの関わり

日本語は文末決定性という性質があり、また文末にはモダリティ（陳述）要素があると考えられるため、文末表現を分析観点とすることで、語り言語の何らかの特徴が見出せると考える。そのため、文末表現を特に注意して語りの表現を検討する必要がある。本研究では、特に、動詞文、テイル文末の文、デアル文末の文、「のだ」文などを、タ形と非タ形に分けて、それぞれ小説の語りにどのような表現効果をもつか検討した。

これまで、タ形文末については文法的に多くの研究がされてきた。本研究では、検討の範囲を小説の語りに限定し、その中でのタ形文末・非タ形文末の表現特性について論じた。糸井（1985）や井島（1989）等に、語りの時制としてのタ形の研究があるが、本研究ではタ形を時制とは違った観点から分析する。

(3) 地の文と発言の関わり

作中人物の発話は、地の文（語り）にどのように挿入されるのか。

地の文は、原則として語り手の語りと考えられる。その一方で、カギ括弧で括られた発話は、作中人物が発したものである。これら二つでは、発信者と受信者が異なっている中で、性格が異なるといえる。地の文（語り）の中に、性格の異なる発話というものが、どのように挿入されるのかというのは、検討しなければならないことである。また、発言がどのように引用されるかは、表現効果に影響を与えている。

ただし、本稿で検討したのは主にカギ括弧で括られた引用である。カギ括弧で括られない引用や話法の問題は扱っていない。

(4) 物語場面

小説の語りでは、出来事の展開を語ったり、ある場面の状態を説明したり、人物の心情を語ったり、あるいは以前の出来事を持ち出したりと、性質の違う語りが混ざって構成されている。どのような性質の語りがどのような順に語られるのかは、小説の語りを分析するうえで重要だと考えられる。また、ある場面は詳細に語られるが、ある時間帯は全く語られないで時間が経過したことになることがある。このように物語世界の内容がどのように語られているのかも着目する必要がある。

これまで、状態描写と事象の語りとが分けて考えられることはあったが、管見では、テキストの具体的な場面（シーン）で何がどのように語られているのかに言及した研究は見当たらなかった。そこで、本稿では物語場面という概念を設定し物語内容について検証する。

2 使用テキスト

題材は、夏目漱石を中心とする小説テキストである。夏目漱石の『三四郎』『道草』を中心に、同じく夏目漱石の『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『虞美人草』『それから』『彼岸過迄』、森鷗外『青年』、芥川龍之介『羅生門』、川端康成『雪国』、三島由紀夫『潮騒』を対象とした。特に、『三四郎』と『道草』を対比のために多く用いた。

テキストの引用は主に全集からとし、夏目漱石のテキストは岩波書店『漱石全集』（1993～2004）に拠った。原則として旧字は新字に置き換え、ふりがなは省略した。

3 先行研究と本研究の概要

物語・語りについての研究は、物語論（ナラトロジー）として、各国においてさまざまに研究されてきている。

一つは、ロシア・フォルマリズムに始まり、構造主義と関連を持ちながら発展していった物語内容の類型の研究が挙げられる。民俗学者プロップの『昔話の形態学』（1928 訳）から、ブレモン¹⁾の著作、トドロフの『文学の理論』（1965 訳）、グレマス『構造意味論』（1966 訳）などの流れである。

もう一つは、テキストとその語り方についての研究の流れである。20 世紀初め頃から本格的に研究されてきていて、バフチンの『言語と文化の記号論』（1980 訳）、ブースの『フィクションの修辞学』（1991 訳）、ハンプルガーの『文学の論理』（1986 訳）、シュタンツェ

ルの『物語の構造』(1989 訳)などの研究があり、1970 年代にジェラルド・ジュネットが『物語のディスクール』(1985 訳 a)『物語の詩学』(1985 訳 b)などで大成した。ジュネット以降では、アメリカのチャトマンのなどの研究がある。日本でも藤井貞和の『平安物語叙述論』『物語理論講義』、三谷邦明『源氏物語の言説』(2002)、山岡實『「語り」の記号論』(2000)などがある。

この後者の流れの研究は、語り手の性質・人称・知識、物語内容、語る時間・順序・視点などを主に問題にしてきた。これらの研究は、記号論の影響を受け、言語学をモデルにしている部分が多い。しかし、言語学そのものではない。

日本の山岡實や野村眞木夫は近代小説を研究対象とし、欧米の理論に精通してそれらを利用して独自の理論に発展させている。特に野村はテキスト言語学の立場から優れた言語学的アプローチをしている。野村の研究は『日本語のテキスト』(2000)という著書の示すとおり、物語論というよりはテキスト研究というのがふさわしい。

本論文は、日本語学の立場から、この後者の研究と同様に、日本の近代小説における語り手と物語世界の関係やその語り方について、その表現の特性の一面を解明しようとした試みである。調査対象を、夏目漱石を中心とした近代の日本語テキストとしているため、上記の欧米の理論も日本の古典を対象とした研究も、本論文にそのままあてはめることはしなかった。特に欧米の理論は英語・フランス語・ドイツ語などの言語を基にしており、日本語のテキストにそのままあてはめるには慎重にならざるを得なかった。そのため、テキストをいくつかの側面から調査し、そこから帰納して考察するという研究態度で論を進めた。物語論・テキスト研究の領域は、文学と語学にまたがるものであるが、本論文は語学的な表現研究・文章論という立場での研究である。

また、調査分析は特定のテキストを対象として行っているため、野村のような普遍的な理論にはなっていない。しかし、用例をテキストごとに集めて、その範囲の用例をすべて検討して帰納しているので、論者の恣意的な分類や思いつきには陥ることなく、そのテキスト全体の傾向を読み取ったと考えている。

なお、「語り」という用語は、書き言葉と話し言葉の両方において使い、広く言説を指すこととする。本論文では、小説テキストにおける言説を指すことが多い。また、小説テキストにおいて、地の文を語る主体を特に狭い意味で「語り手」と呼ぶ。小説テキストのような「語り」のテキストと日常の実用的な「報告」のテキスト²⁾では、表現方法が違う。本論文は、この小説テキストの表現の特性を明らかにするものであり、そのため小説の地の文を語る「語り手」には特に注目した。

原則として、物語世界に存在しない語り手が語る形式をとるテキストをモデルとしたが、物語世界の作中人物が語るテキストについても必要に応じて論じた。

具体的には、次のような問題を検討した。

[本研究の概要]

第1章 語りの様相

1 地の文(語り)を分類する意味(三人称小説の場合)

言語は、「誰かが、誰かに対して、何物（素材）かについて」語るものである。（時枝（1941）国語学原論）

地の文の言語現象を見ていくと、表現者が誰で、想定される受け手が誰なのか、日常言語のように単純でない場合が多い。個々に見ると、作中人物が語っているかのような語り、聞き手を直接の対象にしていなく感じられる語りなどもある。日本語学的に、それをどのように規定していくと合理的なのかという観点で検討し、これを整理するのが目的である。

個々の言語現象を整理すると、語り手が作中人物とどのように関わっているかがわかるはずである。この細かな現象の一つ一つには、表面上のそれぞれの表現者（語り手、作中人物など）と受け手との関係が構築されている。これらの言語現象を検討することによって、語り手は聞き手に対してどのような方法で表現しているかが明らかになる。

[小説テキスト]

作者 →

語り手

 → 聞き手 → 読者

種々の表現者と受け手

[日常のテキスト]

話し手・書き手 ———→ 聞き手・読み手

2 語りの様相

語り（地の文）の様相を、次の基準をもうけ分類した。

- (1) 文末表現は、誰が語る形式になっているか。
- (2) 作中人物の知覚をとらうか。
- (3) 作中人物が発言か心内で言語化した内容であるか。

語り手が語る形式	——語り手が知っていることを語る……………A語り手の立場の語り
	——作中人物の知覚を情報源として語る……………B-1 知覚利用の語り①
作中人物が語る形式	——作中人物が言語化していない内容……………B-2 知覚利用の語り②
	——作中人物が言語化した内容……………C内的独白、自由間接話法

3 語りの様相の傾向

以上の分類について、以下のようなことが認められた。

作中人物の知覚を利用した語りは、その場での知覚を語るなので、具体的場面における時間の流れを感じさせる表現になっている。そのため、物語世界のその場面に密着した語りということができる。語り手が事物を客体化して語る中に、作中人物の知覚を利用した語りが入ることによって、立場の違った語りが生まれるとともに、その場面が具体的に語られることになる。語り手の立場の語りは、作中人物の知覚を利用した語りと混合されて語られることによって、作中人物に焦点をあてた語りができあがることが多い。また、語り手の語りと言の組み合わせによって、展開が淡々と語られることがある。

テキストごとの傾向の違いも見られた。『道草』は『三四郎』より語り手の立場の語りが多く、『三四郎』は『道草』よりも作中人物の知覚を利用した語りが多いといえる。このこ

とによって、語りの様相が両作品の語りに影響を与えていると考えられる。『三四郎』は三四郎の感じたまま語られているような印象が、『道草』は健三が相対化されているような印象があるが、この結論と一致している。

第2章 動詞文・テイル文・デアル文（タ形と非タ形）が語りの表現に与える影響

第2章では、文末表現という観点から語りを分析するということを行う。日本語は文末決定性という性質があり、また文末には語り手の態度が表れると考えられるため、文末表現を分析観点とすることで、語り言語の何らかの特徴が見出せると考える。

動作性動詞文末の文は事態の変化を表し、テイル文末の文は継続している状態あるいは効果の継続している状態を表し、デアル文末の文は表現者の断定判断を表すと考えられる。このような事態の変化、状態、判断の表現が、テキストにおいてどのような特徴と表現効果をもって語られているか、タ形と非タ形に分けて分析する。

第1章で扱った分析とは異なる観点からの分析であるが、場合に応じて分類をクロスさせながら考えていく。

1 地の文における文末形式のタの働き

文末のタには、次の二つの特徴が考えられた。

①文の内容を対象化する。②時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる。

2 動詞文・テイル文・デアル文のふるまいと、そのタ形と非タ形の効果の違い

非タ形の動作性動詞の場合は、その場のその時点での知覚をそのまま表出しているが、タ形の場合は、その知覚を対象化した表現となっている。動作の終わった時点から動作全体を見渡した表現となる。そのため、タ形が連続すると事柄が順々に継起していく印象を与えるし、タ形の中で一部だけが非タ形になるとそこだけ臨場感のある表現となりクローズアップされる

テイル形は状態の継続を表し、表現者が外から事態を知覚して述べている。動詞の原形が事態を外から述べることももちろんあるが、テイル形では外から述べていることが明らかになっている。非タ形のテイル文末は、表現者が現場で事態を知覚・認識しながら語る表現で、知覚体験性・眼前描写性がある。他方、テイタ文末は知覚体験性を感じさせない表現となる。言い換えると、ある時点で継続していた状態を、時間の流れを捨象して、語っている時点から切り離して表している。

非タ形のデアル文末の文は、表現者の判断が表出された文と考えることができる。これに対して、タ形のデアッタ文末の文は、判断を表出する文にはならない。作中人物の判断の場合は、過去の回想か気づき・発見の用法となる。どちらの場合も判断の内容を対象化している。語り手の判断の場合は、判断に対する対象化が加わっていて、「（～である）ということを対象化して一つの事態としてまとめてとらえる」というようなことになるため、物語世界の事実を冷静に語るような表現になる。

3 テキストにおける各文末表現の使用のされ方と表現特徴

上記の文末表現の使用頻度と使用のされ方によってテキストの表現特徴が見られる。

『三四郎』は、テイル形とテイタ形がおおよそ 7 : 3 の割合、デアル形とデアッタ形がおおよそ 7 : 3 の割合、動作性動詞の非タ形とタ形がおおよそ 3 : 7 の割合で出現する。また、作中人物の知覚ではなく語り手の立場での語りであっても、非タ形が多く使われている。

以上のタ形・非タ形の表現効果と出現状況から、『三四郎』は、読者が物語世界の現場に臨場感をもって接する部分を多く持ったテキストだと考えられる。それに対して、ほとんどの文末がタ形である『道草』は、冷静で客観的に語っている印象を強く与えるテキストだと考えられる。また、『三四郎』の動作性動詞はタ形の方が多く、事態の継起はタ形の文で素早く展開していくことが多いことがわかるが、非タ形が混じることによって展開の速さが眼前描写によって抑えられていると考えられる。

4 推量系文末のテキストでの使われ方

小説では、推量系文末の文が使用されることは少ないが、表現者の判断が表される文末であるので、語りの中でどのように使用されるのか注目した。また、他の文末形式の調査と同様にタ形・非タ形の違いについても着目した。

推量系文末は、ほとんどが作中人物の認識・判断を使つての語りとなる。それらの語りは、事態や事物の説明と状態描写のときに用いられることが多い。つまり、作中人物の立場での認識・判断を用いて、物語世界の状態や解説を語っているといえる。

「だろう」「う」は、タ形にはならない形式であり、表現者の認識・判断を表出する。「だろう」は、説明として機能することが多く思考過程（内省）で使用される。

「ようだ」と「らしい」は、タ形の「ようだった」「らしかった」という形式をとることもある。タ形となり事態を対象化して語ることができることから、「ようだ（ようだった）」「らしい（らしかった）」が、事態を外から語る状態描写として機能することが多い傾向が理解できる。

第3章 「のだ」文の使用のされ方がテキストに与える影響

「のだ」文は先行研究でも注目してきた。小説テキストではどのようなふるまいをするのか。また、その使用のされ方でどのような表現効果が表れるのか、分析する。

1 非タ形とタ形の効果の違い

「のだ」文のタ形と非タ形の効果の違いを検討する場合、漱石の小説では「のだ」文のタ形が少なく十分でないので、『雪国』と『潮騒』を使用した。

タ形と非タ形の組み合わせによって、「ルのである」「タのである」「ルのであった」「タのであった」の4種類に分けることができる。

「タのだ」は、表現者が対象化してひとまとまりとして捉えた内容を聞き手に対して強く提示する。表現者の説明的態度が強く表れる表現である。「ルのだった」は、表現者がひとまとまりとして捉えていない内容を傍観者のように語る表現となっている。

『潮騒』は「のだ」文が多く、その中でも「タのだ」が多い。『雪国』は「のだ」文が『潮騒』ほど多くなく、その中では「ルのだった」が多い。

以上のことから、『潮騒』は「のだ」文によって語り手の知識や理解を強く聞き手に提示して説明することが多く、『雪国』は「のだ」文によって冷静に状況を中心に語る傾向があるといえる。

2 「のだ」文のテキストの中での機能

小説での「のだ」文には話題（主題）のある場合がほとんどである。話題と「のだ」文との関係から、「のだ」文の次のような機能が考えられる。

- ・「のだ」文より前の部分の一部の物・事を話題にした「のだ」文は、その物・事についての解説の挿入・付け加えとなる。話題にあたる部分の範囲が広い場合は、「のだ」文はその話題の内容を抽象的にまとめて表すことになる。話題が「のだ」文から離れた位置にある場合は、「のだ」文がそれまでのひとまとまりの内容の論理的帰結になっている。
- ・森鷗外『青年』の「のだ」文は、直前の内容に対する説明や、「のだ」文の内容自体を強調するときに使われる傾向がある。漱石『三四郎』『それから』『道草』では、「のだ」文の以前に必ず話題があり、またその話題が何であるかわかりやすく、論理的に明解な使い方が多い。

第4章 地の文と発言との関係

地の文との関わり方により発言部分は次のように分類されると本研究では考える。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 引用構文の一部（かぎ括弧がない場合）2 引用構文発言<ol style="list-style-type: none">2.1 発言の前後に地の部分がある場合2.2 発言の前に地の部分がある場合2.3 発言の後に地の部分がある場合3 独立発言<ol style="list-style-type: none">3.1 発言を指し示す指示語が地の文にある場合3.2 発言の引用を示す動詞(句)が地の文にある場合3.3 発言の引用を示す指標が何もない場合 |
|---|

1 引用構文発言と独立発言

引用構文発言の特徴として、次のようなことが指摘できる。

- ・あくまで、地の文の一部であるため、発言が語りの中に組み込まれている。
- ・発言が挿入されることにより、一文が長くなるので、説明的で饒舌な印象を与える。

独立発言の特徴として、次のようなことが指摘できる。

- ・地の文（語り）から独立していて、発言がそのまま読者に示される。
- ・地の文から独立しているが、引用を示す指標が本文中に示さることが多く、また前後の文脈により、発言は地の文の中に自然に位置づけられる。

2 発言挿入の方法

発言中心の部分と、語り中心の部分がある。それに応じて挿入の仕方も変わる。発言中

心の部分では、地の文は発言の説明として働く。

3 『三四郎』における発言挿入

引用構文発言が多い。一文も長くなり、饒舌な印象を与える。また、詳しい内容の引用動詞句を使うこともしばしば見られ、饒舌な印象を与える。独立発言は、シリアスな部分、突き放した部分に用いられる（発言を示すだけなので、冷静で客観的な印象を与える。）。

4 『道草』における引用

指示語がある独立発言が多い。そのため、語ることよりも、客観的に示すことが多いといえる。また、具体的な場面を設けてその場の発言をすべて引用するということは少ない。語りの流れに沿って必要な発言だけを独立発言で引用しているといえる。

第5章 物語場面と語りの機能

1 物語場面そのものの語りと物語場面そのものを語らない語り

はじめに、物語場面そのものの語りと物語場面そのものを語らない語りに大別して、語りの特徴を検討した。

物語場面とは、三人称小説においては、物語内容が語られていく過程で、語られつつある物語世界の「いま」（物語世界上の現在）、「ここ」の状況として、具体的な時間と場所が設定される場合を指すこととする。一人称小説においては、回想的に語られる中心的物語内容の生起する時間と場所が具体的に設定されている場合を指すこととする。具体的な物語場面内の語りであっても、物語場面そのものを語る語り、物語場面に関わるが物語場面そのものを語っていない語りが認められる。物語場面そのものを語っていない語りには、物語場面内で語られる場合や、まったく具体的物語場面から離れてその物語世界の解説等を語る場合や、大括みに出来事が語られ一気に物語世界の時間が経過してしまうような場合がある。しかし、大括みな語りの場合以外で、まったく物語場面から離れている語りは、三人称小説ではあまりみられない。三人称小説の「物語場面そのものを語らない語り」の多くは、物語場面内のものである。

物語場面そのものを語らない語りについて、物語場面の「いま」「ここ」を中心として時間的な基準で分類すると、次のようなものは物語場面そのものを語っていないと認められる。①物語世界の「いま」から見て過去のこと（三人称小説の場合）。②事物の性質、一般的な習慣。③物語世界において繰り返し行なわれていることや、日常的な状態。④大括みに展開をとらえて語ること。以上である。この中で、④は他の3つと違い物語世界で進行している「いま」の語りである。本論文では、④をやや性質の違うものとした上で、①～③を広い意味で物語世界の物事を解説する語りとして位置づける。その上で、さらに①を現在と対比されるものとしての過去の語り、②と③を一括して具体的時間に関わらない語り、と考えることとした。

物語場面そのものを語る語りについては、語っている内容によって、①事象の語り、②状態の語り、③説明の語り、④説明的状态の語り、の四つの場合が考えられた。

以上のような分類の観点から、『三四郎』と『道草』を分析したところ、次のような傾向

が見られた。『三四郎』は、物語場面の語りを積み重ねることによってストーリーを展開することが多い。また、物語場面そのものでない語りは、短い解説として挿入されることが多い。『道草』は、物語場面そのものを語らない語りが多く、特定の時間に関わらない語りや過去の語りによって、物語場面を相対化しながら語っている。また、物語場面の物・人の背景を重視している。このように、『三四郎』と『道草』の傾向の違いが見られることから、これらの分類が有効であることがわかる。

2 『それから』における物語場面

前節の分類を利用して、『それから』の表現上の特徴を検討するのが目的である。

『それから』は、全体的に物語場面そのものでない語りが多いため、ストーリー展開が速くない。その理由の一つには、具体的時間に関わらない語りが多いことが挙げられる。これらは、具体的事態の背景である人物や事態の事例や、次の物語場面のための前提の説明として機能している。もう一つには、過去の語りが多いことが挙げられる。これは、現在の物語場面の背景説明として機能している。このとき、「のだ」文によって、過去のことを語る意図が説明されることが多い。

『それから』の物語場面は簡潔に語られることが多い。『それから』の物語場面は、状態と解説が少なめで、物語場面で語られる内容は短い時間帯での出来事が多い。これらのことから、『それから』の物語場面の内容は少ない分量で語られる傾向がある。それに対して、心理描写の設定は多くなっている。

このようなことから、『それから』は、『道草』に似て論理的に説明する印象が強く、『三四郎』の写生的に物語場面を積み重ねるような語りと異なるといえる。

3 『彼岸過迄』における物語場面

後期三部作は、主人公でない人物が焦点となって語りが始まる。そして、後に核心の主人公が焦点となる語りとなる。また、『彼岸過迄』のはじめは推理小説に似た構造を持っている。このようなテキストでは、後半の核心に向けて物語が進んでいく。このような構造のテキストであれば、物語場面の設定の傾向がわかりやすいだろうと考え、『彼岸過迄』を扱った。

『彼岸過迄』においては、『それから』の分析と違い、具体的な物語場面内の語りと、具体的物語場面から離れた語りに大きく2分して考察する。そして、物語場面はどのようなときに設定され語られるのか、物語場面の中では、どのようなときに分量が多く詳しく語られるのか、ということを明らかにすることを目的とする。

『彼岸過迄』における物語場面の特徴については次のようなことを指摘した。

はじめは、物語場面に設定されたり詳しく語られたりするの、主人公の敬太郎の意識の流れとは無関係な、作者の設定したテーマに関係している部分であった。その後、敬太郎の意識の流れに沿って詳しく語られていく。そして、最後には、敬太郎から離れ、敬太郎の興味の強さに関係なく、すべて詳しく語られるようになる。後半になるにしたがって、単位時間当たりの語る分量は増加していく。それは、語りの核心に向かって語りが集約されていくからだと考えられる。

また、後半は読者の知りたいことと敬太郎の興味が重なっていく。敬太郎の意識に沿って語られるので、語り手のあえて語らないことがあってもそれが自然に感じられる。これは、推理小説にも当てはまる手法ではないかと考えられる。

初めの「風呂の後」の段階では、敬太郎の意識は、この後話題の中心になっていく事柄（テーマ）との関わりが多くない。そのため、「風呂の後」では、物語場面で語られる内容が多くなく、単位時間当たりの語られる分量が少ない。敬太郎がひとつの事態にのめりこんでいく段階になると、作者の設定したテーマと敬太郎の意識が重なり、語る分量が増えていったと考えられる。さらに、伏線となる事柄は特に詳しく語られるようになる。その際、状態描写などの挿入のされ方、解説のされ方に影響が出てくる。

そして、最後は、発言部分はほとんど引用されるようになり、敬太郎の意識から自立して事態が詳しく語られていくのである。

第6章 一人称小説『坊つちやん』の表現特性

これまで、三人称小説について検討してきたが、一人称小説についても『坊つちやん』を取り上げ、これまでの延長として触れておきたい。

1 『坊つちやん』の語りの様相

『坊つちやん』は、語り手が過去の出来事を語る設定だが、実況中継のような語りになることがある。そこで、『坊つちやん』における語りの様相を、三人称小説の語りの様相の分類をもとにして以下のように設定した。

- | |
|--------------------|
| A：現在の自分の立場で当時を語る |
| B：当時の自分の立場で語る |
| C：当時の自分になりきったように語る |

具体的物語場面では、語りの様相が「Aで場面設定→BやCによる具体的描写、Aをときどき挿入」というパターンで変化することが多いことが観察された。また、語りが細部に至るに従って、過去を語っているという意識が薄くなることが多い。また、途中で、語っている現在の設定が変化する部分がある。

漱石の初期の一人称小説である『坊つちやん』では、語り手である作中人物が現在の立場から語るだけでなく、当時の自分になりきって語ることがあり、いわゆる三人称小説の語りと同様に多様な語りの様相をもっていることが確認された。その点で『こころ』のような書簡や手記という設定とは異なるといえる。

2 『坊つちやん』語り手と聞き手の設定を推測する

語り手「坊つちやん」が物語世界の特定の人物に語っているという設定は、次のような点から考えにくい。

- ・手紙もめったに書かない「坊つちやん」が長文を書くということが不自然。
- ・当時の自分になりきるなど、現在から過去を語っているという設定が崩れることが多い。

- ・特定の誰かに関わる情報は一切語られていない。
- ・直接語りかけるような表現が多くみられない。

このようなことから、次のような設定が考えられる。

- ・語り手「坊つちやん」が想定している聞き手は、このテキストを読んでいるだろう多数の読者（実際の読者とは違う）。その点で、設定自体がフィクションだといえる。
- ・実際にテキストを書いてはいないという設定である。
- ・三人称小説の語りも、物語世界に存在しない語り手を設定している点でフィクションである。『坊つちやん』の聞き手と、三人称小説における想定される聞き手は、同じような設定だと考えられる。

【注】

- 1) アダン（2004）に詳しい。
- 2) 金水（1989）で指摘されているが、第2章で詳述する。

第1章 語りの様相の考察

この章では、小説の地の文の様相を数種類に分類し、それぞれの特徴と出現の仕方を検討する。本稿では、小説の地の文を語り手が聞き手に対して語る言語表現だと考えるので、地の文の様相を分析するということは、小説の語りの様相を分析することになる。

これまで小説の地の文は自由間接話法などの話法の問題と関係づけて論じられることが多かったので、1節では自由間接話法と小説の地の文との関係について論じる。2節では、地の文（語り）の分類の基準を示した上で、地の文（語り）の分類を試みた。3節では、2節で分類した語りの様相を文末表現と関係づけて論じた上で、それぞれの語りの様相が実際のテキストではどのようにあらわれるのか、またその様相の違いが小説テキストにどのような影響を与えるのか検討した。

1 地の文（語り）を分類する意味

時枝（1941）で、次のように指摘する。

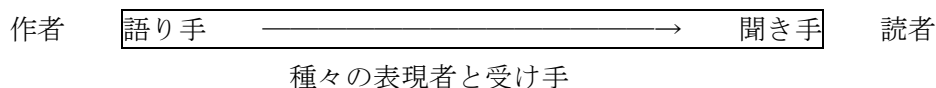
- 【1】言語は、誰か（主体）が、誰か（場面）に対して、何物（素材）かについて語ることで成立するものである

当たり前のようであるが、まさにそのとおりであり、小説テキストも言語である以上、原則としてこのことが成り立つはずである。

しかし、地の文の言語現象を見ていくと、表現者が誰で、想定される受け手が誰なのか、日常言語のように単純でない場合が多い。個々に見ると、作中人物が語っているかのような語り、聞き手を直接の対象にしていらないように感じられる語りなどもある。日本語学的に、それをどのように規定していくと合理的なのかという観点で検討し、これを整理するのが本章での目的である。

それらの個々の言語現象の一つ一つには、表面上のそれぞれの表現者（語り手、作中人物など）と受け手との関係が構築されている。そして、結果的には地の文として、語り手から聞き手に対する表現となっている。この細かな言語現象を検討することによって、テキストの語り手は聞き手に対してどのような方法で表現しているかが明らかになる。また、語り手が作中人物とどのように関わっているかわかるはずである。

[小説テキスト]



[日常のテキスト]



小説の地の文は、言語の話し手と読み手の設定の点で、日常生活で使われる言語と違い

がある。日常生活では、話し手が読み手（聞き手）に対して話すという前提が当然となっているが、小説の地の文では、語り手が読者（聞き手）に語るという前提はあるものの、語り手は架空の存在であることが多く、読者（聞き手）も実際の読者ではなく架空の読者（聞き手）が想定されていることが多い。つまり、多くの場合、架空の語り手が架空の読者（聞き手）に対して語っている物語を、実際の読者が読むという構造になっている。さらに、この架空の語り手が、語る内容をどうして知っているのかは問われない。また、語り手の語っている場がいつどこなのかも問われない。このため、語り手のもっている情報や語られる時制の問題などが、日常言語と異なるのである。

そのため、いわゆる三人称小説の地の文は、日常生活の言語とは区別して考える必要がある。工藤（1995：19）では、日常生活の言語を「発話行為の場へのアクチュアルに関係づけられたテキストのタイプ」とし「はなしあい」のテキストと呼び、小説の地の文などの「かたり」のテキストから区別している。同様に、金水（1989）では、「日常的対話や聞き手にある状態を知らせる行為またはその言表」を「報告」と呼び、「小説や物語の地の文」を「語り」と呼んで区別している。

第2章で詳述するが、「報告」のテキストでは形容詞の人称制限が起こるが、「語り」のテキストでは「報告」よりは緩和されるという違いも見られる。また、よく知られていることとして、「語り」の文では、文末表現を「た」にすることが多いということが挙げられる。

いわゆる三人称小説の語り手は、日常世界の事柄を何でも知っているとして設定されることが多い。神の視点とも呼ばれる設定である。このような設定では、語り手は作中人物の心理も語ることができるし、これから起こる事柄を知った上で語っていることもある。また、作中人物の知覚した内容も語ることができる。これらの結果、作中人物の知覚や心理と、語り手の語る内容が密着してくることがある。そのため、語り手の言説である地の文（語り）は種々の様相をもつことになる。

このような三人称小説の地の文（語り）の様相を整理するときに、これまでは自由間接話法という話法の問題として説明されることが多かった。これは、欧米の言語の語りの研究を日本語の語りに当てはめたものである。しかし、日本語の語りと欧米の語りが同じ理論で説明できるかどうかについては、現在の段階で判断することが難しい。そこでまず、日本語における自由間接話法研究について簡単に検討したい。

なお、本研究では「語り」のテキストの典型として三人称小説を主に取り上げる。一人称小説は、日常の「報告」のテキストと「語り」のテキストの特徴を併せ持っていると考えられるので、必要に応じて検討する。

2 先行研究（直接話法・間接話法・自由間接話法）

2.1 自由間接話法とは

自由間接話法とは、体験話法、描出話法とも呼ばれるもので、ごく簡単に言うと、間接話法が、伝達詞（「…と言った」の「と言った」のような表現）がないまま、テキストの地の文の中におかれた表現のことである。一般的に、次の例文の下線部のようなものを指す。テキストの中の「彼女」というのはガードナー夫人のことである。なお、この例文は野村

(2000) で引用されているものである。

- 【2】彼女はさらに夫のゴム裏の靴を法廷に提出したが、それはずいぶん長い間はいた形跡がなかったし、血痕もなかった。そもそも血痕はガードナーのどの着物にもなかったのである。

彼女は事件の夜の物語に入った。ガードナーはたしかに十時頃ちょっと外へ出たが、それは雷雨がくる気配があったから、空を見るためだった。それから寝室へ入ったが、子供達が雷におびえたので、二人は眠ることが出来なかった。隣家の人が家の中を歩き廻るのを聞いたというのは、彼女の足音で、夫は寝室を出なかった。一晩中、歯が生えかかって、むずがる子供を抱いていた。

ガードナー夫人は雷雨のため一晩中眠れなかったのだから、夫が家を出たら、気づいたはずだと言った。だから自分は夫が無罪なのを知っているのだ、と彼女は言った。

(大岡昇平「妻の証言」『大岡昇平全集 第5巻』(1995) 筑摩書房：569)

下線部はガードナー夫人の話した内容であるが、別の人物が内容を整理して再現した語りとなっている。そのため、途中でガードナー夫人自身のことを「彼女」と表現している。

これまで自由間接話法は種々の考え方がなされてきている¹⁾。その中でも、自由間接話法の研究に大きな影響を与えた保坂・鈴木(1993)に沿って、自由間接話法の理論をみていくことにしたい。

2.2 保坂・鈴木(1993)

保坂・鈴木(1993：25)では、自由間接話法を体験話法と呼び、その成立する要件を次のように示している。

- 【3】要件(1)当該の部分テキストが、形態上は登場人物のパートなのか、語り手のパートであるのか識別がつかない、あるいはそのいずれのパートであるとも読者によって読みとられるように、テキスト構成がなされていること。

要件(2)そのためには、登場人物の思考・発言のパートの人称・時称が語り手の視点からの人称・時称に転換され、語り手のパートの地の文に同化していること。ただし、欧米語にあつては時称が転換されていない場合もある。日本語においては、時称の転換はふつうは行なわれない。

要件(3)通常は、登場人物の思考・発言のパートは、その前後の文脈に、それがだれの思考・発言であるのかを明示する伝達詞(それは必ずしも「と考えた、と言った」というような伝達動詞である必要はない)が欠如していること。

要件(4)それにもかかわらず、当該の部分テキストが登場人物の思考・発言であると、読者が読みとれる識別標識が、その部分テキストの内かその前後に必ずおかれていること。

そして、同(26-28)で、間接話法、自由間接話法の形態的特徴を次のように述べている。

【4】間接話法：人称の転換、伝達動詞の二つが明示されている思考・発言の表現形態である。この二つのうち、人称の明示的転換が欠けていることもありうるが、その場合は、伝達動詞の付加はどうしても必要である。

体験話法：直接話法を成立させる引用記号、1人称、伝達動詞の三つ、あるいは間接話法を成立させる伝達詞の付加が欠けている表現形態である。体験話法は、直接話法と文法形態上の共通点をもたないが、人称の転換もしくは人称代名詞・所有代名詞のゼロ記号化という点では、間接話法と共通した文法形態をとる。ただし、体験話法を登場人物の思考・発言であると読みとってもらうための手がかりとして、直接話法内そのままの直指詞（Deixis）と話法の副詞（Abtonungspartikel）、日本語の場合とはとくに直接話法そのままの文末助詞を直接話法と共有する。

この理論を筆者なりに捉え直してみたい。

まず、直接話法と体験話法の違いを見てみたい。この保坂・鈴木（1993）の体験話法（自由間接話法）の規定からは、形態的に体験話法と自由直接話法の相違点を探すことはできない。つまり、この規定によると、地の文において内的独白と体験話法の形態的違いはないといえる。

間接話法について、砂川（1989）では「直接引用の場合は元の発言や思考の場がかなり忠実に復元されなければならないのに対し、間接引用の場合は多かれ少なかれ、もとの発言や思考の場が引用を行う発言の場に引き寄せられた形に調整されなければならない。」とし、余・門倉（2000）では、「元話者の発話の『場』を基点とする表現（ダイクシス表現）を客観的表現に直すことによって、元話者の『場』を伝達者の『場』に引き寄せ」ることによって、間接話法が成立するとしている。その上で、余・門倉（2000）では、次のような直接話法と間接話法の例を提示し、「明日→今日」、「ここ→306 教室」「試験をします→試験をする」という時間、場所、丁寧体から普通体、の変換を指摘している。

- 【5】・先生は、「明日、午後 1 時からここで試験をします」と言った。（直接話法：石出注）
・先生は、今日午後 1 時から 306 教室で試験をすると行った。（間接話法：石出注）

実際の小説の地の文でときどき見られるのは、丁寧体から普通体に変換されたと思われる文末表現である。実際の文章において時間や場所を表す表現が必ずあるわけではないが、文末表現は必ずあるので、文末表現に注目することは有効である。このように元の発言者が聞き手に対して丁寧語を使っていると考えられる表現の場合は、文中に人称代名詞がもしあった場合には変換される可能性がある。人称代名詞が変換される場合は、間接話法であると認められる。

このようなことから、自由直接話法（内的独白）と体験話法の違いを考えることができる。文末表現において、丁寧表現などの、元の受け手に対するモダリティ要素が変形され、そのために人称代名詞が変換されると考えられる場合は直接話法ではない、つまり内的独白でないといえる。実際の小説の地の文において、この用法以外で内的独白と体験話法の違いを区別することはむずかしい。余・門倉（2000）でも指摘されているが、直接話法で

あっても「元話者の発言の忠実な再現」ではありえないからである。そのため、正確に言えば、引用を行う伝達者の場に引き寄せられた形に調整されたことが明らかな表現だけしか、間接話法・自由間接話法と認定できないはずである。

さて、保坂・鈴木（1993）の論に戻りたい。保坂・鈴木（1993）では、内的独白と体験話法の差異についての明確な説明はないが、次の【6】の(2)のような例は体験話法としている。

- 【6】 ⁽¹⁾順二郎は庭の方に顔を向けた。雁来紅がまだ黒ずんだ赤さを残している。日があ
たとと深紅にかがやく。⁽²⁾多実子は母が不潔だという。不潔ということが、若い女にと
って、何よりも耐え難いことであるらしい。しかし、不潔とは一体なにか。不潔に関
する一定の規準などというものは無いのだ。ただ、不潔と感ずることが不潔である。要
するに母が不潔だというのは多実子の主張であるにすぎない。……

（後略）

（石川達三『自分の穴の中で』『石川達三作品集第十一巻』（1972）新潮社：35）

(2)は、順二郎の思考内容である。この(2)において、日時、場所、文末表現、人称の表現はどれも順二郎の立場からのものであり変換はなされていない。しかし、これらの表現を体験話法としているのは、(2)の文章が、順二郎の思考そのままではなく、順二郎の思考を要約したような表現であるように、何となく受取れるからであろう。

これらのことから、保坂・鈴木（1993）では、元話者の完全な再現と思われえないものはすべて間接話法や自由間接話法にし、直接話法や自由直接話法（内的独白）とはしないと考えられる。

次に、保坂・鈴木（1993）における、内的独白以外の地の文と体験話法の区別について検討したい。次の例は保坂・鈴木（1993：31）だけでなく、山田（1957：62-63）徳沢（1965：57）で体験話法として引用されているもので、欧米の理論にもあてはまる。

- 【7】 さっき、彼は別れた妻から久しぶりに手紙を受け取ったところだった。

その手紙を、彼は五回もくり返して読んだ。短い手紙だったから、文章は全部暗記していた。桂子からの縁切り状だった。一度縁を切って去った女からの、二度目の縁切り状だった。

（いつも愛情にみちたお手紙を頂いて、感謝して居ります）と書いてあった。わかり切った嘘だ。彼を怒らせないように、そつとなだめさとしているのだ。（いろいろな事情がございまして、今後はお手紙を御辞退申さねばなりません。……）それが解らないのだ。いろいろな事情とは、どんな事情であるのか。肺病患者から手紙が来るうささに耐えられなくなったのかも知れない。（どうぞ一日も早く健康になられますように、陰ながら祈って居ります。）……早く死んでくれという意味だ。桂子はそういう薄情な女だった。順二郎は別れてからもひたすら追慕の心をこめて手紙を書いて来たけれども、彼女を信じてはいなかった。信じない女に、愛の手紙を書き綴ることの虚しさ。……その虚しさを知りきって居りながら、虚しい自分の努力に夢を託していたのだった。無実な夢ではないか。いわば何の力もない、何の影響もない、鳥の

なき声のようにむなしい恋文ではなかったか。それをすらも桂子は拒絶しようというのだ。

(石川達三「自分の穴の中で」『石川達三作品集第十一巻』(1972)新潮社：124)

下線部は、地の文の中にある「彼(＝順二郎)」の心内の内容であるが、一人称の表現が「彼」と変換されていることによって、内的独白(自由直接話法)でないといえる。その点で、間接話法が伝達詞なしで地の文にあることになり、体験話法(自由間接話法)だと認定できる。しかし、複数の研究者がこの例文を挙げていることから、このような規定どおりの日本語の体験話法は、ほかに例が多くないのではないかと考えられる。また、筆者にはこの例文が不自然に感じられる。理由は次のとおりである。文末の「のだ」は強い断定判断をあらわしており、順二郎はほぼこの文のとおり、心の中で言語化を行って、自分の判断を表出していると考えられる。この場合であれば、「俺を怒らせないように」と言語化しているはずである。直接話法を間接話法にする理由としては、語り手の立場からも言語化する必要性があるからだと考えられる。たとえば、既出の【2】では、作中人物の発言を要約するという言語化があった。また、作中人物の心理を表現する場合に、語り手がその心理を整理して言語化する場合などもある。しかし、この用例の場合、該当する文は順二郎の内的独白そのものだと考えられ、語り手がこの文に関わる必要がないと思われるのである。

また、次のような例も体験話法として挙げられている。

【8】 当時、日本の貿易船は、重要輸出品として、かならずといっていいほど椎茸や煎海鼠のたぐいを積んでいた。ある日、

「椎茸はないかい」

と、船まで呼ばわった老僧がある。あとでわかったことだが、杭州湾岸の阿育王山広利寺(中国禅の五山の一つ)の禅僧で、一山の炊事係(典座)をつとめる人物であった。

かれは、西蜀(四川省)のうまれである。

郷里を離れて四十年、各寺を遍歴しつつ修行し、ことし六十一歳になる。

あすは、五月五日の端午の節句である。一山の雲水に麺汁(汁の麺ということか)をふるまわなければならぬため、そのだしをとる椎茸を買いに来たのである。(この一事で、後世のわれわれは、上方料理でだしとして椎茸をつかってきたことと、中国の精進料理でのそれとが共通していることを知ることができる。)

船中の道元は、禅客に飢えていただけに、老典座を船に招じた。(後略)

(司馬遼太郎『街道をゆく』18「越前の諸道」、朝日文芸文庫：39-41)

保坂・鈴木(1993)では、下線部が体験話法とされている。「ことし六十一歳になる」の「ことし」と、「あすは、五月五日の端午の節句である」の「あすは」という表現を重く見てこの部分を老僧の発話内容としたのである。しかし、老僧自身のことを「かれは」としていることから、老僧の発言そのものでないことは明らかである。そこで、体験話法という認定をしたということのようである。また、下線部がタ形でないことも影響しているようである。

だが、筆者には、「かれは、西蜀（四川省）のうまれである」が語り手の説明のように受け取れる。言語的直観により、「かれは」の部分が間接話法になったための人称の変換とは受け取りにくい。もちろん、その情報はその老僧から聞いたものであろうと理解したうえである。もし、筆者（石出）のように考えてよいとすると、続く文も体験話法と言い切れないように思われる。

また、次の用例の下線部も体験話法としている。

- 【9】 中島敦の「山月記」はひところ高校の教材にもとり上げられ、意外に若い世代にも知られた名小品である。⁽¹⁾一人は官僚エリート。方や幼少の頃より神童のほまれ高く、将来の地位は約束されたかに見えながら、『文学』という魔性にとりつかれ、ついにあさましい獣も堕ちてしまった詩人。出張を命ぜられた官人は、月夜に人喰い虎の出る峠を越さねばならなくなる。行方知れずになった息子を捜す老母と宿で一緒になり、共に月の出ぬ前の山道にさしかかる。⁽²⁾不意に彼らの前をよぎったものは何か。

⁽³⁾虎は叢の中にかくれて出て来ようとしぬ。⁽⁴⁾少年時代から無二の親友だったその声をどうして忘れ得よう。⁽⁵⁾二人は少年の頃読み合った詩を吟じ、虎は叢の中で慟哭する。⁽⁶⁾月が出ると虎は人の心を失い人を襲う。⁽⁷⁾その前に立ち去れという異形の友に二人は心ならずも別れを告げるが、その前に一目だけ姿を、という老母に、虎は峠を下ってから振り返ってくれという。⁽⁸⁾月が出る。⁽⁹⁾官人と老母が振り返った時、断崖の上に一頭の猛々しい虎が月に吠えていた。

（朝日新聞、1990年9月3日夕刊）

下線部(2)と(4)を体験話法とする説明として、「(2)においては要約再現者が、官人と詩人の老母の二人になりかわって、あるいは二人に同一化して、『彼等の前をよぎったものは何か』との疑問を申し述べているからである。つまり、(2)においては、登場人物の思考のパートと、要約再現者のパートが『彼らの前を』という3人称の明示によって、わかちがたく重なり合っている。」「(4)は、虎の思考を再現する体験話法である」と論じている。

(2)は、語り手が、作中人物の気持ちを代弁したかあるいは同一感情をもったために「彼等」という表現になったという説明に受け取れる。このように、語り手が作中人物の気持ちを代弁するか同様の感情をもつかしたように受取れる表現も体験話法として認定している。(4)は、これが虎の思考だとするならば、直接話法（内的独白）でなく間接話法と認定する理由が明確でないようにも思われる。また、(4)も(2)と同じように「なりかわり」「同一感情」という説明で解釈することも可能のように思われる。

最後に、次の例では(5)(6)を体験話法とした上で、(4)を考察している。

- 【10】 ⁽¹⁾受話器を架台に戻しながら、七瀬は茫然として手にしたカードを眺めた。⁽²⁾早まった、と彼女は思った。⁽³⁾ファイル・ブックの金具をはずす手間を惜しんで引きちぎったため、カードの隅のパンチされた部分が破れていて、⁽⁴⁾今さらもとに戻すことはできなかった。

⁽⁵⁾もし新三が七瀬の父のことを思い出し、ファイルを見てカードの脱落を発見した場合、だいいちに七瀬を疑うだろう。⁽⁶⁾あるいは七瀬が何かを隠そうとしているか、詮索しは

じめるかもしれない。

(筒井康隆集「家族八景」『筒井康隆全集第11巻』(1984):293)

(5)(6)は、一人称の名詞が三人称に変換されていて、例文【2】【7】と同様に体験話法の規定どおりの文といえる。(4)について、保坂・鈴木(1993)では、「原文(4)で、『今さらもとに戻すことはできなかった。』と『…た』止めの地の文形式になっているものが、英語訳(4)で”Now it would be impossible to put the card back.”と、『自由間接話法』にうつされているのが興味深い。それはたぶん、『今さら』が口語体であること、『カードをもとに戻せない』と七瀬が考えたこと、そして最後に、日本語との表現構造と違いによるものであろう。」と述べている。文末がタ形であるということにより(4)を体験話法としてはいないものの、体験話法と関連したものと考えているようである。

ここまで検討してきたところでは、保坂・鈴木(1993)は、文中の人称の変換、時間副詞の変換、文末形式という形態を重んじて体験話法を規定していると考えられる。そして、語り手の語りと考えてもおかしくないようなときも、【8】【9】のように、作中人物の発言・考察が行われたと思われる部分で、人称や時間副詞や文末形式が作中人物からみて矛盾がなければ、語り手の語りとは考えず間接話法と考える傾向がある。保坂・鈴木(1993)では、話法ということを正確にとらえ、地の文の中に間接話法と認定できるものが埋め込まれていることを発見し、日本語にも体験話法が存在することを示そうとしている。しかし、「形態上は登場人物のパートなのか、語り手のパートであるか識別がつかない、あるいはそのいずれのパートであるとも読者によって読みとられる」の意味するところは、文末形式は作中人物の立場のものと考えられるのだが、語り手が発話に手を加えているので作中人物の言葉どおりではなく、どちらのパートか決めかねるということだと考えられる。【10】の(4)を体験話法と認定することに躊躇していることから、タ形文末によって語り手の語りであると認められるが作中人物の意識を語っているような表現は、正式な体験話法とは認めないという態度だと考えられる。あくまで作中人物の発話や意識を「引用した」形式の表現を体験話法と認定するという考えをくずしていない。つまり、文末形式の表現が作中人物の立場でのものであるものだけを体験話法としているのである。

また、その自由間接話法の表現が誰に向けられたものであるかという考察はなされていない。あるいは、話法や思考の引用であるため、発話であれば話し相手に対して、思考であれば自分に対しての表現ということが当然となっていると考えられる。伝達詞(「と言った」「と思った」など)がないまま地の文になっているのであるから、受け手は誰なのかもあわせて考える必要があるはずである。さらにまた、自由直接話法(内的独白)と体験話法の差異が示されていない。これらの傾向は、欧米言語にある自由間接話法を日本語にあてはめるところに研究の出発点があったためだと考えられる。また、【10】の(4)のような例については、野村(2000)などでとり上げられている。

2.3 野村(2000)

野村(2000)では、自由間接話法を描出表現という用語で位置づけ、以下のように規定している。

【11】描出表現とは、「と」などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテキストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばかりからテキストの参加者をさししめすモードで表現する類型である。

(野村 (2000 : 251))

ここで、コミュニケーションの参加者というのは、小説テキストの地の文であれば語り手と読者を指し、テキストの参加者とは作中人物を指すと考えられる。

野村 (2000) では、描出表現にはいろいろのレベルがあるとし、その上で、テキストの中の指標をもとにして、慎重に描出表現かどうかを判断している。その中で、保坂・鈴木 (1993) では体験話法と言い切らなかった【10】の(4)のような文も、描出表現としているようである。次の例はそれに類するものである。

【12】 ①次の日はたま雲ひとつない晴天になった。

②波子は宿泊所の部屋から一日じゅう空と山を眺めていた。③散歩道から見えた、あの彼方の山脈地帯が、すこし視野はせばまるが窓からも見えた。

④朝のうちは、光の加減で遠近感がなくなり、白い山塊が奇妙に扁平にみえたが、正午あたりから、同じ眺めがすっかり違ったものとなった。⑤一続きの連々とした山塊とみえていたものが、まるで、山々が遠くへふいに飛びのいたかのように、前列のもの、中列のもの、後列のもの、そして背景に溶けるほど遠方のものというふうに、散らばってしまっている。⑥一つ一つが巨大な白い山をなしていて、間にただよう白いもやのなかに溺れているふうにみえ、上方は、どこまでも真青で、強い光線が縞をなして満ちている。

(高橋たか子『装いせよ、わが魂よ』新潮社 : 306)

野村 (2000) では、この例の「③～⑥」を描出表現として理解できる」としている。③～⑥にはタ形の文末も非タ形の文末もあるが、作中人物の知覚した内容を描出表現として認定している。このような認定の仕方であれば、【10】(4)の「今さらもとに戻すことはできなかった」という作中人物の判断にもとづく表現も描出表現ということになるであろう。

野村 (2000) は、描出表現に多様なレベルがあるとし、語り手の立場での語りだとされる文も描出表現とすることがある。テキストの中の指標により、作中人物の発話や思考が反映されていると認められる表現は、保坂・鈴木 (1993) の規定にあわないような文も描出表現としている。

また、作中人物の心理などを対象化して語る次のような例も描出表現としている。

【13】「はあ、分りました。もしそういう時があれば、何とか考えまして……」と真田佐平は、坂出範吉をそこに残したまま、足早に歩き去った。

彼は、自分がその話を彼にした坂出範吉自身であったかのように恥ずかしかった。

彼自身が、研究所で立ち枯れになった実行力のない技術者で、抜け目のない遣り手の後輩に追い越され、しかも停年の接近に脅かされている惨めな月給取りであると感じた。

(伊藤整「氾濫」『伊藤整全集 第八巻』(1973)新潮社：224)

下線部は、作中人物である真田佐平の心中を対象として語り手が語ったものである。「恥ずかしかった」という文末は、語り手が真田の心中について説明しているものであり、真田が語るという形式ではない。野村(2000)では、作中人物の内面についての語りは描出表現に含まれる。

日本語の自由間接話法についての代表的な二つの論を簡単に検討したが、これら以外にも自由間接話法について種々の研究がある。しかし、小説における自由間接話法の研究では、作中人物の発話や思考を含む地の文をどのように捉えるかという点で共通している。

次に欧米言語の小説を対象とした前田(2004)の論を見てみたい。

2.4 前田(2004)

欧米のナラトロジー研究の前田(2004)でも、自由間接話法について論じている。

- 【14】 文法的・文体的形式からいえば、体験話法は、直接話法と間接話法との中間に立つ話法である。体験話法は、三人称と過去時制を用いて、作中人物の思考や反省、口に出されなかった問い、あるいは激しい感情を表現する。三人称の使用という点に、間接話法との共通性もある。一方、話法(直説法)と配語法の点では、直接話法を思い起こさせる。テキストの中で、語り手の叙述に属するのか、それとも作中人物の主観的な意見(言葉)なのか、境界が定かでないような部分が、この体験話法なのである。体験話法においては、懐疑や推測、あるいは問いかけといった不確実さを表わす言い回しが支配的である。

このように体験話法は、三人称の人物の思考過程もしくは言葉に表現されていない意識の流れを、三人称の直説法で、しかもたいていは過去形で再現する形式である。見方を変えれば、体験話法は語り手と登場人物の視点をダブらせ、両者の境目が定かでないようにする手法である。

(中略)

三人称と過去形をそのまま日本語に移したのでは意味が伝わらない。つまり、一人称と現在形になおして翻訳するしかない。

(同：151－153)

この記述からも、西欧の言語では、話法において主語や時制について文法的な区別が存在するので、日本語と事情がだいぶ異なっていることがわかる。しかし、日本語においてもこのような「テキストの中で、語り手の叙述に属するのか、それとも作中人物の主観的な意見(言葉)なのか、境界が定かでないような部分」があることは想定できる。また、「三人称の人物の思考過程もしくは言葉に表現されていない意識の流れ」が、その人物の立場から語られていることも地の文にはよくある。日本語のそのような表現をどのように考えるかが問題となる。

さらに、前田(2004：158)では、次のように言う。

- 【15】 一般的な文体論の立場から言えば、体験話法や内的独白が頻繁に現れる語りでは、

語り手による auktorial な叙述のトーンは影を潜めて、映し手による personal な描写が前面に出てくるといってよいだろう。(auktorial=客観的 石出注)

ここでいう「映し手」による語りとは、人格化された語り手の語りに対して、作中人物の知覚や意識を通して物語世界を語ることを意味している。このように、前田（2004）によれば、欧米における自由間接話法は語り手の語り方の問題とも関係する表現としてとらえられている。語り手という存在を目立たせないように作中人物の側から語る表現法であると考えられる。

日本語の自由間接話法では、そのような関連との検証がまだ不十分な状態にあると思われる。また、日本語の自由間接話法の研究は、外国語の研究者がその専門の外国語と日本語を比較して行うというスタイルが多く、日本語だけをとりあげた大きな研究は少ない。

そこで、本論文では語り手の語り方の問題を中心に考え、これまでの自由間接話法の研究成果も参考にして分析を行った。本稿では、語り手の語りの問題を中心にとりあげるが、自由間接話法の考え方とも深く関連している。語り手と作中人物の認識・知覚はどのような関係になっているか、語り手の語る内容は作中人物のもつ情報と重なるのかなどは、自由間接話法の考え方を否定するものではない。

しかし、自由間接話法を拡大したり応用したりして「語り」テキストの地の文を解釈する態度はとらない。自由間接話法については、ゆれの少ない【2】の例のようなものだけを認め、内的独白に類するものとしてとらえることとした。

そのため、小説の地の文を分析するのに必要な語りの様相の分類は、結果的に新しいものとなった。

原則として、地の文は語り手が、想定される聞き手を対象に語る文章である。しかし、そのように見えない文もある。そこで、誰が誰に対して語っているのか（受け手は誰か）という規準と、語っている内容の情報源は誰の知識・知覚なのかという規準で区別することとした。

2.5 直接話法・間接話法・自由間接話法の規定

改めて、本論文と自由間接話法との関連を明らかにしておきたい。

応用言語学辞典（2003）には次のような記述がある。

【16】 直接話法とは、他人のことばを自分のことばと明確に区別する引用形式のことをいう。

間接話法とは、他人のことばを自分のことばに置き換えて提示する形式を指す。

直接話法被伝達部において時・場所・人称などを表す直示表現は、もとの発話者の視点を反映するが、間接話法では、伝達部と被伝達部の直示表現は、通常、引用者の視点を反映しなければならない。（英語の場合）

自由間接話法とは、他人のことばを、その文体的特徴を残しつつも、引用者の談話の形式に見合った変更を加えて提示する引用形式のことを言う。英語の場合、自由間接話法は、もとの発話の時制と人称を引用者の視점에適合するように適宜変更を加え

る（つまり、「間接」的な引用である）が、間接話法とは異なり、伝達部に従属される形はとらない（つまり、伝達部から「自由」な引用である）。

自由間接話法は、描出話法、擬似直接話法、体験話法、自由間接体、物語的独白など、さまざまな名で呼ばれ、これまで多くの注目を集めてきた。

（山口治彦氏担当）

砂川（2003：138）では、「君から始めろ」という発話を間接的に引用した次の文では、「君」が「私」に言い換えられていると説明している。

【17】 私から始めろと言われましたので、始めさせていただきます。

このような話法が日本語の間接話法であり、「君」から「私」への置き換えが応用言語学辞典にある被伝達部の置き換えにあたる。

また、砂川（2003：137）では、「間接引用で再現するのは、もとの発話が表していると伝達者が解釈した命題とテンス形式、それに『発話の力』を表すモダリティ形式である。」と説明している。つまり、特に文末形式に現れるモダリティ表現はもとの発話者のものであるということになる。

このようなことから、自由間接話法を、話法という点を重視して比較的狭く捉えると「自由間接話法はその被伝達部が独立している間接話法表現である」と規定することができる。最も単純にいうと、間接話法の伝達部のない表現ということである。

日本語の小説の地の文において、伝達部がないまま話法の人称が交替する例は経験的に多くないと思われる。山田（1957：62-63）徳沢（1965：57）保坂・鈴木（1993：31）で引用されている【7】の例や、【10】のような、人称の交替表現はあまり見られない²⁾。このようなことから、先に規定した狭く捉えた典型的な自由間接話法は、作中人物の言葉を要約して引用する場合に見られるが、そのほかの場合には認定が難しい。また、【16】で「もとの発話の時制と人称を引用者の視点に適合するように適宜変更を加える」と指摘されているように、英語の自由間接話法の文末表現は直接話法から変更されるのに対して、保坂・鈴木（1993：31）等が規定する日本語の自由間接話法では文末表現が元の発話者のものとなっている。そのため、さらに自由間接話法の認定が難しくなっている。

2.6 自由間接話法の分類（三人称小説において）

2.5で述べたように、本論文では先行研究で自由間接話法としているもののうち、一部を自由間接話法と考える。その基準としては、(1)文末表現が、作中人物が語るという形式の表現であること。(2)当該の文は、実際に発言しない内的（心中）なものであっても作中人物が言語化したものであること。(3)被伝達部の人称や場所や時間の表現が置き換えられていて、内的独白とは言えないこと。この3点である。

これ以外の表現は、いわゆる視点とよばれるものや知覚や感情の主体が作中人物であっても、作中人物が発話したものを引用した表現でないので、自由間接話法としない。

以上のように規定すると、自由間接話法と認定できるものは制限されるが、次に再掲した【2】の下線部のように発言を要約して示すような場合には自由間接話法と認定できる。

ここで再掲する。

【2】 彼女はさらに夫のゴム裏の靴を法廷に提出したが、それはずいぶん長い間はいた形跡がなかったし、血痕もなかった。そもそも血痕はガードナーのどの着物にもなかったのである。

彼女は事件の夜の物語に入った。ガードナーはたしかに十時頃ちょっと外へ出たが、それは雷雨がくる気配があったから、空を見るためだった。それから寝室へ入ったが、子供達が雷におびえたので、二人は眠ることが出来なかった。隣家の人が家の中を歩き廻るのを聞いたというのは、彼女の足音で、夫は寝室を出なかった。一晩中、歯が生えかかって、むずがる子供を抱いていた。

ガードナー夫人は雷雨のため一晩中眠れなかったのだから、夫が家を出たら、気づいたはずだと言った。だから自分は夫が無罪なのを知っているのだ、と彼女は言った。

(大岡昇平「妻の証言」『大岡昇平全集 第5巻』(1995) 筑摩書房：569)

【2】の下線部の前文に「彼女は事件の夜の物語に入った」とあることから、下線部は「彼女」の話した内容だと認定できる。また、下線部の文中の「彼女」は直接話法であれば「私」等の一人称の表現になるべきであり、人称表現が置き換えられていることがわかる。文末表現は彼女が話したという形式を取っていて、彼女が言語化したことばから丁寧語などを抜いて加工を加えた表現である。このように、文脈によって自由間接話法の(1)～(3)の条件を満たしていると考えられるものは、自由間接話法に分類する。

また、(1)～(3)のように規定したため、いわゆる三人称小説の語り手が作中人物の心中を対象化して語る【13】のような表現は、自由間接話法に含めないことになる。

3 語りの様相

前節の自由間接話法に見られるように、小説の地の文には、作中人物の知覚や認識を含んだものが多く見られる。

この節では、作中人物の知覚がどのように地の文に反映しているかということを基準にして、自由間接話法の考え方も踏まえた上で、語り（地の文）の様相进行分类することとする。また、ここでは、いわゆる三人称小説に限定して考えていきたい。引用したテキストは、【18】【19】以外は夏目漱石『道草』と『三四郎』である。夏目漱石のテキストは多様であるが、初期の頃と晩年の頃では隔たりも大きいと考え、この二つのテキストで夏目漱石の三人称小説の前期と後期を代表させてみた。

3.1 テキストによる違い

語り手の設定のされ方は、テキストごとに違いがある。いわゆる三人称小説の場合、語り手は物語世界に存在しないということになっているので、多くのテキストで語り手は物語世界の状態を直接知覚しない設定になっている。しかし、テキストによっては語り手が物語世界の現場で知覚して語っているかのように見えるという設定もある。次の【18】は夏目漱石『虞美人草』の冒頭の部分である。

【18】 「随分遠いね。元来何所から登るのだ」

と一人が手巾で額を拭きながら立ち留つた。

「何所か己にも判然せんがね。何所から登つたつて、同じ事だ。山はあすこに見えて居るんだから」

と顔も体軀も四角に出来上つた男が無雑作に答へた。

反を打つた中折れの茶の廂の下から、深き眉を動かしながら、見上げる頭の上には、微茫なる春の空の、底迄も藍を漂はして、吹けば揺くかと怪しまるゝ程柔らかき中に屹然として、どうする気かと云はぬ許りに叡山が聳えてゐる。

「恐ろしい頑固な山だなあ」と四角な胸を突き出して、一寸桜の杖に身を倚たせて居たが、

「あんなに見えるんだから、訳はない」と今度は叡山を輕蔑した様な事を云ふ。

「あんなに見えるつて、見えるのは今朝宿を立つ時から見えて居る。京都へ来て叡山が見えなくなつちや大変だ」

「だから見えてるから、好いちやないか。余計な事を云はずに歩行いて居れば自然と山の上へ出るさ」

細長い男は返事もせずに、帽子を脱いで、胸のあたりを煽いで居る。日頃からなる廂に遮ぎられて、菜の花を染め出す春の強き日を受けぬ広き額丈は目立つて蒼白い。

「おい、今から休息しちや大変だ、さあ早く行かう」

相手は汗ばんだ額を、思ふまま春風に曝して、粘り着いた黒髪の、逆に飛ばぬを恨む如くに、手巾を片手に握つて、額とも云はず、顔とも云はず、頸窩の尽くるあたり迄、苦茶々々に搔き廻した。促がされた事には頓着する気色もなく、

「君はあの山を頑固だと云つたね」と聞く。

「うむ、動かばこそと云つた様な安排ぢやないか。かう云ふ風に」と四角な肩をいとう四角にして、空いた方の手に榮螺の親類をつくりながら、聊か我も動かばこそその姿勢を見せる。

「動かばこそと云ふのは、動けるのに動かない時の事を云ふのだらう」と細長い眼の角から斜めに相手を見下した。

「さうさ」

「あの山は動けるかい」

「アハハ、又始まつた。君は余計な事を云ひに生れて来た男だ。さあ行くぜ」と太い桜の洋杖を、ひゆうと鳴らさぬ計りに、肩の上迄上げるや否や、歩行き出した。瘡せた男も手巾を袂に収めて歩行き出す。

「今日は山端の平八茶屋で一日遊んだ方がよかつた。今から登つたつて中途半端になる許りだ。元来頂上まで何里あるのかい」

「頂上まで一里半だ」

(中略)

「何もそんなに威張らなくてもいい。君だつて知らんのだから。山の高さは御互に知らんとしても、山の上で何を見物して何時間かかる位は多少確めて来なくつちや、予定通りに日程は進行するものぢやない」

「進行しなければ遣り直す丈だ。君の様に余計な事を考へてゐるうちには何遍でも遣り直しが出来るよ」と猶さつさと行く。瘠せた男は無言のままあとに後れて仕舞ふ。

(『虞美人草』一の一：3-6)

下線部は、語り手が物語世界のその現場で状況を見ているかのように語っていると理解できる。引用した部分は二人の男が比叡山を登山しながら話している部分である。一番目の下線部は、作中人物の一人を「細長い男」と見ているところから語り手が観察しているとわかり、また文末の「煽いである」という表現から、現場で今観察していると考えられる。二番目の下線部も同様に考えられる。次の【19】は三島由紀夫『潮騒』の冒頭部分である。

【19】 歌島は人口千四百、周囲一里に充たない小島である。

歌島に眺めのもつとも美しい場所が二つある。一つは島の頂ちかく、北西にむかつて建てられた八代神社である。

ここからは、島のその湾口に位ゐしてゐる伊勢海の周辺に限なく見える。北には知多半島が迫り、東から北へ渥美半島が延びてゐる。西には宇治山田から津の四日市にいたる海岸線が隠見してゐる。

二百段の石段を昇つて、一双の石の唐獅子に成られた鳥居のところで見返ると、かういふ遠景にかこまれた古代さながらの伊勢の海が眺められた。もとはここに、枝が交錯して、鳥居の形をなした「鳥居の松」があつて、それが眺望におもしろい額縁を与へてゐたが、数年前、枯死してしまつた。

まだ松のみどりは浅いが、岸にちかい海面は、春の海藻の丹のいろに染まつている。西北の季節風が、津の口からたえず吹きつけてゐるので、ここの眺めをたのしむには寒い。

(三島由紀夫『潮騒』第一章：225)

下線部より前の部分は、特定の時間に限られない物語世界の状況の語りとも理解できるが、下線部は、物語世界の現場のそのときの具体的な状態を語っていると考えられる。ここは作中人物がまだ登場しない冒頭部分であるので、語り手が現場の状態を知覚して語っていると考えられる。作中人物がいる場合は、作中人物の知覚した内容を利用して語り手が語っているとも考えられるが、この部分はそうではない。

しかし、多くのテキストでは文末形式がタ形の場合が多く、その場合語り手が物語世界の現場で知覚しながら語っているというようには受け取れない場合が多い。

3.2 地の文（語り）の分類

3.2.1 ジュネット・ジェラルの分類

物語論は1970年代にジュネット・ジェラルによって一応の完成をみた。日本でも石原千秋他（1991）等によってその理論が検証されている。そのため、日本における語りの問題はジュネットの理論によって分析されることが多かった。そこで、ジュネットを指標に本稿の考えを整理してみたい。

語り手が語る場合、焦点となる人物を定めて語る場合が多いが、この場合、ジュネット

(1985 訳 a) では「焦点化ゼロ」「内的焦点化」「外的焦点化」の分類をしている。

ここで問題になるのは、「焦点化」という用語の意味である。ジュネットは視点というと視覚的なものがまつわりつくという理由で、焦点という用語を提案し、人物の知覚全般をとおした語りの意味で使っている。しかし、「外的焦点化」というのは、同書に「主人公の思考や感情については、われわれは決して知ることができない。」(p. 223) とあるとおり、作中人物を外から語ることであり、語り手以外の誰の知覚もおしていないことになり、誰の知覚かということからは離れてしまう。また、「内的焦点化」についてもジュネット (1985 訳 a) の続編であるジュネット (1985 訳 b) では、「彼自身を対象とする知覚も含まれる」「この人物が知覚するすべてのことがらと、彼が考えるすべてのことがらとをわれわれに伝えることができる」(p. 78) と付け加えられ、誰の知覚なのかということは問題にされなくなっている。ジュネットの意図する焦点化とは、どの人物に焦点をあてて語るか、という程度の意味だと考えられるのである。そのため、作中人物の知覚による語りというものについて、正確な規定が必要である。

また、「内的焦点化」の物語言説だけで語られるテキストはほとんどありえないのであって、作中人物の知覚したものを語るだけでなく、作中人物の様子を外から見て語ったりもしている場合が大部分である。また、「外的焦点化」といっても、一人の作中人物のみを語り手が外から語るだけでテキストが出来上がっているということではなく、場面の描写や他の人物の描写が必ず語られている。

「焦点化ゼロ」についての説明は、「語り手はどの作中人物が知っているよりも多くのことを語る」(p. 221) としている。ジュネット (1985 訳 b) では、「その『焦点』を、まことに非限定的な、あるいは非常に遠い地点に、言い換えれば、きわめて遠望的な視野の利く地点に設定するため、『焦点』はどの作中人物とも一致しえず、したがってやはり、非焦点化あるいは焦点化ゼロといった術語の方が古典的小説にはふさわしい」(p. 77) としている。これは、個々の人物のさまざまな視点よりも上位にある視点と知識をもって語り手が語る、という意味だと考えられる。言い換えれば、語り手だから知っているのだという立場で語るということを指していると思われる。このように考えると、具体的な物語世界の場面を語るときなど、「焦点化ゼロ」の言説はごく自然にテキストに含まれていると考えられる。もちろん、それを、作中人物の誰も知らない情報に限定すれば少ないのかもしれない。しかし、ここでは作中人物の誰も知らないことに限定しておらず、語り手の立場での語りという意味のように受け取られる。

このようなことから、本研究では新しい分類を提出し、テキストはそれらが混在してできあがっているものとした。それは、①語り手が語り手の立場で語る、②語り手が作中人物の知覚を利用して語る、③作中人物の内的独白、の三種である。

ジュネットの分類でみた場合に①に入るのは、「焦点化ゼロ」の言説、「外的焦点化」の言説、「内的焦点化」の言説のうち作中人物を対象として客観的に語られた思考や感情、などである。つまり作中人物についての語りでも、語り手の立場で語るものは①とした。また、語り手しか知らないことも①に入る。また、石原 (1986) で指摘されている「三四郎の無知を示唆して、明らかに彼の言葉をこう読んでほしいと方向付け (コード化) している」ような表現、また「これに類するはつきりと三四郎を外側から語るような、語り手が

ト書き風に顕在化したような表現」や、語り手が自分の感想・意見や見解を示す言説も①とした。

②に入るのは、「内的焦点化」の言説のうち、作中人物の知覚・認識した物事である。

次の用例は夏目漱石『道草』の冒頭近くのものであるが、①と②の例が見られる。

【20】 1 彼は知らん顔をして其人の傍を通り抜けようとした。2 けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確かめる必要があつた。3 それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。4 すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めてゐた。

（『道草』一：4）

【20】の1の「彼」は、主人公の健三のことである。1～3は語り手の語りで①であるが、4は健三の知覚を利用した語りの②だと考えられる。1は健三についての語りで、客観的に語り手の立場で語っている。2は、健三の置かれた状況についての説明であるが、健三がこの場で「確かめる必要がある」と認識したということではない。言い換えると、「確かめる必要がある」という表現が健三の認識を表現したものではないということである。そのため、この文は語り手が状況を説明して語ったものといえる。3も、語り手が健三を客体として語っている。このとき、自分が「眸を其人の方角に向けた」ことを健三自身が認識しているのは当然であるから、この文は健三の知覚を利用した語りと考えるべきだという意見もあるかもしれない。しかし、「眸を其人の方角に向け」という表現は健三のものとは考えられない。つまり、健三が自分の行為を「眸を其人の方角に向け」と客体化してとらえていないと考えられるということである。そのため、3は健三の知覚を情報源とした語りではなく、語り手の立場での語りと考えるのが適当である。4は、その場面での「先方」の状態を語ったものであるが、「先方」が「見詰めてゐる」と知覚しているのは健三であり、この文は健三が見た事柄を語ったものである。正確にいうと、健三が知覚したことを情報源にした語り手の語りであるということである。このように、物語世界の事物を表現するときに、主人公が見たり聞いたりして知覚したことを情報源にして語ることが多い。このような語りを本稿では②の語りとしている。

ところで、「先方は」「あちらが」「～て来る」など、表現者の位置がわかるかのような表現のある場合は、作中人物の視点に立っているとと言われることが多い³⁾。しかし、これらの表現は、誰の側に寄り添って語っているかということであり、ここでの視点は作中人物の知覚・認識と完全に一致するものではない。誰の視点に立っているかということと、誰の知覚・認識の語りかということは、一致することが多いとしても、必ず一致するとはいえないのである。次の『道草』の例では、「先方」という表現が用いられている。

【21】 健三が外国から帰つて来た時、彼女は自家の生計に就いて、他の同情に訴へ得るやうな憐れつばい事実を彼の前に並べた。仕舞に兄の口を借りて、若干でも好いから月々自分の小遣として送つて呉れまいかといふ依頼を持ち出した。健三は身分相応な額を定めた上、また兄の手を経て先方へ其旨を通知して貰ふ事にした。すると姉から手紙が来た。長さんの話では御前さんが月々若干々々私に遣るといふ事だが、実際御前さんの、呉れると云つた金高は何の位なのか、長さんに内証で一寸知らせて呉れな

いかと書いてあつた。姉は是から毎月中取次をする役に当るかも知れない兄の心事を疑つたのである。

(『道草』六十九：209)

下線部「先方」を含む一文は、語り手が過去のことを説明している部分であり、作中人物である健三のこの場での知覚を利用した語りではない。

このようなことから、「先方は」「あちらが」「～て来る」などの表現が②の指標であると必ずしも言えないといえる。

また、①と②は、曖昧で決定できない場合もあるが、決定の難しいものは②に入れて考えることにした。また、②の場合、語られた内容を作中人物が同様に認識しているというのが前提になる。

3.2.2 客体化と語りの関係

自分の思いなどをそのまま主観的に語るか、事態を客体としてとらえて語るかという違いは、語り方にも関係してくる。

前掲の【20】の1は、健三を客体化して語った、健三についての語りである。誰が健三を客体化しているのかというと、ここでは語り手である。したがって、1は語り手の立場の語りということになる。作中人物が自分について客体化して語るとは、過去を語るときなどの特殊な場合であり得るが、多くない。そのため、焦点となっている作中人物（主人公）を客体化して語る場合の多くは、3.2.1で示した①「語り手が語り手の立場で語る」語りになる。一方、自分以外の物語世界の事態を客体化してとらえることは、語り手でも作中人物でもあり得る。特に、物語世界のその場面（その時、その場所）で直接知覚した事態については、作中人物が客体化してとらえている場合がほとんどである。【20】の4は、その例である。このように、焦点となっている作中人物以外の物語世界の事態を客体化して語る場合は、3.2.1で示した①と②の両方が考えられる。

また、作中人物が自分の思いなどをそのまま語る場合は、客体化されていない語りである。この場合は、3.2.1で示した②「語り手が作中人物の知覚を利用して語る」語り、③「作中人物の内的独白」の場合が多くなる⁴⁾。

3.2.3 分類の基準

これまで示した本稿の分類について詳述したい。

地の文（語り）の様相分類するにあたり、次の基準をもうけた。

- (1) 文末表現は、誰が語る形式になっているか。
- (2) 作中人物の知覚をとまうか。
- (3) 作中人物が発言か心内で言語化した内容であるか。

この基準にしがたって、次のように分類した。

語り手が語る形式 —— 語り手が知っていることを語る……………A 語り手の立場の語り

—— 作中人物の知覚を情報源として語る……………B-1 知覚利用の語り①

作中人物が語る形式 —— 作中人物が言語化していない内容……………B-2 知覚利用の語り②

—— 作中人物が言語化した内容……………C 内的独白、自由間接話法

なお、複文の場合は、主に主節の文末表現を重視して分類した。

〔A語り手の立場の語り〕

語り手が語り手の立場として知っている内容を語る場合である。三人称小説では、語り手は作中人物の心理を含め、どの作中人物よりも多くのことを知っているという設定の場合が多い（それを語るかどうかは別の問題である）。そのため、作中人物の心理を対象化して語る場合のような、日常の「談話」「報告」のテキストでは通常ありえないものもある。また、語り手が虚構の物語世界の現場で知覚しているかのように語る場合は、このAに属することになる。

〔B-1 知覚利用の語り①〕

【22】 近頃の健三は頭を余計遣ひ過ぎる所為か、どうも胃の具合が好くなかつた。時々思ひ出したやうに運動して見ると、胸も腹も却つて重くなる丈であつた。彼は要心して三度の食事以外には成るべく物を口へ入れないやうに心掛けてゐた。それでも姉の悪強には敵はなかつた。

「海苔巻なら身体に障りやしないよ。折角姉さんが健ちやんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御呉れな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張つて、好い加減烟草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が余り嘸舌るので、彼は何時迄も自分の云ひたい事が云へなかつた。訊きたい問題を持つてゐながら、斯う受身な会話ばかりしてゐるのが、彼には段々むづ痒くなつて来た。然し姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣らうかと云ひ出した。

（『道草』六：17（「彼」＝健三））

この【22】の下線部は、作中人物である健三の知覚を利用して語り手が語っていると考えられる。もし「一向通じないらしい」という非タ形であれば、健三の内的独白と考え、健三が自分に向かって推定の判断を表出している形式だと理解することもできる。しかし、実際には「一向通じないらしかつた」というタ形であることから、語り手が語る形式となっている。これは近傍の文の文末が、すべてタ形で、語り手が語る形式であることによっても、そのように解釈できる。

しかし、語られている内容には「…らしい」という健三の推定が含まれていると考えられる。『道草』の語り手は、他の部分では健三以外の作中人物の心情も知っており、ここだけ語り手の知識に制限があるとは考えにくいからである。語り手はすべてを知ることができる立場にあるので、ここだけ知識がなく推定することになったとは思えないのである。作中人物の知覚・認識を情報源としながら、語り手が語っていると考えるのが妥当である。

この例のように、作中人物の知覚を情報として利用しながらも語り手の語りとする場合を「B-1 知覚利用の語り①」とする。

〔B-2 知覚利用の語り②〕

【23】 1 裏から回つて婆さんに聞くと、婆さんが小さな声で、与次郎さんは昨日から御帰
りなさらないと云ふ。 2 三四郎は勝手口に立つて考へた。 3 婆さんは気を利かして、ま
あ御這入りなさい。 4 先生は書齋に御出ですからと云ひながら、手を休めずに、膳椀を
洗つてゐる。 5 今晚食が済んだ許の所らしい。

6 三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下伝ひに書齋の入口迄来た。 7 戸が開いてゐる。
8 中から「おい」と人を呼ぶ声がする。 9 三四郎は敷居のうちへ這入つた。 10 先生は机
に向つてゐる。 11 机の上には何があるか分らない。 12 高い脊が研究を隠してゐる。 13
三四郎は入口に近く坐つて、

「御勉強ですか」と丁寧に聞いた。 14 先生は顔丈後へ振り向けた。 15 髭の影が不明
瞭にもぢやもぢやしてゐる。 16 写真版で見た誰かの肖像に似てゐる。

17 「やあ、与次郎かと思つたら、君ですか、失敬した」と云つて、席を立つた。 18
机の上には筆と紙がある。 19 先生は何か書いてゐた。 20 与次郎の話に、うちの先生は
時々何か書いてゐる。 21 然し何を書いてゐるんだか、他の者が読んでも些とも分らな
い。 22 生きてゐるうちに、大著述にでも纏められゝば結構だが、あれで死んで仕舞つ
ちやあ、反古が積る許だ。 23 実に詰らない。 24 と嘆息してゐた事がある。 25 三四郎は
広田の机の上を見て、すぐ与次郎の話を思ひ出した。

（『三四郎』七の一：457-458）

【23】の下線部は、作中人物の三四郎が、自分の知覚していることを実況中継している
ような語りである。下線部のそれぞれの文の文末表現は、作中人物の知覚したとおりの表
現だと理解できる。また、その知覚が、語り手によって客体化されていない。これらのこ
とから、これらの文は作中人物が語る形式に見える。しかし、三四郎は、実際に、そのよ
うな語りを内的独白として行っていないと考えられる。つまり、知覚したことを頭の中で
言語にするようなことはしていないと思われる。言語にするということは自分や他人など
の受け手を想定することになるが、三四郎は下線部で語られている内容を自分に言い聞か
せるように心中で言っているとは思えない。特に、5の文末は「らしい」という推量表現で
あり、内的独白に近いように感じられるが、その推量判断を自分に言い聞かせているので
もなく、また誰かに語っているわけでもない。三四郎の語りだとすると、三四郎が誰に対
して語ったのか、その聞き手が想定できないのである。つまり、受け手が想定できない表
現となっている。そのため、そのような言語化はなかったと考え、内的独白とは区別する
のである。【23】の場面において、三四郎は大体下線部のような知覚や認識をしながら行動
をしていったと考えられるのだが、下線部のように自分の知覚を実況中継していたとは思
えないということである。

なお、【23】の3と4の文は、「3 婆さんは気を利かして、『まあ御這入りなさい。4 先生
は書齋に御出ですから』と云ひながら、手を休めずに、膳椀を洗つてゐる。」と理解すべき
文である。漱石テキストには、本来は一文と考えられるこのような表現が、複数の文とし
て表記されることがある。引用符号の使われ方に原因するものだが、その用例は少ない。
文数を数える必要のある場合には慎重に対処した。

B-1とB-2の違いは大きい。B-1は、語り手が想定される聞き手に対して語るとい
う形式を保っている。それに対して、B-2は、作中人物が聞き手を想定しないで語っている

ような形式であり、表面的には受け手に対して語っていないのである。B-2は、作中人物の知覚が言語化されることによって、読者が物語世界の情報を得るという形式になっている。語り手もしくは作者が、作中人物の知覚を言語化して、聞き手に対して提示していると考えることができる。B-1とB-2のどちらも作中人物の知覚を利用して語りを成立させているのだが、語り手のかかわり方が異なっている。もちろん、B-1の方が、語り手が想定される聞き手に語る、という特徴が強く出る。B-2は、表面的には聞き手が想定されないで、作中人物の知覚によって物語が進行していくという印象を強く与える。

〔C内的独白、自由間接話法〕

次に引用した【24】【25】の下線部は内的独白ということができる。

【24】 三四郎は全く驚ろいた。要するに普通の田舎者が始めて都の真中に立つて驚ろくと同じ程度に、又同じ性質に於て大いに驚いて仕舞った。今迄の学問は此驚ろきを預防する上に於て、売薬程の効能もなかつた。三四郎の自信は此驚ろきと共に四割方減却した。不愉快でたまらない。

此劇烈な活動そのものが取りも直さず現実世界だとすると、自分が今日迄の生活は現実世界に毫も接触してゐない事になる。洞が峠で昼寐をしたと同然である。それでは今日限り昼寐をやめて、活動の割前が払へるか云ふと、それは困難である。自分は今活動の中心に立つてゐる。けれども自分はたゞ自分の左右前後に起る活動を見なければならぬ地位に置き易へられたと云ふ迄で、学生としての生活は以前と変る訳はない。世界はかやうに動揺する。自分は此動揺を見てゐる。けれどもそれに加はる事は出来ない。自分の世界と、現実の世界は一つ平面に並んで居りながら、どこも接触してゐない。さうして現実の世界は、かやうに動揺して、自分を置き去りにして行つて仕舞ふ。甚だ不安である。

三四郎は東京の真中に立つて電車と、汽車と、白い着物を着た人と、黒い着物を着た人との活動を見て、かう感じた。けれども学生々活の裏面に横たはる思想界の活動には毫も気が付かなかつた。——明治の思想は西洋の歴史にあらはれた三百年の活動を四十年で繰返してゐる。

（『三四郎』二の一：293）

【24】の下線部は、先の〔B-2知覚利用の語り②〕の【23】と違って、作中人物がこのような内容を、言語を用いて思考したと考えられる。しかし、まったく作中人物の言葉のままかどうかははっきりしない。低徊しているような思考内容であるため、これほど理論が明快であるとは考えづらいからである。これは要約した内容と考えるのが自然のように思われる。砂川（2003：139）にも指摘されているように、直接引用であっても忠実に再現されるわけではないので、作中人物の言葉そのままでも、作中人物によって確かに言語化されて文末表現が作中人物の語りの形式であれば、内的独白や自由間接話法とする。

ところで、この【24】では下線部の次の文に「かう感じた」という指標があるので、内的独白であると認定するのは比較的容易である。

次の【25】は『三四郎』の冒頭に近い部分で、三四郎が上京するために列車の中にいる場面である。

【25】 女とは京都からの相乗である。乗った時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、段々京大坂へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じてゐた。それで此女が車室に這入つて来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。此女の色は実際九州色であつた。

三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つ間際迄は、御光さんは、うるさい女であつた。傍を離れるのが大いに難有かつた。けれども、斯うして見ると、御光さんの様なのも決して悪くはない。

唯顔立から云ふと、此女の方が余程上等である。口に締りがある。眼が判明してゐる。額が御光さんの様にだゞつ広くない。何となく好い心持に出来上つてゐる。それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見てゐた。時々女と自分の眼が行き中る事もあつた。爺さんが女の隣りへ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見てゐた。其時女はにこりと笑つて、さあ御掛けと云つて爺さんに席を譲つてゐた。夫からしばらくして、三四郎は眠くなつて寐て仕舞つたのである。

其寐てゐる間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。眼を開けた三四郎は黙つて二人の話を聞いて居た。女はこんな事を云ふ。――

（『三四郎』 一の一：273-274）

【25】の下線部は、内的独白であることを明示する指標が見当たらないが、要約引用した内的独白と考えられる。この部分は、時間的に少し前の三四郎の状態を挿入的に語っており、三四郎の言語化された内省だと思われるからである。

4 三種類の語りの使われ方

ここまで、A、B、Cの三つの語りについて述べてきたが、これらがテキストの中でどのような現れ方をするのか見ていきたい。本稿は語りの言語の性格を明らかにすることが大きな目的であるので、ここではA、B、Cの語りの展開の仕方を文章論的に分類する。

4.1 Aの語りとBの語りが関係している場合

4.1.1 視覚的注意を喚起する表現がある

視覚的注意を喚起する表現がある場合、その近傍に作中人物が見た事物が語られることがしばしば見られ、そのときの語りは、作中人物の知覚を利用した語りとなる。

次の【26】では、1～3が語り手の立場からの語り、4～8が健三の知覚・認識を利用した語りである。

【26】1 何時もなら婢を呼び返して小言を云つて渡す所を、今の彼は黙つて手に持つたまゝ、しばらく考へていた。2 彼は仕舞に其針をぷつりと襖に立てた。3 さうして又細君の方へ向き直つた。

4 細君の眼はもう天井を離れてゐた。5 然し判然何処を見てゐると思へなかつた。6 黒い大きな瞳子には生きた光があつた。7 けれども生きた働が欠けてゐた。8 彼女は

魂と直接に繋がってゐないやうな眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見当を眺めてゐた。

（『道草』五十：151）

4 から作中人物の知覚を利用した語りになっているが、この4における転換は、前文3の「向き直った」という行為に理由があると考えられる。向き直ったあとに、次に視界に入ったことが4以降語られているからである。この場合、「向き直った」という表現は、＜こちらに視線を移した＞という意味も含んでいるように思われる。このように、知覚をとおりして語られることを予想させるような行為があつて、その後に具体的知覚内容が語られるパターンがよく見られる。

4.1.2 行為と知覚との関わり

作中人物の行為・動作は、客体的に語り手の語りとして語られるが、作中人物の知覚を利用した語りと関係しあっていることが多い。

次の【27】において、1は健三の行為についての語り手の立場での語りで、続く2以降は健三の知覚を利用した語りになっている。

【27】 1 健三は細君の肩を揺つた。2 細君は返事をせず只首丈をそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。3 けれども其所に夫の存在を認める何等の輝きもなかつた。

「おい、己だよ。分るかい」

4 斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陳腐で簡略でしかもぞんざいな此言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。5 それから跪まつて天に祷る時の誠と願もあつた。

（『道草』五十：151-152）

ここでは、健三の行為のあとに、その後の健三の知覚した内容が語られている。細君を揺するという健三の行為の後のことが、健三の知覚を利用して語られている。健三は自分の行為のあと、その場の様子を注視していたことが認められる。結果的に、現場での具体的知覚を利用した語りが行為の後に入ることによって、語り手の客体化した語りに変化をつけている。このように、作中人物について、語り手の立場での語りと作中人物の知覚を利用した語りとの二つの面から語られていることがわかる。この【27】の例では、語り手の立場の語りが先に語られ、その後に作中人物の知覚を利用した語りが語られている。

また、作中人物がある事物を知覚して、それによってその人物が行動する（反応する）のを、語り手が客観的に語るという形式がある。つまり、知覚していた人物について語り手が語ることである。次の【28】の4などがこれにあたる。

【28】 1 彼は仕舞に投げるやうに洋筆を放り出した。

「もう已めだ。何うでも構はない」

2 時計はもう一時過ぎてゐた。3 洋燈を消して暗闇を縁側伝ひに廊下へ出ると、突当りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。4 健三は其一枚を開けて内に入つた。

5 子供は犬ころのやうに塊まつて寐てゐた。6 細君も静かに眼を閉ぢて仰向に眠つて

みた。

7 音のしないやうに気を付けて其傍に坐つた彼は、心持頸を延ばして、細君の顔を上から覗き込んだ。8 それからそつと手を彼女の寐顔の上に翳した。9 彼女は口を閉ぢてみた。10 彼の掌には細君の鼻の穴から出る生暖かい呼息が微かに感ぜられた。11 其呼息は規則正しかつた。12 また穏やかだつた。

(『道草』五十一：154)

また、5 では、再度、語られた作中人物の知覚を利用した語りになるという連続が見られる。5 は、4 で健三の行為を客観的に記述したあと、その行為のあとの健三の知覚・認識が語られている。この場合は、「内に入つた」という動作のために場所が変わり、新しく目に入った状態が語られている。【26】での転換とほぼ同じ形式である。

4、5 だけでなく【28】は大体において、この方法によって知覚を利用した語りと語り手の立場の語りがときどき入れ替わりながら、語りが進んでいる。このような形式によって作中人物を中心とした語りが進んでいくことになる。

このように、作中人物の行為を客観的に語ったあと、その人物の知覚・認識が語られ、次にまた、その人物について客観的に語るという連続になっている場合は多く見られる。

4.1.3 語りの様相と発言

発言が語りの様相の転換点になることがある。

前掲の【28】の 1、4、7、8、10 は語り手としての語りであり、2、3、5、6、9、11、12 は健三の知覚を利用した語りである。

2 は、発言の直後に健三の知覚・認識を利用した語りがきている例である。『道草』では、このように発言の後に作中人物の知覚を利用した語りが続くことが多い。発言は作中人物の生の声の引用であり、その人物の立場からなされるものである。そのため、次の文がその作中人物の知覚・認識を利用した語りである場合、作中人物の立場が続いているといえる。つまり、前の発言をきっかけにしてその人物の知覚・認識になったとみなすことができるのである。そして、【28】の例の場合は、次の 3 までそれが続いている。

また、次の【29】の 2～4 ように、発言連続の途中に地の文が挿入されている場合に、発言の最中に前後の状況説明や、または発言者や周りにいる人物の心理状態などが、語り手の立場から説明されることがある。

【29】1 三四郎は広田の机の上を見て、すぐ与次郎の話を思ひ出した。

「御邪魔なら帰ります。別段の用事でもありません」

「いや、帰つてもらふ程邪魔でもありません。此方の用事も別段の事でもないんだから、さう急に片付ける性質のものを遣つてみたんぢやない」

2 三四郎は一寸挨拶が出来なかつた。3 然し腹のうちでは、此人の様な気分になれたら、勉強も楽に出来て好からうと思つた。4 しばらくして、斯う云つた。

「実は佐々木君の所へ来たんですが、居なかつたものですから……」

「あゝ。与次郎は何でも昨夜から帰らない様だ。時々漂泊して困る」

「何か急に用事でも出来たんですか」

「用事は決して出来る男ぢやない。たゞ用事を拵へる男でね。あゝ云ふ馬鹿は少ない」

5 三四郎は仕方がないから、
「中々気楽ですな」と云った。

(『三四郎』七の一：458-459)

【29】の2の場合は、前文と前々文が発言のみで成り立っている文になっており、引用を示す地の文「と言った」などはない。そして、次の2では、語り手の立場からその発言の後の三四郎の状態が語られている。ここでは、発言と語り手の立場の語りにより、事態が客観的に淡々と語られていく。これに比べて、【28】の2は、発言の後に、発言した作中人物の知覚を利用した語りが続くことによって、事態が淡々と進むように語られなくなっている。発言を含めたその人物の知覚による世界が描かれることになり、人物の思考が加味されるからである。このように、発言・会話と語り手の立場からの語りが連続することにより、展開が淡々と語られていくことがある。これは、この後に述べる、作中人物の意識の流れに沿って語られているのと対照的である。

また、【29】の5のように発言を引用している文は、多くの場合語り手の立場からの語りになっている。これらの文において、「と言った」「と聞いた」というような引用を示す表現が用いられる場合、作中人物が「と言う」「と聞く」というように事態を客体化して思考していないのが普通だからであろう。この場合も、発言という事態の進行が淡々と示される。

4.1.4 心理の表現のされ方

また、作中人物の心理の記述は、多くの場合語り手によって客体化されて表現されるので、語り手の立場からの語りになる。つまり、語り手が作中人物の心理状態を客観的に語っていくのである。そして、その心理描写の途中や前後に作中人物の知覚・認識が混じる場合が多い。前掲の【28】の10から11にかけてはこの例である。10で語り手の立場から健三の知覚についての語りがあり、11と12では健三の知覚を利用した語りになっている。このような現象は、上に述べた、作中人物の行為についての語り手の立場の語りと作中人物の知覚・認識を利用した語りがときどき入れ替わるのと類似の現象である。

作中人物の行為、作中人物の心理が語り手の立場から語られ、そこに具体的な現場に密着した作中人物の知覚・認識を利用した語りや発言が加わり、作中人物を焦点として物語世界の具体的場面を語っていくという構造ができていると考えられる。

また、パターンとして、事態や状態（人物の行為、人物の知覚した事物）が語られ、次にそれに関連した人物の心理が語られ、またそれに関連した事態や状態（人物の行為、人物の知覚した事物）が語られるという連続も多くみられる。

4.1.5 Aの語りとBの語りが関係している場合のまとめ

作中人物の知覚を利用した語りは、その場での知覚を語るなので、具体的場面における時間の流れを感じさせる表現になっている。そのため、物語世界のその場面に密着した語りということができる。語り手が事物を客体化して語る中に、作中人物の知覚を利用した語

りが入ることによって、立場の違った語りになるとともに、その場面が具体的に語られることになる。

語り手の立場の語りは、作中人物の知覚を利用した語りと混合されて語られることによって、作中人物に焦点をあてた語りができあがることが多い。また、語り手の語りと発言の組み合わせによって、展開が淡々と語られることがある。

4.2 作中人物の知覚を利用した語りが単独で現れる場合

テキストの中には、作中人物の意識の流れに沿って語られる部分がある。この場合、作中人物の知覚を利用した語りが続くことになる。『道草』では、前掲の【28】の2から3にかけてがそうである。この場合、『もう已めだ。何うでも構はない』と考え、今何時かと時計を見たら「時計はもう一時過ぎてみた。」ので、寝室へ行こうと思い、「洋燈を消して暗闇を縁側伝ひに廊下へ出ると、突当りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。」という健三の意識の流れに沿って語られている。『三四郎』では、次の【30】のような例がある。

【30】 1「やあ、与次郎かと思つたら、君ですか、失敬した」と云つて、席を立つた。2机の上には筆と紙がある。3先生は何か書いてゐた。4与次郎の話に、うちの先生は時々何か書いてゐる。5然し何を書いてゐるんだか、他の者が読んでも些とも分らない。6生きてゐるうちに、大著述にでも纏められゝば結構だが、あれで死んで仕舞つちやあ、反古が積る許だ。7実に詰らない。8と嘆息してゐた事がある。9三四郎は広田の机の上を見て、すぐ与次郎の話を思ひ出した。

「御邪魔なら帰ります。別段の用事でもありません」

(『三四郎』七の一：458)

1から9まで三四郎の意識の動きのまま語られている。このような場合は、人物の知覚・認識のみによって事態が展開している。(※4～7は、発言の引用であるため、分析の対象としない。)

4.3 語り手の立場での語りが単独で現れる場合

語り手の立場からの語りの大きな特徴として、事態を大まかに示し、事態の大きな進行を語るということがある。作中人物の知覚を利用して語る場合、事態の進行はその場面の時間の流れに密着しているので、事態を大きく進行させることはできないのである。次の【31】の5はその事態の大きな進行を語っている例になっている。

【31】 1しかし先生にそんな事は打ち明けられないから、反対に、

「でも佐々木君は、大いに先生に敬服して、蔭では先生の為に中々尽力してゐます」と云ふと、先生は真面目になつて、

「どんな尽力をしてゐるんですか」と聞き出した。2所が「偉大なる暗闇」其他凡て広田先生に関する与次郎の所為は、先生に話してはならないと、当人から封じられてゐる。3やり掛けた途中でそんな事が知れると先生に叱られるに極つてゐるから黙つて居

るべきだといふ。4 話して可い時には己が話すと明言してゐるんだから仕方がない。5 三四郎は話を外らして仕舞つた。

(『三四郎』 七の一：460)

5 の「三四郎は話を外らして仕舞つた。」は抽象的に客体化した語りである。「話を外らす」ということは、瞬間の行為ではない。話を外らすためのほかの話をする時間がかかるからである。作中人物の知覚を利用してこのように抽象的に客体化した語りはできない。作中人物の知覚を利用してこのように語るのは、過去のことを語るとき以外は不可能である。

このような語りが、作品の冒頭や章のはじめに解説としてなされることがある⁵⁾。次の【32】はその例である。

【32】 与次郎が勧めるので、三四郎はとうとう西洋軒の会へ出た。其時三四郎は黒い紬の羽織を着た。この羽織は、三輪田のお光さんの御母さんが織つて呉れたのを、紋付に染めて、お光さんが縫ひ上げたものだ、と、母の手紙に長い説明がある。小包が届いた時、一応着て見て、面白くないから、戸棚へ入れて置いた。それを与次郎が、勿体ないから是非着ろ着ろと云ふ。三四郎が着なければ、自分が持つて行つて着さうな勢ひであつたから、つい着る気になつた。着て見ると悪くはない様だ。

三四郎は此出立で、与次郎と二人で西洋軒の玄関に立つてゐた。

(中略)

其内御客は略集つた。約三十人足らずである。広田先生もゐる。野々宮さんもゐる。——是は理学者だけれども、書や文学が好だからと云ふので、原口さんが、無理に引つ張り出したのださうだ。原口さんは無論ゐる。一番先へ来て、世話を焼いたり、愛嬌を振り蒔いたり、佛蘭西式の髯を撮んで見たり、万事忙しさうである。

(『三四郎』 九の一：506-507)

この部分は、『三四郎』の九章のはじめの部分である。会に出たということをもまず大まかに語り、服装のことも語っている。(中略)以降の部分で、会の様子が具体的に語られることになる。

また、具体的場面において挿入的に状況を説明する場合は語り手の立場で語られることが多い。次の【33】は章のはじめであるが、1 は、前の章から続いている場面の状態を説明している。『道草』では、多くの章のはじめが語り手の立場からの語りになっている。

【33】 1 彼の眼が冴えてゐる割に彼の頭は澄み渡らなかつた。2 彼は思索の綱を中断された人のやうに、考察の進路を遮る霧の中で苦しんだ。

3 彼は明日の朝多くの人より一段高い所に立たなければならない憐れな自分の姿を想ひ見た。4 其憐れな自分の顔を熱心に見詰めたり、または不得意な自分の云ふ事を真面目に筆記したりする青年に対して済まない気がした。5 自分の虚栄心や自尊心を傷けるのも、それらを超越する事の出来ない彼には、大きな苦痛であつた。

「明日の講義もまた纏まらないのかしら」

6 斯う思ふと彼は自分の努力が急に厭になつた。7 愉快に考への筋道が運んだ時、折々何者にか煽動されて起る、「己の頭は悪くない」といふ自信も己惚も忽ち消えてしまつ

た。

(『道草』五十一：153-154)

状況説明が必要な場合として、場面を語る上での前提を説明する場合がある。例えば、【28】の9がそれである。7、8、10で事態が時間に沿って展開しているが、9は動きのない状態の描写である。この状態の描写が挿入されたのは、10の「彼の掌には細君の鼻の穴から出る生暖かい呼息が微かに感ぜられた」ということを理解するための前提が必要であったからだといえる。他にも、事態を語っているときに状況説明を挿入するときは、語り手の立場からの語りになる。

このように、ある事態を説明するための状況説明は、語り手の立場でなされている。

以上のように、語り手の立場の語りが単独で現れる場合は、事態を大まかに示し、事態の大きな進行を語る場合と、具体的場面において挿入的に状況を説明する場合であった。

5 作中人物の知覚を利用して説明する場合―過去の用例

今までは、物語世界の現在の場面を語る場合を検討してきたが、具体的場面でない場合や物語世界の現在でない場合に作中人物の知覚を利用した語りになっているときもある。その用例について検討したい。

- 【34】 1 たゞ此事件に関して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事実が一つあつた。
2 五六年前彼がまだ地方にゐる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。3 其時彼は変な顔をして其手紙を読んだ。4 然しいくら読んでも読んでも読み切れなかつた。5 半紙廿枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものゝ五分の一ほど眼を通した後、彼はつひにそれを細君の手に渡してしまつた。

(『道草』二：7)

【34】の2と4がこれにあたる。【34】は、2から過去の出来事を語った部分である。物語世界の現在において、作中人物がこの過去の出来事を今思い返しているわけではない。その点で、物語世界の現在の知覚・認識ではない。語り手が現在の状況に関連する出来事としてエピソードを語っているということである。そのエピソードを語り手が語る際に、当時の健三の知覚・認識を利用していると考えられる。2の「突然～机の上へ置かれた」、4の「読んでも読んでも読み切れな(い)」と知覚したのは健三だったと考えることができるのである。

次の【35】は、具体的場面の語りでなく、語り手が状況を解説している部分である。1にあるように、三四郎が広田の家へよく来る理由が説明されている。その語り手の解説の中に、三四郎の知覚が利用されている。2、3は三四郎が日ごろ感じていることである。

- 【35】 1 三四郎が広田の家へ来るには色々な意味がある。2 一つは、此人の生活其他が普通のものと変つてゐる。3 ことに自分の性情とは全く容れない様な所がある。4 そこで三四郎は何うしたらあゝなるだらうと云ふ好奇心から参考の爲め研究に来る。5 次に此人の前へ出ると呑気になる。

(『三四郎』七の二：460-461)

このように語り手の解説の部分にも作中人物の知覚が利用されていることがある。この場合は、作中人物の知覚の一部をパッチワークのように継ぎ合わせて、全体でまとまった解説としている。通常、作中人物の知覚を利用した語りは、具体的場面における時間の流れに沿って語られるが、このようにエピソードや解説に作中人物の知覚が利用される場合はその特徴から、はずれている。

6 語りの様相と文末表現のかかわり

地の文は語り手と作中人物の関係によって種々の様相をもつ。そのため、文末表現が誰の認識・判断なのかは、語り（地の文）の様相を考えるうえで重要な意味をもつ。そこで、文末表現が誰の認識・判断を表しているかをポイントとして、語り（地の文）の様相について検討することとした。

6.1 文末表現とB-2の語りーデアル文末を例として

はじめにデアル文末の文をとりあげたい。「である」は、読者に対して自分の認識・判断を断定する対読者意識の強い表現である。その「……である」は誰を聞き手と想定しているのかが問題である。作中人物の知覚を利用した語りの場合、どのように考えるべきなのか。

次の【36】を例に取りたい。2の「である」文末の文は、三四郎の知覚を利用した語りである。1の「ている」文末の文は、非タ形で三四郎の知覚内容を表している。それに続く2は三四郎の認識・判断といってよい。この文は三四郎が言語化した心理内容とも考えられるが、三四郎が自分に対して言語化して言い聞かせているとは考えにくいので、内的独白でなく知覚利用の語りとする。また、「慥かに」とあることから物語世界の出来事の現場での判断だといえるので、三四郎の判断としてよいだろう。

この場合の文末の「である」は、特定の聞き手を意識しての表現ではない。また、三四郎が自分に言い聞かせて「である」と表現したとも考えにくい。そのため、三四郎のそのときの認識・判断を言語化したもので、聞き手が想定されない表現だと考えられる。つまり、このような断定判断の言語化は、三四郎によって実際はなされなかったと考えられるのである。表現者が特定の聞き手に対して語りかけているというよりは、三四郎の知覚を語り手が言語化して示すことによって、聞き手に情報を与えていると理解できる。

【36】 1 うとうととして眼が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めてゐる。
2 此爺さんは慥かに前の前の駅から乗った田舎者である。 3 発車間際に頓狂な声を出して、馳け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思つたら脊中に御灸の痕が一杯あつたので、三四郎の記憶に残つて居る。 4 爺さんが汗を拭いて、肌を入れて、女の隣りに腰を懸けた迄よく注意して見てゐた位である。

（『三四郎』一の一：273）

以下の【37】の16、29、31、35も同様の例である。

【37】 1 そこでひよいと頭を上げた。 2 すると筋向ふにゐたさつきの男がまた三四郎の方を

見てみた。3 今度は三四郎の方でも此男を見返した。

4 髭を濃く生してゐる面長の瘠ぎすの、どこことなく神主じみた男であつた。5 たゞ鼻筋が真直に通つてゐる所丈が西洋らしい。6 学校教育を受けつゝある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞ふ。7 男は白地の紺の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いてゐた。8 此服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。9 大きな未来を控へてゐる自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。10 男はもう四十だらう。11 是より先もう発展しさうにもない。

一の六

12 男はしきりに烟草をふかしてゐる。13 長い烟りを鼻の穴から吹き出して、腕組をした所は大変悠長に見える。14 さうかと思ふと無暗に便所か何かに立つ。15 立つ時にうんと伸をする事がある。16 さも退屈さうである。17 隣に乗り合した人が、新聞の読み殻を傍に置くのに借りて見る気も出さない。18 三四郎は自ら妙になつて、ベーコンの論文集を伏せて仕舞つた。19 外の小説でも出して、本気に読んで見様とも考へたが面倒だから、已めにした。20 それよりは前にゐる人の新聞を借りたくなつた。21 生憎前の人はいくぐう寐てゐる。22 三四郎は手を延ばして新聞に手を掛けながら、わざと「御明きですか」と髭のある男に聞いた。23 男は平気な顔で「明いてるでせう。御読みなさい」と云つた。24 新聞を手についた三四郎の方は却つて平気でなかつた。

25 開けて見ると新聞には別に見る程の事も載つてゐない。26 一二分で通読して仕舞つた。27 律義に畳んで元の場所へ返ししながら、一寸会釈すると、向でも軽く挨拶をして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

(中略)

28 三四郎はそれを機会に、

「あなたは何方へ」と聞いた。

29 「東京」とゆつくり云つた限である。30 何だか中学校の先生らしく無くなつて来た。31 けれども三等へ乗つてゐる位だから大したものではない事は明らかである。32 三四郎はそれで談話を切り上げた。33 髭のある男は腕組をした儘、時々下駄の前歯で、拍子を取て、床を鳴らしたりしてゐる。34 余程退屈に見える。35 然し此男の退屈は話したがない退屈である。

36 汽車が豊橋へ着いた時、寐てゐた男がむつくり起きて眼を擦りながら下りて行つた。37 よくあんなに都合よく眼を覚ます事が出来るものだと思つた。38 ことによると寐ぼけて停車場を間違へたんだらうと氣遣ひながら、窓から眺めてみると、決してさうでない。39 無事に改札場を通過して、正気の人間の様に出て行つた。40 三四郎は安心して席を向ふ側へ移した。41 是で髭のある人と隣り合せになつた。42 髭のある人は入れ換つて、窓から首を出して、水蜜桃を買つてゐる。

(『三四郎』 一の五～一の六：284-287)

『吾輩は猫である』の猫のデアル文末の文であれば、誰かに対して直接語っている表現だと考えられるが、三四郎の場合は、誰かに報告しようとしているわけではなく観察して判断しているだけであり、また自分に対して言い聞かせているわけでもないから、特定の

聞き手が想定できない。要するに、三四郎の意識として言語化されていない表現である。この点は、このような知覚を利用した語りの特徴である。

このように、三四郎の判断表現である「である」文末の文や推量系文末の文では、受け手が想定されていないことがある。判断表現は受け手に対して判断を提示・表出するものであるから、この判断表現は特殊な使われ方である。実際の日常生活の語りにはありえない、知覚利用の語りという特殊な状況の表現だと考えることができる。

『三四郎』の知覚・認識を利用した語りにおいて、「である」という文末表現は、三四郎の認識の言葉であって、受け手を想定していないといえる。

また、判断表現でない非タ形文末の文(特にテイル文末の文)でも同様のことが言える⁶⁾。例えば、【36】の1のテイル文末の文を三四郎の知覚を利用した語りだと考えるならば、「〜ている」と知覚したのは三四郎であり、読者を意識した表現だとは考えられない。

これらの知覚利用の語りに対して、内的独白は自分自身を受け手にした語りである。内的独白は感情・感覚を表すことが多く、タ形は少ない。また、「である」「かもしれない」「違う」「ない」などの判断文末の文が多い。このような内的独白の文は、自分に言い聞かせる文になっている。内的独白の中には、状態をあらわすテイル文末の文や動詞の終止形文末の文もあるが、それらの文も自分に言い聞かせる描写である。他の聞き手に対しての語りではないが、受け手は存在しているのである。

しかし、ここで示したような作中人物の知覚を利用した、特に「である」等の表現は、三四郎が誰かに報告している表現として使うこともでき、そのまま報告の表現として使っても文法や語法に矛盾は生じない。「である」文末の文や判断系の文末、推量系文末の文は判断を表出・提示する文であるため、特に受け手意識が強い表現であるので、そのような文末表現は、報告の文にふさわしく感じられる。このような三四郎の知覚・認識を利用した語りは、聞き手に対して語る文の表現としてそのまま通用するため、形式的には内的独白に近い表現である。

6.2 タ形文末の語り、対象化された語り

6.1 では、主に知覚利用の語りのB-2を問題としたが、6.2 ではこれまで指摘してきたものよりも語り手の手がより加わっているB-1について問題としたい。既に引用した『三四郎』「一の五」の、次の2、4、7のようなものである。

【38】1 そこでひよいと頭を上げた。2 すると筋向ふにゐたさつきの男がまた三四郎の方を見てゐた。3 今度は三四郎の方でも此男を見返した。

4 髭を濃く生してゐる面長の瘠ぎすの、どことなく神主じみた男であつた。5 たゞ鼻筋が真直に通つてゐる所丈が西洋らしい。6 学校教育を受けつゝある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞ふ。7 男は白地の緋の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いてゐた。8 此服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。9 大きな未来を控へてゐる自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。10 男はもう四十だらう。11 是より先もう発展しさうにもない。

(『三四郎』一の五：284-285)

【38】の2では、「三四郎の方を」というように、知覚者である三四郎のことをそのまま「三四郎」としている。文末は「ていた」であるが、このタ形は、三四郎の知覚そのままで＜既に見ていた＞と知覚した（気づき）とも理解できるし、あるいは三四郎の＜見ている＞という知覚に手を加えたとも考えられる⁷⁾。いずれにしても、この文は三四郎の知覚を表出したものではなく、語り手が聞き手に対して語るという形式である。また、文頭の「すると」は明らかに三四郎が使った表現ではない。しかし、この文は三四郎の知覚したものを伝えているとはいえる。

その次の4、7は、タ形であることによって、三四郎の知覚であっても、三四郎の語りでないことが分かる。三四郎の知覚内容を語り手が対象化して語っていると考えられる。

次の【39】は、【23】としても引用した部分である。この用例の14、17、19は、タ形であっても三四郎の知覚したとおりの表現で、語り手による対象化ではない。

【39】 1 裏から回つて婆さんに聞くと、婆さんが小さな声で、与次郎さんは昨日から御帰りがなさらないと云ふ。2 三四郎は勝手口に立つて考へた。3 婆さんは気を利かして、まあ御這入りなさい。4 先生は書齋に御出ですからと云ひながら、手を休めずに、膳碗を洗つてゐる。5 今晚食が済んだ許の所らしい。

6 三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下伝ひに書齋の入口迄来た。7 戸が開いてゐる。8 中から「おい」と人を呼ぶ声がする。9 三四郎は敷居のうちへ這入つた。10 先生は机に向つてゐる。11 机の上には何があるか分らない。12 高い脊が研究を隠してゐる。13 三四郎は入口に近く坐つて、

「御勉強ですか」と丁寧に聞いた。14 先生は顔丈を後へ振り向けた。15 髭の影が不明瞭にもちやもちやしてゐる。16 写真版で見た誰かの肖像に似てゐる。

17 「やあ、与次郎かと思つたら、君ですか、失敬した」と云つて、席を立つた。18 机の上には筆と紙がある。19 先生は何か書いてゐた。20 与次郎の話に、うちの先生は時々何か書いてゐる。21 然し何を書いてゐるんだか、他の者が読んでも些とも分らない。22 生きてゐるうちに、大著述にでも纏められゝば結構だが、あれで死んで仕舞つちやあ、反古が積る許だ。23 実に詰らない。24 と嘆息してゐた事がある。25 三四郎は広田の机の上を見て、すぐ与次郎の話を思ひ出した。

（『三四郎』七の一：457-458）

タ形か非タ形かだけで、語り手が語る形式になるかならないかが決まるわけではない。しかし、第2章で詳細に述べるが、タ形には内容を対象化する働きがあると考えられるので、作中人物の知覚である内容が、タ形文末によって語り手の語る形式になることがよく見られる。

6.3 語りの様相と文末表現のまとめ

誰に向けて語っているのか、つまり誰を聞き手と想定して語っているかということは、テキストの成り立ちを考える上で注意すべきことである。この問題は文末形式の問題として顕在化することが多い。3.2 節での分類は、これらの検討結果にもとづいている。『三四郎』の知覚にもとづく語りについて、3.2 節での分類をあてはめると、B-1 三四郎の知覚

したことを、語り手が読者を受け手として語る語り、B-2 三四郎が知覚したことを、三四郎が聞き手を意識せずに語る形式の日常ではありえない語り、C 三四郎が知覚したことを、三四郎が自分自身を受け手として語る内的独白、の3種類となる。

想定される聞き手が異なれば、文末のモダリティ要素や文末形式の性質も異なってくる。その顕著な例がタ形の使用であると考えられる。調査範囲では、文末がタ形であることによって、語り手が内容を対象化し語るという形式である場合が多かった。そのような文は、語り手から想定される聞き手に対して語るという形式になっているのである。このことについては、第2章で詳しく述べる。

7 感情・感覚の表現の様相

『三四郎』では音声として発言されなかった内的独白はカギ括弧で示されていない。まとまった考察は、前述したとおり内的独白として地の文で示される。

内的独白以外でも、物語の進行にともない、外からは見えないその時々三四郎の心情が語られる。その場合の様相について検討したい。

知覚や認識と、感情や感覚というのは細かく分けられないこともあり、今まで論じてきた知覚利用の語りの知覚内容も感情・感覚と言うことができる。しかし、ここではなるべく狭く限定して、三四郎の内面感情に関する話題についてのみを扱うこととする。

これまで語りをA・B・Cと3分類してきたうちの「作中人物の知覚を利用した語り」で内面感情を表す場合、知覚利用の語りは、その内容を語り手が対象化せずに、三四郎の知覚をそのまま生かして語っているものである。これに対して、三四郎の内面を語り手が対象化して語る語りもある。

ここでいう「対象化」とは、「僕は寂しい」のように主体的な感情をそのまま表出するのではなく、「三四郎は寂しかった」というように感情を表現者が客体としてとらえることである。

三四郎の感情（心理・考察）を表す表現として、次の【40】の21では、「と見える」という表現が使われている。この推測するという意味で使われている「と見える」は、三四郎の認識であり、三四郎が推測していることを主体的に表出している。

【40】 1 女とは京都からの相乗である。2 乗った時から三四郎の眼に着いた。3 第一色が黒い。4 三四郎は九州から山陽線に移つて、段々京大坂へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くなるので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じてゐた。5 それで此女が車室に這入つて来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。6 此女の色は実際九州色であつた。

7 三輪田の御光さんと同じ色である。8 国を立つ間際迄は、御光さんは、うるさい女であつた。9 傍を離れるのが大いに難有かつた。10 けれども、斯うして見ると、御光さんの様なのも決して悪くはない。

11 唯顔立から云ふと、此女の方が余程上等である。12 口に締りがある。13 眼が判明してゐる。14 額がお光さんの様にだゞつ広くない。15 何となく好い心持に出来上つてゐる。16 それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見てゐた。17 時々女と

自分の眼が行き中る事もあつた。18 爺さんが女の隣へ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見てゐた。19 其時女はにこりと笑つて、さあ御掛けと云つて爺さんに席を譲つてゐた。20 夫からしばらくして、三四郎は眠くなつて寐て仕舞つたのである。

21 其寐てゐる間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。22 眼を開けた三四郎は黙つて二人の話を聞いて居た。23 女はこんな事を云ふ。――

(『三四郎』一の一：273-274)

これに対して【40】の22は、三四郎の知覚した状態を語り手が対象化して語っている。このように、三四郎の感情を表すのに大きく2通りの表現がある。

次の【41】は、野村（2000：272）で描出表現の例としてあげられたものであるが⁸⁾、本研究では作中人物の内面を語り手が対象化して語った語りとした。

【41】翌日、口答試験と体格検査を受け、周二の試験はそれで終わった。しかし彼は帰郷を一日のぼすことにした。最初の一瞥から並々ならず彼を魅したアルプス連峰に、このたびは登ること不可能としても、せめてその内懷ろにもう少し近寄りたいと念じたのである。話だけ聞いている上高地への入口である島々の宿場だけでも覗いてみたかった。

松本駅から島々線の電車に乗り終点で降りる。そこから島々の宿場まで、一昨日の雪の残った村道を、梓川の水音を耳にしながら周二は辿った。

(北杜夫「楡家の人々」『北杜夫全集4』(1977)新潮社：502)

【41】の下線部が「～てみた(い)」で終わるのであれば主体的表現であり、内心の感情の表出である。対象化はなされない。これは他の感情形容詞でも同じである。しかし、これに「た」が後接することによって、感情は対象化され、外側から客体として作中人物の感情が描写されることになっている。

同じ形式でも【38】の7などのように主人公の感情以外の描写であれば、作中人物の知覚を利用した語りとなるところである。しかし、そのような知覚を利用した語りは、作中人物が事物を客体としてとらえ語り手がさらに自分の語りとして対象化するという形式である。

一方、【41】の下線部のような表現では、作中人物が客体としてとらえていない感情・感覚を語り手が語るのだから、知覚を利用した語り手の語りではなく、知覚（感情）を対象とした語り手の語りになる。そこで、本研究では語り手の語りに分類している。

ジュネット（1985 訳a：78）にも次のような記述があり、作中人物の知覚した事物と作中人物の心理を対象化したものとを区別している。

【42】 内的焦点化の場合、焦点は一人の作中人物に一致し、その作中人物はあらゆる知覚の虚構上「主体」となる。――もちろん彼が知覚主体になるとはいつても、この知覚には、彼自身を対象化する知覚も含まれる。したがって物語言説は、この人物が知覚するすべてのことがらと、彼が考えるすべてのことがらとをわれわれに伝えることが可能である…

(ジュネット (1985 訳 a : 78))

このようなことから、作中人物の動作が語り手の語りとして語られるのと同じように、作中人物の感情・感覚に関する語りは、語り手の語りとなることが多いのである。

作中人物の立場で感じたままを語る場合と、その感じた内容を対象化して語る場合の違いについて、これまでは明確な区別はあまりされてこなかった。本研究では、内面を対象化して語る場合は語り手の立場からの語りであり、知覚を利用した語りとは区別されるべきだと考える。

8 語りの様相から見る小説ごとの特徴

『三四郎』の地の文は、これらの「語り手の立場から語り手が語る語り」「作中人物の知覚を利用した語り」「内的独白」によって構成されている。

8.1 冒頭部、中間部、終末部の調査

8.1.1 用例数の割合からの分析

語り手の立場の語りと、作中人物の知覚を利用した語りの数を集計すると、表1のようになった。表1の冒頭、中間、終末というのは、『三四郎』、『道草』の冒頭部、中間部、終末部のそれぞれ100文の地の文を調査したものである。表のそれぞれの上段が「語り手の立場の語り」、中段が「作中人物の知覚の語り」(内的独白も含む)、下段の()が、発言の数(但し、『三四郎』冒頭には三四郎の耳に入った発言を要約した部分があり、それは含まれていない)である。

【表1】

	冒頭	中間	終末	合計
『道草』	80	72	69	221
	20	28	31	79
	(3)	(23)	(41)	(67)
『三四郎』	51	36	74	161
	49	64	26	139
	(4)	(42)	(22)	(68)

表1を見ると、『道草』においては、「語り手の立場の語り」が中心となって語られているといえる。一方、『三四郎』においては、顕著な傾向は認められない。

冒頭部では、発言が少なめになっており、語られている内容を調査したところ具体的場面を離れた説明的な語りも多く認められた。これは、物語世界の設定を語ることが多いためだと考えられ、冒頭部における特徴だと推測される。このことは、中間部よりも冒頭部に「語り手の立場の語り」が多いことと関係が深いように思われる。物語世界の設定を語る時には、具体的な物語世界の現場の場面についての語りから一時的に離れることが多くなる。既に述べたように、作中人物の知覚を利用した語りは具体的場面に即して語られることが圧倒的に多いので、作中人物の知覚を利用した語りは自ずと少なくなると考えられ

るのである。

そうだとすると、『三四郎』においてはそれでも冒頭に知覚を利用した語りがかなり含まれているので、『三四郎』は『道草』と比較して、知覚を利用した語が多いと考えることができる。

『三四郎』終末部は、『三四郎』の他の部分に比べて作中人物の知覚を利用した語りが極端に少ない。この理由はテキストを読めば明らかである。十二章最後の十二章の七から、語り手は三四郎を客観的に外から語る態度に徹しており、三四郎の内心については一切語っていない。さらに、最後の十三章は、そもそも三四郎を焦点にして語っている部分自体が少ないのである。このような語り手の変化が、大きく影響していると考えられる。

『道草』の終末部は中間部とそれほど大きな差異はない。『道草』終末部のテキストにおいて、やや特徴的なのは、健三と細君との会話によって物語が展開していくことが多く、その間に健三の考えや心理が語られていくという形式になっているということである。このために、健三の知覚や認識が比較的多く語りに反映しており、また発言が多くなっている。

以上のような検討の結果、『三四郎』の終末部を除くと、『道草』は『三四郎』より語り手の立場の語りが多く、『三四郎』は『道草』よりも作中人物の知覚を利用した語が多いといえる。このことは、両作品の語りの特徴に影響を与えていると考えられる。『三四郎』は三四郎の感じたまま語られているような印象が、『道草』は健三が相対化されているような印象があるが、この結論と一致している。このような読後の印象を与えている要因の一つには、語りの様相にもあることが認められる。

8.1.2 用例の具体的分析

次に、具体的用例を検討し、『三四郎』と『道草』の傾向を分析したい。

8.1.2.1 用例から見た『三四郎』の語りの様相

次の【43】は、『三四郎』の中間にある「七の一」の冒頭である。ここは、『三四郎』では典型的な語り方である。

【43】 1 裏から回つて婆さんに聞くと、婆さんが小さな声で、与次郎さんは昨日から御帰
りなさらないと云ふ。2 三四郎は勝手口に立つて考へた。3 婆さんは気を利かして、ま
あ御這入りなさい。4 先生は書斎に御出ですからと云ひながら、手を休めずに、膳碗を
洗つてゐる。5 今晚食が済んだ許の所らしい。

6 三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下伝ひに書斎の入口迄来た。7 戸が開いてゐる。
8 中から「おい」と人を呼ぶ声がする。9 三四郎は敷居のうちへ這入つた。10 先生は机
に向つてゐる。11 机の上には何があるか分らない。12 高い脊が研究を隠してゐる。13
三四郎は入口に近く坐つて、

「御勉強ですか」と丁寧に聞いた。14 先生は顔丈後へ振り向けた。15 髭の影が不明
瞭にもちやもちやしてゐる。16 写真版で見た誰かの肖像に似てゐる。

17 「やあ、与次郎かと思つたら、君ですか、失敬した」と云つて、席を立つた。18

机の上には筆と紙がある。19 先生は何か書いてみた。20 与次郎の話に、うちの先生は時々何か書いてゐる。21 然し何を書いてゐるんだか、他の者が読んでも些とも分らない。22 生きてゐるうちに、大著述にでも纏められゝば結構だが、あれで死んで仕舞つちやあ、反古が積る許だ。23 実に詰らない。24 と嘆息してゐた事がある。25 三四郎は広田の机の上を見て、すぐ与次郎の話を思ひ出した。

「御邪魔なら帰ります。別段の用事でもありません」

「いや、帰つてもらふ程邪魔でもありません。此方の用事も別段の事でもないんだから。さう急に片付ける性質のものを遣つてゐたんぢやない」

26 三四郎は一寸挨拶が出来なかつた。27 然し腹のうちでは、此人の様な気分になれば、勉強も楽に出来て好からうと思つた。28 しばらくしてから、斯う云つた。

「実は佐々木君の所へ来たんですが、居なかつたものですから……」

「ああ。与次郎は何でも昨夜から帰らない様だ。時々漂泊して困る」

「何か急に用事でも出来たんですか」

「用事は決して出来る男ぢやない。たゞ用事を拵へる男でね。あゝ云ふ馬鹿は少ない」

29 三四郎は仕方がないから、

「中々気楽ですな」と云つた。

「気楽なら好いけれども。与次郎のは気楽なのぢやない。気が移るので——例へば田の中を流れてゐる小川の様なものと思つてゐれば間違はない。浅くて狭い。しかし水丈は始終變つてゐる。だから、する事が、ちつとも締りが無い。縁日へひやかしになど行くと、急に思ひ出した様に、先生松を一鉢御買ひなさいなんて妙な事を云ふ。さうして買ふとも何とも云はないうちに値切つて買つて仕舞ふ。其代り縁日ものを買う事なんぞは上手でね。あいつに買はせると大変安く買へる。さうかと思ふと、夏になつてみんなが家を留守にするときなんか、松を座敷へ入れたまんま雨戸を閉てて錠を卸して仕舞ふ。帰つて見ると、松が温気で蒸れて真赤になつてゐる。万事さう云ふ風で洵に困る」

（『三四郎』七の一：457-460）

【43】の1はB-2、2はA、3～5はB-2。（3と4は、連続した文である）6はA、7～8はB-2、9はA-10～12はB-2。13はA-14～16はB-2。

このように見てくると、三四郎の動作はAで語られ、三四郎の見た状況はB-2で語られている。そのため、三四郎の知覚したであろう事物を多く語るので、時間をかけて語られている。臨場感がある。

17～24はB-2（20～24は一文）。25はA。20～24の三四郎の記憶を引用したことを25で明らかにしている。26～28はAで、三四郎の動作を語っている。

ここも、1～16と同じように、三四郎の動作はAの語りで、その他の事物は三四郎の知覚を利用して語っている。

三四郎のことを語るときは、タ形文末の文で語っていて、語り手は物語場面の現場で語るようには語っていない。それに対して、三四郎の知覚している内容は非タ形の文末で語られることが多く、臨場感がある。

次の【44】は【43】に続く部分である。途中で「七の一」から「七の二」に移っている。

- 【44】 30 実を云ふと三四郎は此間与次郎に弍十円借した。31 二週間後には文芸時評社から原稿料が取れる筈だから、それ迄立替てくれろと云ふ。32 事理を聞いて見ると、気の毒であつたから、国から送つて来た許りの為替を五円引いて余りは悉く借して仕舞つた。33 まだ返す期限ではないが、広田の話聞いて見ると少々心配になる。34 しかし先生にそんな事は打ち明けられないから、反対に、
- 「でも佐々木君は、大いに先生に敬服して、蔭でも先生の為に中々尽力してゐます」と云ふと、先生は真面目になつて、
- 「どんな尽力をしてゐるんですか」と聞き出した。35 所が「偉大なる暗闇」其他凡て広田先生に関する与次郎の所為は、先生に話してはならないと、当人から封じられてゐる。36 やり掛けた途中でそんな事が知れると先生に叱られるに極つてゐるから黙つて居るべきだといふ。37 話して可い時には己が話すと明言してゐるんだから仕方がない。38 三四郎は話を外らして仕舞つた。

七の二

39 三四郎が広田の家へ来るには色々な意味がある。40 一つは、此人の生活其他が普通のものと変つてゐる。41 ことに自分の性情とは全く容れない様な所がある。42 そこで三四郎は何うしたらあゝなるだらうと云ふ好奇心から参考の為め研究に来る。43 次に此人の前へ出ると呑気になる。44 世の中の競争が余り苦にならない。45 野々宮さんも広田先生と同じく世外の趣はあるが、世外の功名心の為めに、流俗の嗜慾を遠ざけてゐるかの様に思はれる。46 だから野々宮さんを相手に二人限で話してゐると、自分も早く一人前の仕事をして、学海に貢献しなくては濟まない様な気が起る。47 焦慮いて堪らない。48 そこへ行くと広田先生は太平である。49 先生は高等学校でたゞ語学を教へる丈で、外に何の芸もない——と云つては失礼だが、外に何等の研究も公けにしない。50 しかも泰然と取り澄ましてゐる。51 其所に、此呑気の源は伏在してゐるのだらうと思ふ。

（『三四郎』七の一～七の二：460-461）

30 はAである。31 は、三四郎の知覚したことを三四郎が語る形式となっていて、B-2と考えられる。32 は、三四郎が回想していると考えればB-2、語り手が三四郎の行為を語っていると考えればAとなる。前の31をB-2としたことから、31と32とも三四郎の語りと考える方が自然なので、B-2としておく。33 は、「広田の話」という語り手の立場の用語が使われていることから、「少々心配になる」も三四郎の感情表出ではなく、語り手が三四郎を客体化して語った表現だと解釈できるので、Aと考える。34 は、文末が「聞き出した」というタ形となっており、三四郎が物語世界の現場で知覚している語りとは考えにくいので、B-1とする。35 は、はじめに「所が」という表現があり、前文を踏まえた表現であることが分かる。前文の34は三四郎の立場の語りではないので、35をB-2とすることはできない。しかし、35は三四郎の認識を表していると思われるのでB-1とする。36と37は、三四郎の認識の表現なのでB-2である。38は、Aである。

39はAである。40は、はじめに「一つは」とあることから、前文を踏まえた表現なので

B-2ではない。三四郎の知覚を利用した語り手の語りと考えられるので、B-1とする。41は、B-2ともB-1とも考えられるが、40と同様にB-1としておく。42はAである。43は、40と同じように考えてB-1とする。44～51は、三四郎の日頃考えていることを表現しているが、三四郎の語る形式だと考えられるので、B-2とする。

このように、語り手の語りとして語られ始めても、三四郎の認識を媒介として、三四郎の語る形式に変化するようになっている。

これまで、『三四郎』の「七の一」を検討してきた。三四郎についてはAの語りで語られ、物語世界の状況は三四郎の知覚を利用したB-1やB-2で語られることが多い。三四郎が語る形式であるB-2の語りは、文末形式によって三四郎の語りと認定できるが、実際に三四郎が言語化している表現ではないため、語り手が三四郎に介入している印象を与える。AやB-1の文の途中にB-2が入っていても不自然に感じないのは、このことが影響していると考えられる。

「七の一」の前半は、主にB-2とAの語りで物語が展開していく。内容としては、具体的な物語場面の状況が語られている。30以降は、三四郎の心理や回想が入ってくる。それらの語りは、AとB-1とB-2の語りが入り組んで語られている。相対的にB-2の割合は減少する。つまり、語り手の語る形式の語りが相対的に増加したということになる。30以降の実際の文を観察すると、30、33、34、35、38、39、40、41、42、43、が語り手の語る形式となっている。事態が展開していく部分や大枠を語る部分は、語り手の語る形式となっているといえる。それに対して、事態が詳細なところまで語られる時には、三四郎の語る形式（B-2）が用いられると大体いえる。

三四郎の語る形式の文（B-2）は、語りの中に三四郎の知覚・認識を引用するように挿入されている。B-1とB-2は区別が難しい時もあるが、このように表現上で大きな違いを持つことが多い。

『道草』の知覚利用の語りのほとんどは語り手が語る形式であるので、『三四郎』にB-2が挿入されているのは、大きな表現上の違いといえる。

次に、『三四郎』の冒頭部分を検討したい。初めの部分は、現在の物語場面より時間的に前のことを説明している語りなので、その後から引用する。この部分は、B-2がそれほど多くない。なお、文に付した番号が26からになっているのは、テキストの冒頭の文を1と設定したためである。

【45】 26 眼を開けた三四郎は黙って二人の話を聞いて居た。27 女はこんな事を云ふ。――

（中略）

28 爺さんは鮎薬師も知らず、玩具にも興味がないと見えて、始めのうちは只はいはいと返事丈してゐたが、旅順以後急に同情を催ふして、それは大いに気の毒だと云ひ出した。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとう彼地で死んで仕舞つた。一体戦争は何の為にするものか解らない。後で景気でも好くなればだが、大事な子は殺される、物価は高くなる。こんな馬鹿気たものはない。世の好い時分に出稼ぎなど云ふものはなかつた。みんな戦争の御蔭だ。何しろ信心が大切だ。生きて働らいてゐる

に違ない。もう少し待つてゐれば屹度帰つて来る。——29 爺さんはこんな事を云つて、頻りに女を慰めて居た。30 やがて汽車が留つたら、では御大事にと、女に挨拶をして元気よく出て行つた。

一の二

31 爺さんに続いて下りたものが四人程あつたが、入れ易つて、乗つたのはたった一人しかない。32 固から込み合つた客車でもなかつたのが、急に淋しくなつた。33 日の暮れた所為かも知れない。34 駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯の点いた洋燈を挿し込んで行く。35 三四郎は思ひ出した様に前の停車場で買った弁当を食ひ出した。

36 車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。37 此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入つた。38 三四郎は鮎の煮浸しの頭を啣へた儘女の後姿を見送つてゐた。39 便所に行つたんだと思ひながら頻りに食つてゐる。

40 女はやがて帰つて来た。41 今度は正面が見えた。42 三四郎の弁当はもう仕舞掛である。43 下を向いて一生懸命に箸を突込んで二口三口頬張つたが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。44 もしやと思つて、ひよいと眼を挙げて見ると矢つ張り正面に立つてゐた。45 然し三四郎が眼を挙げると同時に女は動き出した。46 只三四郎の横を通つて、自分の座へ帰るべき所を、すぐと前へ来て、身体を横へ向けて、窓から首を出して、静に外を眺め出した。47 風が強くあたつて、鬢がふわふわする所が三四郎の眼に這入つた。48 此時三四郎は空になつた弁当の折を力一杯に窓から放り出した。49 女の窓と三四郎の窓は一軒置の隣であつた。50 風に逆つて抛げた折の蓋が白く舞ひ戻つた様に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと気が付いて、不途女の顔を見た。51 顔は生憎列車の外に出てゐた。52 けれども女は静かに首を引つ込めて更紗の手帛で額の所を丁寧に拭き始めた。53 三四郎は兎も角も謝まる方が安全だと考へた。

54 「御免なさい」と云つた。

(『三四郎』 一の一～一の二：274-276)

26 と 27 はAである。

28 は、ある程度の時間が経過していく出来事を語っている。この場合、出来事全体をまとめて語るので、過去のこととして語ることはできるが、その場で知覚しながら語ることはできない。28 は、その場で知覚した内容といえず、また作中人物が過去のことを回想している語りでもない。そのため、B-2ではなくB-1とする。29 も同様に、B-1とする。30 の「やがて」で時間が経過したことが分かる。三四郎が、現場で少し前のことを回想していると考えるのは不自然であることから、語り手が、聞き手に対して語つたものと考えられる。28～30 は、三四郎が「爺さん」を観察した内容であるが、三四郎が実況しているような語りではなく、語り手の語りだと考えられる。

31～34 は、三四郎の判断による文だと解釈すればB-2で、語り手の判断による文だと解釈すればAとなる。三四郎がその場で知覚している内容だと考えられるので、B-2とした。35 はA。

36 はB-1。37～39 はA。40 と 41 は、文末がタ形であるためB-2かB-1の判断がつきにくい。40 は「やがて」とあることから、時間が経過したことがわかる。そのため、その

場での知覚というよりは、説明的内容を含んでいる。41 の「今度は正面が見えた」というのは、37 の「此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入った」を前提として「今度は」と表現しているので、「今度は」は語り手の意識を反映していると考えの方が適切であろう。また、39 まで語り手の語りであることから、40 と 41 もそれを引きついでいるように考えられる。このようなことから、40 と 41 は語り手が三四郎の知覚を利用して語っている B-1 とするのが適当だろう。42 は A。

43 は解釈しにくい。前半は語り手が三四郎を外から語っている。後半の「…らしい」は、三四郎の判断と考えられる。そこで、ここでは文末形式を重く見て、B-2 と考えることとした。もし、文末が「らしかった」であれば、語り手の語る文となり B-1 とするところである。44 は、B-1 か B-2 である。文末がタ形で説明的な表現であるので、B-1 の方が適当であろう。45 と 46 は B-1 である。47～50 は A である。51 は B-1 と考えられる。前後の語りから考えて、ここだけ三四郎が、「出てゐた」と気づき表現の語りをするとは考えにくいからである。52 も同様に B-1 と考えられる。53 と 54 は A の語りである。

このように見てくると、前の例とは違い、語り手の語る形式が多いことがわかる。

三四郎の知覚を利用した語りがあるものの、A も多く三四郎を対象化して語ることが多い。つまり、三四郎の見た世界を語るだけでなく、三四郎について語る傾向もあるということである。三四郎の知覚を利用して物語場面の状況を語りながら、三四郎の外から三四郎についての語っていくことも多い。

また、この部分は B-2 よりも B-1 が多い。特に、三四郎が弁当を食いだしたところから、B-1 と A が中心になっていく (B-2 は 2 文のみ)。B-1 は、三四郎の知覚を利用しても、語り手の語る形式であるので、語り手が状況を語る印象が強くなっている。三四郎が弁当を食いはじめてからの部分では、語り手が饒舌に語っている印象が強いが、これは A と B-1 の語りが中心となっているためだと思われる。それに対して、前の例のように、B-2 が混じると、語り手が饒舌に語る印象が薄れてくる。

しかし、物語場面は三四郎の行動と知覚で進んでいくことが多い。そのため、三四郎の考えている内容に沿った形で語りが進行しているように感じられる。

今までの例は、『三四郎』の冒頭部分と中間部分を作為なしに引用したもののだが、次に A の多い部分を、意図的に探して挙げる。

次の【46】は、は「四の一」からの引用である。

【46】 1 かう云ふ問答を二三度繰返してゐるうちに、いつの間にか半月許り経過た。2 三四郎の耳は漸々借りものでない様になつて来た。3 すると今度は与次郎の方から、三四郎に向つて、

「どうも妙な顔だな。如何にも生活に疲れてゐる様な顔だ。世紀末の顔だ」と批評し出した。4 三四郎は、此批評に対しても依然として、

「さう云ふ訳でもないが……」を繰り返してゐた。5 三四郎は世紀末杯と云ふ言葉を聞いて嬉しがる程に、まだ人工的の空気に触れてゐなかつた。6 またこれを興味ある玩具として使用し得る程に、ある社会の消息に通じてゐなかつた。7 ただ生活に疲れてゐるといふ句が少し気に入つた。8 成程疲れ出した様でもある。9 三四郎は下痢の為め許

りとは思はなかつた。10 けれども大いに疲れた顔を標榜するほど、人生観のハイカラでもなかつた。11 それで此会話はそれぎり発展しずに済んだ。

(『三四郎』 四の一：345)

【46】は、下線部の8だけが、B-2と考えられ、その他はAと考えられる(3はB-1とも考えられる)。これらの部分は、具体的な物語場面が設定されていないで、時間的に長い期間にわたる内容を扱っている。

このように、具体的な物語場面が設定されていない語りもあり、そのような部分では語り手が語る形式になる。

これまでの『三四郎』の語りの様相の分析についてまとめみたい。

『三四郎』の中間部分として「七の一」、冒頭部分として「一の一～一の二」を引用した。中間部分は、『三四郎』に多くみられる語りで、物語場面の状況を語るときには三四郎の知覚を利用して語り、三四郎の動作を語るときは語り手の語りが多くなる。B-2の語りも多く、臨場感がある。三四郎の知覚・判断や意識の流れに強く沿った形式で語られる部分が多い。このような語りは、『三四郎』ではよく見られる。

冒頭部分は、時間的に幅のある出来事をまとめて語る場合があり、その場合は語りの語りを中心となっている。また、三四郎の知覚を利用している語りでも、語り手の語る形式であるB-1がよく用いられている。中間部分よりは、語り手の語りが多くなっている。

また、「四の一」で、Aの多い部分を引用した。具体的な物語場面を設定しないで語る場合には、当然ながら語り手の語りを中心となる。

以上のことから、次のようにいえる。B-1とB-2の区別が明確にできないこともあるが、AとB-1が多いときには語り手中心の印象を与える。語り手の語りという体裁であるからである。冒頭部分にはB-1が比較的多く、語り手の饒舌な印象を与える部分が多い。

『三四郎』では、中間部分のようにB-2の語りが多く、物語世界の状況を臨場感を持って語る場合が多い。また、冒頭部のようにAとB-1が比較的多く、語り手の饒舌な印象を与える場合も見られる。両者とも、具体的な物語場面の展開に沿って語られている点では共通している。「四の一」のような具体的な物語場面が設定されていない語り挿入されることがあるが、具体的物語場面を語る前の説明として語られることが多い。

8.1.2.2 用例から見た『道草』の語りの様相

次に『道草』の語りの様相を見ていきたい。

はじめに、冒頭部を検討する。次の【47】は、『道草』の冒頭である。

【47】 1 健三が遠い所から帰つて来て駒込の奥に世帯を持つたのは東京を出てから何年目になるだらう。2 彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋し味さへ感じた。

3 彼の身体には新しく後に見捨てた遠い国の臭がまだ付着してゐた。4 彼はそれを忌んだ。5 一日も早く其臭を振り落さなければならぬと思つた。6 さうして其臭のうちに潜んでゐる彼の誇りと満足には却つて気が付かなかつた。

7 彼は斯うした気分を有つた人に有勝な落付のない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二辺づゝ規則のやうに往来した。

8 ある日小雨が降った。9 其時彼は外套も雨具も着けずに、たゞ傘を差したゞけで、何時もの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行つた。10 すると車屋の少しさきで思ひ懸けない人にはたりと出会つた。11 其人は根津権現の裏門の坂を上つて、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十間位先から既に彼の視線に入つたのである。12 さうして思はず彼の眼をわきへ外させたのである。

13 彼は知らん顔をして其人の傍を通り抜けようとした。14 けれども彼にはもう一遍此男の眼鼻立を確める必要があつた。15 それで御互が二三間の距離に近づいた頃又眸を其人の方角に向けた。16 すると先方ではもう疾くに彼の姿を凝と見詰めてゐた。

17 往来は静であつた。18 二人の間にはたゞ細い雨の糸が絶間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかつた。19 健三はすぐ眼をそらして又真正面を向いた儘歩き出した。20 けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ気色なく、じつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。21 健三は其男の顔が彼の歩調につれて、少しづゝ動いて回るのに気が着いた位であつた。

『道草』 一：3-4)

1～7 はすべてA。

8～10 はA。11 は前半が健三の知覚だが、後半は語り手の語りなので、Aとしておく。

12 はA。13～15 はA。16 と 17 はB-1。18 と 19 は、A。20 はB-1。21 はA。

次の【48】は、【47】に続く部分である。

【48】 22 彼は此男に何年会はなかつたらう。23 彼が此男と縁を切つたのは、彼がまだ廿歳になるかならない昔の事であつた。24 それから今日迄に十五六年の月日が経つてゐるが、その間彼等はつひぞ一度も顔を合せた事がなかつたのである。

25 彼の位地も境遇もその時分から見ると丸で變つてゐた。26 黒い髭を生して山高帽を被つた今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさへ隔世の感が起らないとも限らなかつた。27 然しそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。28 彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髪の色が、何故今でも元の通り黒いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。29 帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通してゐる其人の特色も、彼には異な気分を与へる媒介となつた。

『道草』 一：4-5)

22 と 23 はA。24 は、前半が健三の知覚のようにも解釈できるが、後半は語り手の語りなので、Aとしておく。健三が24のようにその時思考したかということ、していないのではないだろうか。25 と 26 は、語り手の説明であり、Aと考えられる。27 は、次の28の内容から見て健三の知覚と考えられるのでB-1。28、29 はA。

このあたりは、欧文脈（無生物主語）の文が用いられていて、そのときは健三の知覚しているような形式の文になっていない。

次の【49】は、【48】に続く部分である。

【49】 30 彼は固より其人に出会ふ事を好まなかつた。31 万一出会つても其人が自分より立派な装束でもしてゐて呉れゝば好いと思つてゐた。32 然し今目前見た其人は、あま

り裕福な境遇に居るとは誰が見ても決して思へなかつた。33 帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織なり着物なりに就いて判断したところ、何うしても中流以下の活計を営んでゐる町家の年寄としか受取れなかつた。34 彼は其人の差してゐた洋傘が、重さうな毛繻子であつた事に迄気が付いてゐた。

35 其日彼は家へ帰つても途中で会つた男の事を忘れ得なかつた。36 折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送つてゐた其人の眼付に悩まされた。37 然し細君には何も打ち明けなかつた。38 機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。39 細君も黙つてゐる夫に対しては、用事の外決して口を利かない女であつた。

(『道草』一：5)

30 と 31 はA。32 と 33 はB-1。34 は健三の内的状態を対象化して語っているのでA。35～39 はA。35 と 36 は健三の内的状態である。38 と 39 は、健三と細君の性質・属性で具体的な時間に関わらない語りである。

この冒頭の部分のはじめの方は、具体的な物語場面が設定されていなくて、日常的な状況について主に語られている。このようなときは語り手の立場のAの語りが多くなる。その後、「思ひ懸けない人」と会う部分は具体的な物語場面となっている。この場面でも、健三を外から対象化した語りが多く、また状況を語り手が説明することが多い。そのため、あまり健三の知覚したことを利用して語られていない。そのため、語り手が説明する印象を強く与える。

引用したのは、「一」章全体であるが、「二」章と「三」章も同様な語り方で、Aの語りを中心である。

このように、『道草』の冒頭は、『三四郎』と異なり、Aが中心である。物語場面があまり設定されずに語り手の立場での説明的な語りが目立つ。

『道草』の中間部として、「五十」章を検討する。次の【50】は、「五十」章の冒頭である。

【50】 1 健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立つた。

「何うかしたのか」

2 細君は眼を開けて天井を見た。3 健三は蒲団の横からまた其眼を見下した。

4 襖の影に置かれた洋燈の灯は客間のよりも暗かつた。5 細君の眸が何処に向つて注がれてゐるのか能く分らない位暗かつた。

「何うかしたのか」

6 健三は同じ問をまた繰り返さなければならなかつた。7 それでも細君は答へなかつた。

8 彼は結婚以来斯ういふ現象に何度となく遭遇した。9 然し彼の神経はそれに慣らされるには余りに鋭敏過ぎた。10 遭遇するたびに、同程度の不安を感じるのが常であつた。11 彼はすぐ枕元に腰を卸した。

「もう彼方へ行つても好い。此所には己が居るから」

(『道草』五十：150-151)

1 はA。健三の発言のあと、2 はB-1、3 はA、4 と 5 はB-1。続いて健三の発言のあと、6 はA、7 はB-1、8 はA。8 は日常的に繰り返される事態を表現している。9 もA。9 は健三の性質・属性を表現している。10 もAで、日常的に繰り返される事態を表現している。8～10 の 3 文は、物語世界の個別的な時間の中の出来事を表していない。11 で元の物語世界の具体的出来事の語りに戻っている。11 はAである。

ここまで、AとB-1 がかわるがわる語られ、8～11 では語り手の説明として語り手の立場で語られている。ここでは、健三の心理が語られているのではなく、健三の見た事柄と語り手が対象化した健三の様子が語られている。

次の【51】は、【50】に続く部分である。

【51】 12 ぼんやり蒲団の裾に坐つて、退屈さうに健三の様子を眺めてみた下女は無言の儘立ち上つた。13 さうして「御休みなさい」と敷居の所へ手を突いて御お辞儀をしたなり襖を立て切つた。14 後には赤い筋を引いた光るものが畳の上に残つた。15 彼は眉を顰めながら下女の振り落して行つた針を取り上げた。16 何時もなら婢を呼び返して小言を云つて渡す所を、今の彼は黙つて手に持つたまゝ、しばらく考へてみた。17 彼は仕舞に其針をぷつりと襖に立てた。18 さうして又細君の方へ向き直つた。

19 細君の眼はもう天井を離れてみた。20 然し判然何処を見てゐると思へなかつた。21 黒い大きな瞳子には生きた光があつた。22 けれども生きた働が欠けてみた。23 彼女は魂と直接に繋がつてゐないやうな眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔の向いた見当を眺めてみた。

「おい」

(『道草』五十：151)

12 は、健三が見ていた内容かどうか判別しにくい健三の目に入っていたと考え、B-1 とする。同様に 13 と 14 もB-1。15～18 は健三を対象化しているのでAとする。

19 は、前文 18 の「細君の方へ向き直つた」とあることから、向き直つて後に見た状態と考えられ、B-1。20 は、健三の心理を対象化しているのでAである。21～23 は、健三の見た内容なのでB-1。

ここでも、健三の見た内容と健三を対象化した様子かわるがわる語られている。

次の【52】は、【51】に続く部分である。

【52】 24 健三は細君の肩を揺つた。25 細君は返事をせずに只首丈をそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。26 けれども其処に夫の存在を認める何等の輝きもなかつた。

「おい、己だよ。分るかい」

27 斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陳腐で簡略でしかもぞんざいな此言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。28 それから跪まづいて天に禱る時の誠と願もあつた。

「何うぞ口を利いて呉れ。後生だから己の顔を見て呉れ」

29 彼は心のうちで斯う云つて細君に頼むのである。30 然し其痛切な頼みを決して口へ出して云はうとはしなかつた。31 感傷的な気分支配され易い癖に、彼は決して外

表的になれない男であつた。

(『道草』 五十：151-152)

24 はA。25 と 26 はB-1。

発言のあと、27～31 は繰り返される事態や状態が語られている。途中の発言も繰り返される内容である。そして、すべてAである。

このように、健三の知覚を利用した語りで物語場面の事態や状態が語られるが、『三四郎』と違い、その場の具体的な時間に関わらない状況を語り手が説明することが多い。個別の出来事を、繰り返される一般的出来事として語るような内容となっている。『三四郎』と違い、具体的な出来事に沿って語るという構成にはなっていない。

次の【53】は、【52】に続く部分である。

【53】 32 細君の眼は突然平生の我に帰つた。33 さうして夢から覚めた人のやうに健三を見た。

「貴夫？」

34 彼女の声は細くかつ長かつた。35 彼女は微笑しかけた。36 然しまだ緊張してゐる健三の顔を認めた時、彼女は其笑を止めた。

「あの人はもう帰つたの」

「うん」

37 二人はしばらく黙つてゐた。38 細君は又頸を曲げて、傍に寐てゐる子供の方を見た。

「能く寐てゐるのね」

39 子供は一つ床の中に小さな枕を並べてすやすや寐てゐた。

40 健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。

「水で頭でも冷して遣らうか」

「いゝえ、もう好ござんす」

「大丈夫かい」

「えゝ」

「本当に大丈夫かい」

「えゝ。貴夫ももう御休みなさい」

「己はまだ寐る訳に行かないよ」

41 健三はもう一遍書斎へ入つて静な夜を一人更かさなければならなかつた。

(『道草』 五十：152-153)

32、33 はB-1。発言を挟んで34、35 もB-1。36 は、「緊張してゐる健三の顔」を健三が自覚していなければAとするべきだが、「彼女は其笑ひを止めた」ことを健三が知覚していたと考えB-1としておきたい。B-1 は作中人物の知覚を利用した語りであるが、語り手が語る形式なので、このように語り手の立場の表現が文の一部に入ってくることもある。

37 はA。38 はB-1。発言を挟んで39 もB-1。40 はA。健三と細君の会話のあと、41 はA。

このあたりも、前の部分と同じでB-1 とAによって進行する。

ここで引用した『道草』の「五十」章は、冒頭の「一」～「三」章に比べると、B-1が多い。発言数も冒頭に比べると多い。「五十」章は具体的な物語場面が設定されて語られているのが大きな理由であろう。内容も、健三が観察する細君の状態が中心であることもB-1の多い理由の一つであろう。

しかし、そういう中でも、繰り返される一般的出来事として事態が語られることにより、語り手の説明的な語りの印象を与えている。また、それによってAの語りも多くなっている。

この「五十」章のように物語場面が設定されB-1の語りが比較的多くある部分もあるが、全体的に見ると表1のようにBの語りは『三四郎』より多くないことが分かる。

次に、『道草』の終末部として「百一」章を検討する。なお、『道草』は「百二」章が最終章である。次の【54】は、「百一」章の冒頭である。文番号が40からになっているのは、テキストの最後の文を100と設定したときの番号だからである。

【54】 40 歳が改まつた時、健三は一夜のうちに変つた世間の外観を、気のなささうな顔をして眺めた。

「すべて余計な事だ。人間の小刀細工だ」

41 実際彼の周囲には大晦日も元日もなかつた。42 悉く前の年の引続きばかりであつた。43 彼は人の顔を見て御目出たうといふのさへ厭になつた。44 そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも会はずに黙つてゐる方がまだ心持が好かつた。

45 彼は普通の服装をしてぶらりと表へ出た。46 成るべく新年の空気の通はない方へ足を向けた。47 冬木立と荒れた畠、藁葺屋根と細い流、そんなものが盆槍した彼の眼に入つた。48 然し彼は此可憐な自然に対してももう感興を失つてゐた。

49 幸ひ天気は穏かであつた。50 空風の吹き捲らない野面には春に似た靄が遠く懸つてゐた。51 其間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身体を包んだ。52 彼は人もなく路もない所へわざわざ迷ひ込んだ。53 さうして融けかゝつた霜で泥だらけになつた靴の重いのに気が付いて、しばらく足を動かさずにゐた。54 彼は一つ所に佇立んでゐる間に、気分を紛らさうとして絵を描いた。55 然し其絵があまり不味いので、写生は却つて彼を自暴にする丈であつた。56 彼は重たい足を引摺つて又宅へ歸つて来た。57 途中で島田に遣るべき金の事を考へて、不図何か書いて見やうといふ気を起した。

58 赤い印気で汚い半紙をなすくる業は漸く済んだ。59 新らしい仕事の始まる迄にはまだ十日の間があつた。60 彼は其十日を利用しやうとした。61 彼は又洋筆を執つて原稿紙に向つた。

(『道草』 百一：311-312)

40 はA。発言を挟んで、41～48 もA。49～51 はB-1。52～57 はA。このあたりのAは、主に健三のことを対象化した語りであるが、健三の心理も含まれている。

58 はA。59 は健三の意識を反映しているのでB-1とする。60～61 はA。

次の【55】は【54】に続く部分である。

【55】 62 健康の次第に衰へつゝある不快な事実を認めながら、それに注意を払はなかつ

た彼は、猛烈に働らいた。63 恰も自分で自分の身体に反抗でもするやうに、恰もわが衛生を虐待するやうに、又己れの病気に敵討でもしたいやうに。64 彼は血に餓ゑた。65 しかも他を屠る事が出来ないのので已を得ず自分の血を啜つて満足した。

66 予定の枚数を書き了へた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。

「あゝ、あゝ」

67 彼は獣と同じやうな声を揚げた。

68 書いたものを金に換へる段になつて、彼は大した困難にも遭遇せずに済んだ。69 たゞ何んな手続きでそれを島田に渡して好いか一寸迷つた。70 直接の会見は彼も好まなかつた。71 向うももう参上りませんと云ひ放つた最後の言葉に対して、彼の前へ出て来る気のない事は知れてゐた。72 何うしても中へ入つて取り次ぐ人の必要があつた。

「矢つ張御兄さんか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでせう。今迄の行掛りもあるんだから」

「まあ左右でもするのが、一番適当な所だらう。あんまり有難くはないが。公けな他人を頼む程の事でもないから」

73 健三は津守坂へ出掛けて行つた。

(『道草』 百一：312-313)

62～66 まですべてA。発言を挟んで 67～70 はA。71 は健三の意識を反映しているのでB-1 と考えられる。72 はA。細君と健三の発言を挟んで、73 はA。

このように、終末のこのあたりは、健三のことだけを語っていて、ほとんどがAの語りとなっている。作中人物の健三を語るにあたり、健三を対象化して見る語りになっている。『三四郎』であれば、作中人物（主人公）を語るときはB-1 やB-2 の語りなどもあり、三四郎の知覚を反映した語りが多くなると考えられる。また、40 からの部分は、物語世界の時間の流れに対して語られる分量が少なく、臨場感のある具体的な物語場面が設定されていない。そのため、物語場面の状態描写などは語られないので、健三の知覚を利用した語りは少なくなっている。このような具体的な物語場面のない語りが『道草』ではよく見られる。

『道草』の語りの様相の特徴は、次のようにいえる。

冒頭部や終末部でAの多かった大きな理由は、語り手の説明であつた。具体的な物語場面そのものを語らない語りのときにAが多くなっている。そして、そのAの語りが『三四郎』よりも多いという傾向がある。つまり、『道草』は物語場面を離れた語り手の説明的な語りが多いといえる。

健三の心理を語るときは、内的独白やBの語りではなく、語り手によって対象化された語りが多く用いられている。そのため、健三の心理を語るときもAの語りが多くなっている。

また、B-1 は、語り手の立場寄りの表現も含まれているため、B-1 が混ざっていても語り手の語りが中心である印象を薄めることになっていない。

8.2 冒頭 15%の調査

次の表2は、『三四郎』と『道草』のそれぞれの冒頭 15% (『三四郎』830 文、『道草』510

文)を語りの様相の観点から調査したものである。なお、便宜上Aを、A-1語り手が作中人物の内的状態を語る文、A-2語り手が作中人物の内的状態以外を語る文、とに分けて示した。

【表2】

『三四郎』

	文数	830 文中 の割合
A-1	131	15.8%
A-2	224	27.0%
B-1	277	33.4%
B-2	144	17.3%
C	54	6.5%
合計	830	

『道草』

	文数	510 文中 の割合
A-1	171	33.5%
A-2	282	55.3%
B-1	56	11.0%
B-2	1	0.2%
C	0	0.0%
合計	510	

A-1は、『三四郎』の方が『道草』に比べて約半数と少ない。作中人物の内面を語る方法として二つの場合が考えられる。一つは作中人物の直接認識として語る場合で、もう一つは語り手が作中人物の内面を対象化して語る場合である。表1のA-1の項目を見ると、『三四郎』は『道草』と比べて、語り手が作中人物の内面を対象化して語ることが少ないことがわかる。語り手が作中人物の内面に立ち入る割合が少ないとも言える。直接認識として内面を語る場合が多いか、そもそも内面を語ることが少ないかのどちらかだと考えられる。いずれにしても、語り手が作中人物の内面を対象化して語れば、その人物を分析的に語っている印象が強くなるので、『三四郎』は『道草』ほど作中人物については分析的でないといえる。

また、『道草』は『三四郎』に較べてAの割合が多く、Bの割合が少ない。このことから、『三四郎』と『道草』を比較すると、『三四郎』は作中人物の知覚・認識を利用した語りが多く、『道草』は語り手の立場からの語りが多いといえる。

9 むすび

本稿では、小説の地の文を従来のような話法の問題とせず、新たな基準で分類した。話法の問題とすると、地の文は元の発話者(作中人物)の発言や心内文の引用ということになる。しかし、実際には作中人物が心内でも言語化していない語りも存在する。また、自由間接話法と考えると、誰が誰に対して語った表現なのかがはっきりしなくなる。その点で、話法と考える方が実態に即している。

話法でないと考えると、「誰が誰にどのような内容を語るのか」という言語の場として考えることができる。この際、語り手というのは実体のない、物語を語るうえでの特別な設定なので、情報をなぜもっているのかは問われない。そのため、語る内容の情報源が作中人物の知覚であったとしても、言語の場として語り手が語るということに矛盾が生じない。

また、自由間接話法と考えずに本稿のように分類することによって、作中人物に対する

語り手の態度と、語り手の距離の取り方が整理できた。

第1章では、語り（地の文）の様相を独自に分類したうえで、それぞれの様相がテキストにおいてどのように現れるかを検証したが、その結果、小説テキストではそれぞれの様相の現れ方にパターンがあり、それぞれのテキストにおいて特徴があることが認められた。

【注】

1) 保坂宗重・鈴木康志（1993）『体験話法（自由間接話法）文献一覧一わが国における体験話法研究一』（茨城大学教養部）に、描出表現（体験話法・自由間接話法）の研究の歴史的経緯が詳述されている。

2) しかし、日本語では主語が省略されることが多いため、それをどのように解釈するかという問題が残っている。

3) 中村（1987）では、次の坪田譲治『風の中の子供』を例について、以下のような指摘をしている。ここでは、「て来る」が作中人物の視点を表す指標と考えられている。また、ここで言う「視点」は、本稿で述べる「作中人物の知覚」と重なっている。

①善太がお使から帰って来ると、玄関に子供の靴と女の下駄がぬいであった。②『三平らしいぞ』③思はず微笑が頬にのぼって来る。④それでも真面目くさって、「唯今。」

と、上にあがって行く、⑤座敷で、お母さんと鵜飼のをばさんとが話してゐる。

⑥お辞儀をして側に坐る。⑦「三平チャンは？」ときゝたいのだけれど、何故か、その言葉が出てこない。⑧立つて、その辺を歩いて見る。

「第7文では、（中略）第3文の場合と同じく、『言葉が出て来ない』の『て来る』の用法から、ここもやはり善太の視点であることが判明する。次の第8文も、（中略）『その辺』というとらえ方や『…て見る』という述べ方には、現場にいる当事者の目が感じられる。」

4) 今回の調査範囲では、②と③の区別がはっきりしないものが『三四郎』にあったが、それは②として扱った。

5) 章のはじめから具体的場面が語られることもあるので、事態の大まかな進行がいつもはじめに示されるとは限らない。今回検討した『三四郎』の冒頭は三四郎の知覚を利用した語りからはじまり、『道草』は語り手の立場からの語りになっている。

6) しかし、タ形の文の場合はその「た」が誰の対象化によるものなのかによって解釈が分かれてしまう。また、そのため文末形式だけで、読者を意識しているかどうか決定できない場合もある。

7) 詳しくは、2章で述べる。

8) 野村眞木夫（2000）では描出表現について「描出表現とは、『と』などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテキストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばからテキストの参加者をさししめすモードで表現する類型である。」と述べられている。

第2章 動詞文・テイル文・デアル文（タ形と非タ形）が語りの表現に与える影響

第2章では、文末表現という観点から語りを分析するということを行う。日本語は文末決定性という性質があり、また文末にはモダリティ（陳述）要素があると考えられるため、文末表現を分析観点とすることで、語り言語の何らかの特徴が見出せると考える。

動作性動詞文末の文は事態の変化を表し、テイル文末の文は継続している状態あるいは効果の継続している状態を表し、デアル文末の文は表現者の断定判断を表すと考えられる。このような事態の変化、状態、判断の表現が、テキストにおいてどのような特徴と表現効果をもって語られているか、タ形と非タ形に分けて分析する。

第1章で扱った分析とは異なる観点からの分析であるが、時に分類をクロスさせながら考えていく。

1 地の文における文末形式「タ」の働き

文末形式の「タ」は、テンスとしての研究が進んでいる。時間という基準で「タ」を分析するものである。本稿は、文末の「タ」を、テンスという見方からではなく、小説の地の文に使用された際の効果という点から、分析したものがある。テンスとして「タ」を研究する場合、想定している対象は主に日常生活で使用される「報告」¹⁾のテキストである。しかし、次の例のような「語り」のテキストの文は、日常生活では使われることはなく、下線部の「タ」の使用のされ方は「報告」のテキストとは異なっている。

「話せば今ならきっと分かって呉れたに違いなかつた。」（「花埋み」）

このように、日常生活で主に使用される「報告」のテキストと小説などの「語り」テキストでは、言葉の使われ方に違いがある。第2章では、対象をいわゆる三人称小説の「語り」テキストである『三四郎』『道草』に限定したうえで、「語り」のテキストに使われる「タ」の性質と表現効果を明らかにし、さらに各文末形式の性質と表現効果を分析するものである。

1.1 「タ」の先行研究

「タ」は、テンス・アスペクトの体系の中でとらえられ、主に過去のテンスをあらわすものとして説明されることが多い。この場合、「タ」の付いた形と付かない形が形態的に対比され、「タ」の付いた形が過去形、「タ」の付かない形が非過去形と呼ばれる。この用語が浸透していることから、「タ」がテンスの問題として扱われることが多いことがわかる。

高橋（1985）では、次のように説明されている。

- 【1】現代日本語動詞は、アスペクトのカテゴリーをもち、完成相と継続相に対立する。そして、その両形式は、さらにテンスによって非過去形と過去形にわかれる。このことによって、動詞は、アスペクト・テンスの観点から、次の四つの語形をもつことになる。

テンス	アスペクト	完成相	継続相
非過去		スル	シテイル
過去		シタ	シテイタ

高橋（1985）では、文末の「シタ」の形式は「完成相」と過去の意味をもっていて、文末の「シテイタ」形式は「継続相」と過去の意味を持っているということになる。

また、工藤（1995）では、高橋（1985）をふまえたうえで、現在と切り離された過去と現在に関係づけられた過去を区別し、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」をあらわすことをパーフェクト相としている。次のような文は、現在パーフェクト（現在完了）と規定されることになる。

【2】この本ならもう読んだ。（工藤（2001）の例文）

寺村（1984）では、同様のことが「現在における既然」として説明される。「シタ」形の疑問に対して「シナカッタ」という形で答えず、「テイナイ」という形で答えるのは、「シタ」の形が「既然」の意味であるからだとする。以下のように説明されている。

【3】・船ハモウ決マッタカイ？

ーイヤ、マダ決マッテイナイ。／決マラナイ。

のように「～シテイナイ」または「～シナイ」となり、「～シナカッタ」とは言わない。

以上のようなテンスを中心に考える立場に対して、尾上（1982）では、次のように指摘している。

【4】「ースル」「ーシタ」などの述語の形態変化は、「時」の表現と関係が深いにしても、「時」と一対一に対応するものではないし、「時」の表現のためのものでもないことがわかる。

そして、次のように考えている。

【5】現在あるものの起源を過去に見るという「ーシタ」の世界は、変化が完成した結果として現在を見るものであるから、アスペクト的に言えば「完了」である。と同時に、起源はあくまで現在に対立する起源として、テンスで言えば「過去」であるほかない。

このように指摘して、「ーシタ」を、アスペクトとしては「完了」、テンスとしては「過去」、ムードとしては確認や回想と、三種の側面からとらえている。

さらに、森田（2001）では時制と関連付けずに「タ」の文法的意味を確述だとする。森田（2001）では、「過去のことか否かは叙述内容が決めることで、それに付属した『た』の働きで決まるわけではない」とし、次のように指摘する。

【6】その事柄が過去の事象であるとか、完了したところであるといった弁別は、あくまで

客観的な叙述内容の問題であって、それに対する話者の主観的な認識を添える『た』は、ただそれを個別的な事象として振り返り、間違いなくそのような事実が成立していると判断する。

森田（2001）は、文末の「た」を陳述として考える立場（ムードと考える立場）をとっているといえる。

このように種々の立場で研究がなされているが、工藤（2004）では、複数の立場にまたがるような指摘がなされている。

【7】 どのような場合であれ、平叙文においては、話し手の現実世界の事象の確認（あるいは事実の判断）というムード的側面と、発話時を基準時とする事象の時間的位置づけというテンス的側面は表裏一体としてあるのであるが、どちらの側面をどのように前面化するかが異なってくるのではないと思われる。

【8】 テンスは、動詞述語にも形容詞述語にも名詞述語にもあって、〈話し手の確認（認識）〉というムードのもとに、その事象の成立時が〈過去〉か〈非過去〉かを表し分ける文法的カテゴリーである（ただし、時間的限定性の有無に応じてテンス対立のありかたは異なってくる）。

工藤（2004）では、「タ」をテンス的側面とムード的側面とから考察している。

また、テンス的側面にしてもムード的側面にしても、述語の構造を意識したものである。さらに文全体の構造の中で「タ」の機能を解明しようとする北原（1981）の研究もある。北原（1981）では、

【9】 「～た」は、目的格・使役格・受身格・対象格、そして主格などの展叙成分をすべてつつんで、時格の展叙成分と関係するものである。

と指摘し、「(あの時に) 太郎が次郎に本を読ませたらしい」という文は、「(あの時に)」が「太郎が次郎に本を読ませた」と関係するとしている。

1.2 本稿の立場

工藤（2004）でも「テンスの場合には、小説の地の文に代表されるようなテキストタイプでは異なる様相をみせる」と指摘しているが、日常における「報告」のテキストと小説などの「語り」のテキストでは、文末の「タ」の使われ方が異なると考えられる。そのため、「報告」のテキストを対象とした研究をそのまま、「語り」のテキストにあてはめることができない。

文末の「タ」をテンスの立場から考えた場合、発話の基準時を設定することができないため、「語り」のテキストでは説明が困難である。「語り」のテキストでは、語り手がどの時点で語っているかを特定できないからである。そこで、本稿では、夏目漱石を中心とし

た小説の地の文の文末の「タ」の用例から帰納して、「語り」における文末の「タ」について、二つの特徴を仮説として指摘する。語り手が物語世界の事態について語るのが小説の地の文であるから、語り手が事態とどのように関わっているかということに観点を置いて分析することとした。このため、テンスなどの時間的側面よりは語り手のムード的側面からみた分析に近いといえる。しかし、テキストのある部分では、語り手が物語世界で観察しながら語っているような語りもあり、その場合は語りの基準時ができるので、小説テキストの文末の「タ」が時間と全く無関係というわけではない。

本稿で、文末の「タ」の特徴として指摘するのは、次の2点である。

(1) 文の内容を対象化する。

(2) 時間の流れを捨象して、事態全体をまとめてとらえる。

これらは、語り手の事態の捉え方に着目したものだが、語られる内容と文末の関係も扱うことになっているので統語論的に「タ」をみている部分もある。

この2点の仮説を論証しながら、地の文におけるタ形文末の特徴を検討していきたい。

1.3 地の文におけるタ形文末の特徴

上の(1)の、タが事態を対象化する表現であるという指摘は、これまでも作中人物の意識を対象化するという方面からなされているが、本稿では語り手と作中人物との関係に踏み込み、さらに(2)の性格と関係づけた。(2)は本稿の独自の主張である。これらの特徴について論じていきたい。

1.3.1 タ形文末による内容の対象化—主に感情表出の文末形式

工藤(1995:203)では、【10】のような例を提出したうえで、「過去形²⁾を使用すれば、作中人物の意識の対象化が起こって、内的視点そのものではなくなる。」と、波線部①②④について指摘している。

【10】 吟子は心の中で叫び続けた。①今1度生きている母に会って許しを乞いたかった。
②話せば今ならきっと分かって呉れたに違いなかった。③母は心では吟子をとくに許していたのかも知れない。

「お前の顔は2度と見たくない」と言いながら、吟子が東京へ出立する朝、母は自分で貯えた小金とお守りを渡して呉れた。④もしかするとあの時から母は言葉とうらはらに吟子を許していたのかも知れなかった。

(『花埋み』)

工藤(1995:203)では、「非タ形と過去形とは、〈視点〉の相違として対立すると言えよう」と指摘しているが、「語り」におけるタ形の特徴について、それ以上の分析はしていない。

波線部の①②の文末が、非タ形の「乞いたい」「違いない」であったならば、文の内容は吟子の内的独白として理解される可能性が高い。しかし、実際はタ形文末であるために、吟子の「乞いたい」「違いない」という感情や推定を別の表現者が外側から対象化して語った表現として理解される。

非タ形にして主格の語を補うとすると、①であれば「私は」という一人称を表す語とな

る可能性が高い。引用文のようにタ形であれば、「吟子は」と三人称を表す語となる。但し、「語り」のテキストであるので、非タ形でも「吟子は」を補える可能性がある。この場合は、タ形文末のときと同様に吟子の感情を外側から表現していることになる。このとき感情形容詞「乞いたい」は、感情表出とはならず属性形容詞のように働くことになる。「語り」テキストならば、このように非タ形でも「吟子は」という三人称の主語を補うことができるが、タ形の方が外から吟子の感情を語っていることがはっきりと感じられる。

これらのことから、タ形であることによって作中人物の「意識の対象化」がはっきりなされているといえる。

なお、ここでいう対象化とは、「事態を、主体の意識が向かう客体として外からとらえる」ことを指すこととしたい。

同様に、感情形容詞の人称制限について考えることができる。「語り」のテキストにおいて、感情形容詞の人称制限がなくなると指摘されているが³⁾、それ以前の寺村（1984:345-351）等では、「語り」「報告」の区別をせずにタ形の文は、人称制限が緩和されると考えられていた。次の【11】は自然ではなく【12】は自然だとされた。

【11】 太郎は水がほしい。

【12】 太郎は水がほしかった。

また、実際の漱石の小説テキストを調査したところ、【11】のような非タ形の感情形容詞は多くなく、【12】のようなタ形の用例が多かった。このように、「語り」においても非タ形の感情形容詞よりも、タ形の感情形容詞の方が用いられやすいといえる。この理由は、タ形が内容を対象化すると考えることに説明できる。

コンテキストの乏しい状況で、【11】が感情表出ではなく属性形容詞のように働いているとするのはやや違和感がある。それは、「ほしい」という文末形式が属性形容詞のように受け取りにくいのではないだろうか。「ほしい」という語が出現すると、感情表出の文だという予想を自然に立ててしまうと考えられる。

しかし、語り手は作中人物本人ではないので、語り手が作中人物の感情を語る場合、感情表出として語ることはない。語り手が作中人物の感情を透視するように語っても、他者としての語りとなる。必然的に、そのときに使われる感情形容詞は感情表出ではなくなる。そのため、感情表出として理解されるのが自然な感情形容詞の場合は、文として許容されにくくなると考えられるのである。

タ形の場合、このことが解消される。【12】の例でいうと、〈水がほしい〉という感情をそのまま表出したのではなく、〈水がほしい〉という素材内容について語り手が外側から述べていることがはっきりしている。つまり、非タ形をタ形にすることによって感情表出でないことが理解されやすくなるといえる。これは、「タ」によって〈水がほしい〉という内容が対象化されたと考えられるためである。

内容の対象化は、感情形容詞だけでなく推量の文末表現においても指摘できる。次の【13】の用例も同様の例である。

【13】（主人公健三の家に養父の島田が訪ねてきている。健三の妻は奥の間で寝ている。）

其時突然奥の間で細君の唸るやうな声をした。健三の神経は此声に対して普通の人以上の敏感を有つてゐた。彼はすぐ耳を峙てた。

「誰か病気ですか」と島田が訊いた。

「えゝ妻が少し」

「左右ですか、それは不可せんね。何処が悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかつた。何時何処から嫁に来た女かさへ知らないらしいかつた。従つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に対する同情を求めやうとは思つてゐなかつた。

（『道草』四十九：148）

作中人物が回想して語っているという設定であれば、下線部は作中人物の回想意識を表した文と考えられるが、この文の場合文脈から作中人物の回想とは考えられない。「何時何処から嫁に来た女かさへ知らないらしい」という作中人物健三の推定内容に「タ」が後接した文だと考えられる。

一方、「何時何処から嫁に来た女かさへ知らないらしいかつた」全体を語り手の推定とみる見方もある。その場合、「らしいかつ」の部分は語り手の推定であり、健三の推定ではないということになる。つまり、健三が何を考えているかは語られていなくて、語り手の推定だけが語られることになる。しかし、この引用部分の最後の文「健三も此人から自分の妻に対する同情を求めやうとは思つてゐなかつた。」という表現から、健三が「…知らないらしい」と推定していたことは明らかで、この見方はあたらない。

あるいは、語り手と同じ推定を健三もしているという解釈もあるかもしれない。その場合、その解釈の前提は、語り手が作中人物寄りの視点を持っているということになる。それを突き詰めて考えると、「らしいかつ」という推定は、健三の意識を反映した語り手の語りということになり、「らしいかつ」という推定は、少なくとも健三の意識を含んでいるということになる。つまり、「らしいかつ」は健三の推定内容だという小論の立場と近いものになる。

さて、「知らないらしい」という健三の推定判断に「タ」が後接したと考えた場合、この文は作中人物の推定を含んだ語り手の語りと考えられる。健三自身が自分の推定内容に「タ」をつけるということは、回想の場合は考えられるが、それ以外では考えられない。そのため、ここでは語り手の語りと考えられるのである。つまり、健三が推定した内容を外側から別の表現者（語り手）が対象化して語った語りだと考えられるのである。

この推定の用例と同様のことが、【10】の②「話せば今ならきっと分かつて呉れたに違ひなかつた」、④「もしかするとあの時から母は言葉とうらはらに吟子を許していたのかも知れなかつた」という推量表現でもいえる。

表現者が自分の過去の意識や心理をタ形で語る場合、ごく自然に自分自身を第三者として対象化している。

【14】私は水がほしかった。

この用例の場合は、日常の「報告」のテキストでも自然な文である。

ここまで内的な意識や推定などの例文を扱ってきたが、それらはタ形になると内容を対象化した表現になり、感情の表出や判断の表出でないことがはっきりする表現となることがわかった。また、そのため、これらの用例ではタ形になると、読者に冷静で客観的な語りの印象を与えるといえる。

1.3.2 時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる一主に動作性動詞

次に内的意識以外の例文について考えたい。はじめに動作性動詞を検討する。

【15】(二人の女に、三四郎が興味を惹かれ見ている場面)

三四郎は慥かに女の黒眼の動く刹那を意識した。其時色彩の感じは悉く消えて、何とも云へぬ或物に出逢った。其或物は汽車の女に「あなたは度胸のない方ですね」と云はれた時の感じと何処か似通つてゐる。三四郎は恐ろしくなつた。

二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若い方が今迄嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落して行つた。三四郎は二人の後姿を凝と見詰て居た。看護婦は先へ行く。若い方が後から行く。

(『三四郎』二の四：302)

【15】の下線部「二人の女は三四郎の前を通り過ぎる」「看護婦は先へ行く」「若い方が後から行く」は、非タ形の文末になっている。現在から未来にかけて動作が眼前で行われているのを、表現者が知覚しながら表現している文である。それに対して波線部「若い方が今迄嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落して行つた」の場合、今、その場で「落として行く」のを知覚しながら表現した文ではない。

一般的には、この「落して行つた」は「落として行く」動作が完了して過去になったと説明される。文末が動作性動詞の場合は、その説明のとおりであり、動作の終わった時点から「落として行く」動作全体を見渡した表現となる。これを別の角度からとらえると、その動作の全体を外から対象化した表現だということができる。非タ形の場合は、「落として行く」という、その時のその時点での知覚をそのまま表出しているが、タ形の場合は、その知覚を対象化した表現となっている。

次の【16】の下線部「乗つた」「近寄つて来た」「通つた」という動作性動詞はタ形であるが、非タ形に替えたとしても眼前で知覚しながら表現しているようには受け取れない。

【16】(主人公の代助が皆と芝居を見に行つた帰りの部分)

三人の迎は来てゐたが、代助はつい車を誂えて置くのを忘れた。面倒だと思つて、嫂の勸を斥けて、茶屋の前から電車に乗つた。数寄屋橋で乗り易え様と思つて、黒い路の中に、待ち合はしてゐると、小供を負つた神さんが、退儀さうに向から近寄つて来た。電車は向ふ側を二三度通つた。代助と軌道の間には、土か石の積んだものが、高い土手の様に挟まつてゐた。代助は始めて間違つた所に立つてゐる事を悟つた。

「御神さん、電車へ乗るなら、此所ぢや不可ない。向側だ」と教へながら歩き出した。神さんは礼を云つて跟いて来た。代助は手探でもする様に、暗い所を好加減に歩

いた。十四五間左の方へ濠際を目標に出たら、漸く停留所の柱が見付った。神さんは其所で、神田橋の方へ向いて乗った。代助はたつた一人反対の赤坂行へ這入った。

（『それから』 十一の八：195-196）

【16】のタ形の文末を非タ形にすると、尾上（1982：370）で「ト書き型」と言われている、事柄を時間順に列挙するような表現となる。この三つの文で表現される内容は、動き（変化）のある事柄であり、ある程度の時間が経過しているので、語っているその瞬間だけで事柄全体を把握して語ることはできない。「面倒だと思つて、嫂の勸を斥けて、茶屋の前から電車に乗った」の文では、「嫂の勸を斥けて」から「電車に乗」るまで、ほんの数秒というわけにはいかない。そのある程度時間の経過している事柄を一瞬で、知覚しながら語ることはできないのである。そのため、非タ形にしても眼前描写の語りと受け取れず、事態の列挙と感じられると考えられる。

これに対して、テキストどおりのタ形であれば、その場で知覚しながら語っているように受け取れないが、事柄が列挙されているようにも受け取れない。事柄が順々に継起していることが自然に語られている。これは、実際にある程度の時間の経過する内容を、全体をまとめて語っているからだと考えられる。これは、タ形になったための特徴である。この特徴を「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」と呼んでおきたい。動きがあり、ある程度時間の経過する内容がタ形文末になるとき、この性質をもつ。

また、1.3.1で扱った感情表出の文、推量を表す文は、もともと時間の流れに関わらない文であるため、タ形の場合、対象化することが「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」をもつということになるといえる。

ところで、この「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」というのは、対象化と関連する特性だといえる。「そういう出来事だ」と対象化してはじめて、全体を把握することができるからである。動作性動詞の場合は、タ形文末が内容を対象化しているということを実感しにくい、実際は、動作の終わった時点から、その動作を対象化してとらえているのである。また、そのため事態について冷静に客観的に語っている印象も与える。

ここまで、文末が内的意識（感情・推定）を表すときと動作性動詞のときを検討してきた。次に、内的意識以外で動作性でない文末についてみていきたいが、まず状態を表すテイル文末を取り上げる。

1.3.3 「テイル」「テイタ」ー状態を表す文末形式

はじめに非タ形のテイル形について検討したい。次の【17】では、「私」が冷静に自分を外から分析しているような語りである。あるいは、映像に映っている自分の表情について述べているかのような表現である⁴⁾。このことから、「羨む」ことを外から、継続した状態として表していることが明らかである。

【17】 私は彼を羨んでいる。

【18】 太郎は彼を羨んでいる。

同様に、【18】のテイル形も状態の継続を表し、語り手が事態を外から述べている。動詞の原形が事態を外から述べることももちろんあるが、テイル形では外から述べていることが明らかになっている。

次に、テイル形に「タ」を付加したテイタ形について検討したい。「報告」のテキストにおいてテイタ形は、過去における状態、過去における継続等の用法として説明されることが多い⁶⁾。しかし、「語り」のテキストでは過去の用法とは限らない。次の【19】では、テイル文末とテイタ文末が混在している。

【19】 1 不図眼を上げると、左手の岡の上に女が二人立つてゐる。2 女のすぐ下が池で、池の向ふ側が高い崖の木立で、其後ろが派出な赤煉瓦のゴシツク風の建築である。3 さうして落ちかゝつた日が、凡ての向ふから横に光を透してくる。4 女は此夕日に向いて立つてゐた。5 三四郎のしやがんでゐる低い陰から見ると岡の上は大変明るい。6 女の一人はまぼしいと見えて、団扇を額の所に翳してゐる。7 顔はよく分らない。8 けれども着物の色、帯の色は鮮かに分つた。8 白い足袋の色も眼についた。9 鼻緒の色はとにかく草履を穿いてゐる事も分つた。9 もう一人は真白である。10 是は団扇も何も持つて居ない。11 只額に少し皺を寄せて、対岸から生ひ被さりさうに、高く池の面に枝を伸した古木の奥を眺めてゐた。12 団扇を持つた女は少し前へ出てゐる。13 白い方は一歩土堤の縁から退がつてゐる。14 三四郎が見ると、二人の姿が筋違に見える。

(『三四郎』二の四：300-301)

4 文目の「立つてゐた」という表現を例にとると、「立つてゐる」という動作はこの後も続いており、過去における状態の継続でないことは明らかである。また、「此夕日に向いて」という表現から、物語世界の今のことを語っているといつてよい。この【19】のように、物語世界の今の状態が、テイタ形で表されることはよくある⁶⁾。

それでは、「語り」のテキストにおいてテイル形とテイタ形ではどのような違いがあるのか。一つには、眼前描写性・知覚体験性があるかどうかの違いが挙げられる。工藤（1995：198）では、「語り」のテキストにおいて次のように指摘している。

【20】 例えば、次の場合。シテイル形式では、作中人物の知覚体験性が前面化するが、シテイタには、それが感じられない。（中略）

闇の中で煙草の火口が赤く点っている。

「勝呂か」屋上に出た戸田は低い声で訊ねた。

「ああ」

「お前、煙草、喫ってんのか」

勝呂は返事をしなかった。彼は屋上の手摺りに靠れて、あごを両手の上においたまま前をむいている。F市は今夜も灯を消して空襲にそなえていた。

(『海と毒薬』)

工藤（1995）の指摘のとおり、この『海と毒薬』の例では、テイル形の文は物語世界の状態をその場で知覚しているような表現である。それに対して、テイタ形は、その場で知

覚しているとは言えない。しかも、最後の文の「そなえていた」という状態は、「今夜も」と文中にあることから、語っている時点から見て過去の状態ではない。このことから、テイタ形は、眼前描写性がなく、また過去の状態の継続でもないことのある表現だといえる。

では、テイタ形はなぜ知覚体験性や眼前描写性がなくなるのか。テイル形は、現在継続している状態、または効果が継続している状態を表現者が知覚し、それをそのまま表出した表現である。テイタ形は、その時その場で知覚したままを表出したものではない。そのため、表現しているその場で、継続している状態を知覚していなくてもよい。だから、眼前描写とはいえないということになる。そのため、語っている時点でその状態が継続しているかどうかは表さなくなる。【20】の「…そなえていた」のように、「事象が継続している」という知覚内容を、語り手が外側から語っている表現である。つまり、語り手が対象化した語りということができる。

「報告」のテキストにおける過去の状態の場合、語っている時点から見て過去のある時点に事象が継続していたことを表す。これは、過去に知覚した内容を、語っている今の時点から対象化したといえる。「語り」のテキストの場合、物語世界にいない語り手がその状態を外から対象化して語っているといえる。このようなことから、テイタ文末は知覚体験性を感じさせない表現となる。言い換えると、ある時点で継続していた状態を、時間の流れを捨象して、語っている時点から切り離して表している。この結果、1.3.2で挙げた「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる性質」も認められることになる。

このように、テイル（テイタ）文末においても、タ形の文末は、「文の内容を対象化する」「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる」という特徴を持っているといえる。また、眼前描写性や知覚体験性がなくなり外側から冷静に語る印象を与えることになる。

これまで、「語り」における内的意識に関わる文末、動作性動詞の文末、テイル文末のタ形と非タ形について検討してきたが、いずれも「文の内容を対象化する」「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる」という特徴をもっていることを指摘した。このことにより、これらの特徴は「語り」のタ形文末において一般的にいえるのではないかと考える。

1.3.4 「デアル」「デアッタ」ー判断を表す文末形式

次に断定判断を表すデアル・デアッタ文末について検討したい。この文末形式は、名詞か形容動詞の語幹に後接するが、時制に関わらずに用いられることが多い。「語り」のテキストではタ形であっても内容が過去でないことが多い。

非タ形のデアルは、断定の判断を表出する形式である。これは発言者が、自分の判断を言語化して今受け手に対して表出（主張）する形式であるため、受け手に対する意識が強い。タ形のデアッタは、断定の判断をした内容を今受け手に対して表出した形式ではなくなる。判断をそのまま表出したのではなく、〈…である〉という内容について表現者が外側から述べている表現となる。

いわゆる一人称小説の場合、通常デアッタは過去のことを表す。また、日常の「報告」のテキストの場合、通常過去のことや表現者の気づきを表す。三人称小説の「語り」では、過去や気づきでなくても用いられている。語り手が物語世界内の存在でないので、過去時

点でなくても内容を対象化できるためだと考えられる。

具体的な用例を見ていきたい。デアルの用法には二種類に分類できる。

1.3.4.1 デアルを2分類して、デアル文末の特徴を考える

小説の地の文において文末表現「である」は、語り手の位置によって、次の2通りに分けられる。〔1〕語り手が、物語世界とは別次元において、物語世界の事態について解説・説明している場合。つまり、語り手と聞き手の場において、解説・説明をする場合。物語世界の具体的事態そのものを語っているわけではない。〔2〕語り手が物語世界のその時間とその場所に身を置いているかのように、物語世界の事態そのものを語る場合。

文末「である」を2分したうちの〔1〕に相当する「である」文末の文は、【21】(1)の用例である。

- 【21】 そんな浮気な男が何故牡蠣の生涯を送つて居るかと云ふのは吾輩猫杯には到底分らない。或人は失恋の為だとも云ふし、或人は胃弱のせいだとも云ふし、又或人は金がなく臆病な性質だからだとも云ふ。どつちにしたつて明治の歴史に關係する程な人物でもないのだから構はない。⁽¹⁾然し寒月君の女連れを羨まし気に尋ねた事丈は事実である。寒月君は面白さうに口取の蒲鉾を箸で挟んで半分前歯で食ひ切つた。吾輩は又欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた。

（『吾輩は猫である』二：27）

【21】の(1)「然し寒月君の女連れを羨まし気に尋ねた事丈は事実である」において語り手の猫は、目の前にある事態を述べているのではなく、事態についての解説・説明をしている。語られる内容は、物語世界の時間にしがって継起していく動きのある出来事でもなく、テイル文末の文で語られるような継続している状態でもない。具体的な時間に関わらない内容である。そのため、必ずしも物語の世界の現場にいる必要はなく、語り手と聞き手の存在する世界に向けて語っている。語り手が聞き手をより意識した語りであるといえる。

〔2〕に相当する「である」文末の文は、【22】、【23】の下線部の用例である。

- 【22】 車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入つた。三四郎は鮎の煮浸の頭を啣へた儘女の後姿を見送つてゐた。便所に行つたんだなと思ひながら頻りに食つてゐる。

女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛である。

（『三四郎』一：276）

- 【23】 下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

（『羅生門』：147）

【22】の最後の文は、語り手が三四郎の様子を観察しているかのように表現している。

【23】の2文目の文は、作中人物の心情・感覚とも考えられるが、ここでは語り手の言語化と捉えておきたい。その場合、「～である。」と判断し表現しているのは語り手となる。この文では、語り手が物語世界の今の状況を現場で知覚しているかのように語っていると考えられ、臨場感がある。

〔2〕の場合、語り手が物語世界の現場から物語世界の事態そのものについて語っているかのような表現だといえる。しかし、「である」という断定が聞き手に向けてのものであるという点では、〔1〕と同じである。

「である」文末の〔1〕は、非タ形で「…である」と表現者の判断を表出する表現であり、受け手への意識が強いといえる。〔2〕の場合も同様に、物語世界で知覚・認識したり判断したりしたことを表出する表現で、受け手への意識が強いといえる。この点では、〔1〕〔2〕は一致している。しかし、〔1〕は、物語世界の具体的事態を語るのではなく、事態の関係などを語る解説として機能しており、その点で事態そのものの語りではないといえる。

1.3.4.2 デアッタ文末の特徴

既出の【21】の「吾輩は又欠けはせぬかと心配したが今度は大丈夫であつた」と、次の【24】の下線部は、「であつた」文末の用例である。

【24】 往来は静であつた。二人の間にはたゞ細い雨の糸が絶間なく落ちてゐる丈なので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらして又真正面を向いた儘歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ気色なく、じつと彼の通り過ぎるのを見送つてゐた。健三は其男の顔が彼の歩調につれて、少しづゝ動いて回るのに気が着いた位であつた。

（『道草』一：4）

【24】の1文目の「であつた」文末の文は、物語世界の外で物語世界の事態について事実を冷静に語っている語りになっている。【24】の1文目の「であつた」を「である」に入れ替えると〔2〕の「である」に相当すると思われるが、ここでは「であつた」であるため、物語世界の現場で知覚していなくても語れる表現になっている。この場合、「静である」という判断を表出する表現ではなくなっている。「静である」ということを対象として外側から述べた表現となっている。このように、デアル・デアッタ文末でも、タ形によって内容の対象化がなされるといえる。

ところで、「であつた」文末の文も、〔1〕物語世界の事態そのものでなく解説・説明の場合と、〔2〕物語世界の具体的事態を語る場合に2分類することは可能である。しかし、「である」文末の文と異なり、〔1〕と〔2〕の分類があいまいになる。一つには、〔2〕の場合も、物語世界のその場に身をおいているように語らなければ語れない語りではないということが挙げられる。タ形によって対象化されるので、〔2〕であっても現場での臨場感はない。もう一つには、〔1〕の非タ形とタ形の違いである。

【24】の最後の文は、〔1〕に分類される。この文の前文の「…じつと彼の通り過ぎるの

を見送つてみた」について、どれほどくじつと見送つてみたのか、その程度を解説する表現である。非タ形であれば「…位であ（る）」という判断の表出になるが、ここではタ形なのでそうっていない。非タ形であれば、時間に関わりのない解説として理解されるが、タ形であるとくそのようなことであったという一つの出来事のように理解される。このことから、「内容を対象化」「時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる」という性質が見て取れる。「…位であった」の文はもともと時間の流れのない表現であるのであえて「時間の流れを捨象する」ことはないが、判断の内容が対象化され、内容がまとめて捉えられている。そのため、その解説が対象化されひとまとまりの出来事としてとらえられていると考えられる。そのため、解説というより対象化して語られた一つの出来事のように受け取れるのである。その結果、〔1〕の語りであっても、物語世界の事態についての語りでなく、物語世界の事態そのものの語りのような印象を与えることになっている。

以上のことから、デアル文末のタ形であるデアッタ文末も、他の文末形式と同様に、(1)文の内容を対象化する、(2)時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえるというタ形の二つの性質が見られる。

また、物語世界外の語り手が語るデアッタ文末の文は、表現者である語り手の判断の表出ではなく、物語世界の客観的事実のようにみなされることになる。「タ」によって事態を外から対象化してまとめてとらえて語ることになり、確認された出来事のように受け取られるからだと考えられる。そのために、語り手の存在を読者は感じなくなり、語り手の存在感が意識されなくなる。語り手が透明である印象を与えやすくなるのである。

このようなタ形のデアッタの使用は、日常の「報告」のテキストとは異なっている。「報告」テキストにおいて、判断を対象化して事態全体をまとめてとらえて語るというのは、通常過去の事態に限られる。事物の性質や属性を述べる場合でも「地球は球形である」を「地球は球形であった」とすると、過去の事態を表現しているように感じられる。しかし、「語り」のテキストでは必ずしも過去のことといえない。なお、「報告」のテキストでデアッタ文末を使用するのは、過去の回想のほかに気づき・発見の用法のときがある。上の「地球は球形であった」も文脈によって気づき・発見の用法に理解できる。「語り」のテキストでは、作中人物の判断のときや、いわゆる一人称小説の場合にこの用法が使用される可能性がある。

1.3.4.3 語りの様相とデアル・デアッタ文末

非タ形文末デアルは、題目と名詞相当部分を結び付け、「いま、ここ」で「である」と判断し断定するため、表現者が受け手に対して強く働きかける文になっている（※自分が受け手の場合もある）。そのため、通常、表現者が作中人物である場合は、(1)他の人物に働きかける表現か、(2)作中人物が自分に言い聞かせる内的独白となる。しかし、「語り」のテキストには、受け手に対して判断を表出しない表現がある。それは、(3)受け手を想定できない、言語化されていない表現の場合である。(1)と(2)は作中人物の語りかそれに準ずる表現である。(3)は作中人物が語る形式であるが実際には言語化されていない表現で、作中人物の知覚を利用した語りと考えられる。本稿の2章で(B-2)と規定したものである。

一方、表現者が語り手である場合は、語り手が想定される聞き手に働きかけることにな

る。そのため、地の文（語り）は語り手の主張や判断が強く感じられるようになる。また、現場での個別的で具体的な事態についての判断の場合は、語り手が現場で知覚しながら語っているかのような表現となる。このように、表現者が語り手である、非タ形のデアル文末は、語り手の存在が意識されやすくなる。

以上のように、作中人物が表現者のときの(3)の場合以外では、非タ形のデアル文末の文は、表現者の判断が表出された文と考えることができる。

これに対して、タ形文末のデアッタは、判断を表出する文にはならない。

作中人物の判断の場合は、過去の回想か気づき・発見の用法となる。どちらの場合も判断の内容を対象化している。

語り手の判断の場合は、判断に対する対象化が加わっていて、「(～である)」ということを対象化して一つの事態としてまとめてとらえる」というようなことになるため、物語世界の事実を冷静に語るような表現になる。そのため、「タ」の前の「である」は、受け手に対する強い働きかけではなく、題目と名詞相当の表現を結びつけるだけである。そのため、語り手の存在はあまり意識されないといえる。

1.4 タ形と非タ形のまとめ

内的意識の文末、動作性動詞の文末、テイル・テイタ形の文末、デアル・デアッタ形の文末について、タ形と非タ形の違いを見てきた。それぞれの文末形式による表現特性を確認したうえで、それぞれタ形と非タ形を比較し、その文の特徴を検討した。その結果、どの文末形式でも、タ形には、(1)文の内容を対象化する、(2)時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえるという特徴があることが確認された。そして、そのためタ形文末の文は受け手に冷静で客観的な語りの印象を与えらることもいえた。さらに、これらのことから、それぞれの文末形式ごとの、タ形と非タ形の表現特性を確認できた。

2 小説テキストにおける、文末形式による表現効果

前の1節において、各文末形式の表現特性を確認したが、その表現特性が実際の小説テキストではどのように機能しているか検討したい。

本節では、第1章に引き続き『三四郎』と『道草』を取り上げ、さらに『吾輩は猫である』の用例も検討した。『吾輩は猫である』はいわゆる一人称小説であり、動詞の非タ形の用例が多いので、非タ形とタ形の比較のために取り上げた。それに加え、デアル文末の調査には、夏目漱石『虞美人草』、川端康成『雪国』、三島由紀夫『潮騒』も取り上げた。『虞美人草』、三島由紀夫『潮騒』は、語り手が現場で知覚しているかのように語っている表現が含まれるテキストである。そのため、デアル文末の使用に特徴があると考え、調査対象とした。また、『雪国』と『潮騒』は比較しやすいテキスト同士である。この二つのテキストを選んだのは、三島と川端の間に交流があったことは知られており⁷⁾、また、テキストの長さがほぼ同じでありながら文体印象に相当な違いがあるからである。

また、『三四郎』と『吾輩は猫である』は写生文と共通する要素があるが、そのことと文末形式の関係についても検討した。『三四郎』の地の文全体 4632 文のうち、非タ形文末の文は、2279 文で全体の 49.2%であった。内訳は、テイル形 524 例（テイル形とテイタ形の

合計のうち 74.6%)、デアル形 35 例 (デアル形とデアッタ形の合計のうち 70.1%)、ノダ形 27 例 (ノダッタ形の用例はなし)、動作性動詞の非タ形 528 例 (非タ形とタ形を合計したもののうち 23.5%)。その他の非タ形 1118 例 (非タ形とタ形を合計したもののうち 71.9%)。これに対して、『道草』の地の文全体 3337 文のうち、非タ形文末の文は 72 文で 2.2%であった。『道草』の非タ形の内訳は、「のである」が 47 例、疑問形・推量形 9 例、倒置文 9 例、「そうである」2 例、「ている」1 例、「ものである」1 例、「からである」1 例、「違ひない」1 例、体言止め 1 例である。動詞の終止形、形容詞の終止形の非タ形の例はない。このように「のである」以外の非タ形はごくわずかといってよい。

2.1 動詞文末の使用による表現効果

これまで検討したタ形と非タ形の違いが、小説テキストの語りの中でどのような影響を与えているかを、動詞の文末について検討する。

調査の対象は、『三四郎』の地の文の冒頭 15%にあたる 830 文、同様に『吾輩は猫である』の冒頭 10%の 662 文、『道草』の冒頭 15%の 510 文とした。『吾輩は猫である』は、全文が他の二作品よりも著しく長いため、調査文数を調節する意味で 10%とした。本来ならば、サンプルは作品全体から均等に抜き出すべきだが、本研究では冒頭のみ調査とした。そのため、正確には、冒頭部分における調査報告とその考察である。冒頭部分は「全体の輪郭、枠の設定」⁸⁾の機能がある場合が多い。そのため、語り手と物語世界の関わりも他の部分より比較的是っきりと打ち出され維持される可能性が高いと考えたからである。また、『道草』は非タ形文末の文が極端に少ないため、テキスト全体の地の文の非タ形文末にあたってみた。

2.1.1 『三四郎』における動詞の非タ形

『三四郎』の冒頭から 15%の 830 文の地の文を調査したところ、非タ形文末の文は 372 文で 44.8%であった。また、主人公である三四郎の知覚や認識を通した非タ形文末の文は 308 例あり、830 文の 37.1%であった。語り手の立場の語りの非タ形の文は 64 例で 7.7%であった。このことから、『三四郎』冒頭部の非タ形文末の文は、ほとんどが三四郎の知覚や認識を通した表現 (以後、三四郎の直接認識の表現とする。) であり、また冒頭部の中に三四郎の直接認識の文が相当にあるといえる。

ここでは、語り手の認識の語りと三四郎の知覚・認識を利用した語りに分けたうえで、それぞれの非タ形とタ形の使われ方を検討する。

2.1.1.1 三四郎を通しての情報を、語り手が語っている動詞の用例

はじめに、1 章で述べた知覚利用の語り①〔作中人物の知覚を情報源として語り手が語る形式〕の場合について考える。これは、三四郎の認識を通した情報を語り手が語っているものである。次に示す下線部がその用例である。

【25】(三四郎が上京する際、後に広田先生とわかる人と関わりになる部分)

三四郎は安心して席を向ふ側へ移した。是で髭のある人と隣り合せになった。髭のあ

る人は入れ換つて、窓から首を出して、水蜜桃を買つてゐる。

やがて二人の間に果物を置いて、

「食べませんか」と云つた。

三四郎は礼を云つて、一つ食べた。髭のある人は好きと見えて、無暗に食べた。三四郎にもつと食べろと云ふ。三四郎は又一つ食べた。二人が水蜜桃を食べてゐるうちに大分親密になつて色々な話を始めた。

(『三四郎』一の六：287)

【25】の下線部は、語り手が現場で直接知覚・認識しているともとれるが、三四郎が知覚・認識していると理解することができる。下線部に「た」が付いていたとしたなら、タ形文末の文が連続することになり物語世界の出来事が次々に語られストーリーがどんどん進んで行く印象を与える。タ形の文は、時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえることになり、また動作性の動詞の場合には事態は完了したものとして語られるからである。【25】の下線部では、タ形の連続の中に動詞の非タ形が挿入されたため、事態を対象化してまとめてとらえるのではなく現場の時間の経過に即した表現になっている。このため、出来事が次々に移っていく印象を与えない。

また、タ形の場合、三四郎の知覚が情報源であっても三四郎の知覚の臨場感を実感しにくい、非タ形の場合は内容が対象化されていないので現場での三四郎の知覚が感じ取りやすい。この【25】では、三四郎の知覚を情報源としていと考えられる表現と、語り手の立場の語りと考えられる表現が混在しているが、特に不自然には感じられない。これには、上で述べたタ形と非タ形の使われ方が関連していると考えられる。

この【25】のようなことは、タ形が続くと単調になるので変化を持たせていると通常考えられている。しかし、その変化によって、以上のような効果があると考えられるのである。

2.1.1.2 三四郎について語り手が外から語る動詞の用例

次の【26】の下線部①～③は、非タ形の文のうち、語り手が三四郎を観察しながら語っているような動詞文の例で、③は三四郎の内面について語っている動詞文の例である。ただし、語り手の立場の語りなのか、三四郎の知覚を利用した語りなのか、区別がつきにくい表現である。

【26】(三四郎が上京する際、初対面の広田先生と汽車の中で話をしている場面。)

けれども相手はそんな事に一向気が付かないらしい。やがて、

「東京は何所へ」と聞き出した。

「①実は始めてで様子が善く分らんのですが……差し当り国の寄宿舎へでも行かうかと思つてゐます」と云ふ。

「ぢや熊本はもう……」

「今度卒業したのです」

「はあ、そりや」と云つたが御目出たいとも結構だとも付けなかつた。たゞ「すると是から大学へ這入るのですね」と如何にも平凡であるかの如くに聞いた。

三四郎は聊か物足りなかつた。其代り、

「えゝ」と云ふ二字で挨拶を片付た。

「②科は？」と又聞かれる。

「一部です」

「法科ですか」

「いゝえ文科です」

「はあ、そりや」と又云つた。③三四郎は此はあそりやを聞くたびに妙になる。

(『三四郎』一の七：289)

中ほど以降は、会話が中心となっている部分で、その中に下線部①と②の非タ形の文がある。会話の流れの中にさらに眼前描写性のある非タ形の文があるため、より臨場感をもって三四郎について語るという効果がある。③は三四郎の内面の解説であり、反復される動作である。この表現は、眼前描写性はないが、「タ」による対象化がないために、語り手が物語世界に身を置いて語っているかのように感じられる。そのため、やはり臨場感のある表現となっている。このように、非タ形で語り手が三四郎の動作を語ると、語り手が物語世界に身を置いているかのように臨場感をもって語っている印象を与えるという効果がある。

この場面の場合、もう一人の作中人物の広田先生については非タ形で語られることがほとんどないため、三四郎の動きだけがクローズアップされる効果がある。

動詞の非タ形では、三四郎の知覚・認識を利用した語りでも、語り手の語りでも、非タ形のときは、物語世界の時間の流れを感じながら臨場感をもって語られることになる。そのため、非タ形の動詞がタ形の中に混じることによって、事態が次から次へと素早く展開するということがなくなる。『三四郎』における動作性動詞文末の文は、非タ形 23.5%、タ形 76.5%と、タ形の方が多いが、このようなことになっているのである。

また、三四郎の知覚・認識を表している文や、三四郎について語る文が多く非タ形になり、その部分だけが臨場感をもつことになると、三四郎がクローズアップされた語りになる。実際に、2.1.1の冒頭で三四郎の知覚・認識を表す非タ形の文の多いことを確認しており、三四郎の知覚によって事態が進行することが多いと考えることができる。

次の【27】は、三四郎の動作について語り手が語った文である。

【27】(三四郎がはじめて、大学に野々宮を訪ねて行く場面である。小使に野々宮の研究室まで案内されて行くところからはじまる。)

「御出でやす。御這入んなさい」と友達見た様に云ふ。小使に食つ付いて行くと四っ角を曲がつて和土の廊下を下へ居りた。世界が急に暗くなる。炎天で眼が眩んだ時の様であつたが少時すると瞳が漸く落ち付いて、四辺が見える様になつた。穴倉だから比較的涼しい。左の方に戸があつて、其戸が明け放してある。其所から顔が出た。額の広い眼の大きな仏教に縁のある相である。縮の襦衣の上へ脊広を着てゐるが、脊広は所々に染がある。脊は頗る高い。瘠せてゐる所が暑さに釣り合つてゐる。頭と脊中を一直線に前の方へ延ばして、御辞儀をした。

「此方へ」と云つた儘、顔を室の中へ入れて仕舞つた。三四郎は戸の前迄来て室の

中を覗いた。すると野々宮君はもう椅子へ腰を掛けてゐる。もう一遍「此方へ」と云つた。此方へと云ふ所に台がある。四角な棒を四本立てて、其上を板で張つたものである。三四郎は台の上へ腰を掛けて初対面の挨拶をする。それから何分宜敷願ひますと云つた。

(『三四郎』 二の二：296)

【27】の下線部より前の部分は、主に三四郎の知覚・認識を中心に展開している。そして、下線部のところで、非タ形で三四郎について外側から語ることになる。

【27】の下線部の非タ形の文は、「挨拶をする」というある程度時間のかかる事態を簡潔に語っているため、眼前描写というよりは事実の提示として受け取られる。しかし、非タ形であるため、事態全体をまとめてとらえていない。そのため、出来事が次へ次へと移っていく印象を与えない。「タ」が付いたときに比べて現場での臨場感が感じられ、物語世界の現在のその時において知覚されていると感じられる。

以上、語り手が三四郎を外から語る文について、非タ形を中心に観察した。物語世界の現場がすべて臨場感を持って語られることはないが、一部に非タ形の文が混じることによって、そこだけは臨場感をもって語られることになり、事態が次から次へと移っていくという印象はなくなることが確認できた。

2.1.1.3 『三四郎』の動詞の非タ形・タ形についてのまとめ

以上の検討からわかったことは次のようなことである。

動詞の非タ形文末の文では、物語世界の現在の時間において語っているものであった。三四郎の知覚・認識を利用した語りでも、語り手の三四郎についての語りでも、非タ形のときは、物語世界の時間の流れを感じながら臨場感をもって語られることになる。そのため、非タ形の動詞がタ形の中に混じることによって、事態が次から次へと素早く展開するということがなくなる。三四郎の知覚・認識を表している文や、三四郎について語る文が多く非タ形になり、その部分だけが臨場感をもつことになると、三四郎がクローズアップされた語りになる。実際に、三四郎の知覚・認識を表す非タ形の文の多いことを確認しており、三四郎の知覚によって事態が進行することが多いと考えられる。

2.1.2 『道草』の動詞の用例

既に述べたように『道草』では、「のである」のほかは、ほとんどがタ形であるとみなしてよい。

【28】 彼は例刻に宅へ帰つた。洋服を着換へる時、細君は何時もの通り、彼の不断着を持つた儘、彼の傍に立つてゐた。彼は不快な顔をして其方を向いた。

「床を取つて呉れ。寝るんだ」

「はい」

細君は彼のいふが儘に床を延べた。彼はすぐ其中に入つて寝た。彼は自分の風邪気の事を一口も細君に云はなかつた。細君の方でも一向其処に注意してゐない様子を見せた。それで双方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞いでうつらうつらしてゐると、細君が枕元へ来て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上がりますか」

「飯なんか食ひたくない」

細君はしばらく黙つてゐた。けれどもすぐ立つて部屋の外へ出て行かうとはしなかつた。

「あなた、何うかなすつたんですか」

健三は何にも答へずに、顔を半分ほど夜具の襟に埋めてゐた。細君は無言のまゝ、そつと其手を彼の額の上に加へた。

晩になつて医者が来た。たゞの風邪だらうと云ふ診察を下して、水薬と頓服を呉れた。彼はそれを細君の手から飲まして貰つた。

（『道草』 十一：28-29）

【28】の地の文はすべてタ形である。そのため、事態が次から次へと移っていく印象を受ける。それぞれの文がタ形であるため、それぞれの内容が対象化されて一つの事態としてまとめてとらえられているからである。会話が引用されているところだけが、物語世界の時間の流れと臨場感が感じられる表現となっている。地の文では語り手が事態を対象化して冷静に語っている印象を受けるとともに、帰宅して風邪で床についているところまでが簡潔に語られているといえる。『道草』の語りは、この【28】のようにタ形が連続するところが多い。

2.1.3 『吾輩は猫である』動詞の非タ形

2.1.3.1 『吾輩は猫である』の非タ形・タ形の概略

『吾輩は猫である』は、猫が一人称で語る作品である。そのため、物語世界外の語り手を想定しなくてよい。「タ」はすべて猫による対象化である。

『吾輩は猫である』の冒頭から10%の662文、『三四郎』の冒頭から15%の830文、『道草』の冒頭から15%の510文、これらの用例のタ形文末の文と、そのうちの回想の用例についての表が表1である。回想とは、物語世界で現在進行中の時間よりも前の事態を、現在進行中の事態に関連させて語ることを指す。『吾輩は猫である』であれば、猫が以前のことを思い出して語ることとなる。

【表1】 文末のタ形の用例と回想の用例

	調査用例	タ形文末の用例		回想
『吾輩は猫である』	662例	148 例 22.4%	（全文調査では 14.9%）	112 例 75.7%
『三四郎』	830例	458 例 55.2%	（全文調査では 50.7%）	19 例 4.1%
『道草』	510例	498 例 97.6%	（全文調査では 97.8%）	83 例 16.6%

（※ 『吾輩は猫である』の全文調査は上巻のみ）

表1から、『吾輩は猫である』のタ形文末の文の中に回想の占める割合の高いことがわかる。タ形文末の文のほとんどが回想用法といえる。つまり、回想でない文の多くは非タ形文末の文だといえる。語り手の猫は、回想するとき以外は非タ形文末の文を用いて事態を語っている。

『吾輩は猫である』冒頭662文の中で、回想を除いた猫の「タ」の使用は36例で、タ形文末148例の24.3%、調査用例662例の4.8%にあたる。参考までに、『三四郎』の冒頭830文の中で、回想を除いた三四郎の対象化による「タ」の使用は7.6%（63例）である。猫の方が対象化することがやや少ないが、語り手でない作中人物による「タ」の対象化というのは、夏目漱石の前期の作品では、この程度だということがわかる。

ただし、ここまで回想とそうでない場合に分けて考えてきたが、『吾輩は猫である』では語っている時点がいつなのかは明解ではない。語りながらも物語世界の時間は経過していき、回想している現在がいつであるかがわかりにくくなっている。現在のことを語っているのかと思って読み進めていると、それは過去のことであったということが起こってくる。

2.1.3.2 『吾輩は猫である』の非タ形・タ形の用例

次に、具体的に『吾輩は猫である』の文章を検討してみる。

次の【29】は、文末がすべて非タ形で、「タ」によって時間を捨象して事態をまとめて語ることがなされないので、事態と語りとの同時進行性がよく感じられる。語り手が物語世界の現場にいてその時点で実際に語っていると感じられる語りである。

【29】（「二」正月に寒月が猫の主人を訪ねてきた場面。各文の文末に下線を施した。）

しばらくすると下女が来て寒月さんが御出になりましたといふ。此寒月といふ男は矢張り主人の旧門下生であつたさうだが、今では学校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話しである。此男がどういふ訳か、よく主人の所へ遊びに来る。来ると自分を恋つて居る女が有りさうな、無ささうな、世の中が面白さうな、詰らなさうな、凄いな様な艶っぽい様な文句許り並べては帰る。主人の様なしなび懸けた人間を求めて態々こんな話しをしに来るのからして合点が行かぬが、あの牡蠣的主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのは猶面白い。

「暫く御無沙汰をしました。実は去年の暮から大に活動して居るものですから、出様々々と思つても、つい此方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見た様な事をいふ。「どつちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔をして、黒木綿の紋付羽織の袖口を引張る。此羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべら者が左右へ五分位宛はみ出して居る。「エヘ、少し違つた方角で」と寒月君が笑ふ。見ると今日は前歯が一枚欠けて居る。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「えゝ実はある所で椎茸を食ひましてね」「何を食つたつて？」「其少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前歯で噛み切らうとしたらぼろりと齒が缺けましたよ」「椎茸で前歯がかけるなんぞ、何だか爺々臭いね。俳句にはなるかも知れないが、恋にはならん様だな」と平手で吾輩の頭を軽く叩く。「あゝ其猫が例のですか、中々肥つてゐるぢやありません

か、夫なら車屋の黒にだつて負けさうありませんね、立派なものだ」と寒月君は大に吾輩を賞める。「近頃大分大きくなつたのさ」と自慢さうに頭をぽかぽかなぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏会をやりましてね」と寒月君は又話しをもとへ戻す。

(『吾輩は猫である』二：25-27)

3文めと4文めは、反復性のある事象であるため、語り手の解説・説明になっている。タ形でないために、これからもその反復が続くだろうという現在の猫の認識が感じられる。猫が物語世界の現場にいる様子と、事態と語りが同時進行していることが感じられる。

この【29】では、動詞の非タ形文末の連続がリズムを構成しながら、物語内容の時間の継起を的確に表している。自然に時間の継起が実感できる。工藤（1995：202）では、動詞の非タ形の連続は、実況報告をしている感じがすると言ひ、これを眼前描写性が感じられると言っている。語り手が「タ」使った場合、物語内容の事態の順序は把握できるが、物語世界の時間の流れを実感することができない。「タ」によって、時間を捨象して事態をまとめて語ることになるからである。

このように、動詞の非タ形の連続あるいは多用は、時間的に現場の時間の臨場感を与える。

しかし、このように物語世界の現場の時間の流れに沿った語りができるのは、『吾輩は猫である』の展開の仕方に関係していると考えられる。『吾輩は猫である』には全体を貫く筋はない。つまり、ある程度まとまった出来事を語っている部分テキストが積み重ねられて全体のテキストが構成されているが、その部分テキスト間の関係は希薄である。そのため、テキスト全体のストーリーの流れに深く関わらずに部分テキストを詳しく語ることができる。そのため、文末に非タ形の動詞を多用して、物語世界の時間の流れに即して語ることができるのである。

次に、過去のことを現在のことのよう語る例を挙げておきたい。

次に示す場面は、事態と語りの同時進行性が感じられていて、実際そのような場面だろうと読者も思っていたのに、実は過去のことだったということがわかる場面である。

【30】（猫が誰もいない台所で餅を食おうとして失敗し、餅を口からとろうとしている場面。下線部は、過去の事だとわかる表現。）

漸くの事は前足の助けを借りて餅を払ひ落すに限ると考へ付いた。先づ右の方をあげて口の周囲を撫で廻す。撫でた位で割り切れる訳のものではない。今度は左りの方を伸して口を中心として急劇に円を劃して見る。そんな呪ひで魔は落ちない。辛防が肝心だと思つて左右交る交るに働かしたが矢張り依然として齒は餅の中にぶら下つて居る。えゝ面倒だと両足を一度に使ふ。すると不思議な事に此時丈は後足二本で立つ事が出来た。何だか猫でない様な感じがする。猫であらうが、あるまいが斯うなつた日にやあ構ふものか、何でも餅の魔が落る迄やるべしといふ意気込みで無茶苦茶に顔中引搔廻す。前足の運動が猛烈なので稍ともすると中心を失つて倒れかゝる。倒れかゝる度に後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所に居る訳にも行かんの、台所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起つて居られたものだと思ふ。第三の真

理が驀地に現前する。「危きに臨めば平常なし能はざる所のものを為し能ふ。之を天祐といふ」幸に天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戦つて居ると、何だか足音がして奥より人が来る様な気合である。こゝで人に来られては大変だと思つて、愈躍起となつて台所をかけ廻る。足音は段々近付いてくる。あゝ残念だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付けられた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊つて居る」と大きな声をする。此声を第一に聞きつけたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣つて勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬の紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さへ書斎から出て来て「此馬鹿野郎」といつた。面白い面白いと云ふのは小供許りである。さうして皆んな申し合せて様にげらげら笑つて居る。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱つた。漸く笑ひがやみさうになつたら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随分ね」といつたので狂瀾を既倒に何とかするといふ勢で又大変笑はれた。人間の同情に乏しい実行も大分見聞したが、此時程恨めしく感じた事はなかつた。遂に天祐もどつかへ消え失せて、在来の通り四つ這になつて、眼を白黒するの醜態を演ずる迄に閉口した。さすが見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとつて遣れ」と主人が御三に命ずる。御三はもつと踊らせ様ぢやありませんかといふ眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺して迄見る気はないのでだまつて居る。「取つてやらんと死んで仕舞ふ、早くとつて遣れ」と主人は再び下女を顧みる。御三は御馳走を半分食べかけて夢から起された時の様に、気のない顔をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君ぢやないが前歯が皆んな折れるかと思つた。どうも痛い痛くないのつて、餅の中へ堅く食ひ込んで居る歯を情け容赦もなく引張るのだから堪らない。吾輩が「凡ての安楽は困苦を通過せざるべからず」と云ふ第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人は既に奥座敷へ這入つて仕舞つて居つた。

（『吾輩は猫である』二：38-40）

なぜ、この場面をわざわざ回想にする必要があつたのか、考察したい。

この場面では、一部の表現を除けば、ほとんどの文の文末が動詞の非タ形で、現在起きている事件を猫がその現場で、その時間に語っているように感じられる。しかし、下線部のうち4文は文末が「タ」になっていて、回想を表している。他の一文の下線部は文脈・内容によって回想とわかる表現である。

なぜ、このように、時々過去のことであることがわかる表現をいれているのか。一番大きな理由として考えられるのは、語り手の余裕ある態度を保つためだということである。この事件を同時進行で語った場合、猫は窮地に立たされているわけで、少なからず、深刻さを帯びることになってしまう。深刻さがなかったとすれば、リアリティに欠けた語りになってしまう。死にそんな事件に直面して、余裕ある態度で語るというのは無理なことである。そこで、事件を少し離れた立場から語る必要がでてくる。『三四郎』や『道草』のように物語世界に存在しない語り手の語るテキストでは、作中人物でない語り手が事件を語るの、それだけで距離ができ、余裕ある態度で語ることができる。しかし、『吾輩は猫である』の場合、猫のことを語るときは、当事者が自分で語ることになるので、距離をとるためには、過去にする必要があつたのである。また、現在の自分について対象化して、事態全体を見渡してまとめて語ることは不可能である。そのため、下線部のうち文末が「タ」

になっているものは、すべて回想の用法をもっている。

このように考えると、わざわざ回想にしたのは、語り手の猫が自分を対象化して語るための距離を作り出すためであったとまとめられる。その結果、余裕ある態度で、自分を深刻化せずに語ることができている。

このように、非タ形文末を用いて写生文のように臨場感をもって語の場合と、タ形文末を用いて猫が対象と距離をとって余裕をもって語の場合とが混在している。片方の用法の語りに偏っていないため、非タ形とタ形のそれぞれの効果が高まると考えられる。

2.1.4 『吾輩は猫である』『三四郎』の、写生文とのかかわり

次に、動詞の非タ形の使用を写生文という見地から分析してみたい。夏目漱石は、正岡子規や高浜虚子との交流の中で、写生文について深い理解を示していた。新聞に「写生文」⁹⁾という文章も書いている。そのため、夏目漱石の初期の文章は写生文との深いかかわりがあると考えられる。

北住敏夫（1973：263）によると、正岡子規は、明治32年12月30日『日本』に、「餅の花」と題する文章を掲げた後にも、「注意」として、「歳晚歳始の事に関する文章御投寄被下候節は成るべく只今見た事を只今見たやうにお記し被下候（中略）実地を見て其時其場の事を面白く写され候はん事を希望致候」（下線は石出）と記した。このことについて、根岸正純（1985：82）では、子規のいう「ありのまゝ見たるまゝに」は、その観察行為のテンポに合わせて、散文のテンポで記述再現してゆく「模写」が成り立つことを意味している、と規定している。また、亀井秀雄（1980：70）は、正岡子規が自己を媒介とする時間的空間的な展開が具象的に描かれることに重きをおいていたことを指摘した上で、明治30年代の国木田独步、島崎藤村などの写実形式の作品が回想形式の作品であったのに対し、子規は、対象化された「自己」の感性で（作品における）現在の状況を描き出す散文の方法を確立したとする。そして、これを吸収し、想起された出来事をいわば現在進行形の形で描きうる方法が、明治30年代後半から広がっていったと指摘する。これらの指摘を重視し、本論文では、正岡子規の考えていた写生文の特徴を「語りながら事態が進行する。事象を知覚している現在と語っている現在が同時進行の形になっている。」と規定することとしたい。この規定のとおり、写生文では語り手が現場で事態を直接認識して語るという形態をとることが多い

小説において動詞の終止形が文末に用いられたときは、時間を捨象してまとめてとらえた出来事でなく、現実味をもった時間性のある事態になる。要約されずに、現在進行中の現実として語られるということで、写生文に近い。写生文というのは、筋のない写生に中心があり、それは、事態を間接的にとらえたものではなく直接とらえたものだからである。このようなことから、動詞の終止形を用いた語りは、写生文の特徴の「写生文は現在進行の形で書かれる」¹⁰⁾ということに合致する。このようなことから、『三四郎』と『吾輩は猫である』は写生文に近いといえる。特に、『吾輩は猫である』は写生文と重なる性質が多いといえる。

実際に『吾輩は猫である』の五章では次のように語られており、語り手の猫自身も写生文のつもりで語っているという設定であることがわかる。

- 【31】 二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだらう、いくら写生文を鼓吹する吾輩でも是は到底猫の企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない。したがって如何に吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇言奇行を弄するにも関らず逐一是を読者に報知するの能力と根気のないのは甚だ遺憾である。遺憾ではあるが已を得ない。休養は猫といへども必要である。

(『吾輩は猫である』五：183)

2.1.5 非タ形の動詞の使用についてのまとめ

非タ形である動詞の終止形について検討してきたが、この検討で確認したことをまとめたい。

(1) 動作性の動詞の非タ形文末は、事態の内容を示すだけでなく、その動作が行われる時間の流れが感じられる。これは、写生文の特徴である「知覚している現在と語っている現在が同時進行の形」に一致する。そのため、動作性動詞の非タ形が、多く使用される場合や現在知覚しているように使われる場合は、写生文の特徴をもつことになる。『三四郎』や『吾輩は猫である』はこれに当てはまる。

(2) 『吾輩は猫である』では、動詞の非タ形の連続によって、物語世界の出来事の時間の流れが実感できる。これは、写生文の特徴である現在進行の形で書かれるということに合致している。

(3) 『三四郎』非タ形文末の多くは、作中人物の認識と考えられる用例であった。作中人物が物語世界の現場で認識した事態を、臨場感をもって非タ形で表していると考えられる。

2.2 テイル文末とテイタ文末の使用による文章特性

2.2.1 小説テキストにおける「ている」「ていた」

「ている」「ていた」という文末表現が小説テキストにおいてどのように使用され、語りにどのような影響を与えているかを検証したい。その際、これまでと同様に『三四郎』と『道草』を中心にとりあげるが、ここではタ形と非タ形の両方の用例が多く見られる『三四郎』を重点的に取り上げる。この二つのテキストは、夏目漱石の書いたテキストでありながら「ている」「ていた」の使い方に大きな違いが見られ、比較しやすい。『三四郎』では、非存在の語り手の語っている時間が過去といえないにもかかわらず、「ている」と「ていた」との使い分けがある。また、『三四郎』は『道草』より物語世界が語り手によって客観的に対象化されて語られている印象が弱い。以上のことを中心に検討していきたい。

2.2.2 調査範囲

2 節での調査範囲と同様に『三四郎』冒頭の地の文の 15%にあたる 830 文を調査範囲とした。比較のため、同様に『道草』の冒頭 15%の 510 文、『吾輩は猫である』の冒頭 10%の 662 文も対象とした。

2.2.3 視点人物

『三四郎』、『道草』ともに物語世界に非存在の語り手が語るという形式である。そのときに、『三四郎』では三四郎、『道草』では健三の知覚を通して、語り手が語る場合がある。これらの人物を先行研究にならい視点人物と呼ぶ。「視点」と言っているが、視覚だけでなく他の知覚や感覚も含んでいる（以後、特別に断らない限り「視点」は他の知覚・感覚を含む）。視点人物の認識を多く含んでいると思われる文を、1章の分類に基づいて次のように分類した。B-1 視点人物の知覚を情報源としているが、語り手が語る形式の文。B-2 視点人物は実際に言語化していないが、視点人物が語る形式の文。C 視点人物の内的独白の文。以上のB-1、B-2、Cの文を三四郎の直接認識と考えられる用例と呼ぶこととした。また、便宜上2章で説明したAの内容を、A-1 語り手が視点人物の内的状態を語る文、A-2 語り手が視点人物の内的状態以外を語る文、と分けることとした。

2.2.4 『三四郎』のテイル・テイタ文末の文の特徴

2.2.4.1 三四郎の直接認識と考えられる用例

2.2.4.1.1 三四郎の直接認識と考えられるテイタ文末の用例

三四郎の直接認識としてタ形が使われるのは、三四郎の気づき・発見か、三四郎の回想だと考えられる。まず回想について検討したい。調査範囲の中には、三四郎の回想するテイタ文末の文の用例が見当たらなかったため、次の用例は、調査範囲以外からの引用である。下線部は、三四郎の知覚が反映されているテイタ文末の文である。

【32】 三四郎の眼の前には、ありありと先刻の女の顔が見える。其顔と「あゝあゝ……」と云つた力のない声と、其二つの奥に潜んで居るべき筈の無残な運命とを、継ぎ合はして考へて見ると、人生と云ふ丈夫さうな命の根が、知らぬ間に、ゆるんで、何時でも暗闇へ浮き出して行きさうに思はれる。三四郎は慾も得も入らない程怖かつた。たゞ轟と云ふ一瞬間である。其前迄は慥かに生きてゐたに違ない。

三四郎は此時不図汽車で水蜜桃を呉れた男が、危ない危ない、気を付けないと危ない、と云つた事を思ひ出した。危ない危ないと云ひながら、あの男はいやに落付いて居た。つまり危ない危ないと云ひ得る程に、自分は危なくない地位に立つてゐれば、あんな男にもなれるだらう。世の中にゐて、世の中を傍観してゐる人は此処に面白味があるかも知れない。どうもあの水蜜桃の食ひ具合から、青木堂で茶を呑んでは烟草を吸ひ、烟草を吸つては茶を呑んで、凝つと正面を見てゐた様子は、正に此種の人物である。——批評家である。——三四郎は妙な意味に批評家と云ふ字を使つて見た。使つて見て自分で旨いと感心した。のみならず自分も批評家として、未来に存在しやうかと迄考へ出した。あの凄惨な死顔を見るとこんな氣も起る。

（『三四郎』三の十：332-333）

この下線部の用例は、下線部の前文の「思ひ出した」という表現から、三四郎にとって過去のことを三四郎が思い出しているという回想の用例だと理解できる。この用例のように、三四郎の直接認識で過去を回想するテイタ文末の文は、内的独白かそれに近い表現となる。ほぼ三四郎が言語化した表現のままであり、「ていた」の「ている」への置き換えが不可能である。

次の用例は、回想ではないと考えられる用例である。

- 【33】 此時三四郎は空になつた弁当の折を力一杯に窓から放り出した。女の窓と三四郎の窓は一軒置の隣であつた。風に逆つて抛げた折の蓋が白く舞ひ戻つた様に見えた時、三四郎は飛んだ事をしたのかと気が付いて、不途女の顔を見た。顔は生憎列車の外に出てゐた。けれども女は静かに首を引つ込めて更紗の手帛で額の所を丁寧に拭き始めた。三四郎は兎も角も謝まる方が安全だと考へた。

（『三四郎』 一の二：276）

この用例は回想ではない。この場合、「ている」に置き換えても、文脈は通る。しかし、タ形の「ていた」になっていることによって、表現の効果が異なっている。

「報告」のテキストにおいて、眼前の事態にテイタ文末の文を使う用例は限られていると考えられる。いわゆる「想起」や「発見」のときで、工藤（1995：184-185）で引用されている次のような用例の場合である。

- 【34】 「ほら、やっぱり起きていた」

（曾野綾子「たまゆら」新潮文庫）

- 【35】 その時、杉戸が、
「おれ、おふくろから菓子を頼まれていた」
と、いまそのことを思い出したように言った。

（井上靖「北の海」新潮文庫）

しかし、「語り」のテキストでは、通常語り手が想起や発見をすることがないため、このような用法はほとんど見られない。【33】の用例の場合も、そのような「発見」の語りと考えることもできるが、三四郎の知覚を利用した語り手の語りと考える方が妥当だと思われる。三四郎がその場の状況に改めて気づき、事態を「発見」したと考えることはできるが、近傍の表現から見てこの文だけが三四郎の語る形式（B-2）や三四郎の内的独白とは考えられない¹¹⁾。そのため、三四郎の知覚を利用した語り手の語り（B-1）と考える方が自然だと思われる。この文が三四郎の語る形式（B-2）や三四郎の内的独白であれば、「報告」のテキストと同様に「発見」と考えられる。しかし、ここではそのようには考えられないので「発見」とはみなさない。

この用例では、語り手がテイタ文末で語ることににより、事態をひとまとまりとして対象化して確認しているため、冷静な語りとなっている。かえってそれが文体的なおかしみをかもし出している。

次に、比較のために、三四郎の直接の発言・認識と考えられる用例で、文末が「ている」の用例を見たい。

2.2.4.1.2 三四郎の直接認識と考えられるテイル文末の用例

次に三四郎の認識と考えられるテイル文末について検討したい。下線部が該当するテイル文末である。

- 【36】 うとうととして眼が覚めると女は何時の間にか、隣りの爺さんと話を始めてゐる。
此爺さんは慥かに前の前の駅から乗った田舎者である。発車間際に頓狂な声を出して、
馳け込んで来て、いきなり肌を抜いだと思つたら脊中に御灸の痕が一杯あつたので、
三四郎の記憶に残つて居る。

(『三四郎』 一の一：273)

- 【37】 所へ窓の外を楽隊が通つたんで、つい散歩に出る気になつて、通りへ出て、とうとう青木堂へ這入つた。

這入つて見ると客が二組あつて、いずれも学生であつたが、向ふの隅にたつた一人離れて茶を飲んでゐた男がある。三四郎が不図其横顔を見ると、どうも上京の節汽車の中で水蜜桃を沢山食つた人の様である。向ふは気がつかない。⁽¹⁾茶を一口飲んでは烟草を一吸すつて、大變悠然構へてゐる。⁽²⁾今日は白地の浴衣を已めて、背広を着てゐる。然し決して立派なものぢやない。

(『三四郎』 三の五：319-320)

【36】、【37】とも2章で述べた語りの様相ではB-2に分類される文である。三四郎が言語化していないが三四郎の知覚のままの文だと考えられる。文末が「ていた」のものと比較すると、テイル文末の文は、ただ自分の知覚でとらえたままの状況を語っているといえる。テイタ文末の文の場合、三四郎が知覚した内容をさらに三四郎あるいは語り手が対象化していると考えられる。

2.2.4.2 語り手が語っている用例

次に、語り手が語り手の立場から語っている用例を見たい。その中から、三四郎についての用例を取り上げてみた。この用例は、語り手が三四郎を対象として語っているので語り手の立場からの語りであることが最もはっきりわかる。

2.2.4.2.1 三四郎について語り手が語っているテイタ文末の用例

- 【38】 其寐てゐる間に女と爺さんは懇意になつて話を始めたものと見える。眼を開けた三四郎は黙つて二人の話を聞いて居た。女はこんな事を云ふ。――

(『三四郎』 一の一：274)

- 【39】 講義が終つてから、三四郎は何となく疲労した様な気味で、二階の窓から頬杖を突いて、正門内の庭を見下してゐた。只大きな松や桜を植ゑて其間に砂利を敷いた広い道を付けた許であるが、手を入れ過ぎてゐない丈に、見てゐて心持が好い。

(『三四郎』 三の二：312)

【38】、【39】は、「ている」に置き換えても文脈は通る。

以上のテイタ文末の用例を「ている」に置き換えた場合を想定して、改めて見直してみる。「ている」にして「聞いて居る」「見下してゐる」とした場合、語り手が現場で知覚しているかのように語っている語りになる。眼前描写、実況中継の語りとなる。それに対して「ていた」文末の文の場合は、時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえていて、現地で知覚していなくても語ることができる文となっている。語り手は物語世界外で語っ

ているように感じられる。時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえるためには、その事態から離れて外側からその事態をとらえ直して見ることになるからだと考えられる。

2.2.4.2.2 三四郎について語り手が語っているテイル文末の用例

次に、語り手が語り手の立場で語るテイル文末に焦点をあてて検討したい。

【40】 三四郎は思ひ出した様に前の停車場で買った弁当を食ひ出した。

車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入つた。三四郎は鮎の煮浸の頭を啣へた儘女の後姿を見送つてゐた。便所に行つたんだと思ひながら頻りに食つてゐる。

(『三四郎』一の二：275-276)

【41】 大きな行李は新橋迄預けてあるから心配はない。三四郎は手頃なズツクの革靴と傘丈持つて改札場を出た。頭には高等学校の夏帽を被つてゐる。然し卒業したしるしに徽章丈は挽ぎ取つて仕舞つた。昼間見ると其処丈色が新らしい。

(『三四郎』一の三：278)

これらのテイル文末の文の用例は近傍の文からも、語り手が実際に物語世界の現場で、物語世界の時間のその時点に見ていなければ（知覚していなければ）言えないような表現であることがわかる。テイル文末は、1.3.3で述べたように、現在継続している状態、または効果が継続している状態を表現者が知覚し、それをそのまま表出した表現なのである。そのため、これらの文は、語り手が現場にいるかのように感じられる表現といえる。

【42】 三四郎は生れてから今日に至るまで西洋人と云ふものを五六人しか見た事がない。

其うちの二人は熊本の高等学校の教師で、其二人のうちの一人は運悪く脊虫であつた。女では宣教師を一人知つて居る。随分尖がつた顔で、鱈又はかます [=魚へんに師] に類してゐた。だから、かう云ふ派出な奇麗な西洋人は珍しい許りではない。頗る上等に見える。三四郎は一生懸命に見惚れてゐた。是では威張るのも尤もだと思つた。自分が西洋へ行つて、こんな人の中に這入つたら定めし肩身の狭い事だらうと迄考へた。

(『三四郎』一の八：290-291)

【42】の用例は、内的情態動詞に「ている」が付いて三四郎の内面を対象化して語っていて、【41】と同じような説明ができない。【42】の「ている」は三四郎のいわば潜在的な状態を表わしている。三四郎の現在の内的状態ではない。この文を説明・解説としてとらえたとき、「ている」には、現在の時間に限らない潜在的状態を表すことがあるといえる。そして、この潜在的状態を表す「ている」は、現在の起っている事態にかかわらない長い時間の状態であるので、語り手が現場で知覚・認識するような表現ではない。そのため、語り手が現場に居なければ語れないような表現にはならない。このように「ている」は目に見える具体的な事象の場合と、説明・解説としての潜在的状態の場合と区別して考える必要がある。

しかし、この【42】の用例の場合は、文末が「ている」であって「ていた」でないために、語り手が知っている情報を示したということではあるが、内容を対象化し事態全体をまとめてとらえて語ったということにはなっていない。そのため、物語世界外から語っているという印象は薄い。これは、テイル文末の文が知覚・認識した事態をそのまま表出する表現であるのに対して、テイタ文末の文がその内容を対象化してまとめて語る文だからである。

2.2.4.3 テイル・テイタ文末の用例からわかること

『三四郎』において、三四郎の直接認識でないテイタ文末の文は、語り手が現場にいるように感じられない。語り手が物語世界の事態から距離をおいているように感じられる。また、このとき語り手の語る場所や時間は物語世界のそれとは関係がない。この場合、従来文学研究で言われてきたとおり、語り手の認識は直接認識ではなくて間接的で概念的な認識である¹²⁾。そのため、物語世界の事態に対しての認識は冷静で客観的な判断であるという印象を与える。それに比べて、三四郎の直接認識でないテイル文末の文は、潜在的状態を表す文以外は、語り手が物語世界のその現場で、その時間にいるように感じられる表現である。

三四郎の直接認識の文では、「ていた」によって、三四郎が知覚・認識した事態を、さらに語り手あるいは三四郎が対象化していることがわかる。見たまま、感じたままを直接表現しただけではない。これに対して、テイル文末の文は、三四郎が自分の知覚でとらえたままの状態を語っている。

テイタ文末の文は、知覚主体が事態の状態を対象として「…ている」と知覚し、さらに時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえている。これは 1.3.3 節で示したとおりである。

「…ている」の部分は知覚主体の主観的判断であるが、タ形の「ていた」になると、冷静で客観的な印象を与える表現となる。そのため説明的な印象にもなる。それは、知覚した内容を対象化して、表現主体が事態から距離をおいて語る表現になるからである。タ形になることによって、知覚・認識を表出する表現ではなく、その知覚・認識を事態として語るという表現になっている。

2.2.5 「ている」「ていた」の使用・不使用の実態とその効果

表2は、調査範囲（『三四郎』冒頭830文、『道草』冒頭510文、『吾輩は猫である』冒頭662文）の中での「ている」「ていた」の出現の状況である。

【表 2】

『三四郎』「ている」					『道草』「ている」					『吾輩は猫である』「ている」				
	ている	ていた	合計	割合		ている	ていた	合計	割合		ている	ていた	合計	割合
A-1	2	5	7	6.0%	A-1	1	20	21	32.3%	A-1	0	1	1	1.3%
A-2	7	21	28	23.9%	A-2	0	32	32	49.2%	A-2	31	7	38	49.4%
B-1	47	8	55	47.0%	B-1	0	12	12	18.5%	B-1	0	1	1	1.3%
B-2	22	1	23	19.7%	B-2	0	0	0	0%	B-2	7	0	7	9.1%
C	4		4	3.4%	C	0	0	0	0%	C	30	0	30	39.0%
合計	82	35	117		合計	1	64	65		合計	68	9	77	

〔凡例〕

A-1 語り手が視点人物の内的状態を語る文

A-2 語り手が視点人物の内的状態以外を語る文

B-1 視点人物の知覚を情報源としているが、語り手が語る形式の文。

B-2 視点人物は実際に言語化していないが、視点人物が語る形式の文。

C 視点人物の内的独白の文。

(B-1、B-2、Cの文を三四郎の直接認識と考えられる用例とする)

表 2 における『三四郎』、『道草』、『吾輩は猫である』の「ている」と「ていた」の使用・不使用の状況から次のようなことがわかる。

第一に、語り手が視点人物の内面を対象化して語る文数に差が出ている。視点人物の内面の状態をテイル・テイタ文末で客体化して語る場合が、『三四郎』と『吾輩は猫である』は『道草』に比べて少ない。

第二に、『三四郎』においては、三四郎の直接認識と考えられるテイル・テイタ文末の文が、語り手の立場からの語りのテイル・テイタ文末文よりも多い。これに対して、『道草』の場合は、全く逆である。このことにより、『三四郎』は『道草』に比べて、視点人物が事態を外側から見ている表現が多いと言える。このことは、『三四郎』が『道草』に比べて、語り手よりも視点人物の事態の認識によって状態が語られているということである。

第三に、『道草』にテイル文末の文が 1 例しかないということから、『三四郎』と『道草』の文体上の効果の違い、語り手の機能の違いは明らかである。『三四郎』では、「ている」と「ていた」の比率はだいたい 2 : 1 である。「ている」は三四郎の直接認識の場合も多いが、語り手の語りの場合もある。語り手の立場からの語りのテイル文末の文は、多くの場合語り手が現場にいるように感じられる表現であるから、『三四郎』の語り手は、ときに応じて物語世界に入り込み物語時間にそって物語世界のその場で認識しているかのように語る。『三四郎』では、テイル文末が多く使われることによって、物語世界を直接感じる人が多い。三四郎の直接認識と考えられる用例は、語り手の存在が意識されにくくなり、物語世界が語り手を媒介とせずに読者に直接感じられるようになる。また、三四郎の直接認識でない語り手の立場からの語りでテイル文末が用いられるときは、語り手は物語世界の

現場にいる印象が強いので、語り手と物語世界が非常に近い印象を受ける。それに比べて、『道草』では「ている」は単独で使われず、ほとんど「た」が後接する「ていた」という形で使われており、語り手は物語世界から距離をとっている。そのため、語り手は冷静で客観的な態度で物語世界の事象の状態をとらえている印象を与える。『三四郎』にもテイタ文末の用例はあるが、使用頻度が『道草』に比べて少ない。また、テイル文末の文とテイタ文末の文をあわせた用例の全文中での使用頻度は『三四郎』と『道草』では大して変わらないが、「ていた」の使用頻度が両作品では決定的に違う。ここが両作品の大きな違いである。

テイル文末の文は『道草』ではほとんど使用されていなかったが、テイタ文末の文は両作品で使用されている。では、テイタ文末の文は両作品において何か性格の違いが見られるのかということで、テイタ文末の文を『三四郎』と『道草』で比較してみたい。

2.2.6 テイタ文末の文の、『三四郎』と『道草』における相違

テイタ文末の文の大きな特徴は、語り手の立場からの語りの場合、語り手が現場にいるかのように感じられる語りにはならないということである。また、「タ」で対象化されまとめられることによって、語り手個人の知覚や認識というレベルではなく、物語世界の客観的事実として語られることになる。そのため、冷静で客観的な語りという印象を読者に与える。このことをふまえて比較してみたい。ここでは、『三四郎』、『道草』とも視点人物の直接認識とは考えられない用例を調査してみた。

『三四郎』で上の条件に該当する用例は26例である。具体的にいくつかの用例を示したい。

- 【43】 唯顔立から云ふと、此女の方が余程上等である。口に締りがある。眼が判明してゐる。額が御光さんの様にだゞつ広くない。何となく好い心持に出来上つてゐる。(1) それで三四郎は五分に一度位は眼を上げて女の方を見てゐた。時々女と自分の眼が行き中る事もあつた。(2) 爺さんが女の隣りへ腰を掛けた時などは、尤も注意して、出来る丈長い間、女の様子を見てゐた。其時女はにこりと笑つて、さあ御掛けと云つて爺さんに席を譲つてゐた。夫からしばらくして、三四郎は眠くなつて寐て仕舞つたのである。

(『三四郎』一の一：274)

【43】(1)の、「五分に一度位は」という表現は、主観的判断が働いた情報である。また、この部分だけが詳しく語られている。その注目の仕方には真剣さが無い。わざと三四郎の面白い状態を表現しようとしている。また、文頭の「それで」は軽い印象を与える。夏目漱石の初期作品には余裕ある態度が感じられると言われるが、このような語り手の語りからもそれが感じられる。

(2)も、語り手が、いかに三四郎が注意して女を見ていたかについて注目している。「尤も注意して、出来る丈長い間、」というのは、やはり必要以上に詳しい情報であり、おおげさな表現である。また、「爺さんが女の隣りへ腰を掛けた時などは、」という表現では、三四郎をからかうような態度がみられる。このようなところからも、余裕ある態度が感じら

れる。

【44】 三四郎は此男に見られた時、何となく極りが悪かつた。本でも読んで気を紛らかさうと思つて、革靴を開けて見ると、昨夜の西洋手拭が、上の所にぎつしり詰つてゐる。そいつを傍へ搔き寄せて、底の方から、手に障つた奴を何でも構はず引き出すと、読んでも解らないベーコンの論文集が出た。ベーコンには気の毒な位薄つぺらな粗末な仮綴である。元来汽車の中で読む見もないものを、大きな行李に入れ損なつたから、片付ける序に提革靴の底へ、外の二三冊と一所に放り込んで置いたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。他の本でも読めさうにはない。ましてベーコン杯は無論読む気にならない。けれども三四郎は恭しく二十三頁を開いて、万遍なく頁全体を見廻してゐた。三四郎は二十三頁の前で一応昨夜の御浚をする気である。

(『三四郎』 一の五：283)

【44】の下線部は、三四郎の真剣な気持ちを語り手が茶化している。「恭しく」「見廻してゐた。」と状態を把握するのは語り手の個性的なとらえかたである。また、内容と「ていた」という冷静で客観的な語りとの間に落差が感じられる。やはり、余裕のある態度が感じられる。この部分について、千種キムラ（1995：20）で、おかしみのある表現だとし、「恭しく」という語は、この脈絡のなかでは場違いな表現であり、皮肉な色合いをもっていると指摘している。

【40】の波線部の用例を見られたい。この用例は明らかに三四郎の姿を滑稽にとらえている。これは、その状況自体がおかしいのであるが、わざわざ「三四郎は鮎の煮浸の頭を啣へた儘」ととらえたのは、語り手が三四郎の様子を細かくとらえ、その様子を戯画化し笑わせようとしているからである。例えば、「弁当を食ひながら女の後姿を…」でもよかったはずである。ここに語り手の個性的な見方が感じられる。また、「見送ってゐた」という状態の把握の仕方も語り手の個性的なとらえ方である。しかし、文体は、「ていた」という文末を使っていることもあつて、淡々と客観的に語っていて、文体落差が感じられる。やはり、余裕ある態度が感じられる語りである。千種キムラ（1995：20-21）で、『三四郎』の笑いを誘う部分としてこの例をあげている。

【42】の用例の波線部の用例を見られたい。この用例の「一生懸命に見惚れ」という表現は語り手の個性的なとらえ方である。「一生懸命に」と「見惚れ」という語の組み合わせは笑いを誘う。語り手は三四郎の状態に対して真剣さや同情をもたず滑稽なものとしてとらえようとしている。その際、テイタ文末であるために語り手と物語世界の人物である三四郎との間に距離ができ、語り手が冷静に客観的に語る印象を与えるので、滑稽なことを真面目に語るという点で文体落差を感じさせる表現となっている。

続いて、『道草』の「ていた」の用例をみたい。該当する用例は52例である。

【45】 彼が遠い所から持つて来た書物の箱を此六畳の中で開けた時、(1)彼は山のやうな洋書の裡に胡坐をかいて、一週間も二週間も暮らしてゐた。さうして何でも手に触れるものを片端から取り上げては二三頁づゝ読んだ。それがため肝心の書斎の整理は何時

迄経つても片付かなかつた。しまひに此体たらくを見るに見かねた或友人が来て、順序にも冊数にも頓着なく、ある丈の書物をさつさと書棚の上に並べてしまった。彼を知つてゐる多数の人は彼を神経衰弱だと評した。⁽²⁾彼自身はそれを自分の性質だと信じてゐた。

(『道草』二：8)

【45】(1)、(2)において、語り手は、『三四郎』に比べて物語世界の事態を滑稽なものとしてとらえようとしていない。テイタ文末によって、物語世界の「彼」に対して距離を置いて、同情をもって語っていないのは『三四郎』の場合と同じだが、事態や人物についてのとらえ方に滑稽味はなく、どちらかというと悲観的にとらえている印象を与える。テイタ文末を用いると、語り手が事態を冷静に客観的に語る印象となるため、悲観的な事態をテイタ文末で語ると、事態を冷徹にみているように感じられる。『道草』の場合には事態のマイナス面をより冷たく語る効果を与えることになっている。

テイル・テイタ文末は、既に述べたように、状態をどのようにとらえるかという語り手の見方が表れると考えられるが、実際『三四郎』の中には、語り手が滑稽味をもって見ようという態度が感じられる表現が多い。それに対して、『道草』では、滑稽に見ようという態度は感じられず、事態をどちらかというと悲観的にとらえている。また、語り手の語るテイタ文末の文は事実を客観的に語る印象を与える表現であるが、その内容が瑣末なことである場合は文体落差を感じさせより滑稽な語りになり、内容がシリアスな場合には冷たく語る印象をあたえる語りになる。『三四郎』には前者のような例が見られ、『道草』には後者のような例が多く見られた。『三四郎』と『道草』において、同じテイタ形を用いていても、その表現の効果に違いがみられるということである。このことによって、語り手の見方や語る態度に差があることが認められる。

2.2.7 テイル文末とテイタ文末の使用についてのまとめ

2.2.4 では、『三四郎』の用例から、テイル文末とテイタ文末の文の特徴を、三四郎の直接認識の場合と語り手の立場の語りの場合に分けて考察した。そして、2.2.5～2.2.6 ではその特徴をもとに、実際にテイル・テイタ文末が用いられることによって『三四郎』という作品がどのような特徴をもつことになったのか検討した。その結果、次のような傾向が考えられた。『三四郎』は、『道草』に比べて視点人物である三四郎の直接認識の文が多く、また全体的にテイタ文末の文よりもテイル文末の文が多いため、語り手と物語世界が非常に近い印象を与える場合が多い。さらに、語り手が内的情態を対象化して語ることが少ないことなども働いて、物語が視点人物中心で展開していく。また、テイタ文末の文に関しては、『道草』が冷たい印象の語りが多いのに比べて、『三四郎』では滑稽味の感じられる語りになる場合もあった。これは、語り手の事態に対する見方や態度の違いが影響している。

2.3 デアル・デアッタ文末の小説テキストでの使われ方

2.3.1 『三四郎』『道草』『吾輩は猫である』における「である」「であった」の使用

小説テキストの中で、デアル文末とデアッタ文末がどのような割合で使用されているか、

これまで検討してきた『三四郎』『道草』『吾輩は猫である』について調査してみた。

次の表3は、各テキストの地の文全体の20%の冒頭部分を調査したものである¹³⁾。『三四郎』977文、『道草』668文、『吾輩は猫である』948文が対象となる。「ものである」「だけである」などの命題相当あるいは活用語に後接するデアル文（形式名詞＋「である」、助詞＋「である」）は数に含めていない。また、調査用例全体の文末をタ形と非タ形に分けてみた。

表3で示したとおり、『吾輩は猫である』、『三四郎』は、デアルの方がデアッタよりも多く用いられている。『道草』ではデアルは用いられず、すべてデアッタが用いられている。『吾輩は猫である』と『三四郎』では、用例全体の非タ形の割合に比べてデアルの非タ形の割合が高い。また、用例全体に占める「である」文末（デアル文末・デアッタ文末の合計）の占める割合は、テキストによる顕著な差は見られない。

以上のことから、『道草』では表現者の主観的判断が他のテキストに比べて少なく、客観的に語っている印象を与える傾向があることがわかる。それに比べると、他の二つのテキストは、表現者が受信者に対して主観的判断を語っている傾向が『道草』よりも強いといえる。『吾輩は猫である』は、いわゆる一人称小説であることから、語り手でもあり作中人物でもある猫の判断が表出されることが多いのは当然だと考えられる。『三四郎』は、第一章で述べたように、作中人物の知覚を利用した語りのB-2が多く、三四郎の判断が表出されることも多い。また、語り手は、物語世界の現場で知覚しているかのように語ることもよくあり、さらに自分の判断を表出したりする場合もある。このようなことが、『三四郎』において非タ形のデアル文が多いということと結び付くと考えられる。

【表3】 「である」・「であった」 の使用		『吾輩は猫である』		『三四郎』		『道草』	
		文数 (用例数)	調査対象全体 に対する割合	文数 (用例数)	調査対象全体 に対する割合	文数 (用例数)	調査対象全体 に対する割合
調査用例全体	タ形	164	17.3%	533	54.6%	647	96.9%
	非タ形	784	82.7%	444	45.4%	21	3.1%
	合計	948	100.0%	977	100.0%	668	100.0%
体言等に後接 する「である」 文末	タ形	7	0.7%	35	3.6%	72	10.8%
	非タ形	107	11.3%	82	8.4%	0	0.0%
	合計	114	12.0%	117	12.0%	72	10.8%

2.3.2 語り手が現場で語るデアル文末の文

1.3.4.1で示したように、非タ形のデアル文末の文の内容は、物語世界の具体的な現場での知覚に関わる場合と、具体的な現場の知覚に関わらない場合や時間に幅のある場合がある。前者の場合で物語世界の知覚可能な事態を具体的に語るときは、原則として物語世界の現場に身を置いているかのような語りになる。【46】、【47】の下線部は、その例である。一方、後者の場合は、非タ形のデアル文であっても物語世界の現場にいないで語ることができる。【48】は、その例である。

通常、具体的な場面で現場の状態を描写する語りは、作中人物の知覚を利用していることがほとんどである。その場の状況を語るには、その場で知覚しているように語る必要があることが多いからである。特に、具体的な現場での知覚に関わる非タ形のデアル文や「のだ」文は、物語世界の現場で判断し語っている表現なので、原則として具体的な現場にいる作中人物の判断である。しかし、テキストによっては、物語世界に存在しない語り手が物語世界の具体的な現場で知覚しているかのように語る場合もみられる。

この際、【46】、【47】のように語り手が物語世界の事物を知覚しているかのように語る場合には、語り手は物語世界の現場にいるかのように知覚・認識を語り、なおかつ想定される聞き手に語ることになる。

【46】の下線部は、作中人物の誰かが観察した内容ではない。この老人のほかには不特定の銭湯の客しかこの場面では登場しない。そのため、この老人の肉体を観察しているのは語り手だと考えられるのである。下線部に続くテイル文末の2文も観察していることが感じられる。

【46】 宮田照吉は銭湯へ行つた。彼は傲慢な身振でのれんを頭ではねのけ、むしりとるやうにシャツを脱いで籠に投げこむので、ともするとシャツや帯は籠の外に四散した。すると照吉は、いちいち大きな舌打ちをして、足の指でそれらをつまみ上げて籠に放り込んだ。まはりで見えてゐる連中はおそれをなしたが、これこそは老いても気力の衰へてゐないことを公衆の前に示すべく、照吉に残された数少ない機会の一つであつた。

しかしその老いの裸はさすがに見事である。赤銅色の四肢には目立つたたるみもなく、鋭い目と、頑強な額の上には、獅子の鬣のやうな白髪が乱れ逆立つてゐる。酒焼けのした胸の赤らみと、この白髪がいかにも魁偉な対照をなしてゐる。隆々たる筋肉は久しく使はれないために硬くなり、それが波に打たれていつそう峻しくなつた巖の印象を強めるのであつた。

（『潮騒』第十章:312）

次の【47】では、作中人物「宗近」と「甲野」が船に乗る場面である。文末表現はすべて非タ形であるが、作中人物が現場で知覚していることを語っているのではなく、語り手が物語世界の現場で語っていると考えるのが適切である。二段落目や三段落目の船頭や竿の説明は、作中人物がじっと船の様子を見て知覚していることを表現していると考えず、物語世界に身を置いているかのように語り手が聞き手を対象に語っていると考えた方が自然である。

【47】 「妙な舟だな」と宗近君が云ふ。底は一枚板の平らかに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に烟草盆を転がして、二人はよき程の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら、大丈夫どす、波はかゝりまへん」と船頭が云ふ。船頭の数は四人である。真っ先なるは、二間の竹竿、続く二人は右側に櫂、左に立つは同じく竿である。

ぎいぎいと櫂が鳴る。粗削りに平げたる櫂の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、余る一尺に丸味を持たせたのは、両の手にむんずと握る便りである。握る手の節の隆きは、真

黒きは、松の小枝に青筋を立てて、うんと掻く力の脈を通はせた様に見える。藤蔓に頸根を抑へられた櫓が、掻く毎に撓りでもする事か、強き項を真直に立てた儘、藤蔓と擦れ、舷と擦れる。櫓は一掻毎にぎいぎいと鳴る。

岸は二三度うねりを打って、音なき水を、停まる暇なきに、前へ前へと送る。重なる水の蹙つて行く、頭の上には、山城を屏風と囲う春の山が聳えてゐる。通りたる水は已むなく山と山の間に入る。帽に照る日の、忽ちに影を失ふかと思えば舟は早くも山峡に入る。保津の瀬はこれからである。

「愈来たぜ」と宗近君は船頭の体を透かして岩と岩の逼る間を半丁の向に見る。水はごとと鳴る。

（『虞美人草』五の三：92）

以上に挙げた『潮騒』『虞美人草』は、引用していない部分も検討した結果、語り手が物語世界の現場で知覚しているかのように語るという設定であることが明らかであった。このような設定の場合、「である」文末の文では、語り手が知覚しているかのように語るために、語り手の主体的判断が語られることになる。語り手であるために知っている真実を客観的に語る（神の視点で語る）というものではない。そのため、語り手の存在が意識される。

2.3.3 語り手が現場で語っているかのような設定でないデアル文末の文

また、1.3.4.1で示したように、現場にいらなくても語れるデアル文末の文もある。事物の性質や状態、習慣、繰り返される出来事などを語る場合である。

次の用例のデアル文末のでは、「奇麗でしたらうは」が主題となっており、物語世界に身を置かなくても語ることはできる。しかし、この文は語り手が自分の判断を想定される聞き手に強く働きかけて語っている。

【48】 「昨夕博覧会へ御出に……」とまで思ひ切つた小野さんは、御出になりましたかにしやうか、御出になつたさうですねにしやうかの所で一寸ごとつた。

「えゝ、行きました」

迷つてゐる男の鼻面を掠めて、黒い影が颯と横切つて過ぎた。男はあつと思ふ間に先を越されて仕舞ふ。仕方がないから、

「奇麗でしたらう」とつける。奇麗でしたらうは詩人として余りに平凡である。口に出した当人も、是はひどいと自覚した。

（『虞美人草』十二の十二：248）

このように語り手が現場に身を置かなくても語れるデアル文末の文も多くあるが、そのような文であっても、デアル文末の文は語り手の存在が強く感じられる。上に挙げたような語り手が物語世界の現場で知覚できる設定のテキストでは、非タ形のデアル文末の文が多く、語り手の存在が目立つ傾向がある。

2.3.4 デアル文末、デアッタ文末の文からみた『虞美人草』の表現特徴

『虞美人草』の地の文 4607 文には、非タ形のデアル文末の文が 557 文、デアッタ文末の

文が 16 文、「のである」文末の文が 21 文、「のであった」文末の文が 0 文であった。同じ夏目漱石『それから』の地の文 4483 文は、デアル文末の文が 152 文、デアッタ文末の文が 257 文、「のである」文末の文が 61 文、「のであった」文末の文が 8 文であった。このように、テキストによって傾向が異なっていることが認められる。『虞美人草』では、デアッタ文末の文に比べて、圧倒的にデアル文末の文が多い。

また、全 19 章のうちの 10 章までの調査ではあるが、デアル文末 242 文のうち語り手の判断だと考えられるものが 227 文であった。テキストの解釈により判定の揺れはあると思うが、約 94% が語り手の判断と考えられた。このことにより、『虞美人草』の語り手は、想定される聞き手に対して強く自分の断定の判断を提示しているといえる。また、作中人物の判断も、数は少ないが地の文に引用されているといえる。

デアル文末の文では、【48】のような用例が多く認められる。つまり、物語世界の事態に対して語り手が自分のコメントを語ることが、しばしば見られるのである。また、テキストの 12 章に、

【49】 謎の女は絹布団の上でその日その日を送る果報な身分である。

(『虞美人草』十二の八：235)

とあるように、語り手が藤尾の母親について悪意や皮肉をこめてデアル文で主観的に表現することもある。このように語り手の姿勢というようなものが比較的鮮明に打ち出されている。さらに、語り手は現場で語るような表現を、デアル文末を用いて語っている。

このようなことから、デアル文末の文を分析することにより、『虞美人草』の語り手が、自分の判断を想定される聞き手に強く語る傾向のあることが認められる。また、デアッタ文末が少ないことから、対象化して状況を語ることが少なく、語り手の判断として解説することが多いと考えられる。

また、『虞美人草』の特徴として、各章のはじめは語り手の感想や批評からはじまることが多いということが挙げられる。次の用例は、八章のはじめであるが、語り手が現場の様子雰囲気や甲野の母について批評している。

【50】 一本の浅葱桜が夕暮を庭に曇る。拭き込んだ椽は、立て切った障子の外に静かである。うちは小形の長火鉢に手取形の鉄瓶を沸らして前には絞り羽二重の座布団を敷く。布団の上には甲野の母が品よく座つてゐる。きりりと釣り上げた眼尻の尽くるあたりに、疳の筋が裏を通つて額へ突き抜けてゐるらしい上部を、浅黒く膚理の細かい皮が包んで、外見だけは至極穏やかである。——針を海綿に蔵して、ぐつと握らしめたる後、柔らかき手に膏薬を貼つて創口を快よく慰めよ。出来得べくんば唇を血の出る局所に接けて他意なきを示せ。——二十世紀に生れた人は是丈の事を知らねばならぬ。骨を露はすものは亡ぶと甲野さんが嘗て日記に書いた事がある。

(『虞美人草』八の一：132)

この部分には非タ形のデアル文が 2 文あり、2 文とも語り手が現場で知覚している表現である。ここでは、デアル文を使って語り手の判断が語られている。このように冒頭に語り手が現場で知覚しているような判断が語られ、その結果、語り手の判断がテキスト全体

に多く作用している印象を与えている。

2.3.5 デアル文末、デアッタ文末の文からみた『雪国』『潮騒』の表現特徴

次に、川端康成『雪国』（1935 - 1947）と三島由紀夫『潮騒』（1954）を比較することにより、デアル文末とデアッタ文末の表現特徴を検討したい。調査対象としたのは、それぞれの地の文の全文『雪国』1210 文、『潮騒』2015 文の中のデアル文末の文とデアッタ文末の文である。なお、今回は否定の「でない」「でなかった」等の表現は対象としていない。

『雪国』におけるデアル文とデアッタ文の用例数は表4のとおりである。

【表4】

『雪国』

	であった	である	合計
語り手の語り	32	13	45
作中人物の知覚を利用した語り、または作中人物の内的独白	159	11	170
合計	191	24	215

『潮騒』

	であった	である	合計
語り手の語り	47	78	125
作中人物の知覚を利用した語り、または作中人物の内的独白	13	17	30
合計	60	95	155

『雪国』において、非タ形のデアル文は、作中人物の知覚にもとづいた語り が 11 例、語り手の語り が 13 例である。語り手の語りの 13 例のうち、2 例は現地の「鳥追い祭り」についての説明、4 例は島村の内面の説明で比較的長い時間の内容を扱った語り、他の 2 例は語り手による理由の説明「からだ」、残りの 5 例はその他の特定の時間に関わらない説明である。他に、表2には含まれていないが、地の文の中に書物の引用がありその中に 2 例ある。このように『雪国』における非タ形である文の語りは、物語世界の場面の具体的時間に関わらない語りとなっている。また、それらの用例は作中人物の島村が説明するのは設定上難しいものに限られている。物語世界の場面の具体的時間に関わる語りは、タ形のデアッタ文によって、作中人物の知覚を利用して語っていることが、ほとんどであった。

これらのことから、『雪国』の語り手は物語世界の現場にいない存在として語っているといえる。また、『雪国』では、タ形のデアッタ文の方が圧倒的に多い。作中人物の知覚にもとづく語りが多く、作中人物の判断を利用して語っているという傾向があるといえる。さらに、タ形が多いということから、表現者の判断が受け手に対して強く働きかけられることなく、物語世界の事態そのものの内容が語られるようになっている。これらのことから、『雪国』は、主人公島村の意識に焦点をあてて語られ、島村の知覚や思考を通して物語世界のことが語られていく傾向があると考えられる。

これに対して、『潮騒』のデアル文・デアッタ文は、表4からもわかるように、『雪国』ほどは多くなく、また非タ形の方が多い。非タ形のデアル文は受け手に対する働きかけが強く、さらに、『潮騒』のデアル文は、語り手の判断であることが多いので、語り手の聞き手に対する働きかけが強いといえる。また、『潮騒』の非タ形のデアル文は、【46】のように、語り手が現場にいるかのように物語世界の知覚可能な事態を具体的に語る場合も含まれている。これらのことから、物語世界のことを主人公新治の知覚や思考を通さずに語り手が解説するような語りが多いと考えられる。

2.3.6 小説テキストにおけるデアル・デアッタ文末のまとめ

それぞれのテキストにおいて、語り手がどのような役割を果たしているかを調査するとき、デアル文に注目することは有効だと考えられる。これらの文によって語り手の断定判断がなされるところから、語り手がどの程度自分の判断を主張しているかということがわかるからである。

各テキストについて次のようなことが認められた。

『潮騒』『虞美人草』『羅生門』のテキストは、語り手が物語世界に存在しているかのように物語世界の現場で知覚して語る場合がある。これらの中から『虞美人草』を分析したところ、デアル文末が多く使用され、『虞美人草』の語り手が自分の判断を想定される聞き手に強く語る傾向のあることが認められた。また、デアッタ文末が少ないことから、対象化して状況を語ることが少なく、語り手の判断として解説することが多いと考えられた。また、『潮騒』でも非タ形のデアル文末が多く、またそのデアル文は語り手の判断のことが多く、語り手が想定される聞き手に働きかける文が多いといえた。これに対して、語り手が物語世界に存在しない設定のテキストの『雪国』を検討したところ、タ形のデアッタ文の方が圧倒的に多く、また作中人物の知覚にもとづく語りが多かった。これらのことから、『雪国』は、主人公島村の知覚や思考を通して、聞き手に対して強く働きかけることなく語っていく傾向があると考えられた。

2.4 動詞文・テイル文・デアル文からみた『三四郎』と『道草』の特徴

上記の文末表現の使用頻度と使用のされ方によってテキストの表現特徴が見られる。

『三四郎』は、テイル形とテイタ形がおよそ7:3の割合、デアル形とデアッタ形がおよそ7:3の割合、動作性動詞の非タ形とタ形がおよそ3:7の割合で出現する。また、作中人物の知覚ではなく語り手の立場での語りであっても、非タ形が多く使われている。

以上のタ形・非タ形の表現効果と出現状況から、『三四郎』は、読者が物語世界の現場に臨場感をもって接する部分を多く持ったテキストだと考えられるが、ほとんどの文末がタ形である『道草』は、冷静で客観的に語っている印象を強く与えるテキストだと考えられる。また、『三四郎』の動作性動詞はタ形の方が多く、事態の継起はタ形の文で素早く展開していくこと多いことがわかるが、非タ形が混じることによって展開の速さが眼前描写によって抑えられていると考えられる。

2.5 推量系文末のタ形と非タ形の使用による文章特性

小説テキストの地の文には、推量の文末形式をとる文は少ない。しかし、その少ない例の中でも、これまで検討してきたタ形と非タ形の違いが観察できる。本節では、いくつかの推量系の文末の文を取り上げ、その表現上の特徴を観察する。

2.5.1 本節で扱う推量系文末の範囲

地の文のなかには、「ようだ【推量】」「だろう」「らしい」「う」「まい」「にちがいない」「かもしれない」といった推量判断系の文末の文がある。しかし、テキストによってその文の現われ方が異なる。そこで、これらの文がそれぞれの文章中でどのように現れるかを観察し、その結果から考えられるこれらの文の機能について考察する。

本節で扱う推量判断系文末は、「ようだ【推量】」「ようである【推量】」「ようであった【推量】」「だろう」「であろう」といった「である」系文末と、「う【推量】」「まい【推量】」「らしい【推量】」「らしかった【推量】」である。「にちがいない」「かもしれない」等の複合辞の文末は、今回は扱わなかった。

取り上げたテキストは、これまでと同様で夏目漱石『三四郎』『道草』である。用例収集のための調査範囲は、『三四郎』と『道草』の地の文全体（『三四郎』4692文、『道草』3337文）である。

2.5.2 推量判断の文末のタ形

「ようだ【推量】」「だろう」「らしい」「にちがいない」「かもしれない」といった推量判断の文末形式をもつ文におけるタ形は、これまで述べたタ形と非タ形の相違と同様に考えることができる。しかし、前接する語が名詞か活用語かの違いがある。次の用例の下線部は非タ形である「知らない」に「らしかった」が接続している。

【51】 其時突然奥の間で細君の唸るやうな声がした。健三の神経は此声に対して普通の人以上の敏感を有つてゐた。彼はすぐ耳を聳てた。

「誰か病気ですか」と島田が訊いた。

「えゝ妻が少し」

「左右ですか、それは不可せんね。何処が悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかつた。何時何処から嫁に來た女かさへ知らないらしかつた。従つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に対する同情を求めやうとは思つてゐなかつた。

（『道草』四十九：148）

【51】は、物語世界の今と考えられる部分の描写であるが、下線部を含む文は語り手が物語世界内のその現場で今知覚しているかのような語りとは感じられない。これは、「タ」がつくことによって「らしい」という判断が対象化されているためだと考えられる。表現者が現場にいるかのような立場で語るのであれば、通常、判断を対象化する表現はなされない。

下線部のような「らしかった」文末をもつ文は、日常の「報告」のテキストであれば、通常過去の事態を語る表現となる。もしこの文が日常の「報告」のテキストであれば、「何

時何処から嫁に來た女かさへ知らないらしい」という当時の島田の状態を回想して語っていると考えることができる。また、タの位置を変え「…知らなかつたらしい」とすると、「知らなかつた」というそれまでの状態を、語っている現在に推量しているということになる。

しかし、「語り」のテキストにおける「らしかった」文末の文は、この例文のように回想でない表現であっても使用される。このとき、表現者は事態全体をまとめてとらえて対象化して語るので、表現者が現場で知覚しているかのように語る必要はなくなる。「…知らないらしい」「…知らなかつたらしい」というその場での判断を表現するのではなく、「…らしい」という状態を対象化してまとめて語る表現となる。この「らしい」と「らしかった」の関係は、「テイルーテイタ」、「デアルーデアッタ」の関係と等しい。

この用例の場合は、作中人物の「…らしい」という知覚・認識を情報源として、語り手が想定される聞き手に対して「…らしかった」と語っている。

次の用例でも同様のことが言える。

- 【52】この女の小説の話は、日常使はれる文学といふ言葉とは縁がないもののやうに聞えた。婦人雑誌を交換して読むくらゐしか、この村の人との間にさういふ友情はなく、後は全く孤立して読んでゐるらしかった。選択もなく、さほどの理解もなく、宿屋の客間などでも小説本や雑誌を見つける限り、借りて読むといふ風であるらしかったが、彼女が思ひ出すままに挙げる新しい作家の名前など、島村の知らないのが少くなかつた。

（『雪国』：37）

上の【52】の下線部は、タ形になることで「～らしい」という内容をひとまとまりのものとして対象化するという働きがなされていることがわかる。また、この下線部の「～らしかった」の文では、「～らしい」という判断部分は作中人物の判断であるが、「～らしかった」というタ形であるために、語り手が外から対象化した文だと認定される。

2.5.3 推量系文末のテキストでの使われ方

2.5.3.1 文章中での機能の分類

地の文一文一文の文章中で担っている機能を検討してみたい。今までの用例調査などから、あらかじめ大枠の分類をした。物語世界の事態の時間的進行に関わるものを「事象の語り」とする。「事象の語り」は、いわゆるストーリー展開に関するものである。時間的進行に関わらないもののうち、物語世界の状態を表すものを「状態描写」と呼び、状態を表すのではなく物語世界の解説として機能しているものを「説明」と呼ぶこととする。

2.5.3.2 「だろう」「であろう」文末（総称して「だろう」文末）の文

「だろう」「であろう」文末の中で、作中人物の疑問を直接表したものが『三四郎』に2例、『道草』に3例ある。また、語り手の疑問を表したものが『道草』に1例ある¹⁴⁾。疑問以外で引用に近いものが『三四郎』に3例ある。「だろう」文末の文29例（『三四郎』25例、『道草』4例）のうち、この9例を除いた20例が推量の用例であった。『道草』の「だろう」

文末の文はすべて疑問の用法である。

次の【53】の下線部の例は、具体的な物語場面において作中人物が知覚・認識した状態をもとにして推量している場合であった。

【53】 髭を濃く生してゐる。面長の瘠ぎすの、どことなく神主じみた男であつた。たゞ鼻筋が真直に通つてゐる所丈が西洋らしい。学校教育を受けつゝある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞ふ。男は白地の紺の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いてゐた。此服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控へてゐる自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。男はもう四十だらう。是より先もう発展しさうにもない。

（『三四郎』一の五：284-285）

【53】の下線部は物語世界のその現場で男を知覚して、その男の性質・属性を推量している。文章中では、男についての「説明」として機能している。現場での臨場感のある描写である。

【53】の例を除いた19例の内訳は、「からだろう、ためだろう」文末の文が4例、「のであろう」文末の文が10例、「ものであろう」文末の文が1例、仮定の文¹⁵⁾が3例、表現者が物語世界の出来事に対する主観的見解を明らかにした文が1例（下の【54】の用例）である。

次の【54】下線部の用例は、その場で見て推測し説明しているような語りで、現場での臨場感のある用例である。

【54】 振り返つた女の眼に应じて、四角のなかに、現はれたものもなければ、これを待ち受けてゐたものもない。三四郎は其間に女の姿勢と服装を頭のなかへ入れた。

着物の色は何と云ふ名か分らない。大学の池の水へ、曇つた常磐木の影が映る時の様である。それを鮮やかな縞が、上から下へ貫ぬいてゐる。さうして其縞が貫ぬきながら波を打つて、互に寄つたり離れたり、重なつて太くなつたり、割れて二筋になつたりする。不規則けれども乱れない上から三分一の所を、広い帯で横に仕切つた。帯の感じには暖味がある。黄を含んでゐるためであらう。

（『三四郎』三の十三：340-341）

下線部は「ためであらう」という形式であることから、前文についての理由を説明しているといえる。

【53】【54】の用例は、作中人物が推量していたが、次の【55】の下線部は語り手の推量である。

【55】 「昨夜、そこに轢死があつたさうですね」と云ふ。停車場か何かで聞いたものらしい。三四郎は自分の経験を残らず話した。

「それは珍らしい。滅多に逢へない事だ。僕も家に居れば好かつた。死骸はもう片付けたらうな。行つても見られないだらうな」

「もう駄目でせう」と一口答へたが、野々宮君の呑気なのには驚ろいた。三四郎は

此無神経を全く夜と昼の差別から起るものと断定した。光線の圧力を試験する人の性癖が、かう云ふ場合にも、同じ態度であらはれてくるのだとは丸で気が付かなかつた。年が若いからだらう。

(『三四郎』三の十一：334-335)

【55】は三四郎が「丸で気が付かなかつた」ことについて語っている部分であるが、文脈からみて推量している主体は語り手としか考えられない。語り手が、三四郎の「丸で気が付かなかつた」理由を推量して説明している。この場合、理由の「説明」であるので特に現場で状態を知覚していなくても語れるため、語り手が現場にいるかのような語りであるかどうかは問題にならない。しかし、語り手が自分の主観的判断を語っており、語り手の存在が前面に出ている。ここでは、物語世界のことは何でも知っているという語り手の立場が与えられておらず、語り手は自分の判断をしている。

以上のように、「だらう」文末の文は、ほとんどの場合は作中人物の知覚・認識による推量であった。作中人物の推量の場合は現場で知覚・認識しながら説明する場合が多いが、語り手はそのような制約はない。いずれにしても、「だらう」にタ形がないため、表現者の判断が対象化されずにそのまま表現されるので、表現者の存在が意識されやすい。

2.5.3.3 「う」文末の文、「まい」文末の文

「まい」文末の文は『三四郎』だけに2例あり、いずれも引用に近い文であった。

「う」文末の文は『三四郎』に6例、『道草』に4例ある。この中で、『三四郎』には引用に近い文が2例、『道草』には、疑問が1例あり、これら3例は検討対象としない。

『三四郎』の他の4例は、【56】の下線部のように、語り手もしくは作中人物が物語世界の出来事に対する主観的見解を明らかにしたものであった。『道草』の3例は仮定して推測する文であった。

【56】野々宮君の話によると此所は昔はかう奇麗ではなかつた。野々宮君の先生の何とか云ふ人が、学生の時分馬に乗つて、此所を乗り廻すうちに、馬が云ふ事を聞かないで、意地を悪くわざと木の下を通るので、帽子が松の枝に引つかゝる。下駄の歯が鐙に挟まる。先生は大変困つてゐると、正門前の喜多床と云ふ髪結床の職人が大勢出て来て、面白がつて笑つてゐたさうである。其時分には有志のものが醵金して構内に厩をこしらへて、三頭の馬と、馬の先生とを飼つて置いた。所が先生が大変な酒呑で、とうとう三頭のうちの一番好い白い馬を売つて飲んで仕舞つた。それはナポレオン三世時代の老馬であつたさうだ。まさかナポレオン三世時代でも無からう。然し呑気な時代もあつたものだと考へてゐると、さつきポンチ画をかいた男が来て、

「大学の講義は詰らんなあ」と云つた。

(『三四郎』三の二：312-313)

【56】の下線部の「う」も、「だらう」と同様に判断を表出する文であり、文章中では馬の「説明」として機能している。ここでの用例は三四郎の内省で内的独白に近い。語られている内容は、三四郎が現場で知覚していることではない。そのため、文章中では、事態の状態を描写するのではなく、事態や事物の原因・理由・属性などの「説明」として機能

することが多い。

また、「だろう」「う」「まい」はタが後接することはない。つまり、判断が対象化されることがなく、表現者の判断を表出する表現となる。そのため、作中人物の知覚を利用した語り手の語り（1章のB-1）にはならない。言語が使われるそのときのその場での判断の表出にしか使えない表現である。それに対して、このあと述べる「ようだ」「らしい」は、そのように判断したということを対象化して語ることができる。

2.5.3.4 「ようだ」「ようである」「ようでもある」「ようであった」文末（総称して「ようだ」文末）の文

「ようだ」「ようだった」文末の文は、『三四郎』15例、『道草』1例である。『道草』の1例は「ようであった」というタ形だが、『三四郎』では14例が非タ形で、1例がタ形である。

調査範囲での「ようだ」文末の文は、すべて現場の「状態描写」であった。『三四郎』の非タ形の用例は、次の【57】の下線部のように、現場で推量判断しているような語りである。

- 【57】 与次郎が勧めるので、三四郎はとうとう精養軒の会へ出た。其時三四郎は黒い紬の羽織を着た。此羽織は、三輪田の御光さんの御母さんが織つて呉れたのを、紋付に染めて、御光さんが縫ひ上げたものだ、と、母の手紙に長い説明がある。小包が届いた時、一応着て見て、面白くないから、戸棚へ入れて置いた。それを与次郎が、勿体ないから是非着ろ着ろと云ふ。三四郎が着なければ、自分が持つて行つて着さうな勢ひであつたから、つい着る気になつた。着て見ると悪くはない様だ。

（『三四郎』九の一：506-507）

【57】の「ようだ」文末の文は、上で述べたように現場で状態を知覚してその内容を推量して語っている。つまり、現場に密着した表現である。

タ形の「ようだった」文末の文は、【58】の『三四郎』の1例と【59】の『道草』の1例である。

- 【58】 其時野々宮君は三四郎に、「覗いて御覧なさい」と勧めた。三四郎は面白半分、石の台の二三間手前にある望遠鏡の傍へ行つて、右の眼をあてがつたが、何も見えない。野々宮君は「どうです、見えますか」と聞く。「一向見えません」と答へると、「うんまだ蓋が取らずにあつた」と云ひながら、椅子を立つて望遠鏡の先に被せてあるものを除けて呉れた。

見ると、ただ輪廓のぼんやりした明るいなかに、物差の度盛がある。下に2の字が出た。野々宮君がまた「どうです」と聞いた。「2の字が見えます」と云ふと、「今に動きます」と云ひながら向へ廻つて何かしてゐる様であつた。

やがて度盛が明るい中で動き出した。2が消えた。あとから3が出る。其あとから4が出る。5が出る。とうとう10迄出た。

（『三四郎』二の三：298）

- 【59】 細君は父がある大きな都会の市長の候補者になつた話をして聞かせた。其運動費

は財力のある彼の旧友の一人が負担して呉れてゐるやうであつた。然し市の有志家が何名か打ち揃つて上京した時に、有名な政治家のある伯爵に会つて、父の適不適を問ひ訊したら、其伯爵が何うも不向だらうと答へたので、話はそれぎりでは済んだのださうである。

（『道草』七十五：230）

【58】の下線部は、作中人物の三四郎の知覚を通した、物語世界の現在の語りであるが、現在事態が進行しているところで語っているようには感じられない。仮に「ようである」ならば、現場で知覚して語っている印象になるが、「ようであつた」文末の場合は必ずしも現場で知覚して語っている印象にはならない。「何かしてゐる様」という状態を対象化し、時間を捨象してまとめてとらえている。そのため、三四郎の知覚そのものの語り（1章のB-2）の可能性もあるが、三四郎の知覚を利用した語り手の語り（1章のB-1）と解釈できる。

【59】の下線部は、物語世界の今からみると過去にあたるものであり、対読者意識は強く感じられない。これは、過去の状態描写で結果的に説明となる。この場合も推量判断をそのまま表出していないので表現者や判断者の存在は強く感じられない。過去に推量したことを用いて過去の状態を語っていると考えられる。また、この文は過去に推量したことを語っているので、当然語る現場と推量内容が離れている。仮に「呉れていたやうである」に直すと過去のことを今推量していることになり、表現者と判断者の存在が強く感じられるようになる。

これらのことから、「ようだ」「ようだった」文末の文は、過去の状態を含めて過去や現在のその時の状態を推量することが多いと考えられる。また、タ形と非タ形の違いは、「テイルーテイタ」、「デアルーデアッタ」の違いと等しいといえる。

「だろう」「う」が、文章中では事態や事物の「説明」として機能することが多かったのに対して、「ようだ」文末の文は物語世界の現場の「状態描写」として機能していることが多い。「だろう」「う」は、現場で知覚したものを元にして事態や事物に対して内省し、その結果、文章中では原因・理由・属性などの説明として機能していることが多かった。これに対して、「ようだ」は、物語世界の状態の中ではっきりと断言できないものについて、推量の形式で表現していることが多い。これらのことから、「だろう」「う」の方が、「ようだ」よりは内省的な傾向があると言える。

2.5.3.5 「らしい」「らしかった」文末（総称して「らしい」文末）の文

「らしい」「らしかった」文末の文は、『三四郎』28例、『道草』17例で、合計45例である。『三四郎』の用例はすべて非タ形で、『道草』の用例はすべてタ形である。『三四郎』には3例の引用に近い文があり、これらは検討対象としなかった。そのため、『三四郎』25例、『道草』17例で、合計42例を対象とした。

『三四郎』の用例は、文章中での機能が「事象」・「状態描写」・「説明」の場合があった。現場で語っているような語りの用例が多いが、そうでない用例も1例観察された。【60】の下線部がそれである。

【60】 三四郎は急いで追い付いた。すぐ受取ったものを渡さうとして、隠袋へ手を入れると、美禰子が、

「丹青会の展覧会を御覧になつて」と聞いた。

「まだ覧ません」

「招待券を二枚貰つたんですけれども、つい閑がなかつたものだから、まだ行かずにゐたんですが、行つて見ませうか」

「行つても可いです」

「行きませう。もう、ぢき閉会になりますから。私、一遍は見て置かないと原口さんに済まないのです」

「原口さんが招待券を呉れたんですか」

「えゝ。あなた原口さんを御存じなの？」

「広田先生の所で一度会ひました」

「面白い方でせう。馬鹿囃を稽古なさるんですつて」

「此間は鼓を稽ひたいと云てみました。夫から——」

「夫から？」

「夫から、あなたの肖像を描くとか云つてみました。本当ですか」

「えゝ、高等モデルなの」と云つた。男は是より以上に気の利いた事が云へない性質である。それで黙つて仕舞つた。女は何とか云つて貰ひたかつたらしい。

(『三四郎』 八の七：495-497)

【60】の下線部を含む文は、文脈から、三四郎の知覚とは関係ない語り手の語りで当時の作中人物の心理の状態を表していると考えられる。また、語り手による「…たらしい」という形であるため、語り手が現場で知覚・認識しているような語りとは必ずしも言えない。しかし、「貰ひたかつたらしい」は、「貰ひたいらしかつた」という形と比べてみると明らかに違いがある。前者は、「らしい」にタが後接していないので、「らしい」という推定を語り手が主観的にしているということがはっきりしている。後者は「らしい」という推定にタが後接しているため、推定という行為自体が対象化され、語り手の主観的推定とは考えられなくなる。

他の用例は現場での作中人物の知覚・認識だと考えられる用例で、次の【61】【62】【63】の下線部のようなものである。

【61】 女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもう仕舞掛である。

下を向いて一生懸命に箸を突込んで二口三口頬張つたが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思つて、ひよいと眼を挙げて見ると矢張り正面に立つてゐた。然し三四郎が眼を挙げると同時に女は動き出した。只三四郎の横を通つて、自分の座へ帰るべき所を、すぐと前へ来て、身体を横へ向けて、窓から首を出して、静かに外を眺め出した。

(『三四郎』 一の二：276)

【61】の下線部を含む文は、物語世界の今の現場で知覚しながら作中人物が推量している。現場で認識していることが感じられる「状態描写」の語りである。このような文は 15

例ある。

【62】 大久保の停車場を下りて、仲百人の通りを戸山学校の方へ行かずに、踏切りからすぐ横へ折れると、ほとんど三尺許りの細い路になる。それを爪先上りにだらだらと上ると、疎な孟宗藪がある。其藪の手前と先に一軒づゝ人が住んでゐる。野々宮の家は其手前の分であつた。小さな門が路の向に丸で関係のない様な位置に筋違に立つてゐた。這入ると、家が又見当違の所にあつた。門も入口も全く後から付けたものらしい。

台所の傍に立派な生垣があつて、庭の方には却つて仕切りも何にもない。只大きな萩が人の脊より高く延びて、座敷の縁側を少し隠してゐる許である。野々宮君は此縁側に椅子を持ち出して、それへ腰を掛けて西洋の雑誌を読んでいた。

（『三四郎』 三の七：324）

【62】の下線部を含む文の例のように「らしい」の前が抽象的な名詞の場合がある。「ものらしい」のほかには「目的らしい」「続きらしい」がある。なお、本研究では【62】の下線部の前の「もの」を物体と解釈していない。このような「ものらしい」文末の文は【62】の例も含めて3例ある。いずれも現場にいる作中人物の推量といえる。

【63】それで論文の事はそれぎり考へなくなつた。美禰子に返事を遣らうと思ふ。不幸にして絵がかけない。文章にしようと思ふ。文章なら此絵葉書に匹敵する文句でなくては不可ない。それは容易に思ひ付けない。愚図々々してゐるうちに四時過になつた。

袴を着けて、与次郎を誘ひに、西片町へ行く。勝手口から這入ると、茶の間に、広田先生が小さな食卓を控へて、晩食を食つてゐた。傍に与次郎が畏まつて御給仕をしてゐる。

「先生何うですか」と聞いてゐる。

先生は何か硬いものを頬張つたらしい。食卓の上を見ると、袂時計程な大きさの、赤くつて黒くつて、焦げたものが十ばかり皿の中に並んでゐる。

（『三四郎』 六の四：429）

【63】の下線部は、物語世界の事態が時間にしたがって推移している具体的「事象の語り」である。このような、三四郎の知覚による事象についての推量の用例は、4例ある。

このように、非タ形である『三四郎』での用例は、三四郎が現場で事態を認識しながら推量している用例がほとんどであつた。

『道草』の用例は、すべてタ形で、現場で推量しているように感じられる用例は観察できなかった。

【64】 健三は苦笑しながら烟草を吹かした。

「さう云へば貴夫、あの人に遣る御金を比田さんから借りなくつて」

細君は藪から棒に斯んな事を云つた。

「比田にそれ丈の余裕があるのかい」

「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方を已められたんですつて」

健三は此新らしい報知を当然とも思つた。又異様にも感じた。

「もう老朽だらうからね。然し已められゝば、猶困るだらうぢやないか」

「追つては何うなるか知れないでせうけれども、差当り困るやうな事はないんですつて」

彼の辞職は自分を引き立てゝ呉れた重役の一人が、社と関係を絶つた事に起因してゐるらしかつた。けれども永年勤続して来た結果、権利として彼の手に入るべき金は、一時彼の経済状態を潤ほすには充分であつた。

（『道草』九十九：305-306）

【64】の下線部を含む文は、「彼の辞職」について述べており、そのことについての推量である。この文は作中人物の知覚を利用した語りであるが、タ形であるため推量がそのまま表出されていない。推量の判断が対象化されて語られている。また、「起因してゐる」ということは、物語世界で起きた具体的な出来事そのものを語っているのではなく、出来事についての「説明」の語りとなっている。このように事態を説明するような「らしかつた」文末の文は【64】の例を含めて2例あつた。

【65】 「彼奴は譬だよ。御母さんにも御前にも譬だよ。骨を粉にしても仇討をしなくつちや」

御常は歯をぎりぎり噛んだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなつた。

彼は始終自分の傍にゐて、朝から晩迄彼を味方にしたがる御常よりも、寧ろ島田の方を好いた。其島田は以前と違つて、大抵は宅にゐない事が多かつた。彼の帰る時刻は何時も夜更らしかつた。従つて日中は滅多に顔を合せる機会がなかつた。

（『道草』四十三：129）

【65】の下線部を含む文は、この部分だけではわかりづらいが、文脈上過去についての語りである。この文は過去の状態を描写していて、物語世界の今の現場で知覚しながらの語りではない。このような過去についての「らしかつた」文末の文は3例ある。

【66】 其時突然奥の間で細君の唸るやうな声がした。健三の神経は此声に対して普通の人以上の敏感を有つてゐた。彼はすぐ耳を聳てた。

「誰か病気ですか」と島田が訊いた。

「えゝ妻が少し」

「左右ですか、それは不可せんね。何処が悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかつた。何時何処から嫁に来た女かさへ知らないらしかつた。従つて彼の言葉にはたゞ挨拶がある丈であつた。健三も此人から自分の妻に対する同情を求めやうとは思つてゐなかつた。

（『道草』四十九：148）

【66】の下線部を含む文は、物語世界の今の描写であるが、表現者である語り手が、物語世界内のその現場で今知覚しているような語りではない。作中人物の物語世界の現場での知覚を利用して語り手が対象化して語る語りである。このような「らしかつた」文末の文の例は12例である。

これまでの用例では、「らしかった」というタ形になると現場での判断だとは感じられなくなっている。「らしかった」文末の文は現場で知覚・認識しながらの描写や解説にはならない。これは、「タ」がつくことによって「らしい」という判断が対象化されるので、現場での知覚しながらの語りには用いられにくいためだと考えられる。

「らしい」「らしかった」文末の文は、「ようだ」「ようだった」文末の文のような、「状態描写」の語りだけではなかった。この点で、知覚・認識した状態を推量する場合だけでなく、内省して推量する場合が加わることもあったと考えられる。

2.5.4 各推量系文末の文章中における機能の特色

『三四郎』と『道草』の推量系文末の文の文章中での機能について次のようにまとめられる。

【表5】

	文章中での主な機能	語る現場との関係	推量の主体
だろう	説明	両方	一部語り手
う	説明	(用例が少なく不明)	作中人物
ようだ	状態描写	強いことが多い	作中人物
ようだった	状態描写	薄い	作中人物
らしい	説明・状態・事象	強いことが多い	一部語り手
らしかった	説明・状態	薄い	作中人物

現場での知覚と、表現者の存在感について、次のように考えられる。

非タ形の文末の文は、推量判断の表出であるため、判断者の存在が強く感じられる。特に作中人物の判断の場合は、物語世界の現場で事態を知覚しながら推量する形式となっている。タ形文末の文の場合は、表現者が判断を表出することにはならず、表現者の存在感は強くない。「タ」によって推量判断が対象化されるからだと考えられる。

推量系文末は、ほとんどが作中人物の認識・判断を使つての語りとなる。それらの語りは事態や事物の「説明」と「状態描写」のときに用いられることが多い。つまり、作中人物の立場での認識・判断を用いて、物語世界の状態や解説を語っているといえる。

主に「だろう」は事態や事物の「説明」、「ようだ」は「状態描写」、「らしい」は「状態描写」と事態や事物の「説明」と機能している。

「だろう」「う」は、タ形にはならない形式であり、表現者の認識・判断を表出する。「だろう」は、「説明」として機能することが多く思考過程（内省）で使用される。物語世界の現場の出来事を元に思考して、その思考内容を推量の形式で語る。物語世界の状態や様子などを推量するのではなく、事態や事物の背後にある事情を推量する。「だろう」はタ形にならないが、そのため、「だろう」で事態や事物の背後を説明するときには、その推量判断は対象化されることはなく、表現者の判断の表出となる。調査範囲では、「だろう」による背後の説明は、表現者の主観的判断で示されることが多かった。

「ようだ」と「らしい」は、タ形の「ようだった」「らしかった」という形式をとること

もある。その場合には表現者の認識・判断を表出することにはならない。タ形となり事態を対象化して語ることができることから、「ようだ(ようだった)」「らしい(らしかった)」が、事態を外から語る「状態描写」として機能することが多い傾向が理解できる。特に「ようだ」は「状態描写」の例が多い。「らしい」は「ようだ」よりは「状態描写」の割合が少なく、内省的な思考の傾向がある。

用例の数を『三四郎』と『道草』で比較すると、次の表4のようになる。『道草』ではタ形の「らしかった」が多く、他の推量系文末の文が少ない。このことから、『道草』には作中人物が認識したことや判断したことをそのまま表出することが少ないと考えられる。「らしかった」文末の文は作中人物の知覚・判断を利用した語りであったが、作中人物の判断そのままの表出ではなく、対象化され語り手の語りとして語られている。この用例は語り手の「説明」である。これに対して、『三四郎』は作中人物の推量判断がそのまま表出されることが多いと考えられる。「だろう」「らしい」がやや多いことから、作中人物の思考過程が語られる傾向があるとも考えられる。

【表6】

	『三四郎』	『道草』
だろう	20	0
う	4	3
ようだ	14	0
ようだった	1	1
らしい	25	0
らしかった	0	17
	89	23

3 小説テキストにおいて、タ形文末と非タ形文末がどのように語りを構成しているか

前節までで、語りにおけるタ形文末と非タ形文末の特徴を検討したうえで、各文末形式の表現上の特性と効果について論じた。ここでは、実際のテキストにおいてどのように非タ形文末とタ形文末が使われ、どのように語りを構成しているのかを検討する。また、その結果として、語りの言語が日常の言語とどのように異なっているのかを明らかにする。

3.1 『三四郎』におけるタ形と非タ形

『三四郎』の四章を例にとり、その中で「作中人物の知覚が利用されている語り」の比較的多い部分と、「語り手の立場の語り」が比較的多い部分を選び、それぞれの非タ形・タ形の使用のされ方を検討する。

3.1.1 『三四郎』において、「作中人物の知覚が利用されている語り」の比較的多い部分

次の【67】【68】は、「作中人物の知覚が利用されている語り」の比較的多い部分である。

【67】 四の二

1 ある日の午後三四郎は例の如くぶら付いて、団子坂の上から、左へ折れて千駄木林町の広い通へ出た。2 秋晴と云つて、此頃は東京の空も田舎の様に深く見える。3 かう云ふ空の下に生きてゐると思ふ丈でも頭は明確する。4 其上野へ出れば申し分はない。5 気が暢び暢びして魂が大空程の大きくなる。6 それで居て身体惣体が緊つて来る。7 だらしのない春の長閑さとは違う。8 三四郎は左右の生垣を眺めながら、生れて始めての東京の秋を嗅ぎつつ遣つて来た。

9 坂下では菊人形が二三日前開業したばかりである。10 坂を曲がる時は幟さへ見えた。11 今はただ声丈聞える。12 どんちやんどんちやん遠くから囃してゐる。13 其囃の音が、下の方から次第に浮き上がつて来て、澄み切つた秋の空気のなかへ広がり尽すと、遂には極めて稀薄な波になる。14 其又余波が三四郎の鼓膜の傍迄来て自然に留る。15 騒がしいといふよりは却つて好い心持である。

（『三四郎』四の二：347）

1 はAの語りである。2～7 は三四郎の内心を言語化したものでB-2 と考えられる。8 は再びAとなっている。1「…広い通へ出た」と 8「…遣つて来た」で事態の動きを表し、その間の2～7 は事態の動きはない。2～7 のB-2 は、三四郎の語りを引用して挿入するような形式となっている。

次の段落の9～12 もB-2 と解釈できる。9「坂下では菊人形が二三日前開業したばかりである」や11「今はただ声丈聞える」は三四郎の内心・知覚の言語化と考えるからである。13～14 は、三四郎がその内容を知覚しているかどうかでB-1 かAかの解釈が分かれる。15 は、直前の13～14 の内容を受けての記述である。13～14 をAと解釈すれば15 もAとなり、13～14 をB-1 とすれば15 はB-2 と考えることができる。

13～15 をAと考える場合は、15 の主語は「三四郎は」となる。9～12 を三四郎の立場で記述したあと、13 から語り手がその場を説明することになっている。

13～14 をB-1 とし、15 をB-2 と考える場合は、語り手の語りを基本としながら三四郎が語る形式を引用して語っていると理解できる。

どちらの解釈でも、三四郎の語る形式の文を引用挿入して語っている。このことから、部分的に三四郎の一人称の語りのような印象を与える。

これまでの例を見ると、三四郎が語る形式の文は主に非タ形で語られることが多い。当然、これらは物語世界の現場にいながら語る語りである。A、B-1 の語りは、語り手が語る形式であるが、タ形と非タ形とが用いられていた。1 と8 のタ形は、事態が完了した時点から事態を対象化してまとめて語っている。日常の「報告」の言語（書き言葉、話し言葉）であれば、過去を回想するときには、事態を対象化して語るができない。しかし、三人称の語りのテキストでは、過去を回想していなくても、タ形を使用している。

13 と14 の語りは非タ形で、時間に幅のある状態を、動詞文を用いて説明している。この【67】の例では、語り手が物語世界の事態を外から対象化してまとめて語ることは少ないといえる。作中人物の知覚が対象化されずに語られることが多いからである。

次の【68】は、【67】に続く部分である。

【68】 16 時に突然左りの横町から二人あらはれた。17 その一人が三四郎を見て、「おい」

と云ふ。

18 与次郎の声は今日に限つて、几帳面である。19 其代り連がある。20 三四郎は其連を見たとき、果して日頃の推察通り、青木堂で茶を飲んでゐた人が、広田さんであると云ふ事を悟つた。21 此人とは水蜜桃以来妙な関係がある。22 ことに青木堂で茶を飲んで烟草を吞んで、自分を図書館に走らしてよりこのかた、一層よく記憶に染みてゐる。23 いつ見ても神主の様な顔に西洋人の鼻を付けてゐる。24 今日も此間の夏服で、別段寒さうな様子もない。

25 三四郎は何とか云つて、挨拶をしようと思つたが、あまり時間が経つてゐるので、どう口を利いていいか分らない。26 ただ帽子を取つて礼をした。27 与次郎に対しては、あまり丁寧過ぎる。28 広田に対しては、少し簡略すぎる。29 三四郎は何方付かずの中間に出た。30 すると与次郎が、すぐ、「此男は私の同級生です。熊本の高等学校から始めて東京へ出て来た——」と聴かれもしない先から田舎ものを吹聴して置いて、それから三四郎の方を向いて、「是が広田先生。高等学校の……」と訳もなく双方を紹介して仕舞つた。

(『三四郎』四の二：347-348)

16 は、「時に」とあることから語り手の語る形式であると考えられ、B-1 とする。続く 17 も、三四郎の知覚内容を語り手が語つたものと思われるので B-1 とする。次の段落の 18 と 19 は B-2、20 は A と考えられる。続く 21～24 は B-2 と考えられる。次の段落の 25～29 は A とし、続く 30 は、三四郎の知覚を語り手が語る形式と考え B-1 とする。30 の「聴かれもしない先から田舎ものを吹聴して置いて」「訳もなく」という評価は三四郎がしたものと解釈した。この評価を語り手がしたものと考えると、30 は A となる。

三四郎の知覚を表出している B-2 と考えられる文はすべて非タ形である。語り手の語る形式である B-1 と A と考えられる文で非タ形なのは、17、25、27、28 である。17 は現場で知覚しているような語り、25、27、28 は、三四郎の状態に関する説明といえる。その他の B-1 と A と考えられる文は、タ形となっている。

ここで引用した範囲において、非タ形の文は、眼前描写の語りか説明となっている。

3.1.2 『三四郎』において「語り手の立場の語り」が比較的多い部分

次の【69】は、「語り手の立場の語り」が比較的多い部分である。【67】【68】は四の二からの引用であつたが、【69】はその前の四の一からの引用である。

【69】 1 かう云ふ問答を二三度繰返してゐるうちに、いつの間にか半月許り経過た。2 三四郎の耳は漸々借りものでない様になつて来た。3 すると今度は与次郎の方から、三四郎に向つて、「どうも妙な顔だな。如何にも生活に疲れてゐる様な顔だ。世紀末の顔だ」と批評し出した。4 三四郎は、此批評に対しても依然として、「さう云ふ訳でもないが……」を繰返してゐた。5 三四郎は世紀末杯と云ふ言葉を聞いて嬉しがる程に、まだ人工的の空気に触れてゐなかつた。6 またこれを興味ある玩具として使用し得る程に、ある社会の消息に通じてゐなかつた。7 ただ生活に疲れてゐるといふ句が少し気に入つた。8 成程疲れ出した様でもある。9 三四郎は下痢の為め許りとは思はなかつた。10 け

れども大いに疲れた顔を標榜するほど、人生観のハイカラでもなかつた。11 それで此会話はそれぎり発展しずに済んだ。

(『三四郎』 四の一：345)

【69】は、下線部以外はタ形文末の文となっている。下線部の8だけが、B-2と考えられ、その他はAと考えられる(3はB-1とも考えられる)。このように、この部分は語り手の立場からの語りとなっていて、主にタ形で語られている。

1の内容から、語り手が、物語世界の現場での出来事を観察しながら語っているのではないことがわかる。写生文のように現場の視点だけで出来事を語っているのではないということである。語り手の時間的・空間的位置は、物語内容の全容を見通せる位置だといえる。

1は、「半月許り経過た」というように、「経過る」という事態が完了した時点から事態を対象化して語っている。2～3も同様に事態が完了した時点でその内容を対象化して語っている。この2～3の事態は時間的に幅のある事態である。このことから語り手が、時間的に幅のある事柄を対象化できる立場であることがわかる。

4～6は、三四郎の内面を語り手が対象化して語ったものである。非タ形のテイルでも継続している状態を外から対象化して語ることになるが、ここではテイタ形であるため、さらに時間を捨象してまとめて、内容を対象化して語ることになる(※テイル・テイタのところで詳述している)。この結果、語り手が物語世界から離れた立場で冷静に語ることになっている。

7、9、10は、同様に三四郎の内面を動詞文・デアル文のタ形で語っている。語り手が物語世界を離れて、時間を捨象して語っているといえる。この部分では、語り手の立場での語りをタ形で語ることにより、時間に幅のある内容をまとめて語っている。日常の「報告」の言語では、過去の回想するのでなければこのような言い方はできない。

このようなことは、内容を対象化し時間を捨象して語るタ形であるから表現することができるのであり、非タ形では内容をまとめて語ることは難しい。

3.1.3 『三四郎』におけるタ形・非タ形の使われ方のまとめ

「作中人物の知覚を利用した語り」が比較的多く語られている部分では、非タ形が多く使用されていた。非タ形が使用されるのは、B-2の語りの場合が多く、そのほかに物語世界の現場での語りや説明の場合であった。B-2の語りは、知覚を表出する表現であるため、「タ」による対象化がなされないことが多く、その場合、非タ形で眼前描写性のある表現になる。つまり、物語世界の具体的な現場で知覚体験しているような表現になるのである。

このため、語り手の語りの中に、作中人物の知覚を表出している表現が混在することになる。語り手の語りの中にB-2の語りが挿入されて、全体の語りが構成されていると考えることができる。日常の「報告」テキストは、表現者の記述だけで構成されており、また眼前描写性のある表現などはないことから、『三四郎』の語りはこの点で日常の「報告」の言語と異なっている。また、B-2は、実際には作中人物が言語化していない表現であり、日常の言語の常識では説明できない。日常の言語は、表現者が受け手に対して伝達するというのが基本的な回路であるが、B-2は作中人物が誰に向けて語っているのかが明らかでなく、フィクションの聞き手に対する言語となっている。

B-2 以外で非タ形が使用されていたのは、語り手が現場で語っているかのような語りと語り手の説明で、用例数は少なかった。語り手が現場で語るかのような例は、日常の報告テキストでは見られないものである。

「作中人物の知覚を利用した語り」が比較的多く語られている部分でのタ形文末の例は多くないが、その用例は語り手が事態を対象化してまとめて語るような例であった。

次に「語り手の立場の語り」が比較的多い部分であるが、この部分はタ形文末が多かった。『三四郎』の地の文には眼前描写性のある表現もあるので、地の文は語り手が回想して語っているものとは言えない。だから、地の文がタ形であっても、過去を回想して語っていると必ずしもいうことはできない。実際にタ形文末の語りを検討していえるのは、タ形は内容を対象化して時間を捨象してまとめて語っているということである。この場合の多くは、物語世界において眼前描写している語りとは違い、物語世界の時間が素早く展開していく。このことから、語り手は、過去を回想しているわけではないが、全体を対象化できる位置にいると考える事ができる。そのように考えれば、ある部分では眼前描写性のある語りを構成し、別の部分では事態をまとめて語ることが理解できる。また、タ形と非タ形が混在していても説明がつく。このようなタ形の使用のされ方は、表現者である語り手についての設定が、日常の「報告」の言語の表現者の立場と異なっていることに原因している。そのことが使われる言語の違いになり、特に文末形式の違いになっているといえる。

3.2 『道草』におけるタ形の使われ方

次に『道草』におけるタ形文末の使われ方を検討する。『道草』はほとんどの文がタ形文末である。

3.2.1 事態をまとめて素早く語る

『道草』は、「作中人物の知覚を利用した語り」が多い部分はなく、語り手の立場の語りばかりである。『道草』については、具体的な発言などが多くない部分と、発言が多い部分の用例で検討してみた。次の【70】は、発言の多くない部分である。

【70】 健三は黙って外へ出て、例の通り仕事をした。然し其仕事の真實際中に彼は突然細君の病気を想像する事があつた。彼の眼の前に、夢を見てゐるやうな細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の立つてゐる高い壇から降りて宅へ帰らなければならぬやうな気がした。或は今にも宅から迎が来るやうな心持になつた。彼は広い室の片隅に居て真ん向うの突当りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向いて兜の鉢金を伏せたやうな高い丸天井を眺めた。仮漆で塗り上げた角材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるやうに工夫した其天井は、小さい彼の心を包むに足りなかつた。最後に彼の眼は自分の下に黒い頭を並べて、神妙に彼の云ふ事を聴いてゐる多くの青年の上に落ちた。さうして復卒然として現実に帰るべく彼等から余儀なくされた。

是程細君の病気に悩まされてゐた健三は、比較的島田のために崇られる恐れを抱かなかつた。彼は此老人を因業で強慾な男と思つてゐた。然し一方では又それ等の性癖を十分發揮する能力が無いものとして寧ろ見縊つてもゐた。たゞ要らぬ会談に惜しい

時間を潰されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の煩ひになった。

「何を云つて来る気かしら、此次は」

襲はれる事を予期して、暗にそれを苦にするやうな健三の口振が、細君の言葉を促した。

「何うせ分つてゐるぢやありませんか。そんな事を気になさるより早く絶交した方が余つ程得ですわ」

健三は心の裡で細君のいふ事を肯がつた。然し口では却つて反対な返事をした。

（『道草』五十二：157-158）

この用例では、各段落とも主人公健三の最近の繰り返される出来事について語られている。それぞれの文の内容は、最近の傾向としてとらえられている。非タ形で記述することもできるが、その場合は、眼前描写ではなく、ト書き風の事実の羅列になる。ある程度時間のかかる事態をまとめて語るためにはタ形になるのが普通である。

一段落は、仕事に出ているときの繰り返される事態で、二～四段落は健三の日常における状況である。それぞれの文は一つのまとまった出来事としてとらえられ、タ形の連続によって出来事が語られている。

このようにタ形を連続させることによって、眼前描写のように現在進行している出来事を語るのではなく、いろいろな時間的内容に次々とまとめて語ることができる。これは、『道草』の特徴の一つである。

このように、『道草』は語られている物語世界の内容が次々に語られていくということがなされやすいテキストだといえる。これは、語り手が全体を見通すような位置から、タ形文末によって事態を対象化してまとめ語っているからである。非タ形文末を使って眼前描写性のある語りを多く語る場合には、このように事態をまとめて次々と語ることができない。

『道草』は、発言が連続するような具体的な物語場面でもタ形文末が使われている。発言が含まれている用例を引用し、その場合の『三四郎』との違いを検討したい。次の用例は、六章の初めの部分である。

【71】 近頃の健三は頭を余計遣ひ過ぎる所為か、どうも胃の具合が好くなかつた。時々思ひ出したやうに運動して見ると、胸も腹も却つて重くなる丈であつた。彼は要心して三度の食事以外には成るべく物を口へ入れないやうに心掛けてゐた。それでも姉の悪強には敵はなかつた。

「海苔巻なら身体に障りやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御呉れな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張つて、好い加減煙草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が余り饒舌るので、彼は何時迄も自分の云ひたい事が云へなかつた。訊きたい問題を持つてゐながら、斯う受身な会話ばかりしてゐるのが、彼には段々むづ痒くなつて来た。然し姉にはそれが一向通じないらしかつた。

他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前

賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣らうかと云ひ出した。

「あんなものゝ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持つて御出でよ。なに比田だつて要りやしないやね、汚ない達磨なんか」

健三は貰ふとも貰はないとも云はずにたゞ苦笑してゐた。

（『道草』六：17-18）

「六」章の初めの部分は、説明が挿入されている。そして、「海苔巻なら身体に障りやしないよ。…」と海苔巻を勧められる発言部分の次の文では、もう健三は海苔巻を食べている。さらに、「姉が余り饒舌るので、彼は何時迄も自分の云ひたい事が云へなかつた」とあるように、姉は多く喋ったはずだがそのことは語られていない。

このように、タ形で語ることによって次から次へと事態の変化を語っている。タ形で語るにより事態を対象化してまとめて語ることで、写生文のような眼前描写性がなくなる。眼前描写性に重きを置かないことにより、事態の展開の速さが自由になる。そのため、上の例文のように、ストーリーの展開する途中で説明が挿入されて、語られる内容の時間が急に遮られても不自然さを感じない。また、『三四郎』と違い、非タ形を使って作中人物の知覚を表出することもないので、語り手が事態を対象化して冷静に語る印象が強くなっている。

これらのことから、タ形文末の多い『道草』は、語られる内容の時間が急に変化することに対応できるテキストだといえる。事態を大きくまとめて語って内容の時間が大きく動いたり、次の内容の語りにすぐ移るということができたりする。しかし、眼前描写性のある語りにはなりにくい。

3.2.2 『道草』と「報告」テキストの違い

『道草』の文末はほとんどがタ形であるが、日常生活の「報告」テキストの文末はタ形ばかりとはかぎらない。『道草』で使われているタ形の中で、「報告」テキストでは使用されないものについて検討した。

【72】 健三の新に求めた余分の仕事は、彼の学問なり教育なりに取つて、さして困難のものではなかつた。たゞ彼はそれに費やす時間と努力とを厭つた。無意味に暇を潰すといふ事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きてゐるうちに、何か為終せる、又仕終せなければならぬと考へる男であつた。

彼が其余分の仕事を片付けて家に帰るときは何時でも夕暮になつた。

（『道草』二十一：63）

物語世界の事態の説明や状態の語りは、通常タ形と非タ形のどちらでも表現可能のことが多い。【72】の下線部は、「…男である」という非タ形の表現も可能ではある。しかし、このテキストでは、タ形で「彼（健三）」についての判断を対象化して語っている。

このようなタ形が「報告」テキストで使われた場合には、過去の内容についての言説ということになる。通常、「彼」が死んだ後に表現したものと考えられる。「彼」が活着している場合は、「…男である」と表現される。あるいは、現在の「彼」がそのような性格でなくなつたと考えられる¹⁶⁾。

ここでは、タ形で「…男であつた」と表現しているが、「彼」が死んだあとの語りとは考えられない。また、彼の性格が現在変化しているとも考えられない。このことから、『道草』のこのタ形は「報告」テキストでは使われないタ形だといえる。なぜ、『道草』では、このような使い方ができるのかというと、語り手が過去のことでも対象化して語ることができるからだと考えられる。「報告」テキストと『道草』では、表現者と表現する内容の関係が異なっているといえる。

次の【73】の下線部でも同様のことがいえる。

【73】 御縫さんの嫁いた柴野といふ男には健三もその昔会つた覚があつた。柴野の今の任地先も此間吉田から聞いて知つてゐた。それは師団か旅団のある中国辺の或都会であつた。

(『道草』 二十二：65)

下線部に「今の」とあることから、「報告」テキストでは文末は「知つてゐる」と非タ形になるところである。しかし、ここでは語り手が内容を対象化してタ形で語っている。

このように、タ形の使われ方の違いから、『道草』と「報告」テキストでは、表現者と表現する内容の関係が異なっていることが指摘できる。

3.2.3 『道草』における作中人物の知覚を利用した語り

『道草』は語り手の立場での語りが多いが、作中人物の知覚を利用していると考えられる表現もある。ほとんどがタ形文末である『道草』において、その表現がどのようになされているのか検討する。次の【74】の下線部は、文脈から主人公健三の知覚した内容であると理解される。

【74】 彼は仕舞に投げるやうに洋筆を放り出した。

「もう已めだ。何うでも構はない」

時計はもう一時過ぎてゐた。洋燈を消して暗闇を縁側伝ひに廊下へ出ると、突当りの奥の間の障子二枚丈が灯に映つて明るかつた。健三は其一枚を開けて内に入つた。

子供は犬ころのやうに塊まつて寐てゐた。細君も静かに眼を閉ぢて仰向に眠つてゐた。

音のしないやうに気を付けて其傍に坐つた彼は、心持頸を延ばして、細君の顔を上から覗き込んだ。それからそつと手を彼女の寐顔の上に翳した。彼女は口を閉ぢてゐた。彼の掌には細君の鼻の穴から出る生暖かい呼息が微かに感ぜられた。其呼息は規則正しかつた。また穏やかだつた。

(『道草』 五十一：154)

下線部以外の文は、語り手がもっている情報を語り手が語っていると理解できる。その際、語り手のもっている情報は誰のものとも重なっていない。その情報を語り手が持っているのは、語り手だから知っているという以外にはない。下線部は、健三が知覚している内容を情報源としていると理解できる。語り手は語り手という立場であるため、健三の知

覚や心理までも知っていて、それを情報源として語っているといえる。しかし、下線部も健三が語る形式ではなく、語り手が語る形式になっている。「時計はもう一時過ぎてみた。」という文は、健三が時計を見て「一時過ぎてゐる」と認識したとということが含まれていると考えられるが、文の形式としては、語り手が聞き手に対して語るという形式を保っている。

日常の「報告」テキストでは、表現者は、他人から入手した情報なのか、自分が知覚認識した情報なのかを言語形式によって示しながら、もっている情報を表現する。報告テキストにおいては「彼は悲しい。」といえず、「彼は悲しいようだ」や「彼は悲しいということだ」ならばいえるというのは、この例である。

しかし、小説の語りテキストでは、作中人物の知覚を情報源とした語りを不自然と感じない。語り手が持っている情報は語り手だから知っているということで認められている。作中人物の知覚についても、語り手だから知っていて、この部分ではその知覚を対象化して語り手の語りとして語っているのである。語り手の持っている他の情報と同等に扱われている。そのために不自然さが感じられないのだと考えられる。つまり、作中人物の知覚を利用した語りも、語り手が語る形式の一部であるためである。これらがタ形の文で語られることによって、語り手が内容を対象化して語っている形式であることが明らかになっている。タ形にすることによって、知覚利用の語りが地の文の中に入っても自然に感じられるのだといえる。

3.3 『三四郎』『道草』におけるタ形・非タ形の使われ方のまとめ

『三四郎』は、タ形と非タ形はほぼ半々であるが、非タ形の文には眼前描写性のある語りが多く含まれている。この場合は、具体的場面の事柄を現場で知覚しているかのように語っている。タ形の文は事態を素早く進めるときや、事態をひとまとまりの出来事として語る場合に使用されていた。このようなタ形・非タ形の使用による効果は、日常の「報告」の言語と異なっている。このようなタ形・非タ形の使用がなされていることによって、語り手の情報伝達の経路や、語り手の語る位置が、日常の報告のテキストと異なることが明らかになった。

『道草』は、ほぼ非タ形文末だけで構成されている。このことによって、物語世界の種々の出来事を、物語世界の時間の流れにとらわれずにまとめて対象化して語ることができるようになっている、ということが明らかになった。具体的な場面を語るときでも『三四郎』のように眼前描写にこだわらずに語っている。また、「報告」テキストでは使わないようなタ形表現もあり、このことにより、語り手と表現内容の関係が「報告」テキストと『道草』のような小説テキストでは異なるということが分かった。

また、『道草』の作中人物の知覚を利用した語りはみな本稿のB-1に分類されるもので、語り手の語りの中に含まれている。タ形であることによって、語り手が対象化した内容であることがはっきりしている。

4 むすび

1 節で、タ形文末と非タ形文末の表現効果の違いと、動詞文・テイル文・デアル文の表

現特徴について論じた。次に2節では、動詞文・テイル文・デアル文、推量系文末の文が小説テキストの中でどのような表現効果をあげているか、タ形・非タ形の違いと語り様相を関連させながら論じた。最後に3節では、小説テキストにおいて、タ形文末と非タ形文末がどのように語りを構成しているか論じた。

小説のような「語り」のテキストと日常の「報告」のテキストでは、使用される言語に違いがある。特に、文末形式には大きな違いがあることが認められた。これは、語り手と聞き手の設定が、「語り」テキストと「報告」テキストで異なっていることが大きな原因であった。また、「語り」テキストには、作中人物の知覚の反映された表現もあり、それによっても文末表現に影響が与えられていた。

このような種々の文末表現により表現効果がそれぞれ異なっていることが認められた。

【注】

- 1) 金水（1989）では、「日常的対話で聞き手にある状況を知らせる行為またはその言表を『報告』と呼ぼう。また、小説や物語の地の文を『語り』と呼ぼう」とし、「報告」「語り」の2種類のテキストに分けて考察している。同様に、工藤（1995：167）では、「発話行為の場へのアクチュアルに関係づけられたテキストのタイプ」を「はなしあい」、小説の地の文のような「発話行為の場へのアクチュアルな関係づけがない、特別なテキストのタイプ」を「かたり」としている。なお、「かたり」はいわゆる三人称小説を典型としている。本稿では、「報告」「語り」として区別することとする。
- 2) 本稿のタ形を指すと思われる。
- 3) 金水（1989：123-124）、益岡（1997：4、7）など。
- 4) 仁田（1989：21）では「運動会のビデオか何かを見ていて、『あつ、私が走っている。』『ほら、君が走っている。』ということはあるだろう。」と指摘している。
- 5) 尾上（1982：383）、工藤（1995：161）など。
- 6) 工藤（1995：200）にも指摘がある。
- 7) 川端康成・三島由紀夫（1997 編）等による。
- 8) 時枝（1960：58）にその指摘がある。
- 9) 『読売新聞』（1907.1.20）に掲載された。（『漱石全集』第16巻：48-56）
- 10) 北住（1973）によると、子規は、明治32年12月30日『日本』に、「餅の花」と題する文章を掲げた後にも、「注意」として、「歳晩歳始の事に関する文章御投寄被下候節は成るべく只今見た事を只今見たやうにお記し被下候（中略）実地を見て其時其場の事を面白く写され候はん事を希望致候」（下線は引用者）と記した。

亀井（1980）で、正岡子規が自己を媒介とする時間的空間的な展開が具象的に描かれることに重きをおいていたことを指摘した上で、明治30年代の国木田独步、島崎藤村などの写真形式の作品が回想形式の作品であったのに対し、子規は、対象化された「自己」の感性で（作品における）現在の状況を描き出す散文の方法を確立したとする。そして、これを吸収し、想起された出来事をいわば現在進行形の形で描きうる方法が、明治30年代後半から広がっていったと指摘する。

- 11) 山岡（2000：105-112）では、このような場合は作中人物が知覚して語っていると考えている。
- 12) 神郡（1990）、山岡（1997）などに指摘がある。
- 13) ここにあげた漱石の3テキスト作品は1905年～1915年に発表されている。テキスト全体の地の文は、『三四郎』4886文、『道草』3340文、『吾輩は猫である』4744文であった。「」に入っていないなくても、他の指標により引用あるいは引用に準ずると判断されるものは地の文として数えていない。また、全体の地の文の量が作品によってまちまちであるため、20%という同じ比率で今回は採集した。冒頭の採集としたのは、冒頭において語り手の役割が示されることが多いということから、傾向がはっきりするだろうと考えたからである。
- 14) ここでいう疑問というのは、「いつのことだろう」のような文を指す。
- 15) 「自分が野々宮君であつたならば、此妹の為に勉強の妨害をされるのを却つて嬉しく思ふだらう。（三の十一：335）」のような文を指す。
- 16) 工藤（2004）でも、同種の用例について、「典型的には主体の死亡（非現存）を表すことになる」と指摘している。

第3章 「のだ」文の使用のされ方がテキストに与える影響

第3章では、「のだ」文に注目する。小説テキストにおいて、いわゆる「のだ」文は相当の割合で出現する。本節ではこの「のだ」文に注目し、その表現特性を検討する。1節では、タ形と非タ形に分けて「のだ」文の特性を検証する。2節では小説テキストにおける使われ方を、「のだ」文の話題と関連させて考察する。

1 「のである」「のであった」の使用による表現特性

1.1 「のだ」文の特徴

「のだ」文について、野田（1997:20）では、『の』の前の部分を名詞化して提出すると指摘しているが、「の」の前の部分を名詞化し、それを『のだ』という形式で提出するという点で先行研究は大体共通している。本研究ではこの共通点から出発し、「のだ」文は、何らかの前提（話題）に対して名詞化された表現を結びつけ、「のだ」で受け手に対し断定して提出する文だと考える。

なお、野田（1997:72）では、「のだ」文には、それと関係づけられるような状況や先行文脈Pが存在する場合と存在しない場合とがあるということは、多くの先行研究において考察されている。」と指摘しているが、本節では、小説の地の文という限られた範囲での調査・考察だということもあり、前提となる話題や状況が存在するということで論を進める。

「のだ」文の、「のだ」に前接する部分（以後Aとする）が提示されるのは、前提となる何らかの話題（以後Bとする）について言及するときだと考える。話題というのは、表現主体が何を意識して「のだ」文を使用したのか、ということである。ごく単純には、「〈 B 〉は、〈 A 〉のだ。」、「〈 B 〉についていうと、〈 A 〉のだ」という形が想定できる。しかし、状況そのものを話題としているため話題が明示されない場合もある。また、Aとして提示される部分には、表現者の心的態度の発現はなく、事態が示されているだけである。

1.2 タ形と非タ形に注目する

1.2.1 調査範囲

文末類型の「のだ」文が非タ形かタ形かということにより、テキストにどのような影響が与えられるかを、川端康成『雪国』（1935 - 1947）と三島由紀夫『潮騒』（1954）を資料として考察する。そして、その延長としてこの二つのテキストの表現特性にも言及する。

これまでのとおり夏目漱石の小説テキストを調査しようとしたが、漱石テキストではタ形の「のだった」文末の文がほとんどない。『三四郎』には用例がなく『道草』でも2例しかない。このため、他の作家のテキストを使用することとした。この『雪国』と『潮騒』を選んだのは、既に述べたように、三島と川端の間に交流があったことは知られており、またテキストの長さがほぼ同じでありながら文体印象には相当な違いがあるからである。調査対象としたのは、それぞれの地の文の全文『雪国』1210 文、『潮騒』2015 文の中に出現する「のだ」文である。本節では、特に「のだ」文の出現の仕方の違いに注目することで、語り手が受け手に対して何についてどのように断定の判断を提出しているかを明らかにで

きると考えた。なお、今回は否定の「のではない」等の表現は対象としなかった。

参考までに、文末形式によって、『雪国』と『潮騒』の地の文を分類すると表1・表2のようになった。この表から、『雪国』と『潮騒』の文末形式の出現傾向に違いが見られる。これは、語り手の物語内容の捉え方や語り手と作中人物との関係の違いが影響していると考えられる。

【表1】『雪国』

	非タ形		タ形		計
である	28	12.5%	196	87.5%	224
のである	11	20.8%	42	79.2%	53
動詞	58	9.4%	557	90.6%	615
ている・てある	22	11.5%	170	88.5%	192
形容詞	16	25.8%	46	74.2%	62
推量文末	43	81.1%	10	18.9%	53
その他	11	100.0%	0	0.0%	11
計	189	15.6%	1021	84.4%	1210

【表2】『潮騒』

	非タ形		タ形		計
である	62	38.0%	101	62.0%	163
のである	115	72.8%	43	27.2%	158
動詞	188	14.9%	1073	85.1%	1261
ている・てある	152	52.6%	137	47.4%	289
形容詞	34	34.0%	66	66.0%	100
推量文末	28	82.4%	6	17.6%	34
その他	10	100.0%	0	0.0%	10
計	589	29.2%	1426	70.8%	2015

※否定形も含む

※百分率（％）で示したのは、非タ形とタ形の割合

テキスト全体の中での「のだ」文の占める割合が、『雪国』より『潮騒』の方が多めであることが認められる。また、『雪国』の方が『潮騒』よりもタ形の多い傾向が認められる。「のだ」文のタ形と非タ形の割合は、『雪国』と『潮騒』では対照的である。次から、この二つのテキストの「のだ」文のタ形と非タ形について詳しくみていきたい。

1.2.2 「のだ」文の非タ形とタ形による違い

「のだ」文と非タ形・タ形の結びつきは、「～ルのだ」「～タのだ」「～ルのだった」「～タ

のだった」の4通りが考えられる。なお、本稿では非タ形を「ル」と表し、また、「のだ」と「のである」、「のだった」と「のであった」の区別はしないこととした¹⁾。また、非タ形とタ形の違いについては2章で述べたので、本章では細かいことにはふれていない。

1.2.2.1 「のだ」「のだった」の違い

「のだ」と「のだった」の違いについては、先行研究でも微妙な問題とされており、使用される環境による多様な表現効果の違いが指摘されている²⁾。このような中、本節ではいわゆる三人称小説の地の文に限定して、その用法について考察する。

非タ形の「のだ」文は、1.1で述べたように、名詞化したものを、受け手に断定して提示するので、受け手に対する働きかけの強い表現だといえる³⁾。しかし、タ形の「のだった」では、性質が変わってくる。丹羽(1992)では、「のだった」に回想視点があると説明されている。また、吉田(1988)では、物語的過去として、現在の現実との関係を断ってしまうのがこの表現だという。両論とも、表現者が物語世界から離れて語るという指摘だといえる。本研究では、これを表現者が物語世界の内容を対象化してとらえる表現だと考える。つまり、「のだった」は、表現者がその「～のだ」という判断内容を客体として外から確認した表現だということである。そのため、次の【1】のように、「～のだ」の場合とは異なり、受け手に対する強い働きかけはなく、傍観者が冷静に語るような表現効果を与えていると考えることができる。また、「のだった」文末の文では、この【1】のようにはっきりした前提の話題がなく、漠然としたその場の状況を話題としている場合がしばしば見られる。これは、傍観者が冷静に語るような「のだった」文末の文は、具体的な話題と事態を結びつけずにその場の状況を説明するときには有効であるためであろう。

- 【1】 国境の山を北から登つて、長いトンネルを通り抜けてみると、冬の午後の薄光りはその地中の闇へ吸ひ取られてしまつたかのやうに、また古ぼけた汽車は明るい殻をトンネルに脱ぎ落して来たかのやうに、もう峰と峰との重なりの中から暮色の立ちはじめる山峡を下つて行くのだった。こちら側にはまだ雪がなかつた。

(『雪国』:70)

下線部の「のだった」を「のだ」あるいは「のである」に置き換えると、表現者が受け手に強く働きかけているように感じられるようになる。これは表現者の判断を外から確認して対象化していないためだと考えられる。

漱石の小説テキストでは、タ形の「のだった」がほとんど用いられていない。例えば『道草』では、ほとんどの文末がタ形であるのに、「のだ」文だけは非タ形がほとんどである。このことから、漱石の小説テキストでは、「～のだ」という判断を対象化することはなく、そのままその判断を表出しているということになる。2節で詳述するが、小説における「のだ」文は、前提となる話題と関連づけて用いられることがほとんどで、そのように関連づけて語るときに、漱石のテキストの語り手は、判断を対象化せずに表出しているといえる。

1.2.2.2 「タのだ(タのだった)」と「ルのだ(ルのだった)」の違い

次に「のだ」「のだった」に前接する部分の非タ形とタ形の違いをみたい。

尾上（2001:423）には、動詞のスル形として次のような例が挙げられている。どの例文でも、事態は継続していて、完了したものとしてとらえられていない。

【2】ねこがいる。（現在の描写）

ほら、ごらん、鳥が飛ぶ。（眼前描写）

アルコールは水にとける。（真理）

また、次の例は森田（2001:279）のものであるが、動詞以外の非タ形の文も、事態を完了したものとして対象化してとらえていない。

【3】地球は青い。（状況認識）

彼は係長だ。

このようなことから、非タ形に「のだ」が後接した「ルのだ」文は、日常的な状態・繰り返される事態、時間に幅のある事態、具体的時間に関わらない事態、眼前描写など、あるいは「～ている」のように現在に持続している事態や現在との関連で捉えられる事態に「のだ」が後接していると考えられる。

次の【4】のはじめの下線部は具体的時間に関わらないことに「のだ」が後接し、二つ目の下線部は習慣として繰り返される事態に「のだ」が後接している。

【4】 この村の正月は二月の一日だから、注連縄があるのだ。さうして子供等は雪の堂の屋根に上つて、押し合ひ揉み合ひ鳥追ひの歌を歌ふ。それから子供等は雪の堂に入つて燈明をともし、そこで夜明しする。そしてもう一度、十五日の明け方に雪の堂の屋根で、鳥追ひの歌を歌ふのである。

（『雪国』：76）

次の【5】の下線部のはじめの文は時間的に幅のある事態に「のだ」が後接しており、二つ目の文は具体的時間に関わりがないことに「のだ」が後接している。

【5】 鏡の底には夕景色が流れてゐて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのやうに動くのだつた。登場人物と背景とはなんのかかはりもないのだつた。しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合ひながらこの世ならぬ象徴の世界を描いてゐた。

（『雪国』：13）

また、次の【6】は、物語世界の現場で現在知覚しているような語りである。

【6】「こんな日は音がちがふ。」と、雪の晴天を見上げて、駒子が言っただけのことはあつた。空氣がちがふのである。劇場の壁もなければ、聴衆もなければ、都会の塵埃もなければ、音はただ純粋な冬の朝に澄み通つて、遠くの雪の山々まで真直ぐに響いて行つた。

以上の例では、全体をまとめて外から対象化してとらえるということをしていない事態に「のだ」が後接している。

次に、タ形に「のだ」が後接する場合を述べたい。2章で述べたように、文末がタ形文末の場合、事態全体をまとめてとらえ、文の内容を対象化して語ることになる。そのため、その事態を語る時点では、その事態はまとめられたひとかたまりの事柄として認識される。いわば「タ」によってひとくくりにされた事態としてとらえられているのである。

このため、「タのだ (のだった)」文は、ひとかたまりとして対象化された事態を提示した語りとなる。次の【7】の二つ目の下線部はその例である。

- 【7】 新治は力の入れどころに困った。足を踏ん張らうとしても風がさういふ姿勢を許さない。うつかり綱に力をとられると、海の中へ引きずり込まれさうになるのである。

(中略)

命綱を浮標に一巻きすると、作業は楽になった。それに力の支点が生じて、逆に太い命綱に新治の身がたよれるようになつたのである。

(『潮騒』 第十四章:361)

この二つ目の「のだ」文は、語り手が事態を「それに力の支点が生じて、逆に太い命綱に新治の身がたよれるようになつた」という完了したひとまとまりのこととして捉えた上で、「のだ」文にしている。そして、この「のだ」文は、「命綱を浮標に一巻きすると、作業は楽になった。」という前提の話題に対する説明として機能している。このため、この「タのだ」文は、完了した事態を前文に結びつけて論理的に読者に説明している。この例では、前提の話題もタ形であり、完了した事態二つを結び付けて「のだ」文で提示している。このため、語り手の論理的な表現という印象を与える。

「のだ」に前接する部分がテイル以外の非タ形の場合は、素材をそのまま提出して名詞化されるため、語り手の態度は表現されない。それに対して、「タのだ (のだった)」「テイルのだ (のだった)」では、「のだ」に前接する部分を語り手が外から対象化してとらえたうえで名詞化される。さらに、「タのだ (のだった)」の場合、その部分がひとかたまりの事態としてとらえられている。

特に、非タ形の「タのだ」文末の文は、表現者が事態全体をまとめてとらえた内容を、受け手に対して強く働きかけて提示するため、表現者の説明するような態度が強く表れる。前出の【7】の二つ目の下線部はその例である。それに対して、次の【8】は、「ルのだった」の例で、表現者の説明的な態度は強く感じられることはない。

- 【8】 島村の頭にはまた徒労といふ言葉が浮んで来た。駒子がいひなづけの約束を守り通したことも、身を落してまで療養させたことも、すべてこれ徒労でなくてなんであろう。

駒子に会ったら、頭から徒労だと叩きつけてやらうと考へると、またしても島村にはなにか反つて彼女の存在が純粹に感じられて来るのだつた。

(『雪国』:51 - 52)

【8】の「のだ」文は、島村の心理の状態を、持続する時間的に幅のあるものとしてとら

え、受け手に強く働きかけることなく語っている。島村の微妙に動く心理をそのまま描写するのに効果的だといえる。仮に文末を「感じられて来たのだ」という「タのだ」に置き換えると、その効果はなくなり、心理状態を表すだけでなく何かについて対象化して説明しているような印象を与えるようになる。

1.2.3 語りの様相（判断の様相）との関係

語り（地の文）にはいろいろの様相があるが、1章で述べたように、大きくは、①語り手の立場で語り手が物語世界の内容を語る場合、②作中人物の知覚した内容を利用して語り手が物語世界の内容を語る場合、③作中人物が内的独白として語る場合、に分けて考えられる。なお、作中人物が独白したとおりの表現でなくても、作中人物が知覚した内容を自分自身で言語化していれば③の語りと考える。本節において、個々の「のだ」文の特徴を見るときには、①を語り手の判断、②と③を作中人物の判断として考えることとした。これは、「のだ」文の「…のだ」という判断を誰がしたかということが、小説テキストの表現特性を考える上で重要であったからである。

作中人物の内的独白の場合、作中人物はその文の内容を自分に提示していることになる。次の【9】の下線部はその例である。

【9】 熊のやうに硬く厚い毛皮ならば、人間の官能はよほどちがつたものであつたにちがひない。人間は薄く滑らかな皮膚を愛し合つてゐるのだ。そんなことを思つて夕日の山を眺めてゐると島村は感傷的に人肌になつかしくなつて来た。

（『雪国』：89）

下線部は、作中人物の島村の判断である「のだ」文で、次の文に「そんなことを思つて」とあることから、心内文であることがわかる。文脈により、語りかけられる相手は島村自身と規定できるので、新たに発見したことを自分に示している用法だといえる。

しかし、実際にこれに類する表現は『雪国』で2例、『潮騒』で3例しか確認できず、作中人物の判断である「のだ」文は少ないといえる。用例を検討したところ、「のだ」に前接する部分に作中人物の知覚を利用している場合はあるが、「～のだ」という断定的判断までが作中人物のものであることは少なかった。

1.2.4 『雪国』における「のだ」文の使用

1.2.4.1 「ルのだった」・「タのだった」文末の文からわかる『雪国』の特徴

【表3】

雪国	用例	小計	内訳
ルのだ	6	11	語り手の判断3、島村の判断1、直接話法2
タのだ	5		語り手の判断4、直接話法1
ルのだった	29	42	語り手の判断22、島村の判断7
タのだった	13		語り手の判断11、島村の判断2

表3は『雪国』の全「のだ」文を分類したものである。これを見ると、『雪国』には「ルのだった」文末の文が多いことがわかる。

「ルのだった」文末の文のうち、島村の知覚・判断を利用したと考えられるものは7例

認められた。内容分析の結果、それらは、時間に幅のある事態（「しゃべる」「言う」「報告する」「行く」「写る」「悶えている」「ままな」）についての語りで、瞬間としての眼前描写ではなかった。次の【10】のように、主人公島村は、作中人物でありながら、「いま、ここ」での事態を比較的長い時間の状況として認識しているのである。これらの文は、広い意味での現場の状態の描写となっているが、島村は事態全体をひとまとまりのものとして対象化してとらえずに、事態を知覚したままとらえている。

- 【10】 この虚偽の麻痺には、破廉恥な危険が匂っていて、島村はじっとそれを味わいながら、按摩が帰ってから寝転んでいると、胸の底まで冷えるように思われたが、気がつけば窓を明け放したままなのであった。

（『雪国』：52）

語り手の判断としての「ルのだった」文末の文の用例は、判断を「のだった」という形式で対象化しているため、読者に対する強い働きかけはなかった。また、「のだ」の前提の話題になる事柄も漠然としていたことから、語り手がありのままの状況を静かに語る印象を与えている。

次に「タのだった」の用例を見ると、「タのだった」の用例全 13 例のうち、物語世界の「いま、ここ」から回想する用例が 9 例であった。また、島村の知覚と思われる 2 例はこの 9 例にすべて含まれている。

回想的でない語りは、内容分析の結果、4 例中の 3 例は、次の【11】のように、少し前に完了したひとまとまりの事態を後から説明するような用例であった。

- 【11】 あつと人垣が息を吞んで、女の体が落ちるのを見た。

（中略）

一目で失心してゐると分った。下に落ちて音はしなかつた。水のかかつた場所で、埃も立たなかつた。新しく燃え移つてゆく火と古い燃えかすに起きる火との中程に落ちたのだった。

（『雪国』：138-139）

「タのだった」文末の文のほとんどが、事態を終了した過去のものとして捉える用法だといえる。

以上のことから、『雪国』の「のだった」文末の文の多くは「ルのだった」文末の文であり、出来事をひとかたまりの事態としてまとめてとらえていることが少なく、時間的に幅のある事態の状況をありのままに静かに語ることが多いといえる。少ない「タのだった」文末の文も、この表現特性を強く打ち消すものではない。「タのだった」文末の文の多くは回想的に語るときに使われていたが、一般的に回想を語るときは出来事をまとまったひとつの事態として捉えるのが通常だからである。

1.2.4.2 「ルのだ」・「タのだ」からわかる『雪国』の特徴

「タのだ」文末は、表現者の説明的態度が強く表れる形式だが、『雪国』にはこの文末の文が 5 例ある。いずれも語り手の判断で、次の【12】のように事態を完了したひとまとま

りとして捉え、読者に強く提示している。『雪国』の中にも語り手の判断が強く表れる部分
はあり、この5例はその数少ない用例である。

【12】 勸進帳であつた。

忽ち島村は頬から鳥肌立ちさうに涼しくなつて、腹まで澄み通つて来た。たわいな
く空にされた頭のなかいつぱいに、三味線の音が鳴り渡つた。全く彼は驚いてしまつ
たと言ふよりも叩きのめされてしまつたのである。敬虔の念に打たれた、悔恨の思ひ
に洗はれた。

(『雪国』：59)

下線部の「のだ」文は、前の「忽ち島村は～鳴り渡つた。」という前提の話題に対してさ
らに情報を提示し、受け手に強く働きかけ説明する機能を果たしている。

「ルのだ」文末の文は6例ある。そのうち1例は、【13】のように発言を要約した語りで
あるので、他と性格が異なる。

【13】 故郷とはいへ、息子はここで生れたのではない。ここは母の村なのだ。母は港町
で芸者を勤め上げた後も、踊の師匠としてそこにとどまつてゐたが、まだ五十前で中
風をわづらひ、療養かたがたこの温泉へ帰つて来た。息子は小さい時から機械が好き
で、せつかく時計屋に入つてゐたから、港町に残して置いたところ、間もなく東京に
出て、夜学に通つてゐたらしい。体の無理が重なつたのだらう。今年二十六といふ。

それだけを駒子は一気に話したけれども、息子連れて帰つた娘がなにものである
か、どうして駒子がこの家にゐるのかといふやうなことには、やはり一言も触れなかつた。

(『雪国』：46)

別の3例は、前出の【4】のように、村のならわしを挿入的に説明する部分にある。他の
2例は、島村の判断の語りであり、その場での判断である。前出の【9】の下線部はその例
である。「ルのだ」文末は多くなく、発言要約や、挿入的な語り手の説明という特殊なとき
以外は、『雪国』ではほとんど使われないといえる。

いずれにしても、非タ形の「のだ」文末の文は多くない。そのため、表現者が受け手に
強く働きかけることはごく少ないといえる。

1.2.5 『潮騒』における「のだ」文の使用

【表4】

潮騒	用例	小計	内訳
ルのだ	45	114	語り手の判断37、その他8
タのだ	69		語り手の判断68、その他1
ルのだった	38	43	語り手の判断38
タのだった	5		語り手の判断4、その他1

(※否定形「のではない」は除いてある)

表4のように、『潮騒』では、『雪国』に比べて非タ形の「のだ」文末の文(「ルのだ」、「タ
のだ」)が多い。それも、ほとんどが語り手の立場での語りである。語り手以外の判断の語
りは、全9例と少なく、「というのである」という伝聞に係わるものなど、特別な場合であ

った。それも最も表現者の態度が強く表れる「タのだ」文末の文ではなくて「ルのだ」文末の文が多かった。これらのことから、『潮騒』の「のだ」文では、語り手以外の判断は目立たず語り手の判断が強く表されることが多いといえる。

『潮騒』は特に「タのだ」文末の文が多く、語り手の説明的態度が強く表現されたテキストだと考えられる。前出の【7】の二つ目の下線部はその例である。前文の「～楽になった。」を前提の話題として、その状況を詳しく説明している。

「ルのだ」文末の文も次いで多い。その用例は、前提の話題に対して、時間に関わらない事態や時間に幅のある事態を結びつけた論理的説明であることが多い。前出【7】のはじめの傍線部はその例である。ここでは、事態全体をまとめてとらえていないが、状況の説明をするときに、語り手の判断が読者に強く提示されている。

タ形の「のだ」文は、「ルのだった」文末の文のほうが多い。用例を検討したところ「ルのだった」文末の文は、『雪国』の場合とほぼ同じで、特定の時間に関わらないような事態を冷静に語っていることが多い。この用例の両テキストにおける地の文全体に対する出現率は、それぞれ『雪国』2.4%、『潮騒』1.9%で、大きな差とはいえない。この「ルのだった」文末の文は、『雪国』の「のだ」文の中では最も多い形式で、表現者の態度が目立たない。『潮騒』のように語り手が読者に強く働きかけるような傾向をもつテキストであっても、冷静に状況を語る部分はある割合で存在すると考えられる。

次の【14】は、「ルのだった」文末の文の用例である。

【14】昔、修学旅行で内地へ渡つて、はじめて円太郎馬車を見た小学生は、目を丸くしてかう叫んだ。

「ほう、大きな犬が雪隠を引っぱつて走つとる！」

島の子供は、教科書の絵や説明で、本物の代りにまづ概念を学ぶのであつた。電車や大ビルディングや映画館や地下鉄を、ただ想像の中から作り出すことはどんなに難しかつたらう。

(『潮騒』第七章：270)

この用例は島の慣例を説明している。このように、『潮騒』の「ルのだった」文末の文は、語り手が慣例や日常的な状況を語るときに用いられることが多い。このような状況を語るときは、受け手である読者に強く働きかける必要がない。

「タのだった」文末の文の用例では、『潮騒』の方が少ない。『雪国』の「タのだった」文末の文も、回想の場合が多かったが、『潮騒』の「タのだった」文末の文5例はすべて過去を想起したものであつた。次の【15】はその用例の1つである。説明として過去を対象化し冷静に語っている。

【15】いつもは手のすく昼間に書き、朝の出漁前に「投函」するのだが、その朝ははやくしらせたいことがあつたので、きのふ書いた長たらしい手紙を破り、代りにこれを書いたと断り書がしてある。

それによると初江は吉夢を見たのであつた。神のお告げで、新治はデキ王子の身代りであることがわかり、めでたく初江と結婚して、珠のやうな子供が生れるといふ夢

を見たのである。

（『潮騒』第十二章：326）

『潮騒』は、非タ形の「のだ」文がタ形の2倍以上あり、それもほとんどが語り手の判断であるというのが特徴的である。これは、『潮騒』の「のだ」文では、語り手が読者に強く働きかけているということである。特に「タのだ」文末の文が多いことから、語り手の説明的態度が強く表されることが多いといえる。

1.2.6 『潮騒』『雪国』において「のだ」文が語りに与える影響

次に、比較的長くテキストを引用し、その中で「のだ」文が語りに対して具体的にどのような影響を与えているか検討したい。

1.2.6.1 『潮騒』における「のだ」文の使用のされ方

はじめに『潮騒』の用例を検討する。次の【16】～【18】は連続する部分で、比較的「のだ」文が多く見られるので用例として挙げた。

【16】 1 浮標までの距離は二十米である。2 誰にも負けない自信のある腕の力も、歌島を五周することさへできる泳ぎの技倆も、その二十米を泳ぎ切るのには十分とは云へない。3 恐ろしい力が若者の腕にかかった。4 波を切らうとするその腕を、見えない棍棒のようなものが打ち据ゑた。5 彼の体は心ならず漂ひ、力が波と頤頤して噛み合ふかと思へば、油に足をとられるやうに力が徒に働いた。6 もう浮標が手のとどくところへ来たと信じて、波間から上げる新治の目は、もと同じ遠さにそれを見るのであった。

（『潮騒』：359 - 360）

1 と 2 の文末は非タ形で、語り手が物語世界の現場で見ているかのように語っている。3 ～5 の文末はタ形になっていて、内容を対象化して語っている。その中で、4 と 5 は新治の知覚を利用した語りだといえる。6 は「のだ」文である。この「のだ」文の話題、つまり、何に対して「～のだ」といっているかという点、この場合は、6 より以前に「恐ろしい力が若者の腕にかかった。」「波を切らうとするその腕を、見えない棍棒のようなものが打ち据ゑた。」「彼の体は心ならず漂ひ、力が波と頤頤して噛み合うかと思へば、油に足をとられるやうに力が徒に働いた。」と語られる、その場の困難な状況であろう。その困難な状況というのは、「もう浮標が手のとどくところへ来たと信じて、波間から上げる新治の目は、もと同じ遠さにそれを見る」という事態を生んでいるということである。また、この 6 は繰り返される動作であり、一回だけの終わった出来事でないと考えられる。そう理解されるのは、非タ形の「見る」に「のだ」がついているためである。「見る」という非タ形は、表現者の対象化がなされておらず、事態の継起は表されない。そのため、文脈により、一回だけの出来事でないとして理解されるのである。物語世界の現場でまだ持続している状況を対象化して語っている。また、タ形の「のであった」という形式であるため、語り手の判断を表出していない。しかし、「～見た」とは違う。「見るのであった」は、「～見る」ということを名詞化して「～のだ」と提示し、さらにそれを対象化している。具体的には、「新治の目は、もと同じ遠さにそれを見る」ということを、6 以前の内容と関連づけたうえで、完了した動作としてとらえないで、最終的には状況を対象化して語っている。もし「見た」

とすると、完了したことになってしまう。「見るのであった」であることによって、完了したものにとらえずに対象化して示すことができるのである。

このように、1～2 では語り手が臨場感をもって判断を表出しているが、3 以降では、動作や状況を対象化して冷静に語っている。語り手は新治に同調せずに、簡潔に事態の継起を語っている。ここまで、語り手の語りを中心であるといえる。

【17】 7 若者は力の限り泳いだ。8 巨大なものは少しずつ躍り退いて道をひらいた。9 固い岩盤が鑿岩機に穿たれてゆくやうに。

10 浮標に手がふれたとき、若者は手を滑らして押し戻された。11 すると今度は幸ひな波が、胸をほとんど浮標にぶつけるばかりに、一息に彼を運んで、浮標に一気によじり登らせた。12 新治は深い息をした。13 風が彼の鼻孔と口にふさがった。14 その瞬間は、息も止るかと思はれ、次になすべき仕事をしばらく忘れてみたほどであった。

15 浮標は暗い海に大まかに身を委ねて揺れてみた。16 波はたえずその半ばを洗つては、ざわめいて流れ落ちた。17 風に吹きとばされぬやうに、身を伏せて、体の綱を解いた。18 濡れてゐる結び目は解きにくかった。

(『潮騒』：360)

7～13 の文末は、動詞に「タ」がついたタ形となっている。そのため、事態が次々に継起していく印象を与えている。これらは、事態を対象化した語りである。14～18 は、文末が動詞でないものもあるが、すべてタ形となっており、対象化された語りとなっている。15 と 16 は新治の知覚を利用した語りであるが、それ以外は語り手の立場の語りである。

【18】 19 ほどいた細綱を新治は引いた。20 そのときはじめて船のほうを見たのである。21 船首の杭のところに、四人の姿が固まつている。22 鯉船の船首にも見張たちがこちらを注視してゐる。23 わずか二十米先であるのに、それがずいぶん遠くに見える。24 舳はれた二艘の黒い影は、相携へて高々と昇り、また沈んだ。

(中略)

25 新治は力の入れどころに困った。26 足を踏ん張らうとしても風がさういふ姿勢を許さない。27 うっかり綱に力をとられると、海の中に引きづり込まれさうになるのである。28 彼の濡れた体は熱し、顔はかつかとほてり、顫顫に烈しい鼓動を打った。

29 命綱を浮標に一巻きすると、作業は楽になった。30 それに力の支点が生じて、逆に太い命綱に新治の身がたよれるやうになつたのである。

(『潮騒』：360-361)

19 まではタ形で対象化された語りであるが、20 は非タ形の「のだ」文となっている。語り手が判断を表出する形式である。この「のだ」文は何に対して「～のだ」といっているかということ、特に見つからない。漠然と「注目すべきことは」というようなことであろう。「～見た」ということを強く提示するために「のだ」文にしたと考えられる。「～見た」ということを名詞化して提示し、『「～見た」ということだ』と「～見た」という動作を強く提示している。「そのときはじめて」という表現からも、語り手がこの動作を強調して語っていることが分かる。ここでは、想定する聞き手に対して判断を強く表出しているといえ

る。「～見た」という完了した事態を強く提示しているのである。強く提示した理由としては、内容を解釈することになるが、新治の行動として特筆すべき行動であったということであろう。

続く 21～23 の文末は非タ形となり、新治が知覚した臨場感のある状態描写となっている。24 も、タ形文末であるが、新治の知覚を利用している。19 までは事態が次々に継起していてスピーディに語られていたが、20 からはスピーディでなくなっている。

(中略) のあと、タ形文末と非タ形文末の両方が使われている。

27 の「のだ」文は、非タ形「なる」に「のだ」が後接している。繰り返しなされる事態を表し、現在の状況を提示して説明している。

27 は、前の 25 と 26 の話題に対して「～のだ」と提示している。そのため、27 は、25 と 26 の説明あるいは言い換えとして機能している。同様に 30 は、前の 29 に対して「～のだ」と提示している。結果的に前の文の説明として機能している。「たよれるようになった」という完了した内容を提示して説明しているのである。語り手は、前の文に対しての判断を表出している。聞き手に対して強く働きかけている。判断を対象化して示しているのではなく、聞き手に対して説明している。

このように、非タ形が多く用いられて臨場感のある語りのときは、非タ形の「のだ」文が用いられることが多い。その場合、表現者は判断を表出し受け手に働きかけることが多くなるからだと考えられる。

『潮騒』では、非タ形の「のだ」文が比較的多く使われ、受け手に状況を強く提示して働きかけることが多かった。

また、タ形の「のだ」文は、その場の状況を対象化して語るときに用いられていた。その場合、状況は冷静に語られていた。

1.2.6.2 『雪国』における「のだ」文の使用のされ方

次に『雪国』のテキストにおける「のだ」文の使用のされ方を具体的に見ていきたい。「のだ」文が比較的多く使われている部分を引用して検討する。

次の部分は、駒子が島村に三味線を弾いて歌ってみせる部分である。【19】～【20】は連続している部分である。

【19】1 部屋いっぱい朝日に温まって飯を食いながら、

「いいお天気。早く帰って、お稽古をすればよかったわ。こんな日は音がちがふ。」

2 駒子は澄み深まった空を見上げた。

3 遠い山々は雪が煙ると見えるやうな柔かい乳色につつまれてゐた。

4 島村は按摩の言葉を思ひ合わせて、ここで稽古をすればいいと言ふと、駒子は直ぐに立ち上つて、着替へといつしよに長唄の本を届けるやうに家へ電話をかけた。

(中略)

5 「いやだわ。一番肩の張るお客さま。」と、駒子はちらつと下唇を噛んだが、三味線を膝に構へると、それでもう別の人になるのか、素直に稽古本を開いて、

「この秋、譜で稽古したのね。」

6 勸進帳であった。

7 忽ち島村は頬から鳥肌立ちそうに涼しくなって、腹まで澄み通つて来た。8 たわいなく空にされた頭のなかいっぱいに、三味線の音が鳴り渡つた。9 全く彼は驚いてしまったと言ふよりも叩きのめされてしまったのである。10 敬虔の念に打たれた、悔恨の思ひに洗はれた。11 自分はただもう無力であつて、駒子の力に思ひのまま押し流されるのを快いと身を捨てて浮ぶよりしかたがなかつた。

(『雪国』: 55-59)

9 の「のだ」文の話題、つまり、何に対して「～のだ」(叩きのめされてしまったのである)といっているかという、7～8 の内容である。「勸進帳」を聞いて、「忽ち島村は頬から鳥肌立ちそうに涼しくなって、腹まで澄み通つて来た」「たわいなく空にされた頭のなかいっぱいに、三味線の音が鳴り渡つた」という状況になったということである。9 は、「のだ」文であることによって、「叩きのめされてしまった」ということが提示され、際立っている。『雪国』ではタ形の「のであった」が多く用いられているが、ここでは「のである」となっていて、語り手の判断が表出されている。10 以降の文は、9 の「叩きのめされてしまった」という内容を中心に進んでいく。「のだ」文で取り立てられた内容が、後に続く文のテーマとなっている。

「のだ」文の前後はほとんどがタ形文末の文である。9 の「のだ」文もタ形に「のだ」が後接した文となっている。文末のタは、時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえ、文の内容を対象化する。そのため、事態を外から見て語る印象を与える。動詞にタが後接した文末の文の場合は、事態が終わった時点において事態をまとめてとらえて対象化して語る。9 の場合は、「叩きのめされてしまった」という、事態が終わった時点で事態をまとめてとらえて対象化したうえで、「のだ」が後接している。このように、【19】のあたりの語りは、事態をまとめてとらえて対象化して語ることが多い。その中で、非タ形の「のだ」文は、まとめてとらえて対象化した事態を聞き手に強く働きかけて語っているといえる。

次の部分は【19】に続く部分である。

【20】 12 十九や二十の田舎芸者の三味線なんか高が知れてるはずだ、お座敷だのにまるで舞台のやうに弾いてるぢやないか、おれ自身の山の感傷に過ぎんなどと、島村は思つてみようとしたし、駒子はわざと文句を棒読みしたり、ここはゆつくり、面倒臭いと言つて飛ばしたりしたが、だんだん憑かれたやうに声も高まつて来ると、撥の音がどこまで強く冴えるのかと、島村はこはくなつて、虚勢を張るやうに肘枕で転がつた。

13 勸進帳が終ると島村はほつとして、ああ、この女はおれに惚れてゐるのだと思つたが、それがまた情なかつた。

14 「こんな日は音がちがふ。」と、雪の晴天を見上げて、駒子が言つただけのことはあつた。15 空気がちがふのである。16 劇場の壁もなければ、聴衆もなければ、都会の塵埃もなければ、音はただ純粋な冬の朝に澄み通つて、遠くの雪の山々まで真直ぐに響いて行つた。

(『雪国』: 59-60)

15 の「のだ」文が何に対して「～のだ」(空気がちがふのである)といっているかという

と、『こんな日は音がちがう。』と、雪の晴天を見上げて、駒子が言っただけのことはあった」ことである。15は前文の内容と関連づけて、島村の判断を表出している。14は島村の知覚利用を利用した語りであるが、15も14の内容を前提として「のだ」文となっており、島村の知覚・認識による語りである。15の「～のだ」という判断は島村の判断であり、15全体が島村の意識を反映させて語っている表現だと考えられる。また、非タ形の「のだ」文を使うことによって、島村の判断を表出する形式をとっている。そのため、物語世界での判断だと受け取られる。

また、15の「空気がちがう」ということが、この後に続く文のテーマとなっている。「空気がちがう」ということが「のだ」文で提示され、それが話題（テーマ）となって続いていく。

『雪国』には非タ形の「のだ」文が少ないが、それが使用されるときは表現者の判断が表出された表現となる。「～のだ」という判断が、語り手の判断の場合と島村の判断の場合があるが、どちらでもそれがいえる。また、作中人物である島村の判断の場合は、特に物語世界の現場で判断しているような語りである。

ここで引用した『雪国』の用例では、非タ形の「のだ」文の後の文は、「のだ」文で「～のだ」と提示された内容がテーマとなっている。表現者が判断を強く表出したならば、その内容について続いて語られるのは自然だと考えられる。

次の部分は、『雪国』の冒頭に近い部分であるが、タ形の「のだった」が多く用いられている。

【21】 1 もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会ひに行く女をなまなましく覚えてゐる、はつきり思ひ出さうとあせればあせるほど、つかみどころなくぼやけてゆく記憶の頼りなさのうちに、この指だけは女の触感で今も濡れてゐて、自分を遠くの女へ引き寄せるかのやうだと、不思議に思ひながら、鼻につけて匂ひを嗅いでみたりしてゐたが、ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた。2 彼は驚いて声をあげさうになつた。3 しかしそれは彼が心を遠くへやつてゐたからのことで、気がついてみればなんでもない、向側の座席の女が写つたのだつた。4 外は夕闇がおりてゐるし、汽車のなかは明りがついている。5 それで窓ガラスが鏡になる。6 けれども、スチムの温みでガラスがすっかり水蒸気に濡れてゐるから、指で拭くまでその鏡はなかつたのだつた。

（中略）

7 それゆゑ島村は悲しみを見てゐるといふつらさはなくて、夢のからくりを眺めてゐるやうな思ひだつた。8 不思議な鏡のなかのことだつたからでもあらう。

9 鏡の底には夕景色が流れてゐて、つまり写るものと写す鏡とが、映画の二重写しのやうに動くのだつた。10 登場人物と背景とはなんのかかはりもないのだつた。11 しかも人物は透明のはかなさで、風景は夕闇のおぼろな流れで、その二つが融け合ひながらこの世ならぬ象徴の世界を描いてゐた。12 殊に娘の顔のただなかに野山のともし火がともつた時には、島村はなんともいへぬ美しさに胸が顫へたほどだつた。

前半に「タのだった」が3カ所ある。1の「のだ」文の話題は何か、つまり何に対して「～のだ」(そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた)といっているかということ、先行する部分にはない。漠然と状況に対してだと考えられる。「～浮き出た」ということを名詞化して提示している。状況を対象化して語る表現である。

3の「のだ」文は、何に対して「～のだ」(向側の座席の女が写つたのだつた)といっているかということ、「ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた」ということである。前の現象を説明することになっている。非タ形でなくタ形であるため、聞き手に対して働きかけるのではなく、状況を外から冷静に語ることになっている。3の場合は、作中人物である島村の意識を反映しているが、最後の「タ」は島村の発見による「タ」ではなく、語り手による対象化だと考えられる。

6の「のだ」文は、何に対して「～のだ」(指で拭くまでその鏡はなかつたのだつた)といっているかということ、「ふとその指で窓ガラスに線を引くと、そこに女の片眼がはつきり浮き出たのだつた。～向側の座席の女が写つたのだつた」のあたり全体だと考えられる。鏡があることにきづかなかったことに対する説明となっている。6も3と同じように、前の内容と関連づけられながら、状況を外から冷静に語る表現となっている。

9と10は「ルのであった」の形式であり、9は動作の完了していない出来事に「のだった」が後接し、10は、個別的な時間に関わらない内容に「のだった」が後接している。この二つの文の「のだ」文は、何に対して「～のだ」といっているかということ、前の「不思議な鏡のなかのこと」である。「不思議な鏡」がどういうものか説明することになっている。この9と10も、3と6と同じように、前の内容と関連づけられているが、状況を外から冷静に語る表現である。結果的に事情の説明になっているが、語り手の判断の表出ではなく、その場で知覚している状況を前の事態に関連づけて、それを対象化して語っているのである。

9と10もタ形の「のだ」文であり、この近傍の文はほとんどタ形になっている。また、作中人物の知覚を利用した語りでなく、語り手が出来事を対象化して説明している文がほとんどである。語り手が物語世界にいるような語りではない。物語世界の外から物語世界の状況を語っているような語りである。

この中で、9は「動く」に「のだった」が後接しているため、完了していない内容を提示して、その判断を対象化して語ることになっている。ここでは、個別的な時間に関わらない原理を説明していて、またその原理が現在も続いていることを表している。「動いた」であれば、動作が完了した時点で動作を対象化する語りとなる。10は、もし文末を「なかつた」とすると、時間の経過を捨象して事態全体をまとめて対象化してとらえることになる。「ないのであった」にすることによって、「～ない」という状態は対象化されない。ただし、その状態を提示する判断が対象化される。

このように、9と10では、物語世界の個別的な時間に関わらない原理や性質について語っているが、その原理や性質はタ形で対象化して語られず、「～のだ」と提示したその判断が対象化されている。そのため、物語世界の事態(原理や性質)が現場で続いていることを表しながら、語り手の存在を強く感じさせずに語っている。

近傍の文がほとんどタ形であることから、この「のだ」文を含めこの部分は、眼前描写性がなく、外から物語世界の状況を語っているといえる。

1、3、6、9、10の「のだった」は、「のだ」に置き換えても内容自体はそれほど変わらない。しかし、「のだった」であることによって語り手の判断の表出ではなく、その場の状況を冷静に語っている印象を与える効果がある。語り手は、判断をタ形で対象化して語っている。ここには、物語世界の状況に対して心理的距離をとって語る語り手の態度が見られる。物語世界の状況について主体的な判断を表出するのではなく、距離をとって外から語る印象を与える。

1.2.6.3 『潮騒』『雪国』における「のだ」文の使用のされ方の特徴

『潮騒』と『雪国』の「のだ」文の使用され方を部分的に見たが、『雪国』は「のだった」で、事態の状況を先行する内容に関連づけたうえで対象化して語る傾向がみられた。『潮騒』は、事態の状況を対象化して語る場合は「のだった」を使うこともあるが、事態の状況を強く提示するときには非タ形の「のだ」文で判断を表出することが多く見られた。

どちらのテキストも、先行する内容があってそれに対して「のだ」文で語られることが多い。『雪国』では、「のだった」というタ形で対象化して語ることが多いので、先行する内容に関連づけて事態を冷静に外から語っている印象を与える。はじめに語られた内容が、「のだ」文でより詳しく語られることが多い。『潮騒』では、非タ形の「のだ」文のときには、先行する内容を「のだ」文で聞き手に説明している印象を与える。非タ形の「のだ」文は判断を表出しているので、事態を対象化して語るのではなく、聞き手に認識させようという印象が強くなるからである。

このように、『雪国』の「のだ」文は、事態の状況を先行する内容に関連づけたうえで対象化して語ることが多く、『潮騒』の「のだ」文は、聞き手に説明しようとして語ることが多いと考えられる。

1.2.7 『雪国』と『潮騒』の語りの特徴と「のだ」文の関係

これまでのことをまとめると以下ようになる。

「のだ」文と非タ形・タ形の結びつきは、「～ルのだ」「～タのだ」「～ルのだった」「～タのだった」の4通りが考えられる。「のだ」と「のだった」を比較すると、「のだった」は表現者がその「～のだ」という判断内容を客体として外から確認した表現だということである。そのため、「～のだ」の場合とは異なり、受け手に対する強い働きかけはなく、傍観者が冷静に語るような表現効果を与えていると考えることができる。また、「のだった」文末の文では、漠然としたその場の状況を話題としている場合がしばしば見られる。これは、傍観者が冷静に語るような「のだった」文末の文が、具体的な話題と事態を結びつけずにその場の状況を説明するときには有効であるためだと考えられる。「ルのだ（ルのだった）」と「タのだ（タのだった）」を比較すると、「ルのだ（ルのだった）」はひとかたまりとしてまとめてとらえていない事態に「のだ」が後接した語りであり、「タのだ（タのだった）」は全体をひとかたまりとしてまとめてとらえた事態を「のだ」で提示した語りだといえる。この4通りの中で、「タのだ」文末の文は、表現者がひとまとまりとしてとらえた内容を、

受け手に対して強く働きかけて提示するため、表現者の説明するような態度が強く表れる。この4通りの「のだ」文を『雪国』と『潮騒』のテキストで検討したところ、次のような結果となった。『雪国』には「のだった」文末が多くて「のだ」文末が少なく、表現者が受け手に強く働きかけることは少なかった。それに対して『潮騒』では「のだ」文末が多く、それもほとんどが語り手の立場での語りであり、語り手の判断が強く示されているといえる。特に「タのだ」文末の文が多く、語り手の説明的態度が強く表現されたテキストだといえる。しかし、「ルのだ（のだった）」文末の文も存在し、「ルのだった」文末の文は語り手が慣例や日常的状態を語るときなどに使用されている。

以上の「のだ」文の検討から次のようなことが推測される。『雪国』の語り手は自分の判断や態度を読者に対して強く示すことが少なく、冷静に状況を中心に語る傾向がある。つまり、物語世界の状況を提示することが中心で説明的でないといえる。それに対し、『潮騒』は語り手の知識や理解を強く読者に説明することが多い。

三島（1974:88）では川端の「美しさと哀しみと」について次のように指摘している。

- 【22】 次に、川端文学は反応のロマネスクである。これは川端文学の無構成の特色とも関わりのあるもので、物語があたかも free-association に拠るかのように、一つの感情によって不条理に惹き起こされた第二の感情のままに運ばれる。

この指摘は、『雪国』の語り手が自分の判断を強く示さずに流れる状況を語っていくという本稿の指摘と矛盾しない。

また、佐伯彰一氏は三島由紀夫について次のように語っている⁴⁾。

- 【23】 一切をわが眼でたしかめ、見ぬいて、あらかじめプランを立て、その通りに実行するのでなくては、安心がならぬといった警戒心である。この種の三島の発言は、ぼく自身も何度か耳にしたおぼえがあり、「最後の一行がきまらなくては、書き出せない」というのは、三島の愛用句に近かった。

この指摘は本稿の指摘と直接関係するものではないが、『潮騒』の語り手中心で読者へ強く働きかけながら語るということと、三島がプランどおりに書き進めるということは通じるものがあるのではないだろうか。

管見では、これらの川端と三島に関する指摘は広く受け入れられたものあり、本稿の結論もこれらの指摘に矛盾するものではない。

2 テキストにおける「のだ」文の使われ方

2.1 小説における「のだ」文

前節では、テキストにおける「のだ」文の非タ形とタ形の違いを中心に検討し、主に、「のだ」文の非タ形かタ形かの違いが語り方にどのような影響を与えているかを確認した。しかし、「のだ」文は、他の文や部分との関わりの中で使用されることがほとんどであるため、「のだ」文だけを調査するだけでなくコンテキストを含めて検討したほうが有効である。

そこでこの節では、タ形と非タ形という観点ではなくて、実際のテキストの中で「のだ」文がどのようなときに使用されているかを調査した。

「のだ」文については文法的研究が進んでいるが、小説という文章中で「のだ」文がどのようなはたらきをしているかはそれほど注目されていない。管見では、文章論の立場から永野（1986）をはじめとした文章の統括の観点に立つ研究が見られるだけである。

本節は、文法研究の観点からではなく、文章中でのはたらきに注目して「のだ」文を扱ったもので、小説作品において「のだ」文がどのようなはたらきをしているのか、特に漱石の小説テキストではどのようなになっているのか調査した。調査の中では、特に「のだ」文が何に対して「～のだ」といつているのかについて焦点をあててみた。

用例収集のための調査範囲は、物語世界外の存在の語り手が語る形式である夏目漱石『三四郎』と『それから』と『道草』、比較のための森鷗外『青年』の地の文全体である。『三四郎』と『道草』はこれまでも取り上げてきたが、用例を増やす必要から『それから』も取り上げた。『それから』は、テキストの成立時期が『三四郎』と『道草』の間に位置し、使用されている文末表現の形式も『三四郎』と『道草』との両方の性格があることから、偏りが少ないと考え調査対象とした。森鷗外『青年』は、上京した若者を主人公にしているという設定が『三四郎』と共通することから漱石との対比に相当と考え、調査対象とした。

なお、文末以外の「のだ」や、「んだ」などの話し言葉、「のだらう」などの推量用法、「のではない」などの否定用法の用例は対象としていない。この結果、『三四郎』26例、『それから』61例、『道草』53例、『青年』168例の用例を得た。なお、タ形の「のであった」文末の文は、『三四郎』0例、『それから』0例、『道草』2例、『青年』12例であったが、用例数が少ないことから、ここでは扱わなかった。

2.2 「のだ」文の特徴

「のだ」文は、「のだ」に前接する部分を受け手に認識させようという意識が働いている文といえる⁵⁾。つまり、「のだ」に前接する部分を受け手に強調して提示するということである。そして、その「のだ」に前接する部分は、提示する素材となっている。次のようなモデルになる。

〈素材〉のだ。

素材というのは、表現主体の心的状態の発現ではなく、事象を示しているだけだということである。名詞述語文との違いは、「のだ」に前接する部分が活用する語であり、体言でないということである。

次に考えるべきなのは、何に対してその素材が提示されたのかということである。素材が提示されるというのは、コンテキストの中に話題があり、その話題について言及するときである。ごく単純には、1節で示したように次のような形が想定できる。

「〈B〉は、〈A〉のだ。」しかし、話題が必ず「〈 〉は」という形で示されるというわけでない。また、明示されないことも多い。話題というのは、「のだ」文の主体・主語にあたるものということではない。語り手が何を意識して「のだ」文を書いたのか、ということである。だからこの話題は「～は」という形で補えないことがよくある。提示

した素材の主体にあたる「～は」が「のだ」文の話題の場合もあるし、ほぼ同じ形式の「のだ」文であってもコンテキストによって話題が他にある場合もあるのである。

2.3 よく使われる形式

2.3.1 挿入的解説（話題が具体的な物・事）

【24】 或日彼は其青年の一人に誘はれて、池の端を散歩した帰りに、広小路から切通しへ抜ける道を曲つた。彼等が新らしく建てられた見番の前へ来た時、健三は不図思ひ出したやうに青年の顔を見た。

彼の頭の中には自分と丸で縁故のない或女の事が閃いた。(1) 其女は昔し芸者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年余も牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るやうになつたのである。

「嘸辛いだらう」

容色を生命とする女の身になつたら、殆ど堪へられない淋しみが其所にあるに違ないと健三は考へた。然しいくらでも春が永く自分の前に続いてゐるとしか思はない伴の青年には、彼の言葉が何程の効果にもならなかつた。此青年はまだ二十三四であつた。

（『道草』二十九：86-87）

【24】の「のだ」文は、「其女」が「昔芸者をしてゐた頃人を殺した罪で、二十年余も牢屋の中で暗い月日を送つた後、漸と世の中へ顔を出す事が出来るやうになつた」という素材を提示している。その話題にあたるもの、つまり何に対して素材を提示したのかというと、常識的に「其女」といえるであろう。「其女」という語は、素材の中に含まれ、「～になつた」という素材の内容の主体にあたるが、同時に「～になつたのである」という提示に対する話題となっている。前文の「或女」という部分を受けて「其女」とし、それを話題にしているのである。したがって話題は前の「或女」ということになる。

そして、この用例のように、具体的な物・人が提示の話題になつた場合には、その提示の文がその物・人の解説になっていると理解される。「〈モノ〉は、〈 〉のである」というように、その人・物の性質・特徴・由来などが示されるのである。またこのような具体的な物・事が話題の場合、(1)のように、その解説が後の文まで長く続かず、元の文脈の流れに戻ることが多い。そのため、この「のだ」文は、一時的な解説挿入のはたらきを担う場合が多い。この用例の「のだ」文の場合は、「女」についての挿入的解説で、この「女」を受け手に認識させようとしている。

また、この「のだ」文の話題である「其女」には「その」という指示語がついていて、前文との関係が明確になっている。このことによって、前文に出てきた「女」が次の「のだ」文の話題になっていることの指標になっている。殊に、この用例の場合は、「其女」の「女」は前文のくりかえしであるので、よりはっきりしている。

2.3.2 前文の内容を発展させる

【25】（門野は代助の家の書生。）

「何だか明日にも危しくなりさうですな。どうも先生見みた様に身体を気にしちや——、仕舞には本当の病気に取っ付かれるかも知れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野は只へえと云つた限、代助の光沢の好い顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めてゐる。代助はこんな場合になると何時でも此青年を気の毒に思ふ。(2)代助から見ると、此青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰まつてゐるとしか考へられないのである。話をすると、平民の通る大通を半町位しか付いて来ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷兎になつて仕舞ふ。論理の地盤を堅に切り下げた坑道などへは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系に至つては猶更粗末である。

（『それから』 一 の四：13）

(2)では、「代助から見ると、此青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰まつてゐるとしか考へられない」という素材を提示している。この(2)の「のだ」文の話題は何か、つまり「〈～考えられない〉のである」は何に対して提示されたのか。これは、前文の「代助はこんな場合になると何時でも此青年を気の毒に思ふ。」である。この場合、「〈 B 〉は、〈 A 〉のだ」という形にきれいにはあてはまらないが、「〈～考えられない〉のである」の〈～考えられない〉という素材が示されたのは、前文に対してであることは理解されよう。単純に形式化すると「〈 B 〉に対して、〈 A 〉のだ」というような形になっている。

この用例では、「のだ」文の話題は前文全体であり、(1)のように文の一部を問題にしているわけではない。前文全体を話題にしているので、一部分についての挿入的説明ではない。前文を発展させてその内容を受け手に認識させようとしているのである。田野村（1990）の用語を用いると、この「のだ」文は前文の事情説明をしている、ともいえる。このタイプの「のだ」文は非常に多く、典型的な使われ方の「のだ」文である。

2.3.3 話題の範囲が広い

【26】愕然として仮寐の夢から覚めた時、失はれた時間を取り返さなければならないといふ感じが一層強く彼を刺撃した。彼は遂に机の前を離れる事が出来なくなつた。括り付けられた人のやうに晝齋に凝としてゐた。(3)彼の良心はいくら勉強が出来なくつても、いくら愚図々々してゐても、左右いふ風に凝と坐つてゐると彼に命令するのである。

（『道草』 六十七：203）

(3)では、「彼の良心」が「いくら勉強が出来なくつても、いくら愚図々々してゐても、左右いふ風に凝と坐つてゐると彼に命令する」という素材を「～のだ」と提示している。その提示は何に対してなされたのかというと、直前の二つの文だと考えられる。やや長い内容があるまとまりとしてとらえ、それに対し提示する場合である。まとまりとしてとらえたその内容を抽象化して受け手に認識させるはたらきも備えている。

2.3.4 話題が「のだ」文の近くには見つからない

【27】（書生の門野が平岡のところから帰ってくる描写があり、その次にそれ以前の話が回想的に語られる。次の用例の最初の２段落は、回想部分の最後のところである。）

其時平岡は、早く家を探して落ち付きたいが、あんまり忙しいんで、何うする事も出来ない、たまに宿のものが教へてくれるかと思ふと、まだ人が立ち退かなかつたり、あるひは今壁を塗つてゐる最中だつたりする。などと、電車へ乗つて分れる迄諸事苦情づくめであつた。代助も気の毒になつて、そんなら家は、宅の書生に探させやう。なに不景気だから、大分空いてゐるのがある筈だ。と請合つて歸つた。

夫から約束通り門野を探しに出した。出すや否や、門野はすぐ恰好なのを見付けて來た。(4)門野に案内をさせて平岡夫婦に見せると、大抵可からうと云ふ事で分れたさうだが、家主の方へ責任もあるし、又其処が気に入らなければ外を探す考へもあるからと云ふので、借りるか借りないか判然した所を、門野に、もう一遍確かめさせたのである。

「君、家主の方へは借りるって、斷つて來たんだらうね」

「えゝ、歸りに寄つて、明日引越すからつて、云つて來ました」

代助は椅子に腰を掛けた儘、新らしく二度の世帯を東京に持つ、夫婦の未來を考へた。平岡は三年前新橋で分れた時とは、もう大分變つてゐる。

（『それから』四の二：58-59）

(4)では、「門野に案内をさせて～、門野に、もう一遍確かめさせた」という素材を提示している。この提示が何に対してなされたのか、その答は(4)の近くには見つからない。引用の冒頭にこの場面に至るまでの説明を付しておいたが、この場面の前に門野が平岡のところから帰ってくる描写が唐突にあり、(4)の「のだ」文になってはじめて門野が何のために外出し戻つてきたのかがわかるのである。だから、(4)の提示は、書生の門野が平岡のところから帰ってくる描写に対してなされたと考えられる。このようになかなか離れた部分に話題がある場合もある。このような場合は、「のだ」文はひとまとまりの内容についての論理的帰結であり、その内容に一段落ついたことの指標になっている。

この用例で注意すべきは、(4)の「のだ」文だけに提示の素材があるわけではないということである。「のだ」文の前にあるいくつかの文と「のだ」文の素材の部分がひとまとまりの内容をもち、それが話題に対する素材となつていて、そして最後の「のだ」文だけが提示の形式をとつてゐるのである。

【28】（新聞に出ていた「学校騒動」について代助と門野が会話している。）

「へえ、左様なもんですかな」と門野は稍真面目な顔をした。代助はそれぎり黙つて仕舞つた。門野は是より以上通じない男である。是より以上は、いくら行つても、へえ左様なもんですかなで押し通して澄ましてゐる。此方の云ふことが応へるのだから、応へないのだから丸で要領を得ない。(5)代助は、其処が漠然として、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐるのである。其代り、学校へも行かず、勉強もせず、一日ごろごろしてゐる。君、ちつと、外国語でも研究しちやどうだなどゝと云ふ事がある。すると門野は何時でも、左様でせうか、とか、左様なもんでせうか、とか答へ

る丈である。決して為ませうといふ事は口にしない。

（『それから』一の二：7）

(5)では、「代助」が「門野」を「其処が漠然として、刺激が要らなくて好いと思つて書生に使つてゐる」という素材を提示している。何に対して提示しているのか。「代助」ではない。コンテキストからみてここでは代助をあまり問題にしていない。すでにこの場面の前に門野は登場していて、「門野といふ書生」という表現も既に示されている。そのため、この「のだ」文の話題は「門野がこの家で書生になっていること」と規定することができる。「〈門野がこの家で書生になっていること〉というのは、〈其処が漠然として、刺激が要らなくて好いと思つて書生に使つてゐる〉（ということな）のである」という形である。このときに、「門野」が書生であるということが既知でない場合には、前提がまったく違っているで話題も違ったものになる。

この用例の場合には、具体的な事柄や書かれた内容ではなく物語世界の状況が、「のだ」文の話題になっている。しかし、状況といっても「門野がこの家で書生になっていること」という既に知らされている物語上の設定の状況を話題にしているのであり、具体的状態を想定できる。そういう点で(4)の用例に近いものであり、この後に述べる2.3.6のように話題がそれまでの内容に全くない場合とは違う。

2.3.5 話題が「のだ」文の内部にある

【29】 二階の八畳である。東に向いてゐる、西洋風の硝子窓二つから、形紙を張つた向側の壁まで一ぱいに日が差してゐる。この袖浦館といふ下宿は、支那学生なんぞを目当にして建てたものらしい。(6) 此部屋は近頃まで印度学生が二人住まつて、籐の長椅子の上にごろごろしてゐたのである。その時廉い羅氈の敷いてあつた床に、今は畳が敷いてあるが、南の窓の下には記念の長椅子が置いてある。

（『青年』 式：283）

(6)では、「此部屋は」に「近頃まで印度学生が二人住まつて、籐の長椅子の上にごろごろしてゐた」という素材が提示されている。「この部屋」は「ごろごろしていた」の主体ではなく、二格あるいはデ格であるものが主題になりハ格になったものと考えられる。また、文脈の流れからみると、ここで話題になっているのは「下宿」の「この部屋」である。このようなことから、この「のだ」文は「この部屋」について受け手に認識させる文と考えられる。この(6)の「のだ」文の場合は、話題になる文や具体的表現というものはそれ以前にはなくこの文の内部にあり、コンテキストの支配を受けてはいるが、「のだ」文の一文で内容が完結している。しかし、「のだ」文の内部に話題がある文でも、その話題となる表現に指示語がある場合は、それ以前の指示語の指示している部分が話題であると考えられることもあり、一律には扱えない。(1)の場合がそれである。

ところで、仮に前の場面に印度学生が使った部屋の様子などが描かれていれば、この文の性質もおおのずと変わってくるので、その文だけで話題を判断することはできない。

2.3.6 話題が文章中にはない

【30】「まあ忘れっぽくて入らつしやることね。晩にお遊びに入らつしやいましな。」言ひ棄てて、夫人が歩き出すと、それまで二王立に立つて、巨人が小人島の人間を見るやうに、純一を見てゐた岡村画伯は、「晩に来給へ」と、鈺響のように同じ事を言つて、夫人の跡に続いた。

純一は暫く二人を見送つてゐた。(7)その間店の上さんが吊銭を手に載せて、板縁に膝を衝いて待つてゐたのである。純一はそれに気が附いて、小さい銀貨に大きい銅貨の交つたのを慌てて受け取つて、鰐皮の蝦蟇口にしまつて店を出た。

（『青年』二十三：451）

(7)では、「その間店の上さんが吊銭を手に載せて、板縁に膝を衝いて待つてゐた」という素材を提示している。しかし、何に対しての提示なのか、テキストの中からは想定できない。ここでは純一のおかれたその場の状況が話題だと考えられる。このように具体的な事象が想定できない用例は多くはない。

2.3.7 伝聞

【31】「あら、そんな事を」と三千代はすぐ打ち消す様に云つた。「それこそ大変よ。貴方」代助は平岡の今苦しめられてゐるのも其起りは、性質の悪い金を借り始めたのが転々して崇つてゐるんだと云ふ事を聞いた。(8)平岡は、あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つてゐたのだが、三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶらぶらし出すと、遊び始めたのである。それも初めのうちは、夫程烈しくもなかつたので、三千代はたゞ交際上已を得ないんだらうと諦めてゐたが、仕舞にはそれが段々高じて、ほうづが無くなる許なので三千代も心配をする。すれば身体が悪くなる。なれば放蕩が猶募る。不親切なんぢやない。私が悪いんですと三千代はわざわざ断つた

（『それから』八の四：134-135）

(8)の「のだ」文は、三千代の直接話した内容の要約である。このように伝聞内容を表現するときに「のだ」文が使われることがある。(8)では、「平岡」が「あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つてゐたのだが、三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶらぶらし出すと、遊び始めた」という素材を提示している。ここでの話題は「聞いた話」あるいは「三千代の言うこと」である。この用例の場合は「三千代」の言葉を模したとも考えられるが、そうでない場合でも伝聞は「のだ」文で表現されることが多い。伝聞情報を描写するときに区切りのいいところで「のだ」文となるのである。

2.4 共起関係と指標

「のだ」文と共起してよく使われる表現があるが、それらの表現に注目して分析を試みたい。

2.4.1 「しかし」

【32】長時間彼女の傍に坐つて、心配さうに其顔を見詰めて居る健三に何よりも有難い其眠りが、静かに彼女の臉の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るやうな気が常にした。然し其眠りがまた余り長く続き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼が却つて不安の種になつた。ついに睫毛の鎖してゐる奥を見るために、彼は正体なく寐入つた細君を、態々揺り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寐かして置いて呉れゝば好いのにといふ訴へを疲れた顔色に現はして重い臉を開くと、彼は其時始めて後悔した。(9)然し彼の神経は斯んな気の毒な真似をして迄も、彼女の実在を確かめなければ承知しなかつたのである。

やがて彼は寐衣を着換へて、自分の床に入つた。さうして濁りながら動いてゐるやうな彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜は其濁りを清めて呉れるには余りに暗過ぎた。

（『道草』五十一：155-156）

(9)では、「彼の神経」が「斯んな気の毒な真似をして迄も、彼女の実在を確かめなければ承知しなかつた」という素材を提示している。何に対して提示しているかという、彼の精神的状態である。つまり、「彼の神経」ということになる。(6)と同様に、「彼の神経」という語は、素材の中に含まれ、「～承知しなかつた」という素材の内容の主体にあたるが、同時に「～承知しなかつたのである」という提示に対する話題となっている。「〈彼の神経〉というものは、〈 〉(な)のである」という形として理解できる。

この用例のはじめに逆接「然し」があるために、前文はそのまま(9)の「のだ」文の話題になり得ない。そのため、「彼の神経は」という表現が強調され、「のだ」文の話題であることがはっきりする。つまり、逆接のあとの「のだ」文の話題は前文ではありえず、この逆接表現は新しい話題が提示されていることの指標になる。

2.4.2 「だから」

【33】（平岡の妻から借金を頼まれていた代助は、前日兄に借金と平岡の仕事の周旋を依頼したが、不調に終わっていた。）

代助は、昨日兄と自分の間に起つた問答の結果を、平岡に知らせやうと思つてゐたのだが、此一言を聞いて、暫らく見合わせる事にした。何だか、構へてゐる向ふの体面を、わざと此方から毀損する様な気がしたからである。其上金の事に付いては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。(10)だから表向挨拶をする必要もないのである。たゞ、斯うして黙つてゐれば、平岡からは、内心で、冷淡な奴だと悪く思はれるに極つてゐる。けれども今の代助はさう云ふ非難に対して、殆んど無感覚である。

（『それから』六の五：96）

(10)では、「表向挨拶をする必要もない」という素材を提示している。前文の「其上金の事に付いては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。」という状態に対しての提示である。「だから」という語があるため、「のだ」文とその前文は、因果関係で結びついていることが明白になっている。「のだ」文は論理的帰結になっており、その論理的帰結の部分を受け手に認識させようという文である。この場合、前文が前提となって「のだ」文があるこ

とが明らかである。このように「だから」があることにより、因果関係という論理がはっきりし、「のだ」文の話題が前文にあることもはっきりする。「～わけだ」におきかえても不自然ではない。

2.4.3 指示語

【34】大石はちよいと手に取つて名前を読んで、黙つて女中の顔を見た。女中はかう云つた。

「御飯を上がるのだと申しましたら、それでは待つてゐると仰しやつて、下に入らつしやいます。」

大石は黙つて頷いて飯を食ひ始めた。食ひながら座布団の傍にある東京新聞を拵げて、一面の小説を読む。(11) これは自分が書いてゐるのである。社に出てゐるうちに校正は自分でして置いて、これ丈は毎朝一字残さずに読む。それが非常に早い。それから矢張自分の擔当してゐる附録にざつと目を通す。

（『青年』 弐：283-284）

(11)では、「自分が書いてゐる」という素材を提示している。話題は「これ」で、「これ」の指す内容は「一面の小説」である。「これ」は「書いてゐる」の主体でないし、「自分が書いてゐる」との主題とも考えにくい。「自分が書いてゐるのである」の話題である。この用例は「〈これ〉は、〈 〉のである」という形で、非常に単純化された「のだ」文になっている。「これ」の指す内容はこの例文のような名詞とは限らず、前文までの内容で話題となるものを指す。

「これは」という語は「のだ」文の話題として文頭におかれる場合が多く、その場合は単純で典型的な形の「のだ」文を作る。この用例のように、「これ」の指す内容が具体的な物・事である場合は、挿入的説明になる。

2.5 テキストにおける「のだ」文の使用法の傾向と、テキストによる特徴

「のだ」文より前にある部分を話題にしている「のだ」文は、その前の部分を別の角度から言い換えるような文が多くなる。意味的機能としては、前の部分の事情説明になっている場合が多い。このような場合、語りは説明的で話題の内容が詳しくなっている。前の部分に対してさらに別な情報を付加しているからである。このとき、前の部分の一部の物・事を話題にした「のだ」文は、言い換えや事情説明というよりはその物・事についての解説で、挿入・付け加えということになり、ストーリーや状態描写の展開を一時保留することになる。それに対し、「のだ」文の内部に話題がある場合は、文章の流れからみるとやや唐突な感じを与える。これは、話題が事前にないまま、「のだ」文になって新たな話題ができていたためだと考えられる。文章によっては、そこで文章の流れが変わる場合もある。

また、話題にあたる部分の範囲が広い場合は、「のだ」文はその話題の内容を抽象的にまとめて表すことにもなる。話題が「のだ」文から離れた位置にある場合は、「のだ」文がそれまでのひとまとまりの内容の論理的帰結になっていて、そこで内容が切れる指標になっている。このように多くの文が関係して「のだ」文に至る場合は、内容のまとまりや帰結を表

すことにもなっている。

今まで見てきたところから、話題の性質の違いによって、「のだ」文の文章中での働きが異なってくることがわかった。

調査した漱石の小説テキストの「のだ」文全 140 例中、前の文が話題になっているもの 77 例、挿入的解説 18 例、複数の文が話題になっているもの 13 例、離れた位置にある話題に対して「のだ」文とその前のいくつかの文で素材を提示しているもの 30 例、伝聞情報 2 例であった。「のだ」文の内部に話題があるもの、状況を話題としているものは確認できなかった。

調査した『青年』の「のだ」文全 168 例中、前の文が話題になっているもの 80 例、挿入的解説 6 例、複数の文が話題になっているもの 16 例、離れた位置にある話題に対して「のだ」文とその前のいくつかの文で素材を提示しているもの 4 例、伝聞情報 14 例、「のだ」文の内部に話題があるもの 37 例、漠然とした状況を話題としているもの 11 例であった。複数の文が話題になっている場合の、その話題にあたる複数の文というのは、多くが作中人物の会話である。会話に対して、「のだ」文で提示し抽象化するのである。

『青年』では、会話に関するもの以外で複数の文に関わる「のだ」文は少なく、あっても話題と「のだ」文はあまり離れていない。また、「のだ」文の内部に話題があるものが比較的多く存在し、その場の状況を話題とする用例も何例もある。このことから、『青年』の「のだ」文は、内容の帰結部分で用いられることが少なく、直前の内容に対する説明として働くことやその「のだ」文の内容自体を強調する傾向があるといえる。つまり、文章の流れを重視するのではなく、比較的狭い範囲を対象にして簡潔に強調し説明したいときに使われる傾向にあるのである。それに対して、漱石の『三四郎』『それから』『道草』の 3 テキストは、「のだ」文以前に必ず話題があり、なおかつその話題が何であるのかがわかりやすいものが多い。論理的帰結として用いられることもあり、「のだ」文についてだけいえば論理的で明解な場合が多い。文章の流れを重視して滞らせないような文体に寄与していると考えられる。また、『青年』に比べて「のだ」文が少ないので、「のだ」文によって受け手に強調して認識させることが少ないといえる。

漱石テキストの中でも、作品による傾向の違いも多少見られた。『それから』『道草』の「のだ」文は、基調となるストーリーと離れたエピソード・解説部分に用いられることが多い。特に『それから』は、エピソード・解説が挿入されることが多く、そのような部分で「のだ」文が使われることが多いのである。やはり、認識させようという意識がはたらく「のだ」文は、解説としてはたらくことが多いからであろう。また、『それから』では、挿入されるエピソード・解説が多いが、その場合、〈離れた位置にある話題に対して「のだ」文とその前のいくつかの文で素材を提示している用例〉を使って、元のストーリーに復帰するということが目立った。

それに比して、『三四郎』での「のだ」文は、エピソード・解説部分での使用がない。これは、『三四郎』という作品にそもそもエピソード・解説部分が少ないことが原因していると思われる。『三四郎』に「のだ」文が少ないことの一因もそこにあるだろう。

3 むすび

1 節では、「のだ」文の非タ形・タ形の結びつきを、「～ルのだ」「～タのだ」「～ルのだった」「～タのだった」の4通りにわけ、主に『雪国』と『潮騒』においてテキストに与える影響を検討した。さらに2 節では、「のだ」文とコンテキストとの関係を漱石と鷗外のテキストで検証した。

ここまで第1章、第2章、第3章において、主に地の文を問題にしてきた。しかし、実際の小説テキストは地の文と引用された発言部分から成り立っている。そして、地の文は「語り」の言語であるが、発言は日常の「報告」の言語に属しており、この二つは性格が異なる。このようなことから、次の第4章では、この異なる言語が小説テキストではどのように組み合わせられているのか、検証することとした。

【注】

- 1) 「のだ」と「のである」の語形の違いによる意味の違いについては、今後の課題としたい。
- 2) 丹羽（1992）、吉田（1988）などに詳細な分析が見られる。
- 3) 1章 3.2.3 節で示したように、小説の地の文には「作中人物が語る形式であるが、作中人物が言語化していない内容」の場合がある。この場合は、受け手を想定していないフィクションの表現となる。
- 4) 三島由紀夫（1974）『作家論』中央公論（初出は1964）の解説による。
- 5) 「認識させよう」という言い方は、野田（1997：100）の用語を使用したものである。

第4章 地の文と発言との関係

語り手が物語世界を語る際、作中人物の生の声をそのまま挿入することはごくふつうのことである。しかし、語り手の語りと作中人物の発言とは性格がかなり違うものである。もちろん表現者が違う。受け手についても違いがある。語り手の語りの受け手は想定された聞き手であるが、作中人物の発言の聞き手は作中の人物（発言者自身も含む）である。

確かに、地の文の語りの中には、作中人物の立場からの語りであつたり作中人物の言葉ではないかと思われたりするものもある。しかし、これらは作中人物の直接の発言をそのまま取り込んだものではない。あくまでも語りの中のバリエーションとして考えられる。その点で、かぎ括弧で発言を生の形で取り込んだものとは異なる。

第4章では、語り手の語り（地の文）の中に、かぎ括弧で示された生の発言がどのように埋め込まれているか、その埋め込まれ方の諸相を検討し、大まかな分類を試みる。そして、地の文と発言部分との関係を検討する。ここでは、これまで中心的に扱ってきた夏目漱石『三四郎』『道草』の二つのテキスト中心とした範囲内での検討とした。

1 発言挿入の諸相

1.1 独立発言と引用構文発言

かぎ括弧で物語世界の人物の生の声を挿入する場合、大きく次の二つの形式に分類できる。

一つには、助詞「と」などを発言の後に付し引用構文として挿入する場合である。次の例のような形式となる。

- 【1】 「久し振に何か奢りませうか」と姉の顔を眺めながら云つた。

（『道草』五：16）

もう一つは、かぎ括弧だけで一文とみなされる場合である。次の例のような形式となる。

- 【2】 健三は貰ふとも貰はないとも云はずにたゞ苦笑してみた。すると姉は何か秘密話でもするやうに急に調子を低くした。

「実は健ちゃん、御前さんが帰つて来たら、話さう話さうと思つて、つい今日迄黙つてたんだがね。健ちゃんも帰りたてゝ嘸忙がしからうし、夫に姉さんが出掛けて行くにしたところで、お住さんが居ちや、少し話し悪い事だしね。さうかつて、手紙を書かうにも御存じの無筆だらう……」

姉の前置は長たらしくもあり、又滑稽でもあつた。小さい時分いくら手習をさせても記憶が悪くつて、どんなに平易しい字も、とうとう頭へ這入らず仕舞に、五十の今日迄生きて来た女だと思ふと、健三にはわが姉ながら気の毒でもあり又うら恥づかしくもあつた。

「それで姉さんの話つてえな、一体どんな話なんです。実は私も今日は少し姉さんに話があつて来たんだが」

「さうかい夫ちや御前さんの方のから先へ聴くのが順だつたね。何故早く話さなか

つたの」

「だつて話せないんだもの」

「そんなに遠慮しないでもいいゝやね。姉弟の間ぢやないか、御前さん」

姉は自分の多弁が相手の口を塞いでゐるのだといふ明白な事実には毫も気が付いてゐなかつた。

（『道草』六：18-19）

以上二つの場合の、引用構文の形式をとる場合の発言部分を「引用構文発言」、発言だけで一文とみなされるものを「独立発言」と、本稿では便宜上呼ぶこととしたい。

引用構文発言の場合は、発言は文の一部でありあくまで語りの中に引用の形式で位置づけられており、語りの形式は保たれている。それに対して、独立発言は語りの中に語りと同列の立場で位置している。この点で違いがある。

引用構文発言は、【3】のようなかぎ括弧で示されない引用構文と形式的には連続しており、違いはかぎ括弧により生の発言そのままであるように見えるということである。

【3】 彼は何う勘定しても六十五六であるべき筈の其人の髪の毛が、何故今でも元の通り黒いのだらうと思つて、心のうちで怪しんだ。

（『道草』一：4-5）

この点から考えても、引用構文発言は独立発言と違い、発言部分が地の文と性質を異にしている、形式上問題なく地の文の中に取り込まれているといえる。

1.2 発言挿入の形式

林（1962）では、夏目漱石『坊つちやん』の「会話文章の表記形式」として、次のような分類をしている。

オ イ コ ミ 式—「引用符号のカギを全然用いない流し書きのもの。（中略）なまのことばの引用だという保証はない」

タタミカケ式—「カギでくくったことばだけを、戯曲のように並べて、地の文を全く書かない形式のもの」

タタミコミ式—「会話のことばはカギでくくってあるが、改行はせず、追い込んで書いてあるもの」

→かぎ括弧の部分は文の一部として扱われている。

混 合 形 式—「タタミコミ式とタタミカケ式との間に、また両者の混合した形式がある」

→かぎ括弧で括った部分が中心だが、〈と……〉のような引用をあらわす地の部分が接続していて、会話の主が変わるたびに改行されているものを指すらしい。

（※ 「→」で示した部分は石出注）

林（1962）の例文を見る限り「タタミコミ式」「混合形式」は次のようなものだと考えられる。「タタミコミ式」は、かぎ括弧で括られた「会話」部分が文の中の一部として扱われている場合（本研究でいう引用構文発言）である。「混合形式」は、同様に「会話」部分

が文の一部であるが、「会話」を含んだ文がその都度改行されているものを指す。また、引かれている例を見ると、「タタミコミ式」では地の部分が「会話」部分の前後にあり、「混合形式」では前あるいは後のいずれかになっている。

この分類を参考にした上で、地の文との関わり方により発言部分は次のように分類されると本研究では考える。

- 1 引用構文の一部（かぎ括弧がない場合）
- 2 引用構文発言
 - 2.1 発言の前後に地の部分がある場合
 - 2.2 発言の前に地の部分がある場合
 - 2.3 発言の後に地の部分がある場合
- 3 独立発言
 - 3.1 発言を指し示す指示語が地の文にある場合
 - 3.1.1 指示語が発言の前にある場合
 - 3.1.2 指示語が発言の後にある場合
 - 3.2 発言の引用を示す動詞(句)が地の文にある場合
 - 3.2.1 引用を示す動詞(句)が発言の前にある場合
 - 3.2.2 引用を示す動詞(句)が発言の後にある場合
 - 3.3 発言の引用を示す指標が何もない場合

林（1962）の「タタミカケ式」は、本稿でいう独立発言の連続を指摘しているが、独立発言が現れるのは複数の発言が連続するときとは限らないので、本稿では上記3のようにした。また、林（1962）でも用例が挙げられているが、2.2の用法は現在の小説テキストではほとんど見かけられないもので、次のようなタイプである。

- 【4】野々宮君はさつき女の立つてみた辺で一吋留つて、向ふの青い木立の間から見える赤い建物と、崖の高い割に、水の落ちた池を一面に見渡して、
- 「一寸好い景色でせう。あの建築の角度の所丈が少し出てゐる。木の間から。ね。好いでせう。君気が付いてゐますか。あの建物は中々旨く出来てゐますよ。工科もよく出来てるが此方が旨いですね」

（『三四郎』二の五：304）

独立発言において下位分類をしたのは、地の文における発言の位置づけられ方に種々の差が認められたからである。

2 引用構文発言

引用構文発言は、既に述べたように、語り手の語りの中に位置づけられたものである。そのため、独立発言に比べると相対的に発言の強調度が低いといえる。発言は一文の中の一部であり、その形式上発言だけが強調されるわけではないからである。しかし、多くのテキストでは発言の前後で改行を行い、発言部分を視覚的に強調することが多い。

2.1 改行の方法

夏目漱石『三四郎』においては【5】のように発言の前で改行していることが多いが、テキストによって違いがある。次の【6】は宮本輝『道頓堀川』の例であるが、発言の前後で改行がなされている。

- 【5】 三四郎は無然として読まないと答へた。野々宮君はたゞ
「さうですか」と云つた許りである。しばらくしてから、
「此空を写生したら面白いですね。——原口にでも話してやろうかしら」と云つた。三四郎は無論原口と云ふ画工の名前を知らなかつた。

（『三四郎』二：305）

- 【6】 男は執拗に邦彦に視線を注ぎ、すれちがいざまに、ためらいつつ、
「安岡はんの、……息子はんと違いまっか？」
と声をかけてきた。邦彦は雑踏の中で立ち停まり、うしろから押し寄せてくる人波に抗いながら、
「ええ、安岡ですが……」
と言った。

（『宮本輝全集1』（1992）「道頓堀川」三：225、※初出は1981）

この改行のため視覚的に発言が強調されることは明らかで、この場合の発言は地の文の一部として位置づけられながら、同時に強調されるということになっている。【5】の『三四郎』の例は自筆原稿でも改行がなされており、作者が意識して発言を視覚的に強調したと考えられる。しかし、【6】の例は、純粹に作家の意図どおりなのか、編集の段階のものなのか断言することができない。

また、この形式は、視覚的印象として独立発言と同様に発言を強く印象付けるが、形式的には独立発言とは異質である。

次に、参考として漱石『三四郎』における改行についての傾向を見てみたい。

『三四郎』においては、原則的には発言の前で改行されている。発言の前に地の文のある引用構文発言であっても、発言は新しい行に入る。しかし、例外として「ええ」「どうです」をはじめとした比較的短い引用の場合は発言の前で改行されないこともある。この例外は二章までの前半部に多く見られる。また、一文中に二つ以上の引用がある場合には改行されない。また、書物のタイトルや文章引用などの、発言でないかぎ括弧部分は改行されない。

発言の前に地の文がない場合は、発言のはじめから新しい行になるのが原則だが、追い込んである場合もある。ここにどのような規則があるのかは不明である。

発言の後に改行するという規則はないようである。また、発言を含む文が終わって次の文に移る場合も、他の文と同様に改行されないことが多い。しかし、発言引用のカギ括弧部分が比較的多くある場面で、引用を示す述語が「云つた」「聞いた」など単純な場合は、改行されることもある。また、発言を含んだ文が次にも続く場合には、次の文の発言部分の前までは改行せず、発言部分になるときに改行するということがよく見られた。一方、発言を含んだ文の後に地の文が連続する場合は、改行されることはほとんどない。もちろん、次の文が発言から始まる場合や、段落が変わる場合は改行される。

これらの傾向を総合してみると、発言が中心の場面では発言を目立たせる工夫が行われていると考えてよいであろう。このように発言中心の場面と地の文中心の場面では書き方にも違いがあるように思われる。

2.2 引用構文発言の特徴

引用構文においては、発言と地の部分の量のバランスも、その文の印象に関わっている。その量に明らかな違いがあればその文が発言中心なのか語り中心なのかということに影響してくる。さらに、前後の文との文脈も考慮に入れることにより、その文の性格が明らかになる。

その中である程度の傾向を計ることができるのが、発言の前後に地の部分があるかどうかである。発言の前と後に地の部分がある場合は、地の文が中心で発言は地の文の一部になっていると認識されやすい。これに対して、発言の後にだけ簡単な地の文あるときは、発言の挿入を示すことが中心の文だと認識される。また、発言の前に地の部分がない場合は前の文との関係を示す指標がないことが多いので、コンテキストによって関係が明らかでない限り、発言部分の内容によって前文とつながりをもっていることになる。そのため、発言の内容によって筋が展開していくことになり、発言が中心の文だと認識されやすい。また、発言の後の地の部分が長く続き、それをきっかけに地の文中心の展開になっていく場合もある。

そうはいうものの、引用構文発言は形式的には地の文（語り）の中に位置づけられるものであり、発言挿入が引用構文発言だけからなるテキストあるいは引用構文発言が多いテキストというのは、構成意識が強い語りという側面を強く持つことになる。

次に、引用構文発言の述語の部分について述べたい。林（1962）でも指摘されている¹¹が、漱石テキストの特に前期テキストでは、発言を引用した場合のその文の述語の部分に、発言の性質を説明するような表現がくることがしばしば見られる。独立発言が連続している会話部分ではこのようなことはできないので、独立発言の連続している部分と大きく違うところである。次の例のように、やや過剰気味の情報を与えて語ることにより、饒舌な語りという印象を与えることになり、語り手の語りの側面が強く感じられる場合がある。

- 【7】あまり気の毒だから、「行くことは行くが、じき帰る。来年の夏休みにはきっと帰る」と慰めてやった。それでも妙な顔をしているから「何をみやげに買って来てやろう」と聞いてみたら「越後の笹飴が食べたい」と言った。越後の笹飴なんて聞いたこともない。第一方角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と言って聞かしたら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。

（※ 林（1962）に掲げられている例。下線も林（1962）
『坊っちゃん』一：260）

しかし、独立発言が挿入されている場合でもこれに似た形式をとることができる。それは、発言を指し示す指示語がある場合であるが、後に述べることとする。

2.3 どのようなとき引用構文になるのか

引用構文発言の最も大きな特徴は、一文の中に発言が位置づけられるということである。そのため、発言が引用構文発言の形式で挿入された場合、発言は地の文の語りの中に含まれていると認識される。結果的に、語りの形式を保つことになる。独立発言は地の文（語り）から独立して存在しているので、語りと発言部分が別に存在することになる。語りの形式だけでテキストが存在しているとはいえない。

『三四郎』においては、シリアスな場面では独立発言が多く、語り手が傍観者として語る場面や、作中人物三四郎の知覚で語りが進む場合に、2.2で示したように発言の性質を説明しながら引用構文発言を使うことが多い。この場合、語り手は、発言も含めてその場の状況を把握し、その把握にしたがって発言を語りの中に入れて語っている。または、作中人物のとらえた状況を作中人物の知覚にしたがって語っている。

次の【8】の下線部は、引用構文発言である。下線部の2文目の「…と三四郎が聞いた」の部分は語り手の立場の語りであるが、下線部全体を通しては三四郎の知覚にしたがった語りといってよいだろう。ここでは、発言を語りの中に取り込んで、三四郎の知覚に沿って語っている。

【8】 「翻訳とは……」

「自然を翻訳すると、みんな人間に化けて仕舞ふから面白い。崇高だとか、偉大だとか、雄壮だとか」

三四郎は翻訳の意味を了した。

「みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻訳する事の出来ない輩には、自然が毫も人格上の感化を与へてゐない」

三四郎はまだあとが有るかと思つて、黙つて聞いてゐた。所が広田さんは夫で已めて仕舞つた。植木屋の奥の方を覗いて、

「佐々木は何をしてゐるのか知ら。遅いな」と独り言の様に云ふ。

「見て来ませうか」と三四郎が聞いた。

「なに、見に行つたつて、それで出て来る様な男ぢやない。それより此処に待つてゐる方が手間が掛らないでいい」と云つて枳殻の垣根の下に跼がんで、小石を拾つて、土の上へ何か描き出した。呑気な事である。与次郎の呑気とは方角が反対で、程度が略相似てゐる。

（『三四郎』四の三：350-351）

次の【9】は、シリアスな場面であり、独立発言が多く用いられている。その中で、実線下線部の引用構文発言は地の文（語り）の一部として機能しているが、分量は少ない。

【9】 三四郎の脱いだ帽子の影が、女の眼に映つた。二人は説教の揭示のある所で、互に近寄つた。

「何うなすつて」

「今御宅迄一寸出た所です」

「さう、ぢや入らつしやい」

女は半ば歩を回しかけた。相変らず低い下駄を穿いてゐる。男はわざと会堂の垣に

身を寄せた。

「此所で御目に掛かればそれで好い。先刻から、あなたの出て来るのを待つてゐた」

「御這入りになれば好いのに。寒かつたでせう」

「寒かつた」

「御風邪はもう好いの。大事になさらないと、ぶり返しますよ。まだ顔色が好くない様ね」

男は返事をせずに、外套の隠袋から半紙に包んだものを出した。

「拝借した金です。永々難有う。返さう返さうと思つて、つい遅くなつた」

美禰子は一寸三四郎の顔を見たが、其儘逆らはずに、紙包を受け取つた。然し手に持つたなり、納はずに眺めてゐる。三四郎もそれを眺めてゐる。言葉が少しの間切れた。やがて、美禰子が云つた。

「あなた、御不自由ぢや無くつて」

「いゝえ、此間から其積で国から取寄せて置いたのだから、何うか取つて下さい」

「さう。ぢや頂いて置ませう」

女は紙包を懷へ入れた。其手を吾妻コートから出した時、白い手帛を持つてゐた。鼻の所へ宛てゝ、三四郎を見てゐる。手帛を嗅ぐ様子でもある。やがて、其手を不意に延ばした。手帛が三四郎の顔の前へ来た。鋭い香がぷんとする。

「ヘリオトロープ」と女が静かに云つた。三四郎は思はず顔を後へ引いた。ヘリオトロープの罎。四丁目の夕暮。迷羊。迷羊。空には高い日が明らかに懸る。

「結婚なさるさうですね」

美禰子は白い手帛を袂へ落した。

「御存じなの」と云ひながら、二重瞼を細目にして、男の顔を見た。三四郎を遠くに置いて、却つて遠くにゐるのを氣遣い過ぎた眼付である。其癖眉丈は明確落ちついてゐる。三四郎の舌が上顎へ密着して仕舞つた。

女はやゝしばらく三四郎を眺めた後、聞兼る程の嘆息をかすかに漏らした。やがて細い手を濃い眉の上に加へて、云つた。

「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」

聞き取れない位な声であつた。それを三四郎は明らかに聞き取つた。

（『三四郎』十二の七：602-604）

シリアスな場面では独立発言が挿入されることが多いが、これは、物語世界の様子を忠実にそのまま見せようとするため、語り手の語りをとおさずに、直接発言を埋め込んだと考えられる。それに対して、独立発言が多くない部分では、語りの中に発言を位置づけその発言の性質を主観的に付加していく、という形式をとっている。このようなことから、引用構文発言で発言を挿入する場合は、語り手が語ることを中心にした部分だと推定される。

多くの場合はその中間で、ある程度物語世界の様子を忠実に見せつつ、主観的な見方を入れながら語っていく。次の【10】では引用構文発言と独立発言が混在している。引用構文発言の述語部分で発言の性格を過剰に叙しているため、語り手の饒舌さが感じられる。後半には独立発言を連続させ、物語世界の会話をそのまま引用している。

【10】 三四郎は何とか云つて、挨拶をしようと思つたが、あまり時間が経つてゐるので、どう口を利いていゝか分らない。たゞ帽子を取つて礼をした。与次郎に対しては、あまり丁寧過ぎる。広田に対しては、少し簡略すぎる。三四郎は何方付かずの中間に出た。すると与次郎が、すぐ、

「此男は私の同級生です。熊本の高等学校から始めて東京へ出て来た――」と聴かれもしない先から田舎ものを吹聴して置いて、それから三四郎の方を向いて、

「是が広田先生。高等学校の……」と訳もなく双方を紹介して仕舞つた。

此時広田先生は「知つてる、知つてる」と二遍繰り返して云つたので、与次郎は妙な顔をしてゐる。然し、何故知つてるんですか忤と面倒な事は聞かなかつた。たゞちに、

「君、此辺に貸家はないか。広くて、奇麗な、書生部屋のある」と尋ねだした。

「貸家はと……ある」

「どの辺だ。汚なくつちや不可ないぜ」

「いや奇麗なのがある。大きな石の門が立つてゐるのがある」

「そりや旨い。どこだ。先生、石の門は可いですな。是非それに仕様ぢやありませんか」と与次郎は大いに進んでゐる。

「石の門は不可ん」と先生が云ふ。

「不可ん？ そりや困る。何故不可です」

「何故でも不可ん」

「石の門は可いがな。新しい男爵の様で可いぢやないですか、先生」

与次郎は真面目である。広田先生はにやにや笑つてゐる。

(※ 実線の下線部が引用構文発言、点線の下線部が独立発言である。)

(『三四郎』四の二：348-349)

2.4 引用構文発言の特徴

引用構文発言は、地の文の一文の中に発言が引用されているという形式であるため、発言は地の文を構成する一部という扱いとなり強調されない。また、引用発言は地の文の一部であるため、発言を引用していても独立発言と比べて説明的な印象を与える。

このようなことから、地の文と強く関連づけられるときには引用構文になりやすい。長い発言引用は、地の文の一文の中で関連付けることが難しいので、引用構文になりにくい。短い引用の方が引用構文になりやすい。また、地の文が多い部分に発言が引用される場合は、地の文に関連付けられることが多いので引用構文になりやすいといえる。

引用構文発言は、語り手の、あるいは作中人物の知覚を利用している語りの場合は作中人物の、主観的な状況把握のひとつとして語りの中で語られる。独立発言は、発言だけを地の文から独立させてテキストの中に挿入しているので、発言をそのままの形式で聞き手に直接見せている。この違いによって、表現効果も異なっている。引用構文発言は、地の文一文の中に収められるので、地の文一文が長くなる傾向がある。そのため、饒舌な印象を与える。特に、「と云つた」などの引用表現部分が詳しい時には、情報が多い印象を

与えられ、饒舌な印象が強くなる。

3 独立発言

独立発言は、引用構文発言と異なり、発言が地の文の中に投げ出されたように挿入されている。そのため、引用構文と比べて発言が挿入されていることが目立ち、発言が語りから独立して直接聞き手に向かって示されている。

独立発言は、地の文との関係によっていくつかに分類することができ、その分類ごとに発言の独立の程度が違い、独立発言として挿入される理由も違うと考えられる。その中で、単純な理由で独立発言になっている場合がある。それは、引用された発言が長い場合である。この場合は、発言の前後に地の部分がついていても長すぎて一つながりの文の内容として認識できないので、独立発言にすると考えられる。その他の場合については、その種類ごとに見ていきたい。

3.1 独立発言で、発言挿入の指標のある場合

独立発言を地の文に挿入する場合、地の文に発言を位置づけるような表現がある場合がある。その場合を「発言挿入の指標のある場合」と呼ぶことにする。この指標のある場合の、発言挿入のされ方について検討していきたい。大きくは、発言を示す指示語が地の文にある場合と、発言の引用を示す動詞句（「云った」など）が地の文にある場合がある。

3.1.1 発言を示す指示語が地の文にある場合

<「(発言)」／こう言った。²⁾><こう言った。／「(発言)」>や、<「(発言)」／こんなことを言った。><こんなことを言った。／「(発言)」>のように、発言を指し示す指示語と動詞句、発言を指し示す指示語と名詞句という形式が現れる場合がある。

このような発言を指し示す指示語が地の文にある場合は、間接的ではあるが発言は地の文の語りに取り込まれているといえる。指示語の部分に発言が置き換えられるからである。この点で、この場合の独立発言は<「(発言)」と言った>という引用構文発言と連続的である。なお、指示語は具体的に色々な語との結びつきがあり、<「(発言)」／この言葉が…>のように体言と結びついて主語になっている場合などもある。

この場合に特徴的なのは、発言を提示した上で地の文においてその発言に言及するという、独立語を含む構文と同じ形式をもっているということである。このため、発言はある程度の独立性をもち強調されながら、同時に地の文の中にも取り込まれることになる。しかし、発言挿入の指標なく独立発言が連続しているときのような、事態のすばやい展開の叙述はできない。

また、この発言を指し示す指示語が発言の前にあるか後ろにあるかで地の文との関わり方に違いがある。

【11】は指示語が発言の前にある場合である。

【11】野々宮君は笑ひながら光るでせうと云つた。さうして、斯う云ふ説明をして呉れた。
「昼間のうちに、あんな準備をして置いて、夜になって、交通其他の活動が鈍くな

る頃に、此静かな暗い穴倉で、望遠鏡の中から、あの眼玉の様なものを覗くのです。さうして光線の圧力を試験する。此年の正月頃から取り掛つたが、装置が中々面倒なのでまだ思ふ様な結果が出て来ません。夏は比較的堪へ易いが、寒夜になると、大変凌ぎにくい。外套を着て襟巻をしても冷たくて遣り切れない。……」

三四郎は大いに驚ろいた。驚ろくと共に光線にどんな圧力があつて、其圧力がどんな役に立つんだか、全く要領を得るに苦しんだ。

(『三四郎』 二の二：297)

(※ は発言を指し示す指示語を含む部分。下線部は該当する発言。)

「さうして、斯う云ふ説明をして呉れた。」という地の文と次の発言とで意味的に一つのまとまりになっているが、発言を指し示す指示語を含む地の文の方が前にあるため、さらにその前の文との文脈的な連続性があり、文脈的に唐突な感じが無い。また、発言の後の地の文は、このひとまとまりの部分を前提として、これに関係する内容が続くことが多い。このようなことから、発言を指し示す指示語が発言の前にある場合は語りがスムーズに行うことが多い。また、この形式は一種の倒置法であるため、発言を挿入したということが強調されることになる。

これに対して、【12】は発言挿入を示す指標が後ろにある場合であるが、地の文とそれに続く発言との間に文脈的に多少の溝が感じられる。

【12】 いつそ此儘で夜を明かして仕舞ふかとも思つた。けれども蚊がぶんぶん来る。外ではとても凌ぎ切れない。三四郎はついに立つて、革鞆の中から、キヤラコの襦衣と洋袴下を出して、それを素肌へ着けて、其上から紺の兵児帯を締めた。それから西洋手拭を二筋持った儘蚊帳の中へ這入つた。女は布団の向ふの隅でまだ団扇を動かしてゐる。

「失礼ですが、私は疝性で他人の蒲団に寐るのが嫌だから……少し蚤除の工夫を遣るから御免なさい」

三四郎はこんな事を云つて、あらかじめ、敷いてある敷布の余つてゐる端を女の寐てゐる方へ向けてぐるぐる捲き出した。

(『三四郎』 一の四：281)

この例では、発言とその後の地の文で一まとまりになっている。発言の前の地の文と発言の後の地の文は文脈としては繋がっている。つまり、一まとまりとして見れば文脈の連続性はある。しかし、発言の前の地の文と発言の間には唐突さがある。それまでは状況の描写で会話がないのに、何の説明もないまま、発言という語りと質の違うものが提示されたからである。独立発言が挿入されるときに、この場合のように前触れのような地の文がないと、唐突さの感じられることが多くなる。しかし、この性質を利用して語りや話題に変化をもたせることもできる。

形式として、この発言を指し示す指示語と「云う」などの引用動詞句が組になって地の文に示されて、発言が挿入されることが多く見られる。

発言を指し示す指示語は、連体修飾の形で用いられることも多く、次のように発言の引用を示す動詞句とともに用いられない場合もある。

【13】 「開けて見たって何が出て来るものか」

彼の心は此一句でよく代表されてゐた。

(『道草』 三十一：92-93)

この場合も、基本的な性格は引用を示す動詞句とともに用いられる場合と同じだが、発言が地の文から独立している印象がやや強調されるという特徴がある。

3.1.2 引用を示す動詞句がある場合

地の文に発言が挿入される時、発言の引用を示す動詞句（例えば、「言う」「聞く」「促す」など）が現れることが多い。引用構文では、その述部に「～と言った」、「～と聞いた」などの形で現れるものであるが、独立発言の場合も発言の前後の地の文に現れることが多い。地の文と発言部分を結ぶものとして、注目すべきものである。

藤田（2000）においては、引用構文における引用動詞句は第Ⅰ類と第Ⅱ類に分けられ、第Ⅰ類は「述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す」、第Ⅱ類は「述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す」と規定されているが、本研究では第Ⅰ類にあたるものを独立発言と地の文とを結ぶ手がかりとして着目し、動詞句だけでなく、挿入された発言を抽象化している表現を広く取りだし分析の対象とした。このことをもとに、地の文との関係と、発言挿入の必然性によって、独立発言の段階を考えてみると、かなり詳しく抽象化する場合から、「言う」などの単に発言があったことを示す程度の抽象化までさまざまな段階があることがわかった。

最初の段階は、次の下線部の例のように引用表現が詳しく発言を限定している場合である。

【14】 健三は黙つてゐた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲けるには本に限るやうな事を云つた。

「御祝儀は済んだが、〇〇が死んだ時後が女丈だもんだから、実は私が本屋に懸け合ひましてね。それで年々若干と極めて、向ふから収めさせるやうにしたんです」

「へえ、大したもんですな。成程何うも学問をなさる時は、それ丈資金が要るやうで、一寸損な気もしますが、さて仕上げて見ると、つまり其方が利廻りの好い訳になるんだから、無学のものはとても敵ひませんな」

「結局得ですよ」

彼等の応対は健三に何の興味も与へなかつた。

(『道草』 十七：49-50)

この場合、地の文だけである程度の情報が提出されている。【14】の下線部は内容を要約して「～やうな事」としているため、発言の意図や情報が十分に与えられた抽象化といえる。この場合は、下線部以後のかぎ括弧「」部分が具体的発言であるが、この発言部分（ここでは会話になっている）で重要なのは内容よりもそのいやらしい言い方であり、かりに発言がなくても物語展開上の情報に大きな影響はない。そのくらい発言要約部分は詳しい。

最後の段階は、次のような例で、挿入された発言は<云ふ>という動作として抽象化されている。

【15】 今其所へ行つて見たら定めし驚ろく程變つてゐるだらうと思ひながら、彼はなほ二十年前の光景を今日の事のやうに考へた。

「ことによると、良人では年始状位まだ出してゐるかも知れないよ」

健三の帰る時、姉は斯んな事を云つて、暗に比田の戻る迄話して行けと勧めたが、彼にはそれ程の必要もなかつた。

（『道草』八：24-25）

この場合、発言内容は地の文の抽象化された表現から類推できないので、言い方だけでなく発言の情報自体が物語に関わっている。

ここに示した最初と最後の段階の間に色々な抽象化表現が存在する。長い表現としては、「其日外出した折の事を食事の時話題に上せた」のように個別的であるが発言内容そのものにふれていないもの、「言い訳がましい答をした」のように発言の内容にはふれないものの発言の意図がわかるもの、「談話は中々元へ戻つて来なかつた」のように複数の発言からなる会話の性質を抽象化したものなどがある。比較的短い表現の抽象化としては「催促した」「促した」のような発言の意図がわかりやすいもの、「斯ういふ述懐が起こつた」「こんな評を加へた」のような発言の意図がそれほどはっきりしないものなどがある。地の文の引用表現において、発言の意図や性格が詳しく示されればされるほど、発言そのものの情報としての必要性は減少していくと考えられる。

どの段階にせよ、地の文において発言があったことが示された上に、発言が挿入される。同じ行為が抽象的と具体的とで二回表現されることになる。しかし、発言部分は地の文に取り込まれているわけではなく、自立している。この結果、発言と地の文とが並べられることによって、物語が展開していくという形式になっている。

この場合の表現特徴は、展開がスピーディにならず、説明的な描写になるということである。

発言引用を示す動詞句等がなく説明的でない形式で発言挿入がなされる場合、発言挿入が自然に感じられるようなコンテキストが必要になる。しかし、引用を示す動詞句等がある場合は、説明的であるため、コンテキストにそれほど頼らずに発言が挿入できる。このため、独立発言の中でも、一つの発言だけを挿入する場合や地の文が多い部分で発言が挿入される場合には、この形式がよく使われる。しかし、発言が連続する場合の、中間の発言の挿入時にはこの形式はあまり使用されない。このことは、引用構文発言の場合と連続的であるといえる。

また、地の文に引用を示す指示語はないが引用を示す動詞句がある場合の中には、次の例のように、独立発言が地の文の中の一部の格にあたると考えられるものがある。

【16】 女はしばし逡巡つた。手に大きな籃を提げてゐる。女の着物は例によつて、分らない。ただ何時もの様に光らない丈が眼についた。地が何だかぶつぶつしてゐる。夫に縞だか模様だかある。その模様が如何にも出鱈目である。

上から桜の葉が時々落ちて来る。其一つが籃の蓋の上に乗った。乗ったと思ふうちに吹かれて行つた。風が女を包んだ。女は秋の中に立つてゐる。

「あなたは……」

風が隣りへ越した時分、女が三四郎に聞いた。

「掃除に頼まれて来たのです」と云つたが、現に腰を掛けてぽかんとしてみた所を見られたのだから、三四郎は自分でも可笑しくなつた。

(『三四郎』四の十：370)

(※ 下線部が該当する発言、 が引用を示す動詞句)

上の例の場合、意味としては「女が三四郎に『あなたは……』と聞いた」ということになる。この場合、発言部分が地の文の中に取り込まれているとは言えないが、地の文と発言部分の関係が深いといえる。

地の文の語りと独立発言という二つの異質な言語によってテキストはできているが、それぞれお互いを補い合っている。原則としては、発言は、地の文の引用を示す動詞句よりも具体的な物語世界のそのままの情報を提供している。独立発言だけを並べた戯曲は具体的な場面だけで成り立っている。しかし、小説はそれだけではなく、地の文による抽象的表現も混在している。両者が補い合っているために、一方だけでは不十分な情報になることが多い。引用を示す動詞句がある場合は、不十分な地の文と不十分な発言がひとまとまりとなり一つの表現となっている。しかし、お互いが補いすぎている場合は過剰な印象を与えることにもなる³⁾。

3.2 発言挿入を示す指標がない場合

発言を指し示す指示語も発言の引用を示す動詞句もないまま独立発言が現れることもよくある。この場合は、発言の引用を示す動詞句があるときよりも発言がより独立していて、発言が持っている情報や役割は他の部分で示されていないし、もちろん発言は地の文の中に取り込まれていない。

発言は一つの動きのある行為であるため、引用を示す動詞句や発言を指し示す指示語がないまま、発言や会話が挿入されると、臨場感やストーリー展開のスピード感を得ることができる。特に、独立発言が連続して会話を形成している場合には、その会話の交わされる速さで事態は進行していく。

このスピード感のある進行は、「言う」などの引用表現が省略されたためともいえる。しかし、その結果として、発言が語り手の語りから投げ出されて独立した状態になり、物語世界の現場の展開が再現されているともいえる。しかし、そのような発言が地の文に挿入されても、コンテキストによりほとんど不自然さを感じずに読むことができる。そのようにさせる地の文と発言とのしくみを考えてみたい。

用例を吟味したところ、このような独立発言の挿入が自然に感じられるのは、場面の中の因果関係と時間の流れによると考えられた。そして、場面の因果関係は、作中人物の意識と場面の状況とに関わっていることがわかった。具体例で見ていきたい。

3.2.1 因果関係と時間の流れによって自然に感じられる独立発言

【17】 そんな古い記憶を喚び起こすにつけても、久しく会はなかつた姉の老けた様子が一層健三の眼についた。

「時に姉さんは幾何でしたかね」

「もう御婆さんさ。取つて一だもの御前さん」

姉は黄色い疎らな歯を出して笑つて見せた。実際五十一とは健三にも意外であつた。

（『道草』五：14）

【17】の下線部の発言挿入が不自然に感じられないのは、時間の流れも自然であるが、地の文との因果関係によるところが大きい。「眼についた」という知覚をした為に、その次の発言に至ったというのは自然に感じられる。「眼についた」ことにより、外から見えない作中人物の内面が動き、発言へ移っている。

【18】 彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏めにして、元のかんじん撚で括らうとした。

彼が指先に力を入れた時、其かんじん撚はぷつりと切れた。

「あんまり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

（『道草』三十三：99）

【18】では、「かんじん撚」が「切れた」という事態の変化の描写のあとに、その事態に対しての発言へ移っている。因果関係もあるが、時間の流れに沿った語りだといえる。この際、発言した人物が「ぷつりと切れた」状況をその場で見て知覚していたことが前提になっている。外的な動きのある事態から発言に移行していて、事態はスピーディに展開している。

このように前後の地の文との関係は、スピーディな展開になったり、発言の必然性がよりはっきりしたりすることに影響する。人物の知覚や心理から発言に移行する場合は、その発言に至るまでの人物の内面の動きがわかりやすくなることが多い。また、周囲の状態や状況の描写の後に発言がある場合は、場面と人物の関係が明確になる。外的な事態の動きや動作の描写の後に発言がある場合や、発言が会話になって続いていく場合は、事態の動きの中に発言も位置づけられ、事態がスピーディに描写されることになる。事態の動きの中の発言挿入の場合は、発言挿入の因果関係はさほど重要でなく、時間の流れの中に発言が位置している。

3.2.2 前の発言との関係が深い独立発言

【19】 「今一寸見たら此中には君に不必要なものが紛れ込んでゐるね」

「左右ですか」

此大事さうに仕舞込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さなかつた事を健三は知つた。兄は又自分の弟がそれ程熱心にそれを調べてゐない事に気が付いた。

「御由の送籍願が這入つてるんだよ」

（『道草』三十六：108）

【19】の下線部の発言は、その前の発言の続きであることが外見的な流れから理解される。直前の地の文は心理描写で、やはりその前の発言に関係するものである。心理と発言の流れとの二つの流れが下線部の発言に関係している。そのため、下線部の発言の直前の地の文から下線部の発言に移るときに、意味の繋がり（溝）ができる。ここでは、発言（会話）が中心で地の文が解説のような役割になっている。

次の【20】は、場面としては一つであるが、地の文から発言に移るときにやはり意味の繋がり（溝）ができている。

【20】 彼が何時もの通り服装を改めて座敷へ出た時、赤と白と撚り合せた細い糸で括られた例の書類は兄の膝の上にあつた。

「先達ては」

兄は油気の抜けた指先で、一度解きかけた糸の結び目を元の通りに締めた。

「今一寸見たら此中には君に不必要なものが紛れ込んでゐるね」

「左右ですか」

（『道草』 三十六：107-108）

大きい流れとしては、健三の家に兄が来ていて、後から帰宅した健三が着替えをして兄の前に出て話し始めるということである。発言の合間の地の文に、兄の膝にある書類の解説が語られている。書類の描写と二人の発言は、あまり関係をもたずに進行している。

【20】は、【19】のすぐ前の部分なのだが、この2例を連続した部分としてみると、だんだん地の文よりも発言が中心になっていっている。その結果、発言が事態の進行を担っていっていることがわかる。ここでの独立発言は、発言がなされたという時間的な動きをも臨場感をもって表している。

3.2.3 地の文に発言の引用を示す表現や指示語がない場合の特徴

これまでの発言挿入の指標がない発言の例をみると、発言そのものと、地の文による記述との間には、言語としての性質の違いのあることがわかる。発言が挿入されるときはいつもこの違いが感じられるが、発言の引用を示す表現がある場合や発言を指し示す指示語がある場合は、地の文との形式的な結びつきが強いので、それほどその違いは意識されない。この点で、地の文に発言挿入の指標がない発言は、地の文とは異質なものが混じっているということが意識され、発言自体が強調されているといえる。そのため、テキストは、語りと生の声を並べ構成したものだという性格がさらに強くなる。

しかし、地の文から発言へ移行するときには、発言挿入を示す指標がなくても因果関係や時間の展開の結びつきがあるので、説明がなくてもその移行が自然である場合が多い。このような発言挿入の指標がない独立発言の挿入をきっかけにして、地の文の多い部分から発言中心の具体的場面に移行することがある。

3.2.4 三種の独立発言と地の文の関係

引用構文発言に比べると、独立発言は、地の文から独立して提示されるため、強調されている。独立発言の中でも、発言を指し示す指示語によって地の文に位置づけられる発言

は、地の文の中に取り込まれている。

指示語ではなく発言引用を示す動詞句等だけがある場合は、さらに発言は地の文と区別されたものとなる。

以上の二つの場合の発言挿入は、地の文によって発言部分の役割や意義が明らかにされている。しかし、発言の引用を示す表現も指示語もない場合は、コンテキストだけが発言挿入の手がかりになる。発言の独立性はきわめて高く、語りによる描写の流れの中で、発言も一つの行為の記述だという側面が強く出ている。そのため、事態の展開に深く関わっている。

また、その語りと発言の量的バランスによって、発言の挿入の仕方にも違いが出てくる。一つの場面を具体的に描写し、すべての発言を引用するときは、発言挿入の指標をとまわずに発言が挿入されていることが多い。事態の臨場感のあるままに物語世界の時間の流れに合わせて発言が配置されている。発言が連続してなされるときには、この発言挿入によって物語がスピーディに展開していく。このようなときには、発言が前面に出て地の文が背景にまわることになる。地の文の語りは発言に対する解説や状況の描写の場合が多くなる。

一方、地の文の語りが多く、発言のすべてが挿入されているわけではないときには、地の文に発言挿入の引用表現や発言を示す指示語が示されて発言が挿入されることが多い。この場合には、地の文の語りの方が前面に出ている場合が多い。特に、引用表現が詳しい場合や発言を指し示す指示語が発言の前にある場合には、語り手の語りが強く前面に出やすい。挿入された発言は、地の文の表現を補う役割を担うことになる。

しかし、この両者の転換は頻繁に行われる。地の文が続いた中に発言が挿入され、それがきっかけとなり具体的場面に移っていくことがよくある。また、発言の後に指示語を伴った引用表現を含む地の文が現れ、<こう言ったところで、……>と地の文が続き、それをきっかけとして地の文が続いていくこともある。次の例では、下線部の引用動詞を含む地の文がきっかけとなり、発言中心の部分から地の文中心の部分に移行している。

【21】 健三はそれぎり座を立たうとした。然し細君にはまだ訊きたい事が残つてゐた。

「それで素直に帰つて行つたんですか、あの男は。少し変ね」

「だつて断られゝば仕方がないぢやないか。喧嘩をする訳にも行かないんだから」

「丈ど、又来るんでせう。あゝして大人しく帰つて置いて」

「来ても構はないさ」

「でも厭ですわ、蒼蠅くつて」

健三は細君が次の間で先刻の会話を残らず聴いてゐたものと察した。

「御前聞いてたんだらう、悉皆」

細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかつた。

「ぢや夫で好いぢやないか」

健三は斯う云つたなり又立つて書齋へ行かうとした。彼は独断家であつた。是以上細君に説明する必要は始めからないものと信じてゐた。細君もさうした点に於いて夫の権利を認める女であつた。けれども表向夫の権利を認める丈に、腹の中には何時も

不平があつた。事々について出て来る権柄づくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故もう少し打ち解けて呉れないのかといふ気が、絶えず彼女の胸の奥に働いた。其癖夫を打ち解けさせる天分も技倆も自分に十分具へてゐないといふ事実には全く無頓着であつた。

（『道草』十四：40）

このように地の文で発言引用したことを示したあとにまだ文がまだ続く場合は、発言部分から地の文の内容へ徐々に移行していくことになることが多くみられた。

4 発言挿入法から見た『道草』の表現特徴

次に、これらの発言挿入の具体的な運用を『道草』の中で見てみたい。

『道草』においては、独立発言が 1120 例あるのに対して、引用構文発言は約 50 例⁴⁾である。このことから、『道草』のカギ括弧で括られた発言部分は大部分が独立発言だといふことができる。『道草』では、原則的には語りと発言を分けて配置しているのである。地の文の語りの中に発言を入れないようにし、発言は発言で独立発言として強調して提示する。他のテキストでは引用構文発言が用いられるようなところを、『道草』では、引用を示す指示語と動詞（句）を前後の地の文に用いて独立発言にしていることが多い。このことによって、引用構文発言が多用される作品に比べて、全体的に発言が独立していて強調されているといえよう。

一方で、この発言を指し示す指示語と発言の引用を示す動詞（句）が発言の後に続くときは、<…こう言って、…><…こう言った健三は…>のように地の部分が指示語の前後に続いている場合が多い。既出の【15】の次の下線部のような例である。

【15】今其所へ行つて見たら定めし驚ろく程變つてゐるだらうと思ひながら、彼はなほ二十年前の光景を今日の事のやうに考へた。

「ことによると、良人では年始状位まだ出してるかも知れないよ」

健三の帰る時、姉は斯んな事を云つて、暗に比田の戻る迄話して行けと勧めたが、彼にはそれ程の必要もなかつた。

（『道草』八：24-25）

この例では、発言の後ろに「健三の帰る時、姉は斯んな事を云つて、暗に比田の戻る迄話して行けと勧めたが、…」とあり、指示語の前後に地の部分が続いている。

単純に発言の挿入があつたことを知らせるだけでなく、地の文（語り）の中に自然に発言を溶け込ませる用法が多いということである。つまり、『道草』における引用を示す指示語と動詞句を伴う形式の発言は、引用構文発言よりその存在が強調されているが、地の文の流れの中に位置付けられる傾向があるのである。

これらのことから、抽象度の高い地の文（語り）と、具体的表現である発言とを、調整して織り混ぜてテキストが構成されているといえる。発言を引用構文発言の形式で語りの中に取り込むことが多くなると、語り手の語り中心のテキストになる⁵⁾が、『道草』はそのようなテキストではない。語りと発言が、ある意思のもとで調整・構成されていて、語りだけが中心になって物語が展開してくわけではない。そして、ある意思が働いて構成され

ているにもかかわらず、地の文（語り）自体に主観が感じられないため、作品の客観的印象を損なっていないのである。

これに対して、『三四郎』は傍観者の語り手が語る形式を基調とした作品になっており、語りは個性的かつ饒舌で、概して主観的である。発言挿入も引用構文発言での形式がよく用いられている。

『道草』の語り方は、ただ成り行きで時間の動きの中で見たままを語るのではなく、物語世界の事態を構成して語るという形式をとっている。発言もすべて引用されているわけではなく、語りに合わせて必要なものを挿入していく。もちろん、一続きの場面のすべての発言を挿入しているところも多いが、それだけではない。特に過去の回想場面では、過去の内容を再構成した語りの中に、ごく一部の発言が取り上げられ挿入されるだけなのである。

それでは、『道草』において発言中心の部分と地の文中心の部分の例を挙げ、具体的に検証していきたい。

初めに発言中心の部分を見ていきたい。次の例は、『道草』二十三のはじめの部分である。発言が連続しており、発言中心の部分といえる。

【22】「貴夫何うして其御縫さんて人を御貰ひにならなかつたの」

健三は膳の上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕かされた人のやうに。

「丸で問題にやならない。そんな料簡は島田にあつた丈なんだから。それに己はまだ子供だつたしね」

「あの人の本当の子ぢやないんでせう」

「無論さ。お縫さんはお藤さんの連れつ子だもの」

お藤さんと云ふのは島田の後妻の名であつた。

「丈ど、もしそのお縫さんて人と一所になつてゐらしつたら、何うでせう。今頃は」

「何うなつてゐるか判らないぢやないか、なつて見なければ」

「でも事によると、幸福かも知れませんわね。其方が」

「左右かも知れない」

健三は少し忌々しくなつた。細君はそれぎり口を噤んだ。

「何故そんな事を訊くのだい。詰らない」

細君は窘められるやうな気がした。彼女にはそれを乗り越す丈の勇気がなかつた。

「どうせ私は始めつから御氣に入らないんだから……」

健三は箸を放り出して、手を頭の中に突込んだ。さうして其処に溜つてゐる雲脂をごしごし落とし始めた。

二人はそれなり別々の室で別々の仕事をした。健三は御機嫌ようと挨拶に来た子供の去つた後で例の如く書物を読んだ。細君は其子供を寝かした後で、昼の残りの縫物を始めた。

（『道草』二十三：66-67）

この部分は、発言引用を示す指標が地の文にない独立発言が連続している。発言の合間にある地の文は非常に少ない。また、一回あたりの発言自体が短い。しかし、このように

地の文がほとんどなく発言だけで事態が進行していく例はそれほど多くなく、この例のように発言の連続はそれほど長くは続かない。つまり、その場面の発言のやりとりを忠実に写すだけという場合は、量として多くないと考えられる。

次の例は、発言が比較的少ない部分で、地の文中心の部分といえる。

【23】 家へ帰ると細君は奥の六畳に手枕をしたなり寐てゐた。健三は其傍に散らばつてゐる赤い片端だの物指だの針箱だのを見て、又かといふ顔をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起きた。健三を送り出してから又横になる日も少くはなかつた。斯うして飽く迄眠りを食らないと、頭が痺れたやうになつて、其日一日何事をしてても判然しないといふのが、常に彼女の弁解であつた。健三は或は左右かも知れないと思つたり、又はそんな事があるものかと考へたりした。ことに小言を云つたあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞寐をするんだ」

彼は自分の小言が、歇私的里性の細君に対して、何う反応するかを、よく観察してやる代りに、単なる面当のために、斯うした不自然の態度を彼女が彼に示すものと解釈して、苦々しい呟きを口の内で漏らす事がよくあつた。

「何故夜早く寐ないんだ」

彼女は宵つ張であつた。健三に斯う云はれる度に、夜は眼が冴えて寐られないから起きてゐるのだといふ答弁を屹度した。さうして自分の起きてゐたい時迄は必ず起きて縫物の手を已めなかつた。

（『道草』三十：88-89）

このように地の文中心の中での発言引用は、何回か繰り返されたであろう発言の場合が多い。特にこの用例の場合は、地の文でも細君の日常の様子や繰り返される事態が語られており、発言もその中で引用されている。つまり、地の文（語り）の中の一部として機能しているといえる。

次の例は、発言も地の文もある程度ある場合である。『道草』ではこのような例が多い。

【24】 姉の家へ来た時、彼の心は沈んでゐた。それと反対に彼の気は興奮してゐた。

「①いや何うもわざわざ御呼び立て申して」と比田が挨拶した。是は昔の健三に対する彼の態度ではなかつた。然し変つて行く世相のうちに、彼がひとり姉の夫たる此人に丈優者になり得たといふ誇りは、健三にとって満足であるよりも、寧ろ苦痛であつた。

「②一寸上がらうにも、何うにも斯うにも忙がしくつて遣り切れないもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も実は頼まれたんですけれども、貴方と御約束があるから、断つてやつとの事で今帰つて来た所で」

比田のいふ所を黙つて聴いてゐると彼が変な女を其勤先の近所に囲つてゐるといふ噂は丸で嘘のやうであつた。

古風な言葉で形容すれば、たゞ算筆に達者だといふ事の外に、大した学問も才幹もない彼が、今時の会社で、さう重宝がられる筈がないのに。——健三の心には斯んな

疑問さへ湧いた。

「③姉さんは」

「④それにお夏が又例の喘息でね」

姉は比田のいふ通り針箱の上に載せた括り枕に倚りかゝつて、ぜいぜい云つてゐた。茶の間を覗きに立つた健三の眼に、其乱れた髪の毛がむごたらしく映つた。

「⑤何うです」

彼女は頭を真直に上げる事さへ叶はないで、小さな顔を横にした儘健三を見た。挨拶をしようと思ふ努力が、すぐ咽喉に障つたと見えて、今迄多少落ち付いてゐた咳嗽の発作が一度に來た。其咳嗽は一つがまだ済まないうちに、後から後から仕切りなしに出て来るので、傍で見てゐても気が退けた。

「⑥苦しうだな」

彼は独り言のやうに斯う呟やいて、眉を顰めた。

(『道草』二十四：71-72)

引用した部分の前には、約1ページ分の地の文が続いている。

引用した部分のテキストの内容から、①②の発言の前後には、比田の発言がほかにもあったが省略されて引用されていないと考えられる。地の文（語り）が中心となつて、必要な発言を挿入しているといえる。③～⑥は、喘息の姉に関わる発言で、物語世界の場面での事態の動きが詳細に語られている。地の文における事態の語りと発言とで、物語の場面を展開させている。②③⑤の発言の前には、発言引用を示す指標がないため、地の文から発言に移るときに、やや唐突な印象を受ける。また、①②⑥の発言の後には、発言引用の指標となる表現が見られる。

これらのことから、①②あたりでは、発言が地の文に関連づけられている印象が強いといえる。③～⑤の周辺の地の文には作中人物の心理が語られているが、その心理は語り手から想定される聞き手に向けてのものである。その中に、作中人物から別の作中人物に向けての発言③～⑤が混じっている。また、③～⑤は、発言引用の指標が地の文にない。このようなことのため、③～⑤は地の文と発言の内容との関連が薄く離れている印象を与えている。

以上のことから、『道草』には次のような発言に関わる特徴が見られた。

引用を示す指示語と動詞（句）を伴う形式の独立発言が多くみられる。この場合、発言は、ある程度独立したものとして読者に提示され、それでいて、地の文の流れの中に位置付けられる傾向があるといえる。

また、独立発言の連続だけで物語が進行していくことは多くなく、そのような場合があっても、発言が短かったり、発言の連続が余り長くないことが多い。『道草』では、具体的な場面を設定し、その場面のすべての発言を引用することが多くない。

独立発言の連続する場合というのは、具体的場面の発言のやりとりを忠実に再現していく場合が多い。『道草』では、このような独立発言が少ないということから、具体的場面を設定して物語世界のすべての発言を忠実に再現していくということが少ないといえる。語りの流れに沿った発言だけが引用されているのである。

『道草』では、発言中心の部分であっても、地の文がある程度含まれていることが多い。

そのような場合、地の文と発言によって事態は展開している。あるいは、発言は地の文に取り込まれずに、地の文から独立して存在している。どちらの場合も、引用構文発言が多い時と比べ、発言は読者に対して直接提示されるものとして機能している。

発言が比較的少ない部分もある。その場合は、地の文中心で展開していく中で、地の文の語りの一部として地の文の内容を補足するように発言が挿入されている。

どの場合も、独立発言が多く、読者に対して発言を直接提示する印象を与える。

5 発言挿入法から見た『三四郎』の表現特徴

『三四郎』は、『道草』に比べて引用構文発言が多い。カギ括弧で引用された発言が 1431 例認められたが、その中で「と……」の形式で引用を示しているものが 538 例あった。『道草』よりも独立発言の割合がかなり少ない。

引用構文発言は、発言部分が長いと、発言引用を含む一文が長くなってしまい、饒舌な印象を与えることがある。また、『三四郎』では、発言を引用する際の引用動詞（句）や引用を示す表現が詳しく語られることがあり、その場合も饒舌な印象を与える。

また、『三四郎』には独立発言も用いられている。独立発言は、引用構文発言よりも、地の文の中に取り込まれる程度が少ないという特徴があるが、『三四郎』ではそのような特徴から独特の効果が感じられる。次の例文は、独立発言が連続している部分である。

【25】 そのうち与次郎の尻が次第に落ち付いて来て、燈火親しむべし杯といふ漢語さへ借用して嬉しがる様になつた。話題は端なく広田先生の上に落ちた。

「君の所の先生の名は何と云ふのか」

「名は蓑」と指で書いて見せて、「艸冠が余計だ。字引にあるか知らん。妙な名を付けたものだね」と云ふ。

「高等学校の先生か」

「昔から今日に至る迄高等学校の先生。えらいものだ。十年一日の如しと云ふが、もう十二三年になるだらう」

「子供は居るのか」

「子供どころか、まだ独身だ」

三四郎は少し驚いた。あの年迄一人で居られるものかとも疑つた。

「何故奥さんを貰はないのだらう」

「そこが先生の先生たる所で、あれで大変な理論家なんだ。細君を貰つて見ない先から、細君はいかんものと理論で極つてゐるんださうだ。愚だよ。だから始終矛盾ばかりしてゐる。先生、東京程汚ない所はない様に云ふ。それで石の門を見ると恐れを作して、不可ん不可んとか、立派過ぎるとかいふだらう」

「ぢや細君も試みに持つて見たら好からう」

「大に佳しとか何とか言かも知れない」

「先生は東京が汚ないとか、日本人が醜いとか云ふが、洋行でもした事があるのか」

「なにするもんか。あゝ云ふ人なんだ。万事頭の方が事実より発達してゐるんだから、あゝなるんだね。其代り西洋は写真で研究してゐる。巴理の凱旋門だの、倫敦の

議事堂だの沢山持つてゐる。あの写真で日本を律するんだから堪らない。汚ない訳さ。それで自分の住んでる所は、いくら汚なくつても存外平気だから不思議だ」

「三等汽車へ乗つて居つたぞ」

「汚ない汚ないつて不平を云やしないか」

「いや別に不平も云はなかつた」

「然し先生は哲学者だね」

「学校で哲学でも教へてゐるのか」

「いや学校ぢや英語丈しか受持つてゐないがね、あの人間が、自から哲学に出来上つてゐるから面白い」

「著述でもあるのか」

「何にもない。時々論文を書く事はあるが、ちつとも反響がない。あれぢや駄目だ。丸で世間が知らないんだから仕様がな。先生、僕の事を丸行燈だといつたが、夫子自身は偉大な暗闇だ」

「どうかして、世の中へ出たら好さゝうなものだな」

「出たら好さゝうなものだつて、——先生、自分ぢや何にも遣らない人だからね。第一僕が居なけりや三度の飯さへ食へない人なんだ」

三四郎は真逆と云はぬ許に笑ひ出した。

「嘘ぢやない。気の毒な程何にも遣らないんでね。何でも、僕が下女に命じて、先生の気に入る様に始末を付けるんだが——そんな瑣末な事は兎に角、是から大に活動して、先生を一つ大学教授にして遣らうと思ふ」

与次郎は真面目である。三四郎は其大言に驚いた。驚いても構はない。驚いた儘に進行して、仕舞に、

「引越をする時は是非手伝に来て呉れ」と頼んだ。丸で約束の出来た家がとうからある如き口吻である。

（『三四郎』四の六：358-361）

このように、発言のやりとり（会話）が『道草』に比べて長く続くし、頻度も高い。このことから、『三四郎』の方が『道草』よりも、物語世界の発言を忠実に再現しようとすることが多いといえる。

次の用例では、前半は独立発言が多く、後半は引用構文発言が多くなっている。

【26】 此時三四郎の腰は縁側を離れた。女は折戸を離れた。

「失例で御座いますが……」

女は此句を冒頭に置いて会釈した。腰から上を例の通り前へ浮かしたが、顔は決して下げない。会釈しながら、三四郎を見詰めてゐる。女の咽喉が正面から見ると長く延びた。同時に其眼が三四郎の眸に映つた。

（中略）

志かも此女にグルーズの畫と似た所は一つもない。眼はグルーズのより半分も小さい。

「広田さんの御移転になるのは、此方で御座いませうか」

「はあ、此处です」

女の声と調子に較べると、三四郎の答は頗るぶつきら棒である。三四郎も気が付いてゐる。けれども外に云ひ様がなかつた。

「まだ御移りにならないいで御座いますか」女の言葉は明確してゐる。普通の様に後を濁さない。

「まだ来ません。もう来るでせう」

女は志ばし逡巡つた。手に大きな籃を提げてゐる。女の着物は例によつて、分らない。たゞ何時もの様に光らない丈が眼についた。地が何だかぶつぶつしてゐる。夫に縞だか模様だかある。その模様が如何にも出鱈目である。

上から桜の葉が時々落ちて来る。其一つが籃の蓋の上に乗つた。乗つたと思ふうちに吹かれて行つた。風が女を包んだ。女は秋の中に立つてゐる。

「あなたは……」

風が隣へ越した時分、女が三四郎に聞いた。

「掃除に頼まれて来たのです」と云つたが、現に腰を掛けてぼかんとしてゐた所を見られたのだから、三四郎は自分でも可笑しくなつた。すると女も笑ひながら、

「ぢや私も少し御待申しませうか」と云た。其云ひ方が三四郎に許諾を求める様に聞えたので、三四郎は大に愉快であつた。そこで「あゝ」と答へた。三四郎の料簡では、「あゝ、御待ちなさい」を略した積である。女はそれでもまだ立つてゐる。三四郎は仕方がないから、

「あなたは……」と向で聞いた様な事を此方からも聞いた。すると、女は籃を椽の上へ置いて、帯の間から、一枚の名刺を出して、三四郎に呉れた。

（『三四郎』四の十：368-371）

前半の独立発言の多い部分では、発言が地の文から比較的独立して、読者に対して発言が忠実に提示されている印象を与える。この前半部分は、三四郎が美禰子とはじめて言葉を交わす部分であり、三四郎も緊張していると考えられる。独立発言で発言が示されることによって、語り手の語りから独立して客観的に発言が提示されたような印象が与えられ、冷静で淡々とした語りの効果を与えている。

それに対して、後半は引用構文発言であるために、地の文の中に発言が取り込まれ、饒舌な語りの印象を与えている。

『三四郎』では、シリアスな部分や緊張感のある部分では独立発言が用いられ、饒舌な語りで滑稽味のある部分や語り手の語りを中心の部分では引用構文発言が用いられることが多い。

6 むすび

かぎ括弧で物語世界の人物の生の声を挿入する場合を、大きく「引用構文発言」と「独立発言」に分け、さらに地の文との関わり方により細かく分類した。

その結果、それぞれの引用のされ方によって、表現効果に違いのあることが認められた。実際のテキストにおいても、種々の引用の方法が使い分けられていることも確認できた。

『三四郎』では、引用構文発言が多く、そのため一文が長くなる傾向がある。また、詳しい引用動詞句等が使用されることも多い。これらのために饒舌な印象を与えていた。独

立発言が使われるのは、シリアスな部分や語り手が事態を突き放してみているときが多かった。『道草』では、指示語のある独立発言が多く用いられ、発言部分は語りの一部というよりは、語りの中に客観的に示されるという傾向が強かった。

【注】

- 1) 林 (1962 : 51) には、「オイコミ式とタタミコミ式とでは、副詞的な修飾語や述語の部分で、その発話の性格を規定し説明していることが多い。(例文略) 単に「……と言った」というだけでなく、どんな言い方をしたか、その会話がどんな性格のものかを説明しながら叙しているわけだ。(中略) 地の文があるからといって、説明がつかなければならないわけではないのだから、やはりこれは注目すべき一つの特徴だといってよかろう。」とある。
- 2) 「／」は改行を示す。
- 3) この場合については引用構文発言も同様のことがいえる。
- 4) 発言の引用には、以前に発言されたことばを部分的に引用する場合と、その場面での発言を写す場合がある。この両者を併せると 50 例ほどになるが、後者に限ると 22 例となる。正確に 50 例と言い切れないのは、カギ括弧に入っている生の声の発言引用と言えないものなどが含まれているためである。
- 5) 作中人物が語るスタイルの作品はこの形式である。

第5章 物語場面と語りの機能

小説には、物語世界で経過する時間が同じであっても、語られる分量が多い部分と、語られる分量の少ない部分が存在する。第5章では、演劇で演じられるような部分や映画のワンシーンのように、物語世界の時間と場所が具体的に設定されて語られている部分を物語場面と位置づけることとする。そのうえで、物語場面とそうでない部分を比較しながら、それぞれの語りの特徴を分析する。

まず、物語場面そのものの語りと物語場面そのものを語らない語りに大別して、テキストの語りの特徴を検討した。物語場面そのものの語りとは、時間と空間が規定された物語世界の中でその事象や状態を語る場合である。また、物語世界の「いま」から見て過去の出来事、事物の性質や状態、日常的状態、大掴みに展開をとらえる語りが、物語場面そのものを語らない語りである。

1節では、主に物語場面そのものの語りと物語場面そのものを語らない語りの特徴と、その現われ方を検討する。2節以降では、この物語場面そのものの語りと物語場面そのものを語らない語りという観点で、具体的に夏目漱石の小説テキストを検証する。

1 物語場面そのものの語りと物語場面そのものでない語りの特徴

小説の語りを上記のように物語場面とそうでない部分とに分けた場合、物語場面の語りの中には、その物語場面で起きた出来事や状況を語ることもあるが、その物語場面の出来事ではないことが関連として語られていることもある。前者は物語場面そのものの語りといえるが、後者は物語場面そのものではない語りとなる。このように、物語場面が設定されその物語場면을語っている中にも、物語場面そのものでない語りは見られる。物語場面でない部分は、物語そのものでない語りしかないことになる。

1節では、物語場面そのものの語りと物語場面そのものでない語りは、それぞれどのような特徴があるのか分析する。また、物語場面そのものの語りと物語場面そのものでない語りが、テキストの中でどのように混在しているか、その様相も検討することとした。

これまでと同様、中心的に扱ったテキストは夏目漱石『三四郎』『道草』である。

1.1 対象とした用例

用例数によって傾向を分析する場合は、漱石『三四郎』と『道草』のはじめ、中間、おわりからそれぞれ地の文 300 文¹⁾（ただし、内容の区切りを重視して 300 文目のある章または節は最後まで調査したため、300 余文となっている。）を取り出し、約 1000 文ずつの調査とした。『三四郎』は 13 章全 117 節で構成されていて、そのうち調査範囲は 22 節分であった。同様にして『道草』は全 102 章のうち 29 章分が調査範囲である。なお、例文に付してある文番号は、それぞれ 300 余文のうちの何番目であるかを示す。ただし、用例数を問題としない場合は、調査範囲以外の部分も適宜引用した。

1.2 物語場面の先行研究

日本語学で場・場面という場合は、通常言語を使う現場のことを指す。一方で、場・場

面を次のように考える場合がある。

【1】「発言の『場』と、表現の中に組み入れられた『場』とは違うから、前者を、たんに『場』（あるいは強調したいときは『現場』）とよび、後者を区別して『場面』とよぶ。」

（今井（1975））

【2】「場面というのは『場・面』というふうに考えていただくといいでしょう。」

「『場』というのは、台本の『筋』の上でのあるくものとくからみあい——形象の相関関係——のことです。それは、劇の場合『時』『所』『人』によって形作られます。」

2)

（西郷（1998：339-340））

先行研究での場・場面のとらえ方は次のようなものが見られる。

①言語表現の場、言語行動の場

実際に言語を使う現場のことで、主として発言の現場を想定する。要素として主体、聞き手、時間、空間、素材が考えられる。

②話の素材としての場・場面

「表現の中に組み入れられた場」（今井 1975）のことで、話の内容（素材）が具体的にどのような状況であったのかを、時間と場所を設定して表現したものをさす。そして、その素材の「場」は、表現されることによって姿をあらわすとされる。そのため、その場、場面は、表現、とらえ方、視点、ストーリー展開等によって、違ったものになる。

①、②の両方とも「場」「現場」「場面」の用語の区別は、それぞれの研究者によって異なっている。また、②でいう「場・場面」は、言語表現によって事態として形作られたひとくぎりということができる。

本節では、「場面」を②のようなものとして、論を進めていきたい。

1.3 物語場面設定の提案

小説テキストには、詳しく具体的に出来事が語られている部分とそうでない部分が存在し、その中間的なものも様々ある。本章では、詳しく語られている物語世界の内容とそうでない内容を区別することとした。物語世界において、具体的な場（時間、空間、出来事）が設定されて語られている場合を「物語場面」（物語内の小場面）の語りと規定することとした。これは、映画や演劇におけるシーン（場面）と似た概念である。

いわゆる三人称小説においては、物語内容が語られていく過程で、語られつつある物語世界の「いま」（物語世界上の現在）、「ここ」の状況として、具体的な時間と場所が設定される場合を指すこととする。いわゆる一人称小説においては、回想的に語られる中心的物語内容の生起する時間と場所が具体的に設定されている場合を指すこととする。

具体的な物語場면을語るときにも、物語場面そのものを語る語りと、物語場面に関わるが物語場面そのものを語っていない語りが認められる。例えば、次の用例は具体的な物語場面が設定されている中での語りであるが、下線部はこの物語場面そのものを語っていない。このような場合が、物語場面の中における物語場面そのものでない語りである。

【3】 188 健三は立つて書斎の机の上から自分の紙入を持って来た。189 一家の会計を司

どつてゐない彼の財囊は無論軽かつた。190 空の儘硯箱の傍に幾日も横はつてゐる事さへ珍らしくはなかつた。191 彼は其中から手に触れる丈の紙幣を攫み出して島田の前に置いた。

(『道草』中間 五十二：159)

また、上の用例のように物語場面の中に物語場面そのものを語らない語りが挿入されるのではなく、まったく具体的物語場面から離れて、その物語世界の解説等を語る部分もある。また、大括みに出来事が語られ、一気に物語世界の時間が経過してしまうようなこともある。本節で扱った「物語場面そのものを語らない語り」の多くは、物語場面内のものである。

1.4 物語場面の認定基準

演劇や映画等は物語場面だけで構成されているといえるが、小説テキストは様々な語りが存在する。そのため、小説テキストを物語場面とそうでない部分にきれいに分けることは難しいが、以下のような基準によって物語場面の認定を試みた。

(1) 特定される場所、特定される時間での出来事であることが想定される。場所は人間が知覚出来る範囲とする。但し、途中で場所が移動するときには、そのことが説明されていれば物語場面が続いているとする。言い換えると、特定の場所や時間が想定されないくらい大括みにとらえられた出来事や、繰り返される出来事などは、物語場面としない。

次の例では、汽車という、知覚できる特定の場所であり、物語世界の連続した時間の中での出来事であるので、このような部分は、物語場面とみなす。

【4】(上京する三四郎が汽車の中で新聞を借りて読む。)

246 開けて見ると新聞には別に見る程の事も載つてゐない。247 一二分で通読して仕舞つた。248 律義に畳んで元の場所へ返ししながら、一寸会釈すると、向でも軽く挨拶をして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

249 三四郎は、被つてゐる古帽子の徽章の痕が、此男の眼に映つたのを嬉しく感じた。

250 「ええ」と答た。

251 「東京の？」と聞き返した時、始めて、

「いえ、熊本です。……然し……」と云つたなり黙つて仕舞つた。252 大学生だと云ひたかつたけれども、云ふ程の必要がないからと思つて遠慮した。253 相手も「はあ、さう」と云つたなり煙草を吹かしてゐる。254 何故熊本の生徒が今頃東京へ行くんだとも何とも聞いて呉れない。255 熊本の生徒には興味がないらしい。256 此時三四郎の前に寐てゐた男が「うん、成程」と云つた。257 それでゐて慥かに寐てゐる。258 独言でも何でも無い。259 髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑つた。260 三四郎はそれを機会に、

「あなたは何方へ」と聞いた。

261 「東京」とゆつくり云つた限である。262 何だか中学校の先生らしく無くなつて来た。263 けれども三等へ乗つてゐる位だから大したものではない事は明らかである。264

三四郎はそれで談話を切り上げた。265 髭のある男は腕組をした儘、時々下駄の前歯で、拍子を取つて、床を鳴らしたりしてゐる。266 余程退屈に見える。267 然し此男の退屈は話しながらない退屈である。

(『三四郎』はじめ 一の六：285-286)

(2) しかし、特定の場所や時間での出来事だと想定することはできるが、具体的場所と時間が問題となっていないぐらい簡潔な語りの場合は、物語場面の語りとししない。簡潔な語りかどうかの判断は、その部分の記述が2文以内であるかどうかを目安とした。『三四郎』と『道草』の調査範囲には適切な例がないが、『こころ』に次のような例がある。次の例の下線部では、具体的な場所と時間において問答があったことが想定できるが、この部分は因果関係で出来事の説明をしているだけの語りである。回想的な語り方で、場所と時間は問題にしていない。また、2文以内である。そのため、下線部は物語場面と認定しない。また、【5】で引用した部分はすべて物語場面ではないものとした。

【5】 さう斯うしてゐるうちに、私は又奥さんと差向ひで話しをしなければならない時機が来た。その頃は日の詰つて行くせわしない秋に、誰も注意を惹かれる肌寒の季節であつた。先生の附近で盗難に罹つたものが三四日続いて出た。盗難はいづれも宵の口であつた。大したものを持つて行かれた家は殆んどなかつたけれども、這入られた所では必ず何か取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空けなければならぬ事情が出来てきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職してゐるものが上京したため、先生は外の二三名と共に、ある所で其友人に飯を食はせなければならなくなつた。先生は訳を話して、私に帰つてくる間迄の留守番を頼んだ。私はすぐ引受けた。

(『こころ』上 十五：43-44)

1.5 物語場面そのものを語らない語り

物語場面というものを、物語世界の「いま」「ここ」として時間と空間が具体的に設定されたものと考え、次のようなものは物語場面そのものを語っていないと認められる。

①物語世界の「いま」から見て過去のこと。②事物の性質、一般的な習慣。③物語世界において繰り返し行なわれていることや、日常的な状態。④大括みに展開をとらえて語ること。

この中で、④は具体的な時間や空間を認定することは難しいが、他の三つと違い物語世界で進行している「いま」の語りである。物語場면을語るときには、非常に細かく語ることにもできるし、あっさり語ることにもできるのだが、あっさり物語場면을語ると大括みに展開を語るのは、連続的であり、区別しにくい。

それに対して、①は物語世界の「いま」についての語りではなく、②は「いま」かどうかとは無関係な語りである。また、③は「いま」に影響を及ぼしている長期にわたる状態についての語りであるが、その物語場面だけに関わるものではない。

本研究では、④をやや性質の違うものとした上で、①～③を広い意味で物語世界の物事を解説する語りとして位置づける。その上で、①～③を、物語場面の「いま」を中心とする時間的な基準で分類し、①を現在と対比されるものとしての過去の語り、②と③を一括

して具体的時間に関わらない語り、と考えることとした。

特に三人称小説における①～③は物語場面そのものの語りと深く関わっていることが多い。く、物語場면을語るための解説として機能することが多い。

以上のことから、物語場面そのものを語らない語りを、Ⅰ過去についての語り（上記①に相当）、Ⅱ具体的な時間に関わらない語り（上記②③に相当）、Ⅲ大掴みに展開をとらえた語りに分類した。

次の【6】の72や73のようなものをⅠ過去についての語り（上記①に相当）、69～71のようなものをⅡ具体的な時間に関わらない語り（上記②③に相当）と考える。

- 【6】 67 幸ひ彼の目下の状態はそんな事に屈托してゐる余裕を彼に与へなかつた。68 彼は家へ帰つて衣服を着換えると、すぐ自分の書斎へ這入つた。69 彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のする事が山のやうに積んであるやうな気持でゐるのである。70 けれども実際から云ふと、仕事をするよりも、しなければならぬといふ刺戟の方が、遥かに強く彼を支配してゐた。71 自然彼はいらいらしなければならなかつた。

72 彼が遠い所から持つて来た書物の箱を此六畳の中で開けた時、彼は山のやうな洋書の裡に胡坐をかいて、一週間も二週間も暮らしてゐた。73 さうして何でも手に触れるものを片端から取り上げては二三頁づゝ読んだ。

（『道草』二：7-8）

次の【7】のようなものをⅢ大掴みな展開の語り（上記④に相当）とする。

- 【7】 240 彼は其日無沙汰見舞かたがた市ヶ谷の薬王寺前にゐる兄の宅へも寄つて、島田の事を訊いて見やうかと考へてゐたが、時間の遅くなつたのと、どうせ訊いたつて仕方がないといふ気が次第に強くなつたのとで、それなり駒込へ帰つた。241 其晩は又翌日の仕事に忙殺されなければならなかつた。242 さうして島田の事は丸で忘れてしまつた。

（『道草』はじめ 八：25）

1.6 物語場面そのものを語る語り

物語場面そのものを語る語りは、物語世界の「いま」を中心として時間の流れを基準に分類すると、①事象の語り、②状態の語り、③説明の語り、④説明的状态の語り、の四つの場合が考えられた。

①事象の語りとは、時間に関わり、動きのあるものとして物事を語る場合を指す。ストーリー展開に関わることが多い。主に動詞文によって表される³⁾。

②状態の語りとは、ある状態がある期間続いているものとして物事を語る場合を指す。その物語場面で具体的に知覚されたり知られたりするものに限る。主に「…ている・ていた」文末の文や形容詞文、一部の名詞文によって表される。

次の【8】の36～37が事象の語りで、38～39が状態の語りである。

- 【8】 36 車が動き出して二分も立つたらうと思ふ頃例の女はすうと立つて三四郎の横を通

り越して車室の外へ出て行つた。37 此時女の帯の色が始めて三四郎の眼に這入つた。38 三四郎は鮎の煮浸の頭を啣へた儘女の後姿を見送つてゐた。39 便所に行つたんだと思ひながら頻りに食つてゐる。

(『三四郎』はじめ 一の二：276)

③説明の語りとは、物語場面の事態についての語りであるが、時間には関係のない語りを指す。名詞文によって表されることが多い。次のようなものがある。

- ・前文までの内容について説明していることが、形式上明らかな場合。

例としては、「～からである」、「～くらいである」、「～のである」のような文末をもつ文などである。

- ・抽象的な事柄が主語になっている場合。

例としては、「…のは～」「…ということは～」のような形式のものである。

- ・名詞文や形容詞文・形容動詞文で、状態を描写しているとはいえないもの。

次の【9】の68～70のようなものが説明である。

【9】 68 此汽車は名古屋留りであつた。69 会話は頗る平凡であつた。70 只女が三四郎の筋向ふに腰を掛けた許である。71 それで、しばらくの間は又汽車の音丈になつて仕舞ふ。

(『三四郎』はじめ 一の二：277)

上に述べた①～③のほか、④説明的状态が考えられた。これは、知覚できない抽象的な状態や関係を表現するものを指すが、本研究では③説明の語りと同等のものとして扱った。例としては、「…する必要があつた」「違わなかつた」「正反対であつた」のような文末をもつ文などである。

1.7 物語場面そのものの語りはどのように語られるか

1.7.1 事象・状態

『三四郎』も『道草』も、状態は、作中人物（焦点となる人物）の知覚を通して語られることが多い。そのため、状態についての語りが続くときは、作中人物が何かを見ているときに限られている。そして、状態についての語りが多い部分では時間的な進行が制限され⁴⁾、物語場面が臨場感をもって感じられることが多かった。

次の【10】は三四郎が男を観察する部分で、男の状態を語ることが多くなっている。

【10】 224 今度は三四郎の方でも此男を見返した。

225 髭を濃く生やしてゐる。226 面長の瘠ぎすの、どことなく神主じみた男であつた。227 たゞ鼻筋が真直に通つてゐる所丈が西洋らしい。228 学校教育を受けつゝある三四郎は、こんな男を見ると屹度教師にして仕舞ふ。229 男は白地の緋の下に、丁重に白い襦袢を重ねて、紺足袋を穿いてゐた。230 此服装から推して、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。231 大きな未来を控へてゐる自分から見ると、何だか下らなく感ぜられる。232 男はもう四十だらう。233 是より先もう発展しさうにもない。

一の六

234 男はしきりに烟草をふかしてゐる。235 長い烟りを鼻の穴から吹き出して、腕組

をした所は大変悠長に見える。236 さうかと思ふと無暗に便所か何かに立つ。237 立つ時にうんと伸をする事がある。238 さも退屈さうである。239 隣に乗合せた人が、新聞の読み殻を傍に置くのに借りて見る気も出さない。

(『三四郎』一の五～六：284-285)

225 は、文末がテイルとなっており、状態であることが明らかである。その前に 224「今度は三四郎の方でも此男を見返した。」とあることから、三四郎が 225 の状態を観察していることがわかる。【10】の例では、225、227、229、234、235 が状態の語りに認定される。このように、状態の語りが連続するのは、作中人物が観察している場合だといえる。また、【10】の引用部分では、後半に繰り返される動きが語られてはいるが、ほとんど動きがなくストーリーは進んでいない。このように、状態描写が多いとストーリーの展開は制限される。

一方、二人以上の人物が登場して何らかの交流が行なわれるときには、事象についての語りが多くなり、それによってストーリーが展開する。そのときは、状態についての語りは制限される傾向にある。

次の【11】は三四郎と与次郎のやりとりである。やりとりによってストーリーが展開している。

【11】 148 講義が終るや否や、与次郎は三四郎に向つて、「どうだ」と聞いた。149 実はまだ善く読まないと言へると、時間の経済を知らない男だといつて非難した。150 是非読めといふ。151 三四郎は家へ帰つて是非読むと約束した。152 やがて午になつた。153 二人は連れ立つて門を出た。

154「今晚出席するだらうな」と与次郎が西片町へ這入る横町の角で立ち留つた。155 今夜は同級生の懇親会がある。156 三四郎は忘れてみた。157 漸く思ひ出して、行く積りだと答へると、与次郎は、

「出る前に一寸誘つて呉れ。君に話す事がある」と云ふ。158 耳の後へ洋筆軸を挟んでゐる。159 何となく得意である。160 三四郎は承知した。

(『三四郎』中間 六の三：425-426)

ほとんどが事象の語りだと認定される。事象の語りでないのは、155、156、158、159 だけだと考えられる。このように人物の交流によりストーリーが展開することが多く、その場合には事象の語り以外の語りは少なくなる傾向がある。

1.7.2 説明

説明は、語り手や作中人物の判断を通した語りとなるため、語り手や作中人物が何に注意しているのかが読み取れる。

『道草』の説明は、物語の展開の上で必要な部分や心理的な部分を説明し、事態の意味付けをすることがほとんどであった。前に語っていることの単なる補足説明であっても、一般的傾向や性格付けに広がることが多い。それに対して、『三四郎』の説明は、物語世界の現場での意識の動きにしたがって判断したような説明が多い。

【12】の 315 と 320 のようなものが『道草』に多い説明で、意味付けをするような説明になっている。

【12】 314 斯んな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの位な真実が潜んでゐるだらうかと反省して見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑えつけたがる男であつた。315 事実の問題を離れて、単に論理の上から行くと、細君の方が此場合も負けであつた。（中略）

318 健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしさうに見送つた。319 彼は論理の權威で自己を伴つてゐる事には丸で気が付かなかつた。320 学問の力で鍛へ上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底から大人しく従ひ得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

（『道草』はじめ 十：30-31）

【13】 の 108 と 109 のようなものが『三四郎』に多い説明で、三四郎の意識に従つた説明になっている。

【13】 105 「どうだ」と云ふ。106 見ると標題に大きな活字で「偉大なる暗闇」とある。107 下には零余子と雅号を使つてゐる。108 偉大なる暗闇とは与次郎がいつでも広田先生を評する語で、三四郎も二三度聞かされたものである。109 然し零余子は全く知らん名である。

（『三四郎』中間 六の一：422）

いずれにしても、説明が挿入されることによって、物語世界の事象や状態の情報が詳しくなる。どのような情報を付加するかということは、事象や状態を意味づけたり評価したりすることにもなり、語り手や作中人物の立場や見方が明らかになる。

説明はストーリーの展開には関わらないので、説明が多くなればストーリー展開は停滞する。また、物語場面の状態の描写でもないので、物語場面で知覚される情報は増えない。これらのことから、説明が多くなると、眼に見えない情報が増え、具体的な現場での情報は相対的に減り、観念的な語りの印象を与える。【12】【13】の例も、そのような傾向が見られる。

1.8 物語場面そのものを語らない語りはどのように語られるか

物語場面を中心に考えると、物語場面の中のところどころに物語場面そのものを語らない語りが挿入されていたり、物語場面と次の物語場面の間に物語場면을語らない語りが挿入されていたりするということになる。

1.8.1 過去についての語りの挿入

I 過去についての語りが挿入されるとき、物語場面とどのような関係をもっているのか、観察されたものを列挙してみたい。

(1) 連想・想起

作中人物が連想したり思い出したりすることにより、過去が語られていくことがある。

次の【14】では、99 から過去についての語りになっているが、96 の「大きな桜がある。」という状態についての語りが過去を語るきっかけになっている。

【14】 94 三四郎は与次郎に跟着教室を出た。95 階子段を降りて、玄関前の草原へ来た。
96 大きな桜がある。97 二人は其下に坐つた。

98 此所は夏の初めになると苜蓿が一面に生える。99 与次郎が入学願書を持つて事務へ来た時に、此桜の下に二人の学生が寐転んでゐた。100 其一人が一人に向つて、口答試験を都々逸で負けて置いて呉れると、いくらでも唄つて見せるがなと云ふと、一人が小声で、粹な捌きの博士の前で、恋の試験がして見たいと唄つてゐた。101 其時から与次郎は此桜の木の下が好になつて、何か事があると、三四郎を此所へ引張り出す。

(『三四郎』中間 六の一：421-422)

(2) 現在との対比や解説

I 過去についての語りが、現在についての対比や解説になっている場合がある。

次の【15】では、130 から過去のエピソードが続いた後に、135 で現在との対比がなされることによって結果的に現在の状況を解説することになっている。

【15】 130 彼は其主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。131 さうして年から云へば叔父甥程の相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をとつては姉から怒られたり、屋根へ登つて無花果を挽いで食つて、其皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。

(中略)

135 さうして夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出来にくゝなつた自分を不快に感じた。

(『道草』はじめ 四：12)

(3) 一般的な語りから過去の語りへ

II 具体的な時間に関わらない語りの後に、I 過去についての語りが挿入されることがある。

次の【16】では、4 からII 具体的な時間に関わらない語りになり、10 以降「動かない」方がよいのだという考えの健三が語られ、それに関連した過去のことが13 から語られる。一時的な出来事だけにとどまらない一般的傾向を語り、その具体例として過去の事態を語っているのである。

【16】 「御前は役に立ちさへすれば、人間はそれで好いと思つてゐるんだらう」

(※健三の発言、石出注)

「だつて役に立たなくつちや何にもならないぢやありませんか」

(※細君の発言、石出注)

4 生憎細君の父は役に立つ男であつた。5 彼女の弟もさういふ方面にだけ発達する性質であつた。6 これに反して健三は甚だ実用に遠い生れ付であつた。

(中略)

10 動かない彼は、傍のものゝ眼に、如何にも気の利かない鈍物のやうに映つた。

11 彼は猶更動かなかつた。12 さうして自分の本領を益反対の方面に移して行つた。

13 彼は此見地から、昔し細君の弟を、自分の住んでゐる遠い田舎へ伴れて行つて

教育しやうとした。14 其弟は健三から見ると如何にも生意気であつた。

(『道草』 おわり 九十二：282-283)

1.8.2 具体的な時間に関わらない語りの挿入

Ⅱ 具体的な時間に関わらない語りは『道草』において非常に多く挿入されているが、そのときの様相について、観察されたものを列挙してみたい。

(1) 章のはじめや物語場面の前での解説

章のはじめや物語場面の前に、解説として普段の状況や作中人物の考え方や行動の傾向が語られることがある。

【17】は、九章のはじめの方の部分で、八章の終りの部分との内容的なつながりは薄い。九章のはじめから 253 までの下線部分はこの頃の日常の状態を語り、254 から大括弧に事象を展開させている。このあと徐々に具体的物語場面が語られていく。

章の初めなどで、新たな内容に入っていく際に、すぐに具体的物語場面に入らないで、物語場面に関わらない語りや大括弧な語りで解説していくことがよく見られる。

【17】 251 其子供たちはまた滅多に書斎へ這入らなかつた。252 たまに這入ると、屹度何か悪戯をして健三に叱られた。253 彼は子供を叱る癖に、自分の傍へ寄り付かない彼等に対して、やはり一種の物足りない心持を抱いてゐた。

254 一週間後の日曜が来た時、彼は丸で外出しなかつた。255 気分を変へるため四時頃風呂へ行つて帰つたら、急にうつとりした好い気持に襲はれたので、彼は手足を畳の上へ伸ばしたまゝ、つい仮寐をした。

(『道草』 はじめ 九：26)

(2) 挿入的な短い解説

具体的物語場面の事物を解説するのに、具体的な物語場面に限らない状態についての語りや、習慣や性質が語られることがある。次の【18】のように、物語場面の語りを断ち切らないようにしながら、前に語られている内容について短く挿入的に解説されることが多い。

190 は繰り返し見られる状態を語っていて、彼の財布に多く入っていないことを解説している。

【18】 188 健三は立つて書斎の机の上から自分の紙入を持って来た。189 一家の会計を司どつてゐない彼の財囊は無論軽かつた。190 空の儘硯箱の傍に幾日も横はつてゐる事さへ珍らしくはなかつた。191 彼は其中から手に触れる丈の紙幣を攫み出して島田の前に置いた。

(『道草』 中間 五十二：159)

(3) 前提としての解説

次に語られる物語場面の前提について予め解説されることがある。そのとき、Ⅱ 具体的な時間に関わらない語りが解説として語られることが多い。

【19】の 163～165 では、海苔巻を食う物語場面の前に、食いたくない事情として普段

の状況が語られている。具体的物語場面に限らない日常的状态や習慣から、具体的物語場面へと、語りが変わっているといえる。

【19】 163 近頃の健三は頭を余計遣ひ過ぎる所為か、どうも胃の具合が好くなかつた。
164 時々思ひ出したやうに運動して見ると、胸も腹も却つて重くなる丈であつた。 165
彼は要心して三度の食事以外には成るべく物を口へ入れないやうに心掛けてゐた。 166
それでも姉の悪強には敵はなかつた。

「海苔巻なら身体に障りやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御呉れな。厭かい」

(『道草』はじめ 六：17)

(4) 背後にある潜在的状況を解説する

具体的物語場面だけにとどまらない長い期間にわたる状況のうち、目に見えない潜在的な状況を語ることがある。このような語りは、物語場面における状態の語りからの延長として語られることが多い。

【20】では、状態描写のあと、163 から健三と細君の普段の思考の状態について解説されている。具体的物語場面の語りから、日常的な状態への語りへと変わっているのである。

【20】 161 昨夜の事は二人共丸で忘れたやうに何にも云はなかつた。

五十二

162 二人は自分達の此態度に対して何の注意も省察も払はなかつた。163 二人は二人に特有な因果関係を有つてゐる事を冥々の裡に自覺してゐた。 164 さうして其因果関係が一切の他人には全く通じないのだといふ事も能く呑み込んでゐた。 165 だから事状を知らない第三者の眼に、自分達が或は変に映りはしまいかといふ疑念さへ起さなかつた。

(『道草』中間 五十一～五十二：156-157)

「具体的な時間に関わらない語り」の諸相を見てきたが、三人称小説である『三四郎』『道草』において、それらは具体的物語場面についての解説として語られているといえる。しかし、逆に見ると、具体的物語場面は、時間に関わらない状態や性質という大きな背景の語りの中で、一部の事態が具体的に語られたものだということもできる。

1.8.3 大括みに出来事を語り、ストーリーを展開させる

物語世界上の「いま」を一気に進める場合がある。章の始めや物語場面と物語場面をつなぐときにⅢ大括みな展開の語りが語られることがある⁵⁾。前掲【17】の二段落目などがそれにあたる。一文ごとに物語世界の場所が変わったり、一文で時間が大きく動いたりする。

1.8.4 物語場面そのものを語らない語りの挿入と発言

発言をきっかけに、物語場面そのものを語る語りと物語場面そのものを語らない語りが入れ替わることは多い。また、発言の合間に、発言を解釈するような、物語場面そのものを語らない語りが挿入されることがよくある。

【21】では、124 までが「具体的な時間に関わらない語り」で、125 から物語場面に入っていく。しかし、まだ 125 は「其日健三は例の如く襷を掛けて戸棚の中を掻きまはしてゐる此姉を見出した。」という物語場면을提示するような語りである。発言の後 126 から具体的物語場面に入っていく。

【21】 121 姉は又非常に嚙舌る事の好きな女であつた。 (中略)

「是が己の姉なんだからなあ」

124 彼女と話をした後の健三の胸には何時でも斯ういふ述懐が起つた。

125 其日健三は例の如く襷を掛けて戸棚の中を掻きまはしてゐる此姉を見出した。

「まあ珍らしく能く来て呉れたこと。さあ御敷きなさい」

126 姉は健三に坐蒲団を勧めて縁側へ手を洗ひに行つた。

127 健三は其留守に座敷のなかを見廻はした。128 欄間には彼が子供の時から見覚えのある古ぼけた額が懸つてゐた。

(『道草』はじめ 四：11-12)

次の【22】の 137 は「具体的な時間に関わらない語り」であるが、その前の発言の最後の部分についての解説になっている。

【22】 「近頃は身体の具合はどうです。あんまり非道く起る事ありませんか」

136 彼は自分の前に坐つた姉の顔を見ながら斯う訊ねた。

「(略) ——でも矢つ張り年が年だからね。とても昔しの様にガセイに働く事は出来ないのさ。昔健ちやんの遊びに来てくれた時分にや、随分尻ッ端折りで、夫こそ御釜の御尻迄洗つたもんだが、今ちやとてもそんな元気はありやしない。だけど御蔭様で斯う遣つて毎日牛乳も飲んでるし……」

137 健三は些少なながら月々いくらかの小遣を姉に遣る事を忘れなかつたのである。

(『道草』はじめ 四：12-13)

1.9 『三四郎』と『道草』における、物語場面そのものを語る語りと物語場面そのものを語らない語り

1.9.1 『三四郎』と『道草』の地の文を具体的に検討する

『三四郎』と『道草』のある程度まとまった部分を対象として、一文ずつ文の機能を検討する。そのことによって、テキストごとの物語場面そのものの語りと物語場面そのものでない語りの現れ方とその結びつき方の特徴を分析する。

1.9.1.1 『三四郎』の地の文の一文ごとの機能

『三四郎』では、調査の対象を中間の「六の一」とした。文章の内容を吟味にせずに中間部の章のはじめから用例を採ることによって、ある程度の傾向を恣意を挟まずに読み取れるだろうと考えたためである。

次の【23】～【26】は連続する部分である。一文ごとに、その文の機能を検討する。

【23】 六の一

87 号鐘が鳴つて、講師は教室から出て行つた。88 三四郎は印気の着いた洋筆を振つて、帳面を伏せ様とした。89 すると隣りにゐた与次郎が声を掛けた。

「おい一寸借せ。書き落した所がある」

90 与次郎は三四郎の帳面を引き寄せて上から覗き込んだ。91 stray sheep といふ字が無暗にかいてある。

「何だこれは」

「講義を筆記するのが厭になつたから、いたづらを書いてみた」

「さう不勉強では不可ん。カントの超絶唯心論がバークレーの超絶实在論にどうか云つたな」

「どうだとか云つた」

「聞いてゐなかつたのか」

「いゝや」

「全然 stray sheep だ。仕方がない」

92 与次郎は自分の帳面を抱へて立ち上がった。93 机の前を離れながら、三四郎に、「おい一寸来い」と云ふ。94 三四郎は与次郎に跟着いて教室を出た。95 階子段を降りて、玄関前の草原へ来た。96 大きな桜がある。97 二人は其下に坐つた。

(『三四郎』六の一：420-421)

87～92 は物語場面そのものの語りである。87～90 はすべて文末が動詞のタ形で、事態の継起を表現している。91 は、90 で「覗き込んだ」とあるが、その覗き込んで与次郎に見えたものである。与次郎の知覚を利用した状態描写となっている。その知覚が元となって、その知覚によってわいた疑問から会話が始まる。92～95 は再び動詞によって、事態の継起が表現される。96 は、95 の「玄関前の草原へ来た」ときに目に入つた情景である。三四郎の知覚を利用した状態描写である。97 は、また動作の継起が表される。ここでは、会話の部分は、物語世界の時間の流れを写したものであるが、その他は動詞のタ形文末の文が多く、次々に事態の継起していく様が語られている。状態描写も 2 文だけで、素早い展開である。

【24】 98 此所は夏の初めになると苜蓿が一面に生える。99 与次郎が入学願書を持つて事務へ来た時に、此桜の下に二人の学生が寐転んでゐた。100 其一人が一人に向つて、口答試験を都々逸で負けて置いて呉れると、いくらでも唄つて見せるがなと云ふと、一人が小声で、粹な捌きの博士の前で、恋の試験がして見たいと唄つてゐた。101 其時から与次郎は此桜の木の下が好になつて、何か事があると、三四郎を此処へ引張り出す。102 三四郎は其歴史を与次郎から聞いた時に、成程与次郎は俗謡で pity's love を訳す筈だと思つた。103 今日は然し与次郎が事の外真面目である。104 草の上に胡坐をかくや否や、懷中から、文芸時評といふ雑誌を出して開けた儘の一頁を逆に三四郎の方へ向けた。

(『三四郎』六の一：421-422)

98～102 は、物語場面そのものでない語りである。98 は、事物の性質を語っており、「具

体的な時間に関わらない語り」である。99 と 100 は過去についての語り、101 は、繰り返し行われることで、「具体的な時間に関わらない語り」である。102 は、過去についての語りである。この 98～102 は、草原の説明として機能している。物語場面の中の事物について、その背景を説明しているということである。物語場面そのものの語りだけでは、その背景にあるものを理解できない。ここでは、背景の情報を挿入的に語り、日常的な事柄や過去の事柄を物語場面に結び付けることになっている。

103 から物語場面そのものの語りに戻る。103 は状態描写で、104 はタ形で事象が語られ事態が進行する。

98～104 のこの段落は、物語世界そのものの語りでない語りも含まれ、事態のあまり継起しない物語場面の語りとなっている。

【25】 105 「どうだ」と云ふ。106 見ると標題に大きな活字で「偉大なる暗闇」とある。

107 下には零余子と雅号を使つてゐる。108 偉大なる暗闇とは与次郎がいつでも広田先生を評する語で、三四郎も二三度聞かされたものである。109 然し零余子は全く知らん名である。110 どうだと云はれた時に、三四郎は、返事をする前提として一先づ与次郎の顔を見た。111 すると与次郎は何にも云はずに其扁平な顔を前へ出して、右の人指し指の先で、自分の鼻の頭を抑へて凝としてゐる。112 向に立つてゐた一人の学生が、此様子を見てにやにや笑ひ出した。113 それに気が付いた与次郎は漸く指を鼻から放した。

（『三四郎』六の一：422）

105 は事象の語り。106 と 107 は、三四郎が「文芸時評」を向けられたときに知覚した内容で、状態描写である。108 は、106 の内容についての説明、109 は 107 についての説明である。110 は事象の語りである。111 は、110 で「与次郎の顔を見た」とあるのに対して、その見たときに知覚した内容で、状態描写である。112 と 113 は事象の語りで、事態が継起していく。この段落は、事象の語りを中心にしながらも、状態描写と用語についての説明も混ざっている。物語世界の時間としてはさほど長い時間が経過していないと考えられるが、それに対する語りの分量は比較的多くなっている。特に、動詞のタ形文末が少なく、事態はそれほど継起していかない。

【26】 114 「己が書いたんだ」と云ふ。115 三四郎は成程さうかと悟つた。

「僕等が菊細工を見に行く時書いてゐたのは、是か」

「いや、ありや、たつた二三日前ぢやないか。さう早く活版になつて堪るものか。あれは来月出る。これは、ずっと前に書いたものだ。何を書いたものか標題で解るだらう」

「広田先生の事か」

「うん。かうして輿論を喚起して置いてね。さうして、先生が大学へ這入れる下地を作る……」

「其雑誌はそんなに勢力のある雑誌か」

116 三四郎は雑誌の名前さへ知らなかつた。

117 「いや無勢力だから、実は困る」と与次郎は答へた。118 三四郎は微笑はざるを

得なかつた。

「何部位売れるのか」

119 与次郎は何部売れるとも云はない。

120 「まあ好いさ。書ゝんより増しだ」と弁解してゐる。

(『三四郎』六の一：422-423)

114 と 115 は事象の語り。その後、与次郎の論文についての会話となる。116 は会話の最後の部分についての説明となっているが、「知らない」という三四郎の状態描写としておく。117 は事象の語り。118 は「～せざるをえない」という説明的状态と考えたい。119 と 120 状態描写である。

118、119 は文末に「～ない」という打消の要素を持っている状態描写だが、この 2 文では時間が継起している。この段落では、状態描写も多く含まれていて非常に速く事態が進んでいくわけではないが、事態は継起していく。

この「六の一」が『三四郎』の典型というわけではないが、「六の一」では、物語場面の事象の語りで事態が継起していきながら、ところどころに作中人物の知覚を利用した状態描写や、事物の説明が混じっている。動詞のタ形が比較的多いので「事態全体をまとめてとらえる」ことが多くなり、事態は次々と展開していくことになっている。ただし、状態描写や説明によって語る分量が増えるので、物語場面が簡潔に語られているわけではない。

1.9.1.2 『道草』の一文ごとの機能

『道草』では、物語場面が含まれているが会話ばかりでない部分として、はじめの部分の 103 文以降から用例を採取した。

【27】 103 彼には一人の腹違の姉と一人の兄があるぎりであつた。104 親類と云つた所で此二軒より外に持たない彼は、不幸にして其二軒ともあまり親しく往来をしてゐなかつた。105 自分の姉や兄と疎遠になるといふ変な事実は、彼に取つても余り気持の好いものではなかつた。106 然し親類づきあひよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。107 それから東京へ帰つて以後既に三四回彼等と顔を合せたといふ記憶も、彼には多少の言訳になつた。108 もし帽子を被らない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木の町を毎日二返規則正しく往来する丈で、当分外の方角へは足を向けずにしまつたらう。109 もし其間に身体の楽に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢を畳の上に横たへて半日の安息を貪るに過ぎなかつたらう。

(『道草』三：10)

103～109 は物語場面そのものでない語りである。103～107 は、「具体的な時間に関わらない語り」である。108 と 109 は語り手の感想で、説明に分類できる。

『道草』には、この部分のように「具体的な時間に関わらない語り」が多く、それによって、具体的な出来事を普遍的な事態の例のように解説する傾向がある。『三四郎』に比べて物語場面でない語りが非常に多い。

【28】 110 然し次の日曜が来た時、彼は不図途中で二度会つた男の事を思ひ出した。111

さうして急に思ひ立つたやうに姉の宅へ出掛けた。112 姉の宅は四ッ谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。113 彼女の夫といふのは健三の従兄にあたる男だから、つまり姉にも従兄であつた。114 然し年齢は同年か一つ違で、健三から見ると双方とも、一廻りも上であつた。115 此夫がもと四ッ谷の区役所へ勤めた縁故で、彼が其所を已めた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといつて、姉は今の勤先に不便なもの構はずに、矢つ張り元の古ぼけた家に住んでゐるのである。

（『道草』三：10-11）

109 までは、健三の日常について「具体的な時間に関わらない語り」で説明している。それに続いて、110 からは具体的な出来事を語っている。110 と 111 は物語場面そのものの語りで、事象の語りである。しかし、大まかに事態をとらえて語っている。112～115 は物語場面そのものでない語りで、「具体的な時間に関わらない語り」ある。「姉の宅」についての解説として機能している。このように物語の事態は大まかに進行するが、事態が次々に継起するようには語られない。出来事の解説として機能する語が多い。

【29】 四

116 此姉は喘息持であつた。117 年が年中ぜいぜい云つてゐた。118 それでも生れ付が非常な癩性なので、余程苦しくないとは決して凝としてゐなかつた。119 何か用を拵えて狭い家の中を始終ぐるぐる廻つて歩かないと承知しなかつた。120 其落付のないガサツな態度が健三の眼には如何にも気の毒に見えた。

121 姉は又非常に饒舌る事の好きな女であつた。122 さうして其喋舌り方に少しも品位といふものがなかつた。123 彼女と対坐する健三は屹度苦い顔をして黙らなければならなかつた。

「是が己の姉なんだからなあ」

124 彼女と話をした後の健三の胸には何時でも斯ういふ述懐が起つた。

（『道草』四：11）

116～124 も、物語場面そのものでない語りで、「具体的な時間に関わらない語り」である。「姉」の解説として機能している。次の 125 から再び物語場面の語りとなる。

【30】 125 其日健三は例の如く襷を掛けて戸棚の中を掻きまはしてゐる此姉を見出した。

「まあ珍らしく能く来て呉れたこと。さあ御敷きなさい」

126 姉は健三に坐蒲団を勧めて縁側へ手を洗ひに行つた。

127 健三は其留守に座敷のなかを見廻した。128 欄間には彼が子供の時から見覚えのある古ぼけた額が懸つてゐた。129 其落款に書いてある筒井憲といふ名は、たしか旗本の書家か何かで、大変字が上手なんだと、十五六の昔此所の主人から教へられた事を思ひ出した。

（『道草』四：11-12）

125～127 は、間に姉の発言を挟んで、事象の語りが続いている。128 は、127 の「～座敷のなかを見廻した」に続いて、その「見廻し」で知覚したものを状態描写している。129 は、その知覚によって昔のことを思い出すという、事象の語りとなっている。

このように、作中人物が何かを見て、次にその見たものを状態描写するということは、『三
四郎』でもよく見られた。この部分は、物語場面そのものの語が多い。

【31】 130 彼は其主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものである。131
さうして年から云へば叔父甥程の相違があるのに、二人して能く座敷の中で相撲をと
つては姉から怒られたり、屋根へ登つて無花果をも（=手偏+劣）いで食つて、其皮を
隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。132 主人が箱入りのコンパスを買つて
遣ると云つて彼を騙したなり何時迄経つても買つてくれなかつたのを非常に恨めしく
思つた事もあつた。133 姉と喧嘩をして、もう向ふから謝罪つて来ても勘忍してやらな
いと覚悟を極めたが、いくら待つてゐても、姉が詫まらないので、仕方なしに此方か
らのこのこ出掛けて行つた癖に、手持無沙汰なので、向ふで御這入りといふ迄、黙つ
て門口に立つてゐた滑稽もあつた。……

（『道草』四：12）

130～133 は、物語場面そのものでない語りで、「過去についての語り」である。次の 134
に「古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向けた」とあるこ
とから、130～133 は、姉の宅での物語場面で健三が回想した内容であることが分かる。

【32】 134 古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向けた。135
さうして夫程世話になつた姉夫婦に、今は大した好意を有つ事が出来にくゝなつた自
分を不快に感じた。

「近頃は身体の具合はどうです。あんまり非道く起る事もありますか」

136 彼は自分の前に坐つた姉の顔を見ながら斯う訊ねた。

「えゝ有難う。御蔭さまで陽気が好いもんだから、まあ何うか斯うか家の事丈は遣
つてゐるんだけど、——でも矢つ張り年が年だからね。とても昔しの様にガセイに
働く事は出来ないのさ。昔健ちやんの遊びに来てくれた時分にや、随分尻つ端折りで、
夫こそ御釜の御尻迄洗つたもんだが、今ちやとてもそんな元気はありやしない。だけ
ど御蔭様で斯う遣つて毎日牛乳も飲んでるし……」

137 健三は些少ながら月々いくらかの小遣を姉に遣る事を忘れなかつたのである。

「少し痩せた様ですね」

「なに是や私の持前だから仕方がない。昔から肥つた事のない女なんだから。矢ツ
張り癪が強いもんだからね。癪で肥る事が出来ないんだよ」

138 姉は肉のない細い腕を捲つて健三の前に出して見せた。139 大きな落ち込んだ彼
女の眼の下を薄黒い半円形の暈が、怠さうな皮で物憂げに染めてゐた。140 健三は黙つ
て其ばさばさした手の平を見詰めた。

「でも健ちやんは立派になつて本当に結構だ。御前さんが外国へ行く時なんか、も
う二度と生きて会ふ事は六づかしからうと思つてたのに、それでもよくまあ達者で帰
つて来られたのね。御父さんや御母さんが生きて御出だつたら嘸御喜びだらう」

141 姉の眼にはいつか涙が溜つてゐた。142 姉は健三の子供の時分、「今に姉さんに
御金が出来たら、健ちやんに何でも好きなものを買つて上げるよ」と口癖のやうに云

つてみた。143 さうかと思ふと、「こんな偏窟ぢや此子はとても物にやならない」とも云った。144 健三は姉の昔の言葉やら語気やらを思ひ浮べて、心の中で苦笑した。

『道草』四：12-14)

134 と 135 は事象の語りであり、健三の心情の流れが語られている。その後会話になっているが、これによって物語世界の事態の展開が感じられる。会話の間の 136 は事象の語りである。137 は物語場面そのものでない語りで、日常的な状態を語っており、「具体的な時間に関わらない語り」である。直前の発言の解説として機能している。138 は、直前の発言と関わっている事象の語りである。139 は、健三が姉を見たときに知覚した内容で状態描写になっている。140 は、138 の内容を受けての事象の語りである。発言のあとの 141 は状態描写である。

142 と 143 は物語場面そのものでない語りで、「過去についての語り」である。ただし、次の 144 に「～を思ひ浮かべて」とあることから、このときに健三が回想した内容であることが分かる。144 は事象の語りで、健三の心情の動きを語っている。

134～144 は、物語場面そのものの語りが比較的多く、会話が進んでいく。しかし、状態描写や「具体的な時間に関わらない語り」による解説なども含まれるため、事態がどんどん進んでいくわけではない。

このように見てくると、物語場面の中でも、物語場面そのものでない語りが多く混じっていることがわかる。「過去についての語り」は実際に物語場面の中で健三が回想したものであり、物語場面内のことであるが、物語場面の事態の解説として機能している。

状態描写や物語場面そのものの語りとしての説明は少ない。その代り、物語場面そのものでない語りによる解説が多く、物語場面の時間展開に対しての語る分量は多くなっている。このことによって、物語場面の背景が詳しく語られることになっている。これは、物語場面が、物語場面そのものでない語りによって相対化されているといえる。物語場面は、「具体的な時間に関わらない語り」や「過去についての語り」と関連する一部の具体的な出来事として捉えられる傾向がある。

しかし、『道草』にも物語場面が比較的に長く続く部分もあり、いろいろな語りでテキストが構成されている。しかし、このような全体の傾向はあるといえる。

1.9.1.3 『三四郎』『道草』における地の文の機能

以上のように、ある程度まとまった部分を検討してきた。『道草』は物語場面そのものを語らない語りによって、物語場面が解説されることが多い傾向がある。『三四郎』は、物語場面そのものを語らない語りは『道草』ほど多くない。物語場面の状態描写や説明によって物語場面が詳しく語られ、物語場面そのものの語りを中心として語られる傾向がみられた。

1.9.1 では 1 文ごとに文の機能を検討したが、次にテキスト全体の傾向を、用例数を中心に検討していきたい。

1.9.2 『三四郎』と『道草』における、物語場面に関する傾向

『道草』のはじめ・中間・おわりのそれぞれ 300 余文を合計した 976 文中、物語場面そ

のものを語る語りは517文で、物語場面そのものを語らない語りは459文であった。同様に『三四郎』959文中、物語場面そのものを語る語り897文、物語場面そのものを語らない語り62文であった。この二つのテキストにおける物語場面そのものを語る語りの割合には、傾向の違いが見られる。

また、物語場面そのものを語る語りの量を見ると、『三四郎』と『道草』における事象・状態・説明の量的な割合は、ともに事象57～60%、状態32～35%、説明約8%で顕著な差が見られない。しかし、この中で、『三四郎』のはじめの約300文と中間の約300文においては、事象の語りがやや少なく状態の語りがやや多い⁶⁾。

また、『道草』における状態についての語りは、物語場面の中での割合としては『三四郎』とそれほど大きく変わらないが、物語場面そのものを語る語りが『三四郎』よりかなり少ないため、全体の中の量としてはかなり少ない印象を与えている。物語場面においては説明も少ないが、物語場面でないところに説明的な語り（「過去の語り」「具体的な時間に関わらない語り」）が多いため、全体の中で説明が少ないという印象は与えない。これに対して、状態の語りは物語場面内にしかないため、テキスト全体の中の量の少なさが目立つ。

また、物語場面の中での説明として、『道草』では事態を意味づけるようなものが多いが、『三四郎』はその場かぎりのものが多い。1.7.2で指摘したとおりである。

これらのことから、『三四郎』では、三四郎の知覚を中心にしながら、状態がよく語られ、物語場面の描写が重視されているといえる。また、物語場面の割合が『三四郎』の方が多いため、事象の語りの絶対数も『三四郎』の方が多くなる。『三四郎』の方が具体的な物語場面での事態の動きが多く語られているといえる。

1.9.3 『三四郎』と『道草』における、物語場面そのものを語らない語りに関する傾向

1.9.3.1 『三四郎』の物語場面そのものを語らない語りの傾向

『三四郎』は、『道草』に比べて物語場面そのものを語らない語りが極端に少ない。テキストの「はじめ」の部分にはやや多く見られるが、その他の部分ではところどころに短い解説として挿入されている程度である。このことから、『三四郎』は物語場面の語りを重ねることによって、語りが進行していくテキストだと考えられる。

1.9.3.2 『道草』の物語場面そのものを語らない語り傾向

『道草』は、物語場面そのものを語らない語りが非常に多く、具体的物語場面そのものを語る場合が相対的に少ない。物語場面そのものを語らない語りの中に、物語場面そのものの語りをあてはめていくという作業がなされているともいえる。

『道草』では、1.8で示した「物語場面そのものを語らない語りはどのように語られるか」のすべてのパターンが観察される。特に目立つのは、1.8.2の(4)で示したような、具体的な時間に関わらない性質や状態が、具体的物語場面にも反映していることを示すというパターンである。そのような用例は、1.9.2で示した「はじめ・中間・終わり」の976文の中に6カ所観察された。文数の合計として58文であった。前掲【17】～【19】では、日常的な状態や習慣が語られたあとに、具体的な物語場面が語られているが、その物語場面はそ

の前の日常的な状態や習慣にあてはまる内容になっている。また、【20】ではその逆の順になっている。具体的な時間に関わらない性質や状態と、具体的物語場面とを関係づけようとしていることが多いのである。

また、1.8.1の(3)で示したような、具体的な時間に関わらない性質や状態が、過去の具体的出来事に反映している例も4カ所観察され、文数の合計として31文あった。

『三四郎』の959文中では、具体的な時間に関わらない性質や状態が、具体的物語場面や過去の内容に反映している例は、1カ所で合計2文だけ観察された。

このようなことから、『道草』では、具体的な時間に関わらない内容が、具体的な出来事に関連付けられて語られることが多いといえる。このことにより、物語場面の具体的内容だけでなく、普遍的・一般的内容を語る傾向にあると考える事が出来る。

また、大掴みな展開の語りから具体的な物語場面の語りに移行することがあり、大掴みな展開と具体的物語場面を織り交ぜながらストーリーを進行させているともいえる。

さらに、連想によって物語場面から過去の語りに移行することが非常に多いということも指摘できる。またそのとき、具体的な物や視覚が媒介になることが多く、物語場面と過去を重ねながら語り、普遍的なものを見出そうとしていると考えられる。また、このことは、作中人物の意識や知覚を重視しながら語っているともいえる。

1.9.2で示した976文中で、連想によって過去の内容に移行するのは8カ所で、そのときの過去の語りは合計87文である。同様の『三四郎』の例は4カ所で、そのときの過去の語りの合計は9文である。『三四郎』でも連想による過去への移行はあるものの、過去の語りの分量は少ない。このことから、『道草』では健三の回想が多く取り入れられているといえる。これらのことから、『道草』は物語場面の内容は、具体的な時間に関わらない性質や状態だけでなく、過去の出来事によっても、相対化されているといえる。

次の用例は、調査対象外の部分であるが、育ての親の島田が訪ねてきている部分である。下線部が連想による過去の語りである。

【33】 成程火屋が薄黒く燻つてゐた。丸心の切方が平に行かない所を、無暗に灯を高くすると、斯んな変調を来すのが此洋燈の特徴であつた。

「換へさせませう」

家には同じ型のものが三つばかりあつた。健三は下女を呼んで茶の間にあるのと取り換へさせようとした。然し島田は生返事をする限で、容易に煤で曇つた火屋から眼を離さなかつた。

「何ういふ加減だらう」

彼は独り言を云つて、草花の模様丈を不透明に擦つた丸い蓋の隙間を覗き込んだ。

健三の記憶にある彼は、斯んな事を能く気にするといふ点に於いて、頗る几帳面な男に相違なかつた。彼は寧ろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金銭上の不潔癖の償ひにでもなるやうに、座敷や縁側の塵を気にした。彼は尻をからげて、拭掃除をした。跣足で庭へ出て要らざる所迄掃いたり水を打つたりした。

物が壊れると彼は屹度自分で修復した。或は修復さうとした。それがために何の位な時間が要つても、又何んな労力が必要になつて来ても、彼は決して厭はなかつた。

さういふ事が彼の性にある許りでなく、彼には手に握つた一錢銅貨の方が、時間や労力よりも遥に大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅で出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」

損をするといふ事が彼には何よりも恐ろしかつた。さうして目に見えない損は幾何しても解らなかつた。

(中略)

其時島田は洋燈の螺旋を急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になつた。それに驚いた彼は、又螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はたゞでさへ暗い灯火を猶の事暗くした。

「何うも何処か調子が狂つてますね」

健三は手を敲いて下女に新しい洋燈を持つて来させた。

(『道草』四十八)

この用例において、健三は、島田がランプの不具合に固執する態度を見て、昔の島田を回想している。過去の出来事を連想することにより、島田の人間性が普遍化して語られることになっている。

以上のように、『道草』においては、健三の連想によって過去の内容に移行することが多く、そのことによって物語場面の内容が相対化されていることを指摘した。このことは、清水(1985)において「回想は、現在の健三の状況を照らし、解析し、そしてパラフレーズしている」と指摘されているのと合致する。清水(1985)は文学研究の立場から『道草』における回想の果たしている役割を指摘している。本稿における文機能分析においては、健三の連想によって過去の内容に移行することが実際に『道草』に多く、物語場面が過去の出来事によって相対化される構造をもっていることが論証された。また、本稿では、『道草』の物語場面(清水(1985)では「現在」という)が、過去の語りだけでなく日常の具体的な時間に関わらない語りによっても相対化されることを指摘した。

さらに、発言の前後に解説が挿入され、発言の背景が語られることもある。既出の【21】や【22】の用例では、発言の前や後に物語場面そのものを語らない語りがなされ、発言の解説として機能している。

具体的物語場面にはその背景が必ずあるはずだが、『道草』はその背景を解説することが多いといえる。

1.9.3.3 『道草』『三四郎』の、物語場면을語らない語りの相違点

『三四郎』の物語場面そのものを語らない語りは、その物語場面の事象や状態を補足説明することが多いが、『道草』の物語場面そのものを語らない語りは、さらに目に見えない状況や背景について詳しく解説する。

また、『三四郎』は物語場面そのものを語ることが多いが、『道草』は物語場面そのものを語らない語りが多く挿入されるため物語世界の「いま」の事態は相対化されて語られ、具体的物語場面だけが中心にはなっていない。

1.9.4 『三四郎』と『道草』の相違

『道草』は物語場面そのものを語らない語が多く、「具体的な時間に関わらない語り」や「過去の語り」によって、現在の物語場面が相対化されて語られる傾向がある。またストーリーも大掴みな語りと物語場面の語りが組み合わされて展開している。これに対して、『三四郎』は物語場면을積み重ねることによってストーリーが展開し、その物語場面で語られている内容が相対化されることはほとんどない。これらのことから、『三四郎』の方が物語場面に重きをおいて語っていることがわかる。

以上のことから、『道草』では物語場面が相対化されて語られ、『三四郎』では物語場面が独自性をもったものとして語られる、という傾向を認めることができる。それによって、『道草』は全体の構成が意識されたうえで語られ、逆に『三四郎』は写生文的にその場を語っていく傾向があるといえる。

2 『それから』における物語場面

ここまで、『三四郎』『道草』を対象として、物語場面そのものの語りとそうでない語りという観点の調査・分析をしてきた。本節では、前節の分類を利用して、『それから』の表現上の特徴を分析する。はじめにいわゆる前期三部作のひとつである『それから』を分析し、次にいわゆる後期三部作の『彼岸過迄』について調査することとした。

漱石は、『吾輩は猫である』以来、その表現・文体をいろいろ変えていったが、その中で『それから』は、事態の進行と語る順番が一致しないいわゆる錯時法⁷⁾が多く用いられ、また背景にある事情が挿入されることの多いテキストである。また、『それから』には、ストーリー展開の非常に速いところもあるが、停滞するところもある。語られ方によって時間の流れはさまざまである。ここでは、これらの表現特性の仕組みと物語場面との関係について調査・考察した。また、『それから』はいわゆる姦通小説であるため、心理描写が必然的に多くなる。そこで、テキストにどのような方法で心理描写が挿入されるかも注目した。

2.1 物語場面そのものでない語りの挿入

物語場面そのものを語らない語りの中の「Ⅰ過去についての語り」と「Ⅱ具体的な時間に関わらない語り」は、ストーリー展開に関わらない語りである。まず、『それから』におけるこれらの語りについて検討し、『それから』の特徴をみていきたい。

2.1.1 具体的な時間に関わらない語り

『それから』では、次の用例のように、「具体的な時間に関わらない語り」が多く挿入されている。次の用例の【34】【35】の下線部では、代助の性癖や考え方について、語り手が代助を対象化して語り手の立場で語っている。

【34】けれども——代助は覚えず慄とした。彼は血潮によつて打たるゝ掛念のない、静かな心臓を想像するに堪へぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寐ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此所を鉄槌で一つ撲されたなと思ふ事がある。彼は健全に生きてゐながら、此生きてゐるといふ大丈夫な事実を、殆んど奇蹟の如き僥倖とのみ

自覚し出す事さへある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた

(『それから』 一の一：4)

【35】丸で女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。実際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉体に誇を置く人である。彼の尤も嫌ふのは羅漢の様な骨骼と相好で、鏡に向ふたんびに、あんな顔に生れなくつて、まあ可かつたと思ふ位である。其代り人から御洒落と云はれても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えてゐる。

一の二

約三十分の後彼は食卓に就いた。

(『それから』 一の一～二：5)

次の【36】は、代助以外の作中人物についての説明で、「具体的な時間に関わらない語り」である。このとき、代助の知覚が利用されていると考えられる。下線部分は、物語世界の「いま」「ここ」の現場の語りではない。つまり、代助がこの場で知覚したり考えたりしたことではない。そうではあるが、代助の普段の知覚・認識を反映していると考えられる。それは、「此方の云ふこと」という表現があることにより代助の立場からの語りであり、代助はこのようなことを考えていたと思われるからである。しかし、「いま」「ここ」での現場では、代助は「それぎり黙つて仕舞つた」だけで、具体的にこのような思考をしてはいない。したがって、この部分全体は、語り手が代助の知覚や認識を利用しながら、解説を挿入し構成しているのである。代助の知覚・認識が使われている部分は、語り手がその内容を要約して引用し構成したと規定するのが適当である。このように、代助以外の作中人物や事物について解説する場合には、代助の知覚や認識を利用した語が多い。代助がとらえたその人物や事物について語られているのである。このような表現では、語り手が代助の知覚・認識を代弁しているような印象を与える。

【36】「へえ、左様なもんですかな」と門野は稍真面目な顔をした。代助はそれぎり黙つて仕舞つた。門野は是より以上通じない男である。是より以上は、いくら行つても、へえ左様なもんですかなで押し通して澄ましてゐる。此方の云ふことが応へるのだから、応へないのだから丸で要領を得ない。代助は、其所が漠然として、刺激が要らなくつて好いと思つて書生に使つてゐるのである。

(『それから』 一の二：7)

以上のように、「具体的な時間に関わらない語り」は、代助についての解説とその他の人物・事物の解説とがあるが、前者は語り手の立場からの語り、後者は代助の知覚・認識を利用した語が多い。文末表現に注目すると、両者とも「である」、「のである」、状態を表す「ている」や「ある」などが多用されている。

また、【34】【35】では、非タ形の「である」文末の文などを用いて、語り手が自分の判断を強く受け手に働きかけて解説している。【36】も、代助の知覚・認識を利用しながらも、同様に語り手が受け手に強く働きかけている。

このような『それから』の「具体的な時間に関わらない語り」の多くは、そこで語られ

ている具体的事態の背景を説明するもので、長いこともしばしばある。上の【34】～【36】の下線部の例のように、人物の性質の後に具体的な事例が語られることが多く、それがさらに発展し長くなることもある。例えば、【36】で引用した部分のあとは、この後もなかなか物語場面の現場の語りに戻らず、『漱石全集』にして約1ページのエピソードが続いた後、約4ページにわたって門野がこの家の書生になる事情が語られる。これらのことから、『それから』の語り手が、物語場面の現場の語りから離れやすいという傾向も確認できる。

また、これらの語りが元の物語場面の現場の語りに戻ったときは、元の現場の時間がある程度進んでいると考えられるように設定されていることが多い。このため、解説が挿入されても物語場面の現場の語りの時間の流れはそれほど不自然になっていない。【34】～【36】でも、それは共通している。

ところで、これまでの「具体的な時間に関わらない語り」の例は前文についての解説になっていたが、後に続く物語場面での語りに影響する例もある。次の【37】の下線部は、代助の兄についての日常の状態を語った部分である。

【37】代助の顔を見るや否や、

「此室は大変好い香がする様だが、御前の頭かい」と聞いた。

「僕の頭の見える前からでせう」と答へて、昨夜の香水の事を話した。兄は、落ち付いて、

「はゝあ、大分洒落た事をやるな」と云った。

一二の四

兄は滅多に代助の所へ来た事のない男であつた。たまに来れば必ず来なくつてならない用事を持つてゐた。さうして、用を済ますとさつさと帰つて行つた。今日も何事か起つたに違ないと代助は考へた。さうして、それは昨日誠太郎を好加減に胡魔化して返した反響だらうと想像した。五六分雑談をしてゐるうちに、兄はとうとう斯う云ひ出した。

(『それから』十二の三～四：209)

この部分では、下線部が下線部の次にある代助の推測の語りを支える前提の知識となっている。つまり、下線部は前提の説明として機能しているといえる。そこには論理的に語ろうという姿勢が見られる。

また、ここでは、「である」文末の文でなくタ形の「であつた」文末の文が用いられているため、受け手に対する強い働きかけはない。

以上のように、『それから』における「具体的な時間に関わらない語り」は前文までの背景を解説したり、前提の説明となったりして機能することが多い。また、全文調査したところ、「具体的な時間に関わらない語り」はテキスト全体の地の文の11.4%を占めていた。1.9.2で検討した『道草』976文、『三四郎』959文で調査したところ、『道草』の「具体的な時間に関わらない語り」は19.3%、『三四郎』の「具体的な時間に関わらない語り」は1.6%であつた。『道草』には及ばないが、『それから』ではある程度のまとまった量が「具体的な時間に関わらない語り」で占められているといえる。しかし、このような解説をする場合に作中人物の代助の知覚を利用していることがあり、語り手の立場の解説が多い『道草』

とは異なる点もある。

2.1.2 過去についての語り

「具体的時間に関わらない語り」と同様に、過去についての語りも物語場面の語りの解説となっている。過去の事態と関連させて現在をとらえるということである。

次の【38】の一重下線部は、『それから』の冒頭の部分よりも時間的にさらに前のことであり、代助を対象化して「代助が」「彼は」と表現していることや、一重下線部の3文後の文に「代助はそんな事があった様にも思つて」とあることから、語り手の立場での語りといえる。ここでも、おもてには見えない背景を語り手が補って読者に解説している。

【38】 「僕に呉れたのか。そんなら早く活けやう」と云ひながら、すぐ先刻の大鉢の中に投げ込んだ。茎が長すぎるので、根が水を跳ねて、飛び出しさうになる。代助は滴る茎を又鉢から抜いた。さうして洋卓の引出から西洋鋏を出して、ぷつりぷつりと半分程の長さに剪り詰めた。さうして、大きな花をリリー、オフ、ゼ、ワ、レー、の簇がる上に浮かした。

「さあ是で好い」と代助は鋏を洋卓の上に置いた。三千代は此不思議に無作法に活けられた百合を、しばらく見てゐたが、突然、

「あなた、何時から此花が御嫌になつたの」と妙な質問をかけた。

昔し三千代の兄がまだ生きてゐる時分、ある日何かのはずみに、長い百合を買つて、代助が谷中の家を訪ねた事があつた。其時彼は三千代に危しげな花瓶の掃除をさして、自分で、大事さうに買つて来た花を活けて、三千代にも、三千代の兄にも、床へ向直つて眺めさした事があつた。三千代はそれを覚えてゐたのである。

「貴方だつて、鼻を着けて嗅いで入らしたぢやありませんか」と云つた。代助はそんな事があつた様にも思つて、仕方なしに苦笑した。

（『それから』十の五：169）

このような挿入はいたるところに見られる。ときどきは、代助が思い出したり考えたりする内容のこともあるが、語り手の解説の形式であることが多い。

上の用例の下線部に対して、「のである」文が、過去の事情と現場の事態を結びつけている。この「のである」文末の文は、『『あなた、…』と妙な質問をかけた。』という表現に対して解説した文だからである。

次の例も過去の事情を挿入として語る例である。しかし、過去にあたる下線部の内容は、このテキストの冒頭部分よりも時間的に後のことである。つまり、これまでの語りの中で省略されていた内容である。

【39】 代助は門を出た。江戸川迄来ると、河の水がもう暗くなつてゐた。彼は固より平岡を訪ねる気であつた。から何時もの様に川辺を伝はないで、すぐ橋を渡つて、金剛寺坂を上つた。

実を云ふと、代助はそれから三千代にも平岡にも二三遍逢つてゐた。一遍は平岡から比較的長い手紙を受取つた時であつた。それには、第一に着京以来御世話になつて

難有いと云ふ礼が述べてあつた。(中略)

いま一遍は、愈新聞の方が極まつたから、一晩緩り君と飲みたい。何日に来て呉れ
といふ平岡の端書が着いた時、折悪く差支が出来たからと云つて散歩の序に断わりに
寄つたのである。(中略)

三遍目には、平岡の社へ出た留守を訪ねた。其時は用事も何もなかつた。約三十分
許り椽へ腰を掛けて話した。

夫から以後は可成小石川の方面へ立ち回らない事にして今夜に至たのである。代助は竹早町へ上つて、それを向ふへ突き抜けて、二三町行くと、平岡と云ふ軒燈のすぐ前へ来た。格子の外から声を掛けると、洋燈を持つて下女が出た。が平岡は夫婦とも留守であつた。代助は出先も尋ねずに、すぐ引返して、電車へ乗つて、本郷迄来て、本郷から又神田へ乗り換えて、そこで降りて、あるビヤ、ホールへ這入つて、麦酒をぐいぐい飲んだ。

『それから』十一の四：183-185)

下線部の「実を云ふと、代助はそれから三千代にも平岡にも二三遍逢つてゐた。」の「それから」というのは、十章の三千代が訪ねてきたとき以来を指すと考えられる。三千代が訪ねてきてからは、甥の誠太郎のこと、代助のアンニュイな気分のことぐらしかテキストには語られていなかったが、この間に三千代と平岡に会っていたということになる。

前の用例と同様に、「のである」文末の文によって、過去の内容が現場の語りと関係づけられている。このように、『それから』では「のである」文末の文によって、過去の挿入の意図を明確に解説して、元の物語場面の語りに戻る例が多い。この表現により、元に戻ったことがはっきりする。また、論理的に解説しようという語り手の態度が確認できる。

以上のように省略された部分を後になって過去として語り直すという例もあり、『それから』というテキストでは、時間の流れと語りの流れが一致していないことが多い。しかし、「のだ」文を用いるなどして、過去を現在との関係で論理的に位置づけようとしていて、語り手の構成意図が感じられる。前作『三四郎』のように物語世界の時間の流れに沿って語るテキストではない。

1.9.2で検討した『道草』976文での「過去の語り」は16.9%、『それから』の全文調査の「過去の語り」は9.9%であつた。また、1.9.2で検討した『三四郎』の959文中の「過去の語り」は3.2%であつた。『それから』は、『道草』ほどではないが、「過去の語り」の多いテキストだといえる。しかし、『道草』では、作中人物健三の連想・想起によって過去の内容が挿入されることが多いのに対し、『それから』では、語り手が「のだ」文を用いて過去の内容を物語場面の語りに結び付けることが多いという傾向が見られる。『それから』の方が、論理的に物語場面とそうでない部分を結び付けようとしていると考えられる。つまり、『それから』の方が、「過去の語り」が物語場面の解説として強く機能していると考えられる。

「具体的時間に関わらない語り」と「過去の語り」について検討してきたが、この二つの語りは、広い意味で物語場面についての解説といえる。これらの解説が多いという点では、『それから』は前節で検討した『道草』と傾向が似ている。『道草』ほどではないが、『三四郎』と比較すると、『それから』は解説の多いとテキストだといえる。

『道草』では、「具体的時間に関わらない語り」と「過去の語り」により出来事の背景にある状況が詳細に語られていて、物語場面の内容はそのような状況の具体的な表れとして語られる傾向があった。『道草』にもストーリーはあるが、健三と育ての親との交渉が進行していくということが中心であり、大きな波乱もなく作中人物が日常生活を送る中で少しずつ進行していくというものである。このような『道草』の特徴は、『道草』の解説の多さからみても順当な見方だと考えられる。これに対して、『それから』は、物語場面を中心としたストーリーの流れがあり、その中で解説が挿入されているという傾向がある。『それから』は、代助が三千代と結婚することを決めるまでの波乱がストーリーの中心にして、代助と平岡との関係の変化や代助と家との関係の動きが関連して語られる。ストーリーの展開は、『道草』より波乱を含み複雑である。このような展開のなかで、出来事の背景や人物・事物を解説し、個々の出来事を論理的に結びつけているために多くの解説がなされたのが、『それから』の「具体的時間に関わらない語り」と「過去の語り」だと考えられる。この解説の分量が『道草』より少なく『三四郎』より多いというのは、このように解釈できる。

2.1.3 大掴みに展開をとらえて語る

「大掴みに展開をとらえて語る」場合も、物語場面そのものの語りではない。しかし、「具体的時間に関わらない語り」と「過去の語り」と異なり、「大掴みに展開をとらえて語る」場合は、物語世界の事態が進行していく。

次の用例は、代助が平岡を呼び出して食事をしながら話しをした部分である。

- 【40】 代助は少々平岡を低く見過ぎたのに恥ぢ入った。実は此側から、彼の心を動かして、旨く油の乗った所を、中途から転がして、元の家へ滑り込ませるのが、代助の計画であつた。代助は此迂遠で、又尤も困難の方法の出立点から、程遠からぬ所で、蹉跎して仕舞つた。

一三の九

其夜代助は平岡と遂に愚図々々で分れた。会見の結果から云ふと、何の為に平岡を新聞社に訪ねたのだから、自分にも分らなかつた。平岡の方から見れば、猶更左様であつた。

(『それから』十三の八～九：247)

下線部は、現場の具体的な場面の語りではなく、「其夜」のことをまとめて語っており、大掴みな語りといえる。物語世界の時間が一気に進むことになる。このような語りは多くのテキストで見られるものである。『それから』においてもよく用いられているが、他のテキストと比較して特に特徴的な用法は観察できなかった。

2.2 物語場面そのものの語り

『それから』は、物語場面そのものでない語りの分量が多い。そのため、物語場面そのものの語りの分量が相対的に少なくなっている。しかし、少ない物語場面でもストーリーは展開している。少ない物語場面でどのようにストーリー展開していくのかに注目しながら

ら、物語場面の語りを検討したい。

『それから』で描かれている時間は、つばきの花のある頃から暑い盛りまでということなので、長く見ても3月～8月、短ければ4月～7月で、4～6ヶ月間である。この期間は小説として特に長いわけではないが、物語世界のすべてを語るわけにはいかない。語る時間（読む時間）は、通常物語世界に流れる時間よりも短くなければならない。

現場の具体的現場を語るときは、語る時間が物語世界に流れる時間と同じぐらいになることが多いだろう。そのため、多くの具体的現場を設定したり一つの具体的物語場面を長く語ったりすれば、他の部分を語る時間は減らす必要が出てくる。

『それから』では、「省略—語らない部分を作る」「物語場면을簡潔に語る」「大掴みに語る」のような語り方が用いられ、語る分量が調節されている。本稿では、「省略」とは、物語世界のある事態やある期間を語らないこと、としたい。「物語場면을簡潔に語る」とは、物語場面の現場を語っているが、現場の時間の流れに比べると短い時間で語り終わってしまうような場合としたい。「物語場면을簡潔に語る」と「大掴みに展開を語る」ということとは連続的である。

2.2.1 簡潔に語られる物語場面

物語場面が多くない場合、物語世界のある期間については語らないということもあり得る。しかし、『それから』の場合、物語世界のまとまった期間を、全く語らないということとはそれほど多くない。もちろん毎日のことを欠かさず語るということではないが、「その三日後に…」のように、時間の経過がわかる程度にかなり多くの日を扱い、また一日の経過がわかるように語られていることも多い。そういう点で、比較的省略の少ないテキストだといえる。多くの日のことが少しずつ語られているのである。そのため、長い時間の空白がないので、解説などの挿入の多い割には、ストーリーの流れは明確である。しかし、省略が少ないということは、「物語場면을簡潔に語る」「大掴みに語る」ということが相対的に増える可能性が高くなることになる。実際にテキストを検討したところ、『それから』では簡潔に語られる物語場面が多くみられた。

『それから』は簡潔に語られた物語場面が多くあるが、要約的な話法を使った語りはその典型的な例である。『それから』には、発言を要約しながらで語る語りが多くみられる。発話をかき括弧にいて直接話法で引用するよりも、語る時間は短くなる。この場合、「と云った」「と思った」などの引用表現が工夫されている。このような表現形式では、直接話法の羅列と比較すると、発言や会話の意味づけがなされるので、構成意識がより明らかになる。

次の用例では、要約的な引用表現や、引用はないが発言を規定する表現が多く見られる。このような発言を規定する表現と要約された発言を組み合わせ、さらにそれらを畳み込むように連続させて、簡潔に会話の様子を語っている。

【41】 そこでは、梅子が如才なく、代助の過去に父の小言が飛ばない様な手加減をした。

さうして談話の潮流を、成るべく今帰つた来客の品評の方へ持つて行つた。梅子は佐川の令嬢を大変大人しさうな可い子だと賞めた。是には父も兄も代助も同意を表した。

けれども、兄は、もし亜米利加のミスの教育を受けたといふのが本当なら、もう少しは西洋流にはきはきしさうなものだと云ふ疑を立てた。代助はその疑にも賛成した。父と嫂は黙つてゐた。そこで代助は、あの大人しさは、羞耻む性質の大人さだから、ミスの教育とは独立に、日本の男女の社交的關係から来たものだらうと説明した。父はそれも左うだと云つた。梅子は令嬢の教育地が京都だから、あゝなんぢやないかと推察した。兄は東京だつて、御前みた様な許はゐないと云つた。

（『それから』十二の七：221）

このように直接語法を引用せずに会話の様子を語る語りは多く見られる。その場合、上記の例のように、タ形の文末の文を連続させることによって、物語場面の語りが簡潔になっていることが多い。タ形文末の文で事態全体をまとめてとらえて語ることで、それを連続させることによって、ストーリーはすばやく展開していく。このとき、状態描写も「ていた」文末の文のようにタ形で語ると、時間を捨象してまとめてとらえた状態描写となり、眼前描写性がなくなる。また、タ形文末の文で語られるとき、表現者が事態をどのようなまとまりとしてとらえて確認しているかによって、語りの簡潔さの程度も変わってくる。このように、物語場面を簡潔に語るときは、タ形文末が多用される。

2.2.2 物語場面の構成

『それから』にはこのような簡潔に語られる物語場面が多いが、もちろんすべてがそうというわけではなく、眼前描写性のある語りや発言引用の多い部分もある。また、種々の語りが混在していることも多い。

次の例は、代助が実家を訪れ嫂の梅子と今話している部分である。はじめの下線部（途中で章が変わっている）が対象化された心理描写で、それに続く部分は簡潔に語られている。また、3段落目の下線部は要約された発言による簡潔な語りである。このように、物語場面の語りは種々の語りを含みながら速やかに進んでいく。

- 【42】 「だから、貴方が奥さんを御貰ひなすつたら、始終宅に許ゐて、たんと可愛がつて御上げなさいな」と云つた。代助は始めて相手が梅子であつて、自分が平生の代助でなかつた事を自覚した。それで成るべく不断の調子を出さうと力めた。

一四の三

けれども、代助の精神は、結婚謝絶と、其謝絶に次いで起るべき、三千代と自分の關係にばかり注がれてゐた。従つて、いくら平生の自分に帰つて、梅子の相手になる積でも、梅子の予期してゐない、変つた音色が、時々会話の中に、思はず知らず出て来た。

「代さん、貴方今日は何うかしてゐるのね」と仕舞に梅子が云つた。代助は固より嫂の言葉を側面へ摺らして受ける法をいくらでも心得てゐた。然るに、それを遣るのが、輕薄の様で、又面倒な様で、今日は厭になつた。却つて真面目に、何処が変か教へて呉れと頼んだ。梅子は代助の問が馬鹿氣てゐるので妙な顔をした。が、代助が益頼むので、では云つて上げませうと前置をして、代助の何うかしてゐる例を挙げ出した。梅子は勿論わざと真面目を装つてゐるものと代助を解釈した。

語り手は、物語世界の時間の流れと語る時間の流れを調節しながら、種々な内容を挿入し、それらを構成し語っている。その点で、『それから』は構成者の意図が表れているテキストである。

2.2.3 心理描写の挿入

『それから』にはいわゆる心理描写が多い。これは、姦通小説というジャンルの特徴でもある。心理を語ると、外側から見えるストーリーの動きがほとんどないのに語る内容が多くなる。このために、語りに特徴が見られる。

作中人物のいわゆる心情・思考で、外からは見えず本人にしかわからないものの語りを、ここでは心理描写としておく。『それから』の心理描写には、代助の心情・思考を代助の立場で言語化した表現（内的独白）、語り手が対象化して語る表現、代助の認識を利用して語り手が語る狭義の自由間接話法の表現がある。多くは内的独白と語り手が対象化して語る表現であった。

次の例は、平岡が代助宅を訪れ帰った後で、代助が書斎に入って考え事をする部分である。（中略）の後の初めの段落は、下線部を除いて、語り手の手が加わっている可能性はあっても原則としては内的独白かそれに近い表現である。下線部は「代助と」とあることから、代助の内的独白ではなく代助の認識を利用した語り手の語りであるが、内的独白に近い。狭義の自由間接話法と考えられる表現である。しかし、その次の段落の代助の心理について語る部分は、語り手が対象化して語る語りになっている。『それから』の心理描写の多くがこの形式になっている。下線部のある段落は非タ形が多く、次の段落はタ形が多くなっているのは、語り手によって対象化されているかどうかという違いでもある。

「それが次第々々に泣けなくなつた。」は代助の内的独白と考えられそうだが、近傍の文との関係から語り手の立場の語りと考える。代助もこの段落の内容をこの場で考えたであろうが、語り方は代助の立場からの語りではない。

【43】 代助は返事も為ずに書斎へ引き返した。

（中略）

代助と接近してゐた時分の平岡は、人に泣いて貰ふ事を喜ぶ人であつた。今でも左様かも知れない。が、些ともそんな顔をしないから、解らない。否、力めて、人の同情を斥ける様に振舞つてゐる。孤立しても世は渡つてみせるといふ我慢か、又は是が現代社会に本来の面目だと云ふ悟りか、何方かに帰着する。

平岡に接近してゐた時分の代助は、人の為に泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云ふのではなかつた。事實は寧ろ之を逆にして、泣かないから現代的だと言ひたかつた。泰西の文明の圧迫を受けて、其重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為に泣き得るものに、代助は未だ曾て出逢はなかつた。

（中略）

代助は書斎に閉ぢ籠つて一日考へに沈んでゐた。晩食の時、門野が、

上の例のように、心理描写は代助の立場からの内的独白に近い語りか、語り手の対象化した語りか、のいずれかで語られる。内的独白の形式であっても簡略化されていることがあるが、発言の引用と同様に、原則として内的独白を語る時間は現場での思考時間と同程度である。これに対して、語り手が対象化して心理を語る時間は、語り手によって調節されるので短くすることも可能である。

上の用例の、二つめの（中略）の部分では、語り手によって対象化された語りが多くを占めているので、語る時間は調節されていると考えられる。上の例では、代助は書斎へ入り「晩食の時」まで、少なくとも半日は「考えに沈んでいた」という設定である。しかし、（中略）部分を含めて、それほど長の語りはなされていない。内的独白と語り手の語りが組み合わされて語りの長さが調節されていると考えられるのである。

また、心理描写をまとめて語ることによって、その間に物語世界の時間が経過した印象を与えている。『それから』の後半は心理描写が多くなり、そのほかの事態について語ることが相対的に少なくなるが、それでも物語世界の時間は経過していることになっている。

このように、『それから』では心理が多く語られ、ストーリー展開の速さに影響を与えている。

2.3 物語の時間的展開と物語場面

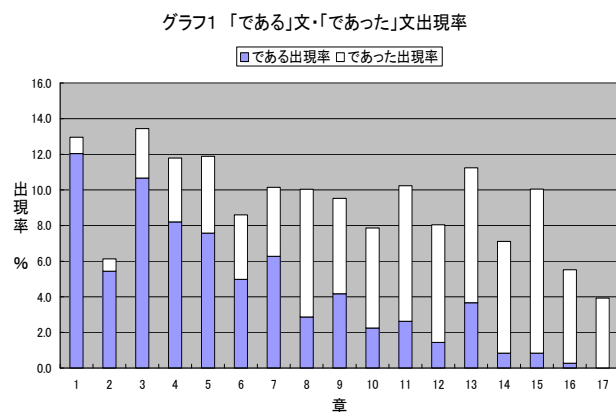
『それから』は、物語場面の現場の語りの途中や心理描写の途中に「具体的な時間に関わらない語り」と「過去の語り」が多く挿入される。地の文全体の中で、「具体的な時間に関わらない語り」の占める文数は11.4%、「過去の語り」の占める文数は9.9%にもなっている。これらは、物語世界の時間の流れを中心においた語りの中に挿入され、個々の物語場面を語るのに必要な解説となっている。解説を終え元に戻るときは、解説の意図が論理的にわかるようになっていたり、解説している間に時間が経過しているように設定されていたりして、挿入による展開の不自然さは少ない。

眼前描写性のある物語場面や、語られる分量の多い物語場面は、あまり長くは語られない。そのため、解説の挿入が少なくなるとストーリー展開が速くなる。それで、後半はストーリーの展開が速やかになっている（グラフ2を参照）。全体にわたって物語場面そのものの語りは簡潔に語られることが多く、また大掴みに流れが語られることもあり、物語場面の内容は比較的速く語られることが多い。その代わりに解説や心理描写が詳しい。

2.4 前半と後半の差異

『それから』では、解説の語り方が変化していくのが観察される。

グラフ1は、章ごとに地の文（1章108文、2章147文、3章253文、4章195文、5章185文、6章221文、7章207文、8章279文、9章168文、10章267文、11章420文、12章348文、



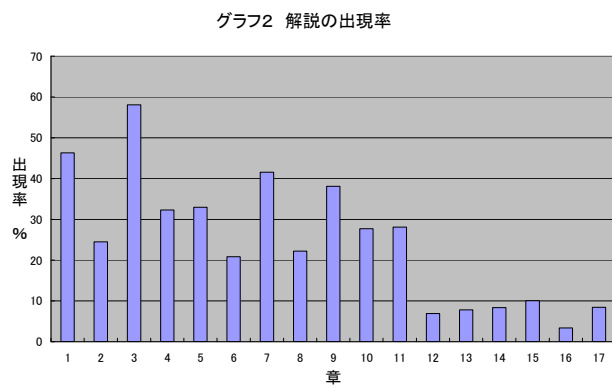
13 章 409 文、14 章 478 文、15 章 239 文、16 章 381 文、17 章 178 文) の中で「である」文と「であった」文がどれぐらい出現するかをしめしたものである。章を追うごとに「である」文より「であった」文が多く使われる傾向が確認できる。

非タ形の「である」文末の文は、表現者の断定判断の表出である。これに対して、タ形の「であった」文末の文は、判断に対する対象化が加わっているため、判断自体を強く主張することにならない。

『それから』の「である」文末の文の用例を見ると、前半の語り手の語りの文では、語り手が物語世界に存在しているように意識されることが多く、語り手の気分的な要素までが読み取れるようになっている。語り手が饒舌で、ユーモアを持っているように感じられることもある。一方、後半はその要素はあまり感じられない。

また、解説の挿入に注目しても、語り手の存在感の変化が観察できる。前半の「具体的時間に関わらない語り」は、非タ形が多く語り手が読者に強く働きかける解説になっているが、後半の解説はタ形が多く語り手の強い働きかけは感じられない。これは、2.1.1 の【36】と【37】の下線部を比較することによってもわかる。

また、後半は心理描写が多く、現場の語りが少なくなる傾向も見られる。それに伴い、挿入される解説も、事態や人物の背景を解説するものより、代助の主義主張に関するものや過去の事態を語るものが多くなる傾向がある。さらに、12 章以降は、解説の挿入自体が明らかに減っている。結末に向けて、背景の解説よりも事態の展開が中心に語られているためだと考えられる。グラフ 2 は、章ごとに地の文の中で解説（「具体的時間に関わらない語り」と「過去についての語り」）の文がどれぐらい出現するかをあらわしたものであるが、今述べた傾向が読み取れる。



このように、語り方が変化していくことが認められ、これは深刻化していく内容とも関係していると考えられる。

2.5 『それから』の語りの特徴のまとめ

『それから』について以下のようなことを指摘した。

『それから』は比較的省略の少ないテキストで、多くの日のことが少しずつ語られている。そのかわり、一つ一つの物語場面は簡潔に語られることが多い。

『それから』では心理描写が多いが、内的独白と語り手の語りが組み合わせられ、語りの長さが調節されたうえで語られている。

『それから』では、物語場面の語りや心理描写の途中に「具体的な時間に関わらない語り」と「過去の語り」が多く挿入される。これらは、地の文全体の中で、20%以上を占める文数となっている。これらは、個々の物語場面を語るのに必要な解説となっている。

テキストのはじめ・中間・おわりのそれぞれ 300 余文を合計した『道草』976 文におけ

る、「具体的な時間に関わらない語り」と「過去の語り」の合計の占める割合は 36.2%であった。同様に『三四郎』959 文における割合は 4.8%であった。また、『それから』の全文における割合は、21.3%であった。『それから』は、『三四郎』と『道草』の中間的な傾向をもっているといえる。『道草』ほどではないが、『三四郎』に比べると解説の多いテキストだといえる。

ことから、『それから』は、物語場面そのものの語りの途中で、物語場面そのものを語らない語りに離れていきやすい傾向が認められる。しかし、実際には、物語場面そのものでない語りは、「のだ」文を用いるなどして、もとの物語場面と論理的に関係づけられて語られている。その点で、『三四郎』のように物語世界の時間の流れに沿って語るテキストではない。

『それから』の物語場面の語りは、全体にわたって簡潔に語られることが多く、物語場面でのストーリー展開は比較的速く語られることが多い。その代わりに物語場面そのものの語りを解説する語りや心理描写が多く語られる。このことから、『それから』は論理的に構成されたテキストといえる。

このように、『それから』は『道草』に似た部分を多く持っているといえる。しかし、『それから』は、作中人物の知覚を利用して事物や人物を説明することがあるように、作中人物の知覚・思考を情報源としながら、語るときに論理的に構成するといえることが多い。また、『道草』と異なり、ほとんどすべての文末がタ形ということもない。このようなことから、『三四郎』と『道草』の中間的性格をもつといえる。

3 『彼岸過迄』における特徴

3.1 本節の目的

ジュネット(1985 訳 a)では、物語世界の時間の流れ(物語内容の時間)と語る時間(物語言説の時間)の相当性によって、要約法、情景法、休止法という分類がなされている。そして、「物語内容の時間<物語言説の時間」は現実にはないという。しかし、テキスト全体ではなく部分的には、「物語内容の時間<物語言説の時間」の場合がありえる。事態を細かく語ろうとすればいくらでも細くなる。ほんの一瞬見たことを言語化しようとする、一瞬では語り尽くせないのが普通である。また、物語世界の現場の状態を細かく描写したり、一瞬の心理の動きを語ったり、挿入的に説明を加えたりすることにより、文章量は多くなる。しかし、実際には、テキスト全体で「物語内容の時間<物語言説の時間」となることはない。読む時間が膨大になってしまうからである。

本節では、語りを物語場面とそうでない部分に分けて考え、そのうえで『彼岸過迄』の語り手が何を詳しく語っているのかを明らかにしていきたい。言い換えれば、語り手が物語世界の出来事をどのようにとらえたのかということを検討するということである。

『三四郎』、『道草』、『それから』の分析では、大きく物語場面そのものの語りと物語場面そのものでない語りとに分けて検討した。物語場面そのものの語りは、①事象の語り、②状態の語り、③説明の語り、④説明的状态の語り、の四つの場合が考えられた。また、物語場面そのものでない語りは、①物語世界の「いま」から見て過去のこと、②事物の性質、一般的な習慣、③物語世界において繰り返し行なわれていることや、日常的な状態、

④大掴みに展開をとらえて語ることに分けられた。これらは、語り（地の文）にはどのようなものがあるかを分析したものである。

本節では、どのようなことが詳しく語られているかを主な分析の観点としたため、はじめに物語場面かそうでないかを区別した。そのため、具体的な物語場면을語っている途中で、「具体的時間に関わらない語り」「過去の語り」という「物語場面そのものでない語り」が挿入されている場合は、その挿入された部分も含めてその全体を物語場面の語りとして扱うこととした。そのため、本節における物語場面でない部分というのは、物語場面とは全く切り離された語りを指すこととなる。

3.2 調査対象

夏目漱石のいわゆる後期三部作『彼岸過迄』『行人』『こころ』は、共通の構造を持っている。それは、主人公でない人物を通して物語世界の出来事が語り始められ、やがて主人公（須永、一郎、先生）の苦悩が語られ、最後に主人公でない者の語りで締めくくられるというものである。この際、語りははじめのうちは、読者に与えられる情報が制限されていて、その後背景にある事情が明らかにされて核心に至るという語り方がなされている。このようなテキストであるため、読者に対してどのように情報が与えられていくのかという、その語り方に特徴があると考えられる。

『彼岸過迄』以外の二つのテキストは、最初から最後まで作中人物の誰かが語るという形式をとっているが、『彼岸過迄』だけは、物語世界に存在しない語り手によって語り始められ、その後作中人物の語りが挿入されるという形式になっている。本研究では、主に物語世界外の語り手が語るいわゆる三人称小説を中心に分析しているため、この節では『彼岸過迄』の語り手の語りだけで構成されている「風呂の後」「停留所」「報告」を調査の対象とし、分析することとした。

3.3 『彼岸過迄』の章立てと時間

3.3.1 『彼岸過迄』の章立て

『彼岸過迄』は、「風呂の後」12、「停留所」36、「報告」14、「雨の降る日」8、「須永の話」35、「松本の話」12、「結末」1の全118章からなる。そのうち本節の分析対象としているのは、「風呂の後」12、「停留所」36、「報告」14の62章分で、全体の半分超となっている。この前半62章の部分は、主人公須永の友人である敬太郎を焦点として語られている。

3.3.2 章立てと時間

新聞小説は、同時代の新聞読者が過ごす日常の時間と、物語世界の時間の流れとが関連する場合がある。

【表1】

	章の数	物語られる時間
風呂の後	12	30日程度
停留所	36	24日程度
報告	14	3日
合計	62	57日程度

『彼岸過迄』は、新聞紙上に1章ずつほぼ毎日連載された。もし、その1章に物語世界の1日分の内容が語られれば、新聞読者の毎日の時間の流れと物語世界の時間の流れが、ほぼ同時に進行しているように感じられるはずである。

表1をみると、章ごとの新聞読者の時間の流れと物語世

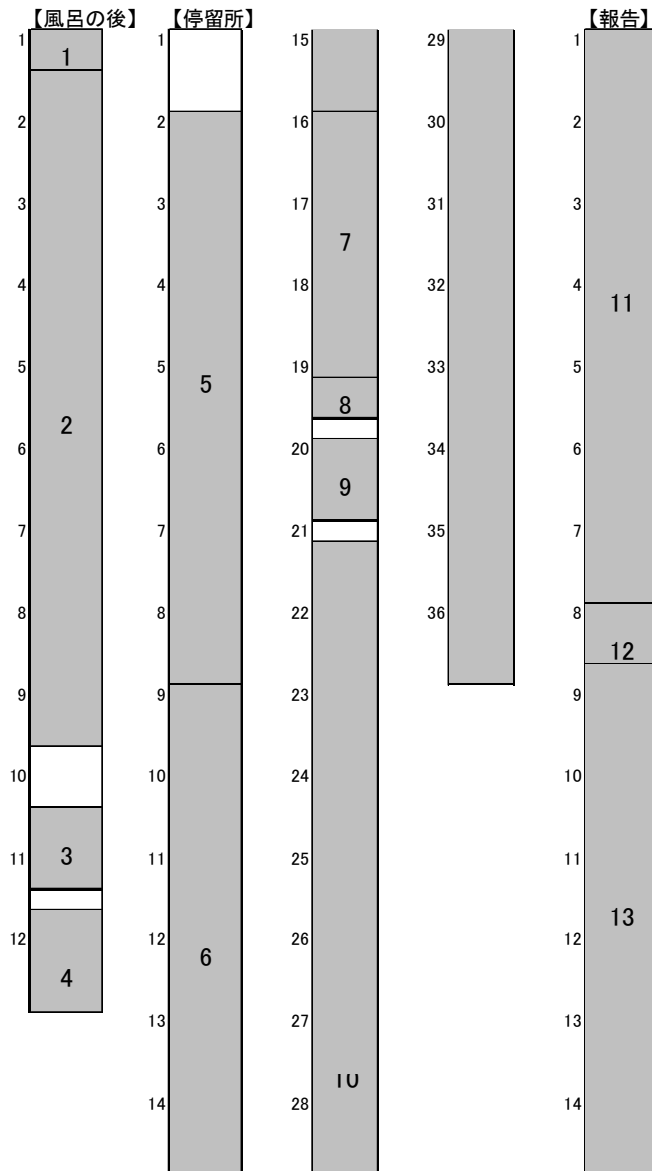
界の時間の流れに差異があるが、「報告」までを平均してみると新聞読者の時間の流れと物語世界の時間の流れに大きな差はない。物語世界として設定されている時期については、「停留所 29」に「この陰鬱な師走の空気」とあり、冒頭のあたりは 11 月頃と推測される。実際の新聞連載は明治 45 年 1 月 2 日から始まっている。語られている内容は、新聞読者にとって実際の季節の一月～二月ほど前となっている。これも大きな差ではないといえよう。これらのことから、連載が始まってからの 2 ヶ月の間、新聞読者は、物語世界と現実の時間は違うものだと意識しながらも時間の流れにそれほど違和感をもたずに読んだらうと考えられる。また、表 1 によると、「風呂の後」では、語られている内容よりも語る時間のほうが短い。つまり、全体としては語られる時間に対する文章量が少ないということになる。これに対して「停留所」「報告」は逆に、語られる時間に対する文章量が多いということになる。この三つの部分をみると、語られる時間に対して文章量が増えていく傾向のあることがわかる。

3.3.3 物語場面の語りとそうでない部分の語り

本節では、現場の場所が特定されて、語られる内容の時間が連続していて、具体的に事態が語られている語りを物語場面の語りとして、それを中心に分析した。『彼岸過迄』の中には、13 箇所物語場面が設定できた。そのどの箇所も数時間以上の物語世界の現場を語っていることが多い⁸⁾。図 1 は、その物語場面の長さの様子を図示したものである。目盛となっているのは章番号で、色の濃い部分が物語場面である。

『彼岸過迄』の「風呂の後」、「停留所」、「報告」のそれぞれの特徴を見ていきたい。

【図 1】



いる内容も長くても数時間と考えられる。

この「風呂の後」の物語場面は、敬太郎に起こる日常のいろいろな出来事の中のほんのちょっとした1～2日あるいは数時間で、書かれていない日がどれくらいあるかも明確には示されていない。このようなことから、「風呂の後」の(2)～(4)の現場の語りは、敬太郎が森本に関わった事柄だけが語られていて、そのほかのことはあえて語られていないといえる。しかし、敬太郎にとって森本は意識の中心ではない。次の【44】は、(2)と(3)の間の物語場面でない部分であるが、この下線部の表現からも普段敬太郎が森本をさほど意識していないことがわかる。

【44】 夫から一週間許の間、田川は落ち付いて森本と話す機会を有たなかつたが、二人共同じ下宿にゐるのだから、朝か晩に彼の姿を認めない事は殆んど稀であつた。(中略)すると其洋杖がちゃんと例の所に立てゝあるのに、森本の姿が不意に見えなくなつた。

十 (※章が変わる 石出注)

一日二日はつい気が付かずに過ぎたが、五日目位になつても、まだ森本の影が見えないので、敬太郎は漸く不審の念を起し出した。給仕に来る下女に聞いて見ると、彼は役所の用で何処かへ出張したのださうである。

(「風呂の後」九～十：27-28)

ところで、物語場面として語られる(2)～(4)は、森本の人物像や森本と敬太郎の関係がよく理解できるような部分となっている。(2)は森本のロマン的な話を敬太郎が聞くという、森本と敬太郎の関係の核になる部分である。(3)は下宿屋の主人との会談であるが、下宿屋の主人の説明により森本の失踪が明らかになり、この後の森本という人物の捉え方や敬太郎と主人との関係が規定される部分である。(4)の森本からの手紙の部分は、森本の行方がわかるという点で重要な部分である。また、(4)の子連れの子の詳しい描写によって、ロマンと現実の差ということから敬太郎に森本を連想させている。

(1)の、敬太郎が就職活動に嫌気がさしている部分は森本にそれほど関係ないが、就職活動のことは「停留所」以下の場面と深く関係することになる。また、(1)は1ページ程度の短い部分で、語られている分量としては少なく、(2)への導入の役割を果たしている。

以上のことをまとめると、「風呂の後」で物語場面の語りとして中心的に語られているのは、森本のロマン的なところや森本のする面白い話、森本の運命に関わるところ、敬太郎と森本との接点に関する所である。あるいは、「停留所」以下と関係するところといえる。物語場面として語られない大部分の日常は、構成上必要とされなかった部分だと考えられる。

3.3.3.2 「停留所」

「停留所」の具体的な物語場面の語りを列挙すると、以下のようになる。

(5)友人の須永の家に行って帰り、下宿で森本に手紙を書く。須永から電話がかかり、就職の世話をしてくれるかもしれない須永の伯父である田口の家へ出かけるが、面会することができない。(6)中一日あけて田口に電話し、田口の家玄関に行つたが会えず、帰りに

須永の家に行くが不在だったため須永の母と話しながら須永を待つ。(7)10日間ぐらい思考した後、占いに行く。(8)その翌日、就職のために田口に対して行動を起こす。(9)田口から電話がきて会いに行き、話をする。(10)田口から連絡がきて、ある男(松本)を探偵するよう要請される。

「停留所」は、ある日のこととしてはじまる。しかし、「風呂の後」と異なり、ここからはその後の日の経過が具体的に示されていく。話題は、「風呂の後」と連続しておらず、新たな事柄である。この後、物語場面の現場の語りがいくつかあり、その合間に何日かが空くことになる。(5)と(6)の間は「中一日」であるが、この間の敬太郎のことはわからない。しかし、(6)と(7)の間は、物語場面でない部分において、田口の家で書生に怒ってしまったことや須永の家で会った女のことを考えて過ごしている日々が語られ、田口や須永の家のことが敬太郎の意識の中心であることがわかる。

連続する2日間である(7)(8)場面の後、4日ほどあくが、この日々も田口からの連絡をずっと待っており、敬太郎の意識の中心は田口だといえる。また、(9)場面の後にも4日あくが、ここも次の【45】のように田口からの指示を待つ「愉快」な日々として語られており、生活の中心が田口であることが確認できる。そして、(10)場面からは「報告」の終わりまで、ほとんど連続した時間として語られる。次の【45】は、(9)と(10)の間の部分であるが、下線部のような表現から敬太郎の意識が田口中心であることがわかる。

【45】 穏やかな冬の日が又二三日続いた。敬太郎は三階の室から、窓に入る空と樹と屋根瓦を眺めて、自然を橙色に暖ためる大人なしい此日光が、恰も自分の為に世の中を照らしてゐる様な愉快を覚えた。彼は此間の会見で、自分に都合の好い結果が、近い内にわが頭の上に落ちて来るものと固く信ずる様になつた。さうして其結果が何んな異様の形を装つて、彼の前に現われるかを、彼は最も楽しんで待ち暮らした。彼が田口に依頼した仕事のうちには、普通の依頼者の申し出以上のもの迄含んでいた。彼は一定の職業から生ずる義務を希望した許でなく、刺戟に充ちた一時性の用事をも田口から期待した。彼の性質として、もし成效の影が彼を掠めて閃めくならば、恐らく尋常の雑務とは切り離された特別の精彩を帯びたものが、卒然彼の前に投げ出されるのだらう位に考へた。そんな望を抱いて、彼は毎日美しい日光に浴してみたのである。

(「停留所」二十一：92)

このようなことは、敬太郎の日常の意識とは違っている森本に関わることだけが語られる「風呂の後」と傾向が異なっている。敬太郎の中心的興味や意識に沿って語られ、その中で物語場面として語られる部分が設定されている。「停留所」の(6)場面以降、敬太郎の意識は概ね一つの問題に集中しており、その意識に沿って忠実に語られている。テキストが、語り手の意図だけでなく敬太郎の意識に沿って語る方向に集約していくのである。語り手の設定したテーマの流れがあつて、それに関係する部分を語っているというだけではない。敬太郎の意識そのものが徐々に田口と須永の家で見た女のことに絞られてきているということである。

では、どのような部分が物語場面になっているのか。物語場面として語られているのは、みな今後の展開に関係のある何らかの行動を起こしているところである。物語場面になっ

ていない部分は、「考えたり」「ぶらぶら」と暮らしたりしている部分が多い。屈託している様子や考え事を物語場面として語ることも可能だが、『彼岸過迄』ではそうになっていない。事態が動かない部分は、次の【46】のように時間の幅のある心理状態として語られることが多い。【46】は(6)と(7)の間の部分であるが、須永の家で見た女と田口のことにについて日々繰り返される心理を、特定の現場の時間に限定せずに語っている。2文目以降の文の文末は非タ形になっており、特定の1回だけの事態ではないことがわかる。

【46】　すると直須永と後姿の女との関係が想像された。もともと頭の中で無暗に色沢を着けて奥行のある様に組み立てる程の関係でもあるまいし、あつた所が他の事を余計な御切買だと、自分で自分を嘲けりながら、ああ馬鹿らしいと思ふ後から、矢張り何かあるだらうといふ好奇心が今の様にちょいちょいと閃めいて来るのである。さうして此道をもう少し辛抱強く先へ押して行つたら、自分が今迄経験した事のない浪漫的な或物に打つかるかも知れないと考へ出す。すると田口の玄関で怒つたなり、あの女の研究迄投げてしまった自分の短気を、自分の好奇心に釣り合わない弱味だと思ひ始める。

（「停留所」十四：74-75）

3.3.3.3 「報告」

「報告」の具体的物語場面の現場の語りは、以下のとおりである。

(11)探偵した翌日の朝に準備して田口の家に行き、報告して帰る。(12)その翌日、松本の家に行ったが会えずに帰ってきて家にいる。(13)その翌日、松本の家に行き会話して帰る。

「報告」は連続する3日の毎日の様子が語られているが、田口と松本に会うこととそれに関係すること以外は語られていない。これらのことから、敬太郎についてのことよりも田口や松本に関わる部分を語るために、具体的場面を設定するという方向に変化してきていると考えられる。読者の側も、田口はなぜ探偵させたのか、また探偵の対象である人物が何者なのかということが関心の中心になっているはずである。「停留所」と比べると、敬太郎個人について語ることも、敬太郎の知覚を利用しながら他の人物を語ることに中心が移っているといえる。本節で調査外とした『彼岸過迄』の後半は、須永を取り巻く親戚間の話題となっていくが、その前段階としてそれらの人物を語っているとも考えることができる。

連続する三日間のことが語られているが、出かけたのは三日ともほぼ午前中だけで、帰宅してからのことは語られていない。次の【47】は、(11)場面の終わりの部分である。田口の家に行き会った帰り道の敬太郎の心理を、説明している部分の最後である。

【47】　彼は斯ういふ風に気の置ける田口と反対の側に、何でも遠慮なく聞いて怒られさうにない、話し声其物のうちに既に懐かし味の籠つた様な松本を想像して已まなかつた。

（「報告」七：158）

この例から、敬太郎が翌日の松本との面会を楽しみにしていることがわかる。そして、翌日と翌々日と連続で松本の家に出かけるということから考えても、この時期の敬太郎の心理はこの二人に面会することが中心であったと推測してよいだろう。

次の【48】は、(12)場面の後でその日の午後についての語りであるが、松本に面会できなかった後「気分が中止の姿勢に余儀なく据え付けられたまま、どの方角へも進行できないのが苦痛になった。」とあることから、敬太郎の意識の中心は松本との面会であると考えてよいだろう。

【48】敬太郎は仕方なしに又雨の降る中へ出た。ざあと云ふ音が急に烈しく聞こえる中に、子供の鳴らす太鼓が未だどんとどんと響いてゐた。彼は矢来の坂を下りながら変な男が有つたものだといふ観念を数度繰り返した。田口が唯でさえ会い悪いと云つたのは、斯んな所を指すのではなからうかとも考へた。其日は家へ帰つても、気分が中止の姿勢に余儀なく据え付けられた儘、どの方角へも進行出来ないのが苦痛になった。

（「報告」八：160）

このように、(11)と(12)の間の時間、(12)と(13)の間の時間とも物語場面として語られていないが、面会のことがこのときの敬太郎の意識の中心と考えられる。敬太郎に起こるいろいろの出来事の中のほんの一部の出来事だけを大きく取り上げたわけではない。「停留所」と同様に、敬太郎の意識に沿って語られ、その中で動きのある部分が物語場面の現場の語りになっていると考えられる。しかし、それだけでなく、敬太郎についての語りが減り、敬太郎の意識に沿いながらも、これからの展開の基礎になる田口と松本に関わるころが、現場の語りの中心になっているのである。

3.3.4 物語場面の現場の語り

物語場面の語りの中にも、分量の多い詳しい語りの部分と、省略や簡潔な語り、要約した語りの部分も見られる。どのような部分が多く分量で語られるのか、みていきたい。

3.3.4.1 「風呂の後」

「風呂の後」の物語場面の語りにおいて、多くの分量で語られているのは、森本の冒険談などのロマン的な話である。森本が語る不思議な話はそのまま引用されることが多い。それに対して、森本の話の中でも愚痴のような面白くない話は簡潔に語られる。次の【49】のような場合である。この【49】では繰り返される出来事がまとめて語られ、語る分量が少なくなっている。

【49】 森本は近頃身体の為に酒を慎しんでゐると断わりながら、注いで遣りさえすれば、すぐ猪口を空にした。仕舞にはもう止ませうといふ口の下から、自分で徳利の尻を持ち上げた。彼は平生から閑静なうちに何処か気楽な風を帯びてゐる男であつたが、猪口を重ねるにつれて、其閑静が熱つてくる、気楽は次第々々に膨脹するやうに見えた。自分でも「こうなりや併呑自若たるもんだ。明日免職になつたつて驚くんぢやない」と威張り出した。

（「風呂の後」七：19）

このようなことから、敬太郎の興味の強いところが多く分量で語られ、興味の強くないところは少ない分量で語られているといえる。

しかし、森本の発話の終わりの方で話が理窟っぽくなっていき、仕事をやめたいと言う部分がある。ここは、敬太郎が面白くなくて聞き流している部分であるが、発言がそのまま引用されていて、分量が多くなっている。この部分は、後に家賃を払わず森本がいなくなることの伏線になっており、そのために詳しく記述する必要があったと考えられる。

以上のことから、「風呂の後」の物語場面の語りでは、敬太郎の興味の強い部分と、後の語りの伏線となる部分が、多くの分量で語られているといえる。

3.3.4.2 「停留所」

「停留所」で分量多く語られるのは、田口の家の様子や未知の女を観察する部分、占いなどの不思議なことや未知のことを体験する部分などである。これらの部分では敬太郎の知覚を利用して語ることが多い。不思議なことや迷信のようなものを好むのは敬太郎の傾向である。また、田口という人物や須永の家で見かけた女（探偵のときに見た女）については、敬太郎には知らされていないことが多いため、情報を得ようとして観察が詳しくなっている。これは、読者も同じ状態である。敬太郎の意識に沿った語りであるが、読者に興味を与えることになっている。これらのことから、「停留所」の物語場面の語りにおいても分量多く語られるのは、「風呂の後」と同様に、敬太郎の興味を持ったり強く刺激を受けたりしたところだといえる。

もう一ついえるのは、後の話に深く関わりを持つ部分が詳しく語られるということである。例えば、敬太郎が須永の母と会話する場面になんか見られる。須永の母の発言内容は、要約で示されたり省略されたりすることが多いが、矢来の叔父（松本）と須永の関係、田口に娘がいることなどはそのまま引用されている。また、要約の形だが田口は悪戯好きでにくめないというエピソードが2ページ以上にわたって語られている。これらの部分は、後のストーリー展開と密接に関わる部分である。敬太郎は田口の悪戯によって無駄な探偵をすることになるのである。そもそも、敬太郎の興味・意識に沿って語った場合「須永の家に寄ったが須永は留守で、待ったけれども会うことができなかった。」という内容だけでよいはずである。敬太郎にとって須永の母との雑談はそれほど重要なものではなく、意識の中心でもなかったからである。

これまでのことから、次のような組み合わせの傾向が見られる。

○後の内容の伏線になっている部分が詳しい。

——敬太郎の興味と必ずしも同じではない。

——語り手の立場での語りが多い。

○敬太郎の興味の強い部分が詳しい。

——敬太郎の興味に従った語り

——敬太郎の知覚を利用した語りが多い。

また、両方の要素が重なる場合もある。次の【50】は、敬太郎が田口に対して「何でも遣ります」と売り込む部分である。下線部が簡潔に語られているのに対して、その後の発言はそのまま引用され時間をかけて語られている。ここは就職のかかった敬太郎にとって

重要な部分であり、なおかつストーリー展開の上では、「何でも遣ります」という発話が田口の敬太郎に探偵をさせる伏線になっている。

【50】 田口は笑い出した。さうして機嫌の好い顔付をして、学士の数の斯んなに殖えて来た今日、幾何世話をする人があらうとも、さう最初から好い地位が得られる訳のものでないといふ事情を懇ごろに説いて聞かせた。然しそれは田口から改めて教わる迄もなく、敬太郎の疾うから痛切に承知してゐる所であつた。

「何でも遣ります」

「何でも遣りますつたつて、まさか鉄道の切符切も出来ないでせう」

「いえ出来ます。遊んでゐるよりは増しですから。将来の見込のあるものなら本当に何でも遣ります。第一遊んでゐる苦痛を逃れるだけでも結構です」

「さう云ふ御考なら又私の方でも能く気を付けて置ませう。直といふ訳にも行きますまいが」

「どうぞ。——まあ試しに使つて見て下さい。貴方の御家の——と云つちや余り変ですが、貴方の私事にででも可いから、一寸使つて見て下さい」

「そんな事でも為て見る氣がありますか」

「あります」

「それぢや、殊に依ると何か願つて見るかも知れません。何日でも構いませんか」

「ええ成るべく早い方が結構です」

敬太郎はこれで会見を切り上げて、朗らかな顔をして表へ出た。

（「停留所」二十：91）

次に、探偵を行う(10)場面の特徴を見てみたい。探偵をする(10)場面では、出来事が細かく語られている特別な部分である。そのため、ジュネット（1985 訳a）でいう「物語内容の時間＝物語言説の時間」に近い印象を受ける部分が多い。探偵する小川町に着いてから松本を見失うまでの数時間を、12章（12日間）かけて語っている。物語場面の時間の流れに対して語る分量が極端に多くなることはなるべく避けられるため、語る分量には限度がある。そのため、事態を細かく語れば、心理、状態、説明、発言の引用などは語る量を抑える必要が出てくる。探偵する部分は、観察したままの事態の展開を語ることが多いため、心理や説明や発言引用は少なめになる。

その中で事態の展開に関わる内容が短く語られているのは次のようなときである。章のはじめの部分に内容や状況が大まかにあるいは要約されて語られることがある。また、家に上がる動作や帰るときの動作や挨拶、レストランでの支払い動作、電車の乗降、などの形式的な動作は簡潔に語られる。また、同じ状態が持続しているときは、その持続している実際の時間よりも語る分量は少なくなる。このような語りによって語る分量が節約され、その分で心理や説明などを語る余地が生まれている。

(10)場面全体を通しては、敬太郎の興味の強い出来事の観察が詳しく語られている。男（松本）が現れてからは任務を忠実に行ううえで、誰もが重要だと思ふようなことは詳しく細かく語られている。伏線のための詳しい語りはほとんど見られない。しかし、敬太郎の興味を持つ部分が、展開の中でも重要な伏線部分になっていることはある。次の【51】

の女を観察する部分は、敬太郎の興味に沿った語りで詳しく語られているが、後にこの女が田口の娘であることがわかり、さらに後半では重要な役割を果たす部分でもある。

【51】 敬太郎は年に合わせて余りに媚びる気分を失い過ぎた此衣服を再び後から見て、どうしても既に男を知った結果だと判じた。其上此女の態度には何処か大人びた落付があつた。彼は其落付を品性と教育からのみ来た所得とは見做し得なかつた。家庭以外の空気に触れた為、初々しい羞恥が、手帛に振り懸けた香水の香の様に自然と抜けてしまつたのではなからうかと疑ぐつた。それ許ではない、此女の落付の中には、落ち付かない筋肉の作用が、身体全体の運動となつたり、眉や口の運動となつて、ちょいちょい出て来るのを彼は先刻目撃した。

（「停留所」二十九：115）

3.3.4.3 「報告」

「報告」は、敬太郎が田口や松本と会話する部分を中心である。

前半の、田口との会話では、会話の中で後の展開から見て重要な部分が明確になるように伏線が語られていた。また、「風呂の後」「停留所」と同様に、敬太郎の興味の強い部分が詳しく語られていた。例えば、敬太郎が探偵し報告した松本と女は後の展開上重要な役割を担う。敬太郎は田口に探偵した男女について話を向けられ、事情もわからず答えるのだが、敬太郎はこの報告に就職がかかっていると思うので、この受け答えは意識の中心でもある。この点で、この部分は後の伏線でもあり、敬太郎の興味の強いところでもある。

後半の松本との会話では、謎解きがなされていく。会話のはじめの部分は簡潔に語られているが、本題に入ってから簡潔に語られる部分が少ない。松本の話の一部が要約で示される以外は、ある特定の話題だけが詳しく取り上げられることはない。会話内容のほとんどが語られるため、敬太郎の興味の強いところと伏線部分が詳しく語られるという傾向は明確でなくなる。

これは、「報告」が終わりに近づくにつれて、敬太郎の興味にしたがって語るだけでなく、須永を取り巻く人間を詳しく語るということにも力点が出てくるからだと考えられる。その一つの傾向として、次の【52】のように、松本の長い発言がそのまま引用されることもしばしば見られるようになる。このような発話によって、松本という人物が徐々に明らかになり、『彼岸過迄』後半の須永の親戚の物語へと移行していく。

【52】「田口は君だからさう思ふんぢやない、誰を見てもさう思ふんだから仕方がないさ。

ああして長い間人を使つてゐるうちには、大分騙されなくつちやならないからね。偶に自然其儘の美しい人間が自分の前に現われて来ても、矢張り気が許せないんです。それがああ云ふ人の因果だと思えば夫で好いぢやないか。田口は僕の義兄だから、こう云ふと変に聞えるが、本来は美質なんです。決して悪い男ぢやない。唯ああして何年となく事業の成功といふ事だけを重に眼中に置いて、世の中と闘かつてゐるものだから、人間の見方が妙に片寄つて、此奴は役に立つだらうとか、此奴は安心して使えるだらうとか、まあそんな事許考へてゐるんだね。（後略）

「報告」全体の中で少ない分量で語られる部分の傾向は次のようになっている。田口に会うときも松本に会うときも、出かけて向こうに着き本題に入るまでは短く語られる。ほかにも、田口に紹介状を書いてもらう部分や帰り際の動作などは実際の時間よりも簡潔に語られる。これらの部分は、会話の内容に比べると、常識的にそれほど重要とは思えない部分である。また、田口に偵察内容を報告するときや、松本に田口から指示された内容を説明するときなど、読者が既に知っている内容は語られない。また、ゴーリキーのエピソードや松本と田口の親戚関係は要約して語られる。これらは、誰がどのように語るかというよりも情報内容が語りに影響するものである。また、笑いや沈黙などの一定時間続く状態を語るときは実際の時間よりも語る時間は短くなる。これらで語る分量を調節しながら、会話の様子は多い分量で語られている。特に松本との会話は詳しい。松本との会話が詳しく語られるのは、今まで謎として語られなかった事情が種明かしされ、その結果『彼岸過迄』の前半部分の内容のまとめの役割も担っているということと、松本の人間性を紹介するためだと考えられる。

3.3.4.4 全体的特徴

これまでのことから、伏線部分は詳しく語られる傾向が見られたが、実際には伏線であることがあからさまであるように感じられない。その理由の一つは敬太郎の意識に沿った語りがほとんどであるためだが、もう一つは次のようなことによるものだと考えられる。『彼岸過迄』において、どの程度詳しく語るかは部分によってさまざまであるが、語るべき項目はあまり省略されていない。ある事柄が全く語られないということは少なく、簡潔にでも語る場合が多いのである。例えば、田口や松本の家に行くときも、次の【53】のように出かけるまでが語られ、訪問先の玄関が語られ、部屋に通されて、書生や下女がでてきて、主人が来て、話が終わって挨拶して、そして帰り道のことが語られる。

【53】 敬太郎は又例の袴を穿きながら、今度こそ様子が好ささうだと思つた。それから此間買った許の中折を帽子掛から取ると、未来に富んだ顔に生気を漲ぎらして快豁に表へ出た。外には白い霜を一度に摧いた日が、木枯しにも吹き捲くられずに、穏やかな往来をおつ通りと一面に照らしてゐた。敬太郎は其中を突切る電車の上で、光を割いて進む様な感じがした。

田口の玄関は此間と違つて蕭条りしてゐた。取次に袴を着けた例の書生が現われた時は、少し極りが悪かつたが、まさか先達ては失礼しましたとも云えないので、素知らぬ顔をして叮嚀に来意を告げた。書生は敬太郎を覚えてゐたのか、いないのか、只はあと云つたなり名刺を受取つて奥へ這入つたが、やがて出て来て、どうぞ此方へと応接間へ案内した。敬太郎は取次の揃えて呉れた上靴を穿いて、御客らしく通るには通つたが、四五脚ある椅子のどれへ腰を掛けて可いか一寸迷つた。

そのため、「停留所」で、田口訪問の帰りに須永の家に寄り須永の母親と会話する部分も、時間の流れに沿って語っただけのような印象を受ける。それによって、その会話の内

容が伏線になっているとは気づきにくくなるのである。また、「停留所」「報告」と進むに従って、敬太郎に知らされていない情報が多いために、敬太郎の興味を持つ部分が伏線と重なる傾向があった。そのため、特に「停留所」や「報告」の語りは、推理小説や探偵小説のような面をもちながらも、その展開がわざとらしくなく自然に感じられるのである。

このようなことから、調査範囲では、伏線が張られていることが目立たなくなり、時間順に語られている印象を与えられられる。

3.4 『彼岸過迄』において詳しく語られる部分

これまで、物語場面としてどこが語られているのか、また物語場面の中でどの部分が多く分量で語られるのかということを検討してきた。「風呂の後」は、語り手によって森本のロマンに関することが物語場面として語られているが、「停留所」以降は徐々に敬太郎の興味に沿った部分が物語場面として語られていくようになる。敬太郎の興味はロマンチックなことと就職であるので、「風呂の後」の語りは自然に引き継がれるようになっていく。このような変化に伴って、物語世界の出来事がより多く語られるようになる。言い換えると、物語世界の時間の流れと語る分量を比べた場合、その語る分量の割合が増加していくのである。物語が展開するに従って、物語場面として語られる部分が増えていく。特に「停留所」の後半から「報告」にかけては、連続する毎日が物語場面の語りとして語られている。これらのことは表1からも確認できる。

また、物語場面の中で多くの分量で詳しく語られる部分は、敬太郎の興味の強い部分と後の伏線になる部分であった。「風呂の後」において、物語場面は作者によって設定されて語られているのだが、その物語場面の中では敬太郎の意識に沿って語られている。全体を通して作者は、構成を意識しつつも敬太郎の意識に沿って語りを進めているといえる。語る分量については、「停留所」の探偵部分や「報告」は語られる分量が多かった。「報告」の最後にある松本との会話では、実際の時間の流れに対して語る分量も十分に多いと思われる部分が多くを占めた。

以上のことから、本稿の調査範囲においては、終わりの部分の方が、物語世界の単位時間に対しての語る分量が多く、また敬太郎の意識の流れに近くなっているといえる。そして、最終的には敬太郎の興味だけでなく現場の時間の流れを十分な分量をかけて語るような語りになっている。

また、敬太郎の意識や興味に沿って物語を展開させたり、松本の長い発話をそのまま引用したりするような方法は、『吾輩は猫である』や『三四郎』などの漱石の前期のテキストからよく見られる特徴で、写生文に通じるものである。このことから、『彼岸過迄』も前期作品の特徴の一部を引き継いでいると考えられる。

4 まとめ

物語場面そのものの語りと物語場面そのものを語らない語りに大別して、語りのテキストの特徴を検討した。

1節では、主に『三四郎』と『道草』を題材として、物語場面そのものの語りと物語場面そのものを語らない語りの特徴について検証した。

2節では、『それから』『彼岸過迄』における物語場面とそうでない部分の構成について検証した。

『それから』の語り手は、物語場面の現場の語りから離れやすいという傾向があるが、「のだ」文を用いるなどして、元の物語場面との関係で論理的に位置づけようとしていることがわかった。『それから』は語り手の構成意識が強く反映されたテキストといえる。

『彼岸過迄』においては、『それから』の分析と違い、具体的な物語場面内の語りと、具体的物語場面から離れた語りに大きく2分して考察した。『彼岸過迄』では、後の伏線になる部分や作中人物の興味の強い部分が詳しく語られる傾向が見られた。また、テキストの初めの部分では、物語世界に流れる時間に比して具体的物語場面として語られる時間が少ないが、クライマックスに向かうにしたがい、物語世界に流れる時間に比して物語場面の語りが増えていくという傾向も確認できた。

第1章から第5章まで、物語世界に存在しない語り手が語る設定の小説、いわゆる三人称小説を中心に論じてきた。これは、この設定が最も小説として典型的な語りであると考えたからである。そのような語り手の語りについて、これまである程度の分析は行うことができた。そこで、最後の第6章では、これまで中心的に扱わなかった、物語世界内の作中人物が語る設定の小説、いわゆる一人称小説について簡潔に扱うことにする。

【注】

- 1) 300 という数字は特に意味を持たないが、新聞小説である『三四郎』であれば約7日分の量に相当（文庫本15頁程度）し、はじめ、中間、おわりを合計し約1000文とすることで、大まかな傾向を知ることができると考えた。ただし、内容の区切りを重視して、300文目のある章または節は最後まで調査したため、300余文となっている。
- 2) 西郷氏は、文芸全体を視野に入れているが、ここの引用では主に演劇の「場面」を念頭において説明している。
- 3) 時間に幅のある事象に関しては、場所が具体的に確定していれば物語場面の中の事象とした。
- 4) 但し、前の事象から変化した次の状態を語ることによって、時間が経過したことを表現する場合も時にはあり、このような場合は必ずしも時間的進行が制限されると言えない。
- 5) 具体的物語場面であっても時間の展開の速さはまちまちである。大掴みな語りであるかどうかは、一文だけでその場面の語りが終わるかどうかが一応の目安になるが、決定的なものとはいえない。
- 6) 『道草』では、はじめが事象61.8%・状態29.9%、中間が事象59.5%・状態29.9%であるのに対して、『三四郎』では、はじめが事象53.9%・状態40.9%、中間が事象54.7%・状態37.3%であった。

しかし、『三四郎』のおわりだけは、事象と状態の割合の差が大きくなっている。これは、『三四郎』のおわりにおいて、三四郎の内面が語られなくなるなど、語り方が変化していることに由来すると考えられる。

- 7) ジュネット (1985 訳 a) では錯時法について「物語内容の順序と物語言説のそれとのさまざまな形式の不整合を、本書ではこのように名付けることにする」とある。また、プリンス (1991 訳) では錯時法を「諸事象が起きた (とされる) 順序とそれらの諸事象が報告される際の順序の不一致。」としている。
- 8) 途中に長い挿入があり中断している場合も含む。

第6章 一人称小説『坊つちやん』の表現特性

これまでは主に物語世界外の語り手が語る小説テキスト（いわゆる三人称小説）を対象にしてきた。しかし、物語世界内の作中人物が語る設定の小説テキスト（いわゆる一人称小説）も多くある。一人称小説と三人称小説では、今まで検討してきた語り手と物語内容の関係が異なる。第6章では、これまでの三人称小説の検討してきたことを延長させて、一人称小説『坊つちやん』における語り手と物語内容の関係、語りの様相を検討したい。

1 『坊つちやん』の設定

夏目漱石の小説にも、初期には『吾輩は猫である』（1905～1906）、『坊つちやん』（1906）、『草枕』（1906）など、後期には『彼岸過迄』の一部や『行人』『ころも』などのような、作中人物が語るスタイルのテキストが見られる。

これらの中で、『吾輩は猫である』と『草枕』は、行為しているくいま×ここと、語っているくいま×ここがほぼ重なるという設定になっている。つまり、実況中継のような語りである。また、後期のテキストは、手記や書簡として、語っている現在から回想して語るという設定になっていて、語りではなく日常の言語の形式をとっている。

それに対して、『坊つちやん』は、過去の出来事を回想して語っているという設定だが、『吾輩は猫である』や『草枕』のような実況中継のような語りに似た部分ももっている。また、『ころも』等のような手記や書簡という形式ではなく、語りの形式をとっている。そこで、特に『坊つちやん』を中心に一人称小説を検討することとした。

夏目漱石『吾輩は猫である』『草枕』の一人称小説の設定は、フィクションであることが前提となっている。『吾輩は猫である』の場合、語り手は、猫であるため書くことができないし人間との会話が成り立たない。また『草枕』は独言しながら同時に行為している。これらのことから、現実には語り手がテキストを作成する過程（どこで、どのような手段で発信しているのか）は問うことができない。しかし、受信者（読み手・聞き手）については、特定できないが想定されているといえる。作中人物である語り手がすべて自分に向けて語った独話と考えられず、誰かに向けて語っている形式だからである。そこで、作中人物によりテキストが発信され、想定される受信者に受信されたという仮定の上で考えることにする。この際、語り場（発信の場）と読む・聞く場（受信の場）は同じである必要はない。想定される受信者は物語世界の時間・場所とは無関係であるとする。

2 『坊つちやん』における語りの様相

『坊つちやん』で語られる内容は、ほとんどが語り手にとって過去のことであるが、語り方は一様でない。例えば次のようなものである。

【1】（四国の中学の教師になるのを引き受けた後、）

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節

であつた。然しかうなると此四畳半も引き払はなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許りである。今度は鎌倉所ではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先程小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。只行く許である。尤も少々面倒臭い。

(『坊つちやん』一：259)

この部分は最初の1章の一部で、清に金を借りたことについて「今となつては十倍にして返してやりたくても返せない」と語った部分から、それほど離れていないところの語りである。このことから、下線部の「おれの生涯のうちでは」というのは、清の亡くなっている現在までの生涯と考えてよい。

そのように考えると、下線部を含む「おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であつた」という文までは、現在の自分が昔のことを語っているといえる。しかし、その後徐々に当時の自分が語っているような語りに変化している。

このように語りの様相は一定ではない。そこで、『坊つちやん』テキストを検討した結果、語り手がどのような立場で語っているかと、誰に対して語っているかを基準にして、次のような語りの様相が考えられた。なお「想定される受信者」とは、語っている作中人物が想定している受信者を指す。

- A 現在（語る時点）の自分の立場で当時（出来事の時点）を語る。
—想定される受信者に対して語る。あるいは自分に言い聞かせるように語る。
- B 当時の自分の立場で語る
—想定される受信者に対して語る。
- C 当時の自分になりきったように語る。
—当時を現在とする受信者に対して語る。

（当時の内的独白は、当時の自分に対して語るもので、便宜上Cに入れておく）

境界ははっきりしたものではない。特にBとCの境界である、誰に対する語りであるのかは区別が困難である。

Aには、A-1 思い出すという要素の強いものと、A-2 思い出すという要素は強くなく、場面について対象化して詳しく語るもの、とがあるが、連続的である。A-1は作中人物としての側面がつよく、A-2は語り手としての側面がつよい。そのため、A-2は、物語世界外の語り手が語るときに似ている。また、A-1の方が感情・思いが強く働いている。

いわゆる三人称小説のテキストの語りは2章において、次のように分類した。

語り手が語る形式	——語り手が知っていることを語る……………A語り手の立場の語り
	——作中人物の知覚を情報源として語る……………B-1 知覚利用の語り①
作中人物が語る形式	——作中人物が言語化していない内容……………B-2 知覚利用の語り②
	——作中人物が言語化した内容……………C 内的独白、自由間接話法

三人称小説と比較しながら一人称小説の語りの様相をみてみたい。大まかにみると、過去を語る一人称小説では、現在の自分が三人称小説でいう「語り手」、当時の自分が三人称小説でいう「作中人物」と言える。しかし、『坊つちやん』では回想的でない語りも多く、単純ではない。A-1は、語り手が感情的に語る場合で、三人称小説では多くない語りであ

る。A-2の方が、三人称小説の語り手の立場の語りAに近い。Bは当時の自分の立場からの語りであるが、想定される受信者に対しての語りであるので、三人称小説のB-1に近い。Cは過去の当時の自分のことばをそのまま語っていて、AとBにおける想定される受信者と異なる受信者に対して語っているように見えることから、三人称小説のB-2やC内的独白に近いと考えられる。また、一人称小説では、語られている内容はすべて作中人物が言語化したものである。¹⁾

次に具体例をあげて説明したい。

- 【2】 兄とおれは斯様に分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつついて九州下り迄出掛ける気は毛頭なし、と云つて此時のおれは四畳半の安下宿に籠つて、夫すらもいざとなれば直ちに引き払はねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたが御うちを持つて、奥さまを御貰ひになる迄は、仕方がないから、甥の厄介になりませうと漸く決心した返事をした。此甥は裁判所の書記で先づ今日には差支なく暮して居たから、今迄も清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清は仮令下女奉公はしても年来住み馴れた家の方がいゝと云つて応じなかつた。然し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易をして入らぬ気兼ねを仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだらう。夫にしても早くうちを持ての、妻を貰への、来て世話をするのと云ふ。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百元出して是を資本にして商買をするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた。兄にしては感心なやり方だ。

(『坊つちやん』一：257)

文脈からみて、【2】のはじめの1文は、Aに相当し、回想的な語りといえよう。次の「引き払はねばならぬ始末だ。」「どうする事も出来ん。」は、当時の状況を想定される受信者に対して説明しているが、当時の自分の立場を反映しての語りになっていて、Bである。その後、「聞いてみた」「返事をした」のようなAが続く。ここまでは、まず状況・状態を語り、そのような状況だから、このように行動し、それでどうなったという流れで大まかな事態の語りが続く。この後、その事態についての詳しい事情が語られる。「然し今の場合～思つたのだらう」は、その行為の理由を推測している。このときはAと考えるのが自然だろうが、続く「云ふ」「好きなのだらう」はC当時の自分になったような語りと考えられる。

Bについてもう少し説明を加えたい。

- 【3】 出立の日には朝から来て、色々世話をやいた。来る途中小間物屋で買つて来た齒磨と楊子と手拭をズツクの革鞆に入れて呉れた。そんな物は入らないと云つても中々承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔を昵と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌やう」と小さな声で云つた。目に涙が一杯たまつて居る。おれは泣かなかつた。然しもう少しで泣く所であつた。汽車が余つ程動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から

首を出して、振り向いたら、矢っ張り立つて居た。何だか大変小さく見えた。

(『坊っちゃん』一：260-261)

文脈からみて、【3】の「目に涙が一杯たまつて居る」は、語り手が物語世界の事態を知覚・認識した語りである。その場で見たこととして語っている形式といえる。そのため、「当時の自分」になって語っているということができる。タ形の「ていた」であれば、その場で見ていなくてもよい表現になる。「承知しない」も当時の状態を現場で認識している語りである。しかし、両者とも、当時を現在とする受信者に語っているのではなく、想定される受信者に対して語っていると考えられる。そのためBである。

【4】 停車場はすぐ知れた。切符も訳なく買った。乗り込んで見るとマツチ箱の様な汽車だ。ごろごろと五分許り動いたと思つたら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思つた。たつた三銭である。夫から車を傭つて、中学校へ来たら、もう放課後で誰も居ない。宿直は一寸用達に出たと小使が教へた。随分気楽な宿直があるものだ。校長でも尋ね様かと思つたが、草臥れたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云ひ付けた。車夫は威勢よく山城屋と云ふうちへ横付にした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋号と同じだから一寸面白く思つた。

(『坊っちゃん』二：262)

下線部「汽車だ」は、「汽車だった」でも文としては成り立つ。しかし、タ形にしてしまうと、判断が対象化され臨場感がなくなる。タ形でなければ、判断の表出となる。少なくとも、「～汽車だ」の部分は、感情の高揚したことが表わされた表現であるため、今知覚しているかのような語りになっている。つまり、対象化されないままの感情を表現している。このように文全体は完全に当時の自分になっているわけではなく、文末部分だけが当時の知覚を引用している場合がある。「乗り込んで見ると」の部分は当時の現場で語る表現ではない。そのため、想定される受信者に語るBとなっている。

そのように考えると、「たつた三銭である」も同様に考えられる。「たつた三銭であつた」でも通じるが臨場感がなくなる。「である」のままなので、感情がそのまま表出されている。

「宿直があるものだ」は、語り手の感情の表出である。当時の自分になりきったCと考えられる。語っている現在からの語りとも考えられるが、そう考えると回想的な場面になるので、Cと考えたい。

これまで、『坊っちゃん』におけるA、B、Cの例をみてきたが、形態的には次のような傾向があった。

〔非タ形文末の文〕

テイル文末……………当時の立場での知覚・認識

判断の文末……………当時の立場での知覚・認識、または語っている現在の立場での判断

形容詞……………当時の立場での判断・認識、または語っている現在の立場での判断

〔タ形文末の文〕

タ形文末……………当時の立場での知覚・認識（「た」が気づきや発見の用法の場合）

または、語っている現在の立場での判断（当時を回想する場合）

3 具体的場面における様相

具体的にはどのようなパターンで、A、B、Cが語られていくのか、みていきたい。

『坊っちゃん』「一」章は回想的で、具体的物語場面が少ない。そのため、回想して語っているということがわかりやすくなっている。「二」章から物語場面が詳しく語られることも多くなり、回想して思い出を語るといった性格は薄れる。徐々に、語り手がどこに身を置いて語っているのかがわかりにくくなる。

3.1 A語っている現在の立場の語りから、C当時の自分になりきった語りへ

もう一度【1】を引用する。

- 【1】 1 引き受けた以上は赴任せねばならぬ。2 この三年間は四畳半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。3 喧嘩もせず済んだ。4 おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であつた。5 然しかうなると此四畳半も引き払わなければならぬ。6 生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許りである。7 今度は鎌倉所ではない。8 大変な遠くへ行かねばならぬ。9 地図で見ると海浜で針の先程小さく見える。10 どうせ碌な所ではあるまい。11 どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。12 分らんでも困らない。13 心配にはならぬ。14 只行く許である。15 尤も少々面倒臭い。

（『坊っちゃん』一：259）（再掲）

2・3文目からはこの3年間についての回想である。4「おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であつた」は、語っている現在の時点からの回想的な性格の強いA-1の語りと考えることができる。6文目は、「この当時の自分は『生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許り』である。」の意味だと解釈するか、「おれは『生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許り』である。」と解釈するかで、AかB Cかの認定が変わる。続く7、8は解釈によってBかCかの認定が変わるが、7「今度は」と表現されることから当時の自分（四国に行く前の自分）の立場からの語りだといえる。次の9「見える」、10「所ではあるまい」あたりから当時の自分になりきっている。その次からはさらに感情が高まっている。

このように、非タ形のAの語りから非タ形のCの語りに徐々に変化する。文の機能から見ると、状況説明のあと、感情・内省・思考の語りへ推移する傾向が見られる。この例から、次のような傾向が確認できる。

論理的に語り始められ、事情や状況が語られ、次に、それに対する語り手の思考・感想が語られる。そして、さらに細かいことや本筋からはずれることも感情的になりながら語られていく。この段階で語り手は当時の自分になりきっていく。語り手である人物は自分を「無鉄砲」とであると評価しているが、実はこのように筋道を立てて考えを進め、語る順序も考慮している人物である²⁾。

また、「一」章においては、そのようなエピソードが一段落にほぼ一つの割合で連続していく。また、本筋からはずれた語りは饒舌な印象を与えている。これらのパターンは、『吾輩は猫である』などの語りにも似ている³⁾。

3.2 Bの語りからCの語りへ、当時の自分になりきっていく

B当時の自分の立場の語りから、C当時の自分になりきったような語りへの変化について、【5】を例にして検討したい。

- 【5】 1 夫から又床へ這入つて横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶんぶん唸つて居る。2 手燭をつけて一匹宛焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手をはづして、長く畳んで置いて部屋の中で横堅十文字に振ふつたら、環が飛んで手の甲をいやと云ふ程撲つた。3 三度目に床へ這入つた時は少々落ち付いたが中々寐られない。4 時計を見ると十時半だ。5 考へてみると厄介な所へ来たもんだ。6 一体中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手するなら気の毒なものだ。

(『坊つちやん』四：286)

1 文目は、前半で事態を対象化して説明し、後半では知覚を引用していて、Bだと認定できる。2 文目は、一文の中で時間に幅のあるいくつかの事態が語られているのに、一連の出来事としてまとめられてタ形になっていて、Aだといえる。3 文目は、状態描写で自分について語っているのだが、「寐られない」は当時の感情と考え、Bとする。次の「十時半だ」もBである。このあたりから当時の自分の立場からの語りが多くなり、次第に当時の自分になりきっていく。次の5・6文は当時の自分になりきっているが、内的独白の引用の始まりだと考えられる。引用に入る前は、状況説明やCになっていると考えられる

3.3 A現在の立場での語りと、B C当時の自分の語りとの混在

A現在の立場での語りと、B C当時の自分の語りが混在する場合について、【6】を例にして検討したい。

- 【6】 1 温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかざやいて居る。2 太鼓が鳴るのは遊廓に相違ない。3 川の流れば浅いけれども早いから、神経質の水の様にやたらに光る。4 ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向に人影が見え出した。5 月に透かして見ると影は二つある。6 温泉へ来て村へ帰る若い衆かも知れない。7 夫にしては唄もうたはない。8 存外静かだ。

9 段々歩行いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。10 一人は女らしい。11 おれの足音を聞きつけて、十間位の距離に逼つた時、男が忽ち振り向いた。12 月は後からさして居る。13 其時おれは男の様子を見て、はてなと思つた。14 男と女は又元の通りにあるき出した。15 おれは考があるから、急に全速力で追つ懸けた。16 先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移して居る。17 今は話し声も手に取る様に聞える。18 土手の幅は六尺位だから、並んで行けば三人が漸くだ。19 おれは苦もなく後ろから追い付いて、男の袖を擦り抜けざま、二足前へ出した踵をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。20 月は正面からおれの五分刈の頭から顚の辺り迄、会釈もなく照す。21 男はあつと小声に云つたが、急に横を向いて、もう帰らうと女を促がすが早いか、温泉の町の方へ引き返した。

22 赤シャツは図太くて胡魔化す積か、気が弱くて名乗り損なつたのかしら。23 所が狭くて困つてるのは、おれ許りではなかつた。

(『坊っちゃん』七：338-339)

1 文目は複文になっており、前半は自分を対象化して説明している語りでBである。これをきっかけに次の文から、BあるいはCになっている。4 文目はAあるいはBの語りである。その文末の「見え出した」をきっかけに、見た（知覚した）光景が語られる。その光景はBあるいはCとして語られる。次の「かも知れない」などの判断はCと判断できる。その流れで、「かも知れない」の文と、それに続く2文はCとなっている。

次の段落も同様に始まる。10「一人は女らしい」はCと考えられる。その後、語っている現在の立場でのAの語りになる。ここでCからAに移っても不自然には感じられない。これは、次の動作、次の局面に移行したからであろう。臨場感をもってCで語った後、新たにまた次の動作に入り、事態が進んでいくのである。タ形で出来事をまとめて語り、スピーディに事態を進行させながら、一方でCによる語りもあり、臨場感も与えている。

CからAへの移行は、動作・事態の進行により出来事が次の局面に移る際のもので、その際のAは事態を対象化して説明する語りとなっている。

このように見ると、【6】は、自分を対象化したところ以外は、語り手の現場での知覚と判断が語られている。そのため、臨場感がある。（自分を対象化したところ以外のタ形の文は、知覚したままの気づき・発見と考えられる。）

このように動きのある事態と状態が混合されて場面が語られている。

3.4 B当時の自分の立場の語りに、解説としてA語っている現在の自分の立場の語りが挿入される

次に、B当時の自分の立場の語りを中心となっている部分に、A現在の自分の立場での語りが挿入されている場合について【7】を例にして検討したい。

【7】 1 二人が着いた頃には、人数もう大概揃つて、五十畳の広間に二つ三っ人間の塊まりが出来て居る。2 五十畳丈に床は素敵に大きい。3 おれが山城屋で占領した十五畳敷の床とは比較にならない。4 尺を取つてみたら二間あつた。5 右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶を据えて、其中に松の大きな枝が挿してある。6 松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣がないから、銭が懸らなくつて、よからう。7 あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物ぢやありません、伊万里ですと云つた。8 伊万里だつて瀬戸物ぢやないかと、云つたら、博物はえへゝゝと笑つて居た。9 あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云ふのださうだ。10 おれは江戸っ子だから、陶器の事を瀬戸物といふのかと思つて居た。11 床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔位な大きな字が二十八字かいてある。12 どうも下手なものだ。13 あんまり不味いから、漢学の先生に、なぜあんなまづいものを例々と懸けて置くんですと尋ねたところ、先生があれは海屋と云つて有名な書家のかいたものだとか教へてくれた。14 海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つて居る。

1 文目「二人が着いた頃には」とあるので、現在の立場からとらえられているが、文末は「ている」で、Bである。それ以後はBかCである。4「尺を取つてみたら二間あつた」はAであろう。このように説明のために、BCの中にAのような説明が入ることがある。

6「銭が懸らなくつて、よからう」は、Cのようだが、Aとも考えられる。引き続き「瀬戸物」に関する説明がAの語りとなる。この2文は、時間が短縮されタ形でまとまった話として語られている。8「笑つて居た」は、このテキストで数少ない「ていた」形文末の文である。回想として語られている。

また、引用の最後の「おれは今だに下手だと思つて居る」も、そこまでが回想であったことを明確に表す表現である。

このように、BCが基本になり物語を進行させて、解説としてAの語りをしている。これは、現在の立場からその出来事を意味づけたり解釈したりしているのである。

3.5 具体的場面の様相によりわかること

これまでの検討により、傾向として次のようにいえる。具体的場面を語るときは、「Aの語りで場面設定 → BやCの語りによる具体的語り → ときどきAの語りで時間の展開を速めたり、解説したりする。」のようなパターンが多い。また、内的独白は状況が説明されたあとに挿入されやすい、状況の説明の後に感情や思考が語られることが多い、ということが挙げられる。このことは、大まかな設定の後に語り手の内面が語られるということである。

また、A→C、B→Cという変化が頻繁にあることから、語りが深く細部に至るにしがって、語っている現在の時間が意識されなくなっていく傾向があるといえる。

このように、AとBCの組み合わせにより、事態の進行をスムーズにしながらか臨場感も与えられている。また、BC中心の展開の中で、Aの現在からの立場を用いて解釈することによって、複数の立場で語られることになっている。

4 『坊っちゃん』における現在の設定の変化

『坊っちゃん』には種々の語りの様相があり、その大まかな傾向も変化していく。

「一」章は、子供の頃の出来事が語られるが、語り方は現在から回想して語るというのが基本である。勘太郎とのエピソードなども回想として語られている。時折、当時の自分の立場で語ることもあるが、長く続くものではない。その回想もA-1にあたるもので、昔のことを懐かしく思い出しているようである。

「二」章以降、主人公が四国に着いてからは、昔のことを思い出すという形式は少なくなる。出来事も細かく詳しく語られる。具体的な物語場面が語られることが多くなる。しかし、章の冒頭は、語り方が変わることが多い。

「八」章のはじめの方は、当時の自分が過去の事柄を思い出して整理して語るという形式になっている。そのようにして、すでに語ってきた事件の意味を考えている。ここでは、語っている時点が今までとは異なっているかのようである。次の例では、ある特定の時点を基準にしてそれより以前のことを語ったり、最近の状態を語ったりしている。

- 【8】 山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易へて、赤シャツとおれは依然として在来の
關係を保つて、交際をつゞけて居る。野芹川で逢つた翌日杯は、学校へ出ると第一番
におれの傍へ来て、君今度の下宿はいゝですかの又一所に露西亜文学を釣りに行かう
ぢやないかのと色々な事を話しかけた。

（『坊っちゃん』八：341）

下線部は、表現者である「おれ」が現在の状況を語っている語りだと考えられる。しかし、その「現在」とは、四国で過ごす日常生活のことであり、東京に帰っている「現在」のことではない。語り手の「おれ」は、四国生活でのある時点を基準にして、それ以前のことを回想して下線部以降の出来事を語っている。

その回想的部分がこの後も長く続き、以前のことを語っているうちに、時間に関しての設定が不明確になる。途中で回想が終わり、元の設定に戻るのだが、いつ語っているのかという時間の設定が分りにくくなっている。

次の例の「十」章のはじめは、Cではじまり、実況中継のようである。

- 【9】 祝勝会で学校は御休みだ。練兵場で式があると云ふので、狸は生徒を引卒して参列しなくてはならない。おれも職員の一員として一所にくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まばしい位である。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍を整へて、一組一組の間を少しづゝ明けて、それへ職員が一人か二人宛監督として割り込む仕掛けである。仕掛けだけは頗る巧妙なものだが、実際は頗る不手際である。生徒は小供の上に、生意気で、規律を破らなくつては生徒の体面にかゝはると思つてゐる奴等だから、職員が幾人ついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに関の声を揚げたり、丸で浪人が町内をねりあるいてる様なものだ。軍歌も関の声も揚げない時はがやがや何か喋舌つてゐる。

（『坊っちゃん』十：368-369）

1文目に「だ」文末の文で解説され、続く2文は状況の説明である。ここまで現在のことにように語っている。「町へ出ると…である」では時間が進んでいるが、語っている現在は町を歩いているときだと考えれば矛盾はない。つまり「くつついて行く」最中と考える。このあとしばらく⁴⁾は、行為・観察と語りが同時であるような語りが続く。しかし、その後は時間が飛び、過去の出来事として語られていく。完全な実況中継ではないが、部分的な実況中継の語りと考えるのが自然である。「十」章の、祝勝会の余興を描写する部分にも同様の箇所がある。このように、細かい状況を臨場感豊かに語るときには、実況中継の語り有効だと考えられる⁵⁾。この場合、詳細に時間をかけて語り、語る分量が多くなっている。

このように、いつ語っているのかという設定が多少変動しながら、また元の時間に戻ることになっている。

5 『坊っちゃん』の語り手と聞き手（受信者）の設定を推測する

『吾輩は猫である』と『草枕』の受信者がフィクションであることを既に論じたが、『坊つちやん』においてコミュニケーション回路がどのようなになっているのか、推測してみたい。

手紙もめったに書かないと設定されている「坊つちやん」という人物が、このような長文の語りを書くことは不自然である。また、当時の自分になりきるなど、現在語っているという設定が崩れることが多いため、想定される受信者が途中で変更されているようにも見える。また、受信者に語りかけるような表現が見られず、また受信者についての情報が一切語られていないことから、物語世界の特定の人物を受信者と考えることは困難である。

このようなことから、語り手が想定している受信者は特定の人物ではなく、また、語り手である「坊つちやん」は、このテキストを書いているわけではないと考えられる。そうすると、このコミュニケーション回路は非現実のフィクションの回路であるということになる。そこで、語り手がこのテキストを読んでいる多数の読者に対して語っているという推測が成り立つ。そう考えれば、想定される受信者に語りかけるように語らないことも納得できる。読者は物語世界内の時間の流れとは別の存在であるので、語り手が当時の自分になりきって、当時を現在とする受信者に語るように語っても問題ない。しかし、実際には、そのようなフィクションのコミュニケーション回路を創作した作者が実際の読者を想定しながら語っている。そのように考えると、語り手である「坊つちやん」が受信者として想定している読者と、現実の読者は、同じではないといえる。

三人称小説の語りも、語り手を設定していることがフィクションであり、語り手が想定しているフィクションの聞き手に語っている。『坊つちやん』の聞き手と、三人称小説における想定される聞き手は、同じような設定だと考えられる。

6 一人称小説と書簡の比較（『こころ』下との比較）

一人称小説は、日常の「報告」テキストと似ている部分もあるが、コミュニケーション回路がフィクションであるという点で、やはり「語り」テキストの一種であるということをも前節で指摘した。本節では、書簡という設定である『こころ』下と比較することによって、一人称小説の語り、書簡などの日常の「報告」テキストと異なることを検証したい。

次の用例は、『こころ』下「先生の遺書」の一部である。「先生の遺書」というのは、『こころ』上と中で「私」が「先生」と呼んでいる人物の遺書のことである。これは、「私」宛に「先生」が郵送したものである。つまり、この遺書の表現者は「先生」で、受け手は「私」である。引用した部分は「先生」が大学生の頃のことを回想している部分である。「先生」とその友人Kは同じ下宿に暮らしていたが、ある日下宿屋の主人である「奥さん」とその娘の「御嬢さん」から歌留多をしようと誘われた。当時「先生」は、「御嬢さん」に好意をもっていた。

【10】 ある日奥さんがKに歌留多を遣るから誰か友達を連れて来ないかと云つた事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答へたので、奥さんは驚ろいてしまひました。（中略）奥さんはそれぢや私の知つたものでも呼んで来たら何うかと云ひ直

しましたが、私も生憎そんな陽気な遊びをする心持になれないので、好い加減な生返事をしたなり、打ち遣つて置きました。所が晩になつてKと私はとうとう御嬢さんに引つ張り出されてしまひました。客も誰も来ないのに、内々の小人数丈で取らうといふ歌留多ですから頗る静なものでした。其上斯ういふ遊技を遣り付けないKは、丸で懷手をしてゐる人と同様でした。私はKに一体百人一首の歌を知つてゐるのかと尋ねました。Kは能く知らないと答へました。私の言葉を聞いた御嬢さんは、大方Kを輕蔑するとでも取つたのでせう。それから眼に立つやうにKの加勢をし出しました。仕舞には二人が殆ど組みになつて私に当たるといふ有様になつて来ました。私は相手次第では喧嘩を始めたかも知れないのです。幸ひKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼の何処にも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事に其場を切り上げる事が出来ました。

それから二三日経つた後の事でしたらう、奥さんと御嬢さんは朝から市ヶ谷にゐる親類の所へ行くと云つて宅を出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃でしたから、留守居同様あとに残つてゐました。

（『こころ』下 三十五：242-243）

この部分は、具体的な物語場面と考えられる部分である。非タ形の文は、1文目の「あります」のほかに「のでせう」「のです」「らう（本文中では句点が付いていない）」があるだけである。1文目の「あります」文末の文は読み手に対して説明している文で、「のでせう」「のです」「らう」は、当時の出来事について現在の判断を表出している文である。つまり、『坊っちゃん』のように、語り手が当時の自分の立場で語るために非タ形文末になっているわけではない。他の文は、すべてタ形文末の文となっている。そのタ形の文は、すべて過去を回想する用法である。これらのことから、語り手である作中人物は、現在の自分の立場から当時を回想する立場でしか語っていないことがわかる。

『坊っちゃん』では、「論理的に語り始められ、事情や状況が語られ、次に、それに対する語り手の思考・感想が語られる。そして、さらに細かいことや本筋からはずれることも感情的になりながら語られていく。この段階で語り手は当時の自分になりきっていく」という傾向がみられることを前節で指摘した。この『こころ』のこの例でも、「論理的に語り始められ、事情や状況が語られ、次に、それに対する語り手の思考・感想が語られる。」という展開は大体同じだといえる。しかし、『こころ』では、語り手は回想として語る形式を維持している。また、受け手である作中人物を意識して語っている。これは、途中で「のでせう」「のです」という文末表現が使われていることから明らかである。つまり、コミュニケーション回路はフィクションではない。このように、『坊っちゃん』とは違い、『こころ』は日常言語の体裁を崩していないといえる。

以上のように、書簡という日常言語と一人称小説の語りは、表現うえで、特にコミュニケーション回路のうえで、異なっているといえる。

7 『坊っちゃん』の語りの特徴（むすび）

『坊っちゃん』でも、現在進行している事柄について語る語りが見られることがある。物語世界外の語り手が語るスタイルの『三郎』も、この点では同様である。『草枕』や『吾

輩は猫である』はどの時点で語っているかはっきりしないところもあるが、現在進行している事柄について語る形式である語りに近い。しかし、『坊っちゃん』の設定は、東京に帰ってきて清も亡くなった時点から回想して語り始めるので、部分的にこれらのテキストに似ているが、語りの設定がこれらのテキストとは全く異なっている。基本的には回想の物語であるという点で、初期の他のテキストと違いがある。

しかし、『こころ』等のように書簡や手記という設定ではなく語りであるという点では、三人称小説との共通点ももつ。語り手が、特定の人物でない多数の受信者（聞き手）に対して語るという設定であるため、日常の「報告」テキストとは異なり、受信者に対して語りかけるような表現にはならない。また、コミュニケーション回路がフィクションであるという点でも、一人称小説であれ三人称小説であれ、語りのテキストは共通している。

『坊っちゃん』の語りの様相としては、基本的には作中人物が過去を語る物語であるのに、Cのような語りが多くあるということがテキストに大きな影響を与えている。Cの語りには、ストーリー展開にはあまり関わらない、語り手の考えが挿入されることもしばしば見られた。その部分は、主人公の性格が反映され、饒舌な語りになっている。

大体において、時間の流れにしたがって、小事件が具体的に語られ、それにともない主人公が真相を理解・解釈していき、全体の結末に向かっていく。全体を知っているはずの語り手だが、構成のために時間の前後を変えるようなことはほとんどなく、物語場面の語りを重ねていくことによって、自然に結末にたどり着く。この点では、『それから』以降の、時間の順序が前後することの多いテキストとは異なっており、『三四郎』の語りに似ている。

漱石の初期の一人称小説である『坊っちゃん』では、語り手である作中人物が現在の立場から語るだけでなく、当時の自分になりきって語ることがあり、いわゆる三人称小説の語りと同様に多様な語りの様相をもっていることが確認された。

【注】

- 1) 顧（2005）では、シュタンツェル（1979：56）を引用しながら、「私」について、①語りの時間において「語る私」自身によって指し示される「語る私」、②語りの時間において「語る私」によって指示される「体験する私」、③出来事の時間において「体験する私」の3分類を提示している。
- 2) 小森（1983）では、語り手である「坊っちゃん」が四国で「裏表のある言葉」を学んだ結果、新しい文体を持つことになったという指摘をしている。また、石原（2010）では、石山徹郎（1916）「漱石氏の作物の研究」『水甕』を引用し、語り手と作中人物「坊っちゃん」が同一人物であることから起こる不自然さについての批判が、同時代批評から既にあることを指摘している。
- 3) 『吾輩は猫である』では、小事件を積み重ねることによって、語りを進めている。
- 4) 『漱石全集』の4ページ弱の分量。
- 5) いわゆる写生文にはこのような効果が認められる。

結語

最後に、各章で検証した成果を述べたい。

第1章〔語りの様相〕

語り（地の文）をA、B-1、B-2、Cの様相に分けて考えたが、テキストの一文一文でその様相が違っていることが確認できた。小説テキストでは、語り手が聞き手に、あるいは作者が読者に、情報を伝達するにあたって、種々の手段を使っていることが認められる。たとえば、作中人物の知覚を利用した語りB-2の語りでは、作中人物が知覚・認識したであろう内容を語り手が言語化して、作中人物の言葉のように示す。この場合、その言語の直接向けられた受け手は、語り手が想定する聞き手ではない。だから、この場合、作中人物が誰かに向けて語っているかのような言語を、聞き手が読む（聞く）ことによって、情報が伝達されるという構造になっている。その他の場合も、語り手と作中人物が関係しながら情報を伝達していることが解明できた。

これに対し、日常生活のテキストは、語り手から聞き手に対して直接語るものであるから、小説テキストとは大きな違いがある。

第2章〔動詞文・テイル文・デアル文（タ形と非タ形）が語りの表現に与える影響〕

小説においては、文末の「タ」が、日常のテキストとは違った使われ方がなされていることが検証された。語り手は、タ形文末によって、物語世界の事態を対象化し、時間の流れを捨象して事態全体をまとめてとらえる。このことによって、表現主体である語り手は、過去でないこともタ形であらわし、物語世界に流れる時間から独立して、物語世界の事態を対象化して語ることができるということが明らかになった。

第3章〔「のだ」文の使用のされ方がテキストに与える影響〕

はじめに「のだ」文のタ形とのかかわり方を検証した。「タのだ」「ルのだ」の違いからは、表現者が内容を対象化してとらえたうえで「のだ」文にしているのかどうかの違いがみられた。「のだ」と「のだった」の違いからは、「…のだ」という自分の判断を、表出しているか対象化しているかという違いがみられた。この観点は、語り手が内容を語るときの態度の違いを検証するのに有効であった。漱石の小説テキストでは、「のだ」文の文末はいつも非タ形の「のだ」という形式であるため、表現者（特に語り手）の判断が表出されていた。

また、「のだ」文の話題に着目することによって、「のだ」文が文章中の何を解説しどのような役割を果たしているかを検証することができた。『それから』では、錯時法が使われたときに、時間の前後関係を結び付けるために「のだ」文が使用されていた。これは、初めにある事態を述べて、それが現在起こっていることと関係しているということを、「のだ」文で「…ということなのだ」と述べたものである。このように、話題にこだわることで、文章の展開の仕方を把握出来るということが検証された。

第4章〔地の文と発言の関係〕

地の文と発言がどのように関係しているのかということが、テキストによって違いのあ

ることが認められた。『三四郎』に特徴的な、発言を地の文の語りの中に取り込んでいるような場合は、発言は語りの一部として機能している。しかし、『道草』に特徴的な、地の文から発言を独立させて提示している場合は、語り手の語りをとおさずに発言を聞き手（あるいは読者）に直接示している印象を与える。いわゆる telling と showing という違いが表れるといえる。

第5章〔物語場面と語りの機能〕

物語場面そのものの語りだけに注目してみても、一つの物語場面の中で、事象・状態・説明などの違った種類の機能が混合して語られている。さらに、そこに物語そのものでない語りも混じってくる。それでは、どのような内容の積み重ねでテキストが構成されているのか。語られる内容を分類したうえで、それらがテキストとしてどのように有機的に構成されているのかを検討した。テキストによって、またテキストの部分によって、その構成のされ方は異なっている。例えば、『道草』は、物語場面そのものの語りが少なく、物語そのものでない語り的事物や人物の解説として機能している傾向が認められる。

このような物語場面を語る語りとそうでない語りに分け、さらに細かく分類して分析することは、テキストの構造を考えるうえで有効であった。

第6章〔一人称小説『坊つちやん』の表現特性〕

一人称の語りは日常の「報告」テキストに近いだろうという予想から出発したが、そのような傾向はあまり見られなかった。「語り」とは異なる日常の言説であれば、ストーリーを語る時にはほとんどが回想形式になるはずである。しかし、一人称小説『坊つちやん』の語りでは必ずしもそうになっていない。さらに「坊つちやん」と呼ばれる語り手は、実際にテキストを書いていないらしいことがわかってきた。一人称小説『坊つちやん』は、語りの設定自体がフィクションなのであった。日常の言説を模した形式をとろうとしてもいないのである。

【補遺】テキストの校異について

『漱石全集』のテキストについて、確認しておきたい。

『漱石全集』（1993～2004）には、各巻に「今次『漱石全集』の本文について」が掲載されている。その抜粋を掲げておく。

一、原稿等の自筆資料が現存するものについては、できるだけその自筆資料を底本として本文を作成した。

四、本全集の本文作成にあたっては、右記の底本をできるだけ忠実に翻刻（活字化）した。ただし、衍字・欠字を含む明らかな誤記・誤植の類は底本以外の本文資料（初出の雑誌・新聞または単行本など）により訂正した。訂正の内容は校異表に掲げた。

（一）字体

- a i 平仮名のうち、「か、く、こ、し、す、た、な、に、は、よ、り、れ、わ」などは変体仮名で書かれることがあるが、翻刻するにあたってはすべて通行の字体を使用する。
- b i 原則として、常用漢字表・人名漢字表に定められている字体（新字体）を使用する。
 - ii 右の表に含まれない漢字については、現存正字体として一般に通行している字体を使用する。
 - iii 異体字、譌字、略字（書き文字）は使用しない。

（二）用字・表記について

- a 固有名詞について
 - i 人名。地名などの現実の固有の表記は、原則として底本にある表記に従う。
 - ii 登場人物名または呼称が誤記されたときは訂する。
- b 漢字の文字遣い・漢字熟語について
 - i 原則として底本の表記に従う。
 - ii 以下の場合に修訂を施すことがある。
 - イ漢籍由来の漢語や仏教語で、誤記（誤植）・当て字と判断されるとき
 - ロ偶然の誤記とは思われない表記のうちで、一般の慣用と異なる場合
 - ハ意味は通じるが、音としての読みが一般になじまない熟語
- c 仮名遣いについて
 - i 仮名遣いは、原則として底本の表記に従う。衍字や欠字は修訂する。
 - ii 「矢つ張り」や「一ヶ月」などの小字は、「矢つ張り」などと表記されることもあり、その大小は底本に従う。

五、自筆資料が参看できない場合は、活字化された資料に基づくが、活字化された資料には、印刷上の「誤植」が含まれている可能性がある。その事への配慮から、自筆資料によらない場合の修訂の基準は自筆資料による場合と異なることがある。

本論文で引用した『漱石全集』のテキストは、『吾輩は猫である』以外は漱石の自筆原稿を底本としている。『吾輩は猫である』だけは、残っている自筆原稿が部分的であるため、単行本の初版を底本にしている部分がほとんどである。

上の基準によって『漱石全集』の本文が作成されているが、初版の単行本と比較しても大きな違いは認められなかった。次に『漱石全集』本文と初版の単行本の本文との違いを簡潔に記す。

- ・漢字や、漢字の送り仮名に違いがある。『漱石全集』では、使用される漢字や送り仮名の表記が統一されていてゆれが少ない。
- ・初出の新聞や単行本には、現代の句読点のつけ方と異なるものがあるが、『漱石全集』では現代の句読点のつけ方とほぼ同じである。
- ・活用語が、連体形として下の単語にかかっているのか、あるいは終止形として文を終止するのか、について単行本と『漱石全集』では異なることが多い。『漱石全集』では、終止形として扱う傾向が強い。

「髭を濃く生やしてゐる。面長の瘠せぎすの、どこことなく神主じみた男であった」

(全集) (『三四郎』: 284)

「髭を濃く生やしてゐる。面長の瘠せぎすの、どこことなく神主じみた男であった」

(単行本)

次のような例文の場合は、『漱石全集』の接続語が不自然に感じられる。

「けれども二人の事が何だか気に掛る。ことに細君のことが気に掛る。ので一寸顔を出した。」

(全集) (『それから』: 70)

「けれども二人の事が何だか気に掛る。ことに細君のことが気に掛る。ので一寸顔を出した。」

(単行本)

- ・カギ括弧(「 」)のあとに改行するかどうかで、『漱石全集』と初版本では多少のゆれが見られる。初版本において改行に直されることが多い。しかし、この直しは多くない。
- ・タ形と非タ形が交替しているものがあるが、『それから』以外はテキストごとに数例見られる程度である。しかし、『それから』では他のテキストに比べて、タ形への交替が多い。また部分的に大幅な交替が集中して見られる。次の3箇所が最も目立つところである。

85～86 ページの1 ページ強の部分に8例、91～92 ページのほぼ1 ページの部分に4例、122～123 ページの1 ページ強の部分に7例が、単行本になったときには、非タ形文末からタ形文末に直されている。詳しくは、次のようである。

85～86 ページは、「六の二」の冒頭部分で、主人公代助の日常的な思考状態が語られている。「てゐない」「てゐる」6例と「である」2例がタ形に直されている。

91～92 ページは、「六の四」の冒頭部分で、代助が友人の平岡の家を訪れたときの、その家の外観についての印象が語られている。「てゐる」1例と「である」3例がタ形に直されている。

122～123 ページは、「七の六」の冒頭に近い部分で、代助の結婚に対する考え方が語られている。「のである」1例、「てゐない」「てゐる」3例、「ない」2例、動詞(「気がする」)1例がタ形に直されている。全ての文末がタ形になったわけではないので、機械的に直されたとは考えにくい。内容は、代助の心理や思考と思われることを語り手が説明する部

分である。本文でも触れたが、このような語りのときはタ形になることが多い。

『三四郎』などの比較的早い時期の漱石の三人称小説テキストは、非タ形文末の文が多い。一方、晩年の漱石の三人称小説テキストは、タ形文末の文が多い。文末形式と語り手の特徴に関連があることは本論でも述べたとおりである。『それから』は、非タ形文末が多いテキストからタ形文末が多いテキストに変化している時期のテキストである。テキスト成立時期からしても、『それから』は、語り手が物語世界の現場にいるかのように感じられる『三四郎』のテキストに近い性格をもちながら、語り手が冷静に語る『道草』のテキストのような性格ももっていると考えられる。この『それから』の初版本と『漱石全集』の校異もそのことを反映しているように思える。『それから』において、多くの非タ形文末をタ形文末に換えることにより、語り手の特徴に変化が出てくるのである。

【テキスト】

- 『芥川龍之介全集 第一巻』(1995) 岩波書店『羅生門』(初出は 1915)
- 『石川達三作品集第十一巻』(1972) 新潮社『自分の穴の中で』(初出は 1954)
- 『伊藤整全集 第八巻』(1973) 新潮社『氾濫』(初出は 1958)
- 『大岡昇平全集 第 5 巻』(1995) 筑摩書房『妻の証言』(初出は 1957)
- 『川端康成全集 第十巻』(1980) 新潮社(初出は 1947)
- 『北杜夫全集 4』(1977) 新潮社「楡家の人々」(初出は 1964)
- 『漱石全集 第一巻』(1993) 岩波書店『吾輩は猫である』(初出は 1906)
- 『漱石全集 第二巻』(1994) 岩波書店『坊っちゃん』(初出は 1906)
- 『漱石全集 第四巻』(1994) 岩波書店『虞美人草』(初出は 1907)
- 『漱石全集 第五巻』(1994) 岩波書店『三四郎』(初出は 1908)
- 『漱石全集 第六巻』(1994) 岩波書店『それから』(初出は 1909)
- 『漱石全集 第七巻』(1994) 岩波書店『彼岸過迄』(初出は 1912)
- 『漱石全集 第九巻』(1994) 岩波書店『心』(初出は 1914)
- 『漱石全集 第十巻』(1994) 岩波書店『道草』(初出は 1915)
- 『決定版 三島由紀夫全集 4』(2001) 新潮社(初出は 1954)
- 『宮本輝全集 1』(1992) 新潮社(初出は 1978)

【既出論文との関係】

序章 書き下ろし

第1章

- ・ 『三四郎』における地の文の様相—語り手と作中人物との関わりと、文末表現を中心に— (2005) 『日本語論叢』 6号
- ・ 漱石『三四郎』『道草』における語りの多様性 (2005) 『早稲田大学教育学研究科紀要別冊』 12号— 2

第2章

- ・ 夏目漱石の小説におけるタ形文末・非タ形文末の表現効果 (2011) 『表現研究』 93号
- ・ 動詞の終止形 (非「た」形) の使用による文体特徴と写生文との関係—『吾輩は猫である』、『三四郎』、『道草』の場合— (1999) 『早稲田大学教育学研究科紀要別冊』 7号
- ・ 文末表現の文体に対する影響—漱石『三四郎』における「ている」「ていた」文末の場合— (2000) 『早稲田日本語研究』 第8号
- ・ 語り手と「である」系文末との関係—夏目漱石『吾輩は猫である』『三四郎』『道草』、芥川龍之介『羅生門』を例として— (2002) 『文体論研究』 48号
- ・ 表現研究の方法—「である」文・「のだ」文に注目して— (2007) 『日本語論叢』 特別号

第3章

- ・ 「のだ」文におけるル形とタ形の表現上の違い—三島由紀夫『潮騒』と川端康成『雪国』を資料として— (2008) 『表現研究』 87号
- ・ 漱石作品における「のだ」文の使われ方—鷗外『青年』と比較して— (2004) 早稲田大学教育学研究科紀要別冊 11号— 2

第4章

- ・ 発言引用の諸相—漱石作品を例として— (2004) 『日本語論叢』 5号
- ・ 夏目漱石『道草』における作中人物の発言と地の文との関係 (2004) 『表現研究』 79号

第5章

- ・ 夏目漱石『三四郎』『道草』における語りの諸相 (2005) 『表現研究』 82号
- ・ 漱石中期作品の表現—『それから』の語り手の特徴 (2007) 『早稲田日本語研究』 第16号
- ・ 夏目漱石『彼岸過迄』前半における語り—語られる出来事と語る時間— (2008) 『日本語論叢』 8号

第6章

- ・ 物語世界内の人物が語る語りの特徴—『坊っちゃん』を中心に—（2006）『日本語論叢』 7号

結語

書き下ろし

【参考文献】

- 相原和邦（1988）『漱石文学の研究—表現を軸として—』明治書院
- アダン・ジャン＝ミシェル著、末松壽、佐藤正年訳（2004）『物語論』白水社 文庫クセジュ（原典 1984）
- 安東璋二（1990）「漱石・『こころ』の方法（一）—語り手の位置など—」『人文論究』第 50 号北海道教育大学函館人文学会
- 飯田 隆（2005）『ウィトゲンシュタイン』講談社
- 庵 功雄（2001）「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4
- 石出靖雄（2000）「文末表現の文体に対する影響—漱石『三四郎』における「ている」「ていた」文末の場合—」『早稲田日本語研究』8 早稲田大学国語学会
- 石出靖雄（2005）「漱石『三四郎』『道草』における語りの多様性」『早稲田大学教育学研究科紀要別冊』12 号-2
- 石出靖雄（2004）「夏目漱石における「のだ」文の使われ方—鷗外「青年」と比較して—」早稲田大学教育学研究科紀要別冊 11 号-2
- 石出靖雄（2005）「夏目漱石『三四郎』『道草』における語りの諸相」『表現研究』82
- 石出靖雄（2011）「夏目漱石の小説におけるタ形文末・非タ形文末の表現効果」『表現研究』93
- 石原千秋、木股知史、小森陽一、島村輝、高橋修、高橋世織（1991）『読むための理論 文学史・思想・歴史』世織書房
- 石原千秋（1986）「鏡の中の『三四郎』」『東横文学』第 18 号（石原（1997）所収）
- 石原千秋（1997）『反転する漱石』青土社
- 石原千秋（2004）『テキストはまちがわらない—小説と読者の仕事』筑摩書房
- 石原千秋（2004）『漱石と三人の読者』講談社
- 石原千秋（2005）『『こころ』大人になれなかった先生』みすず書房
- 石原千秋（2009）『読者はどこにいるのか——書物の中の私たち』河出書房新社
- 石原千秋（2010）『漱石はどう読まれてきたか』新潮社
- 井島正博（1989）「物語と時制——近現代小説を材料として」『東洋大学日本語学会』2
- 井島正博（1993）「物語と視点」『成蹊国文』第 26 号
- 井島正博（2001）「古典語過去助動詞の研究史概観」『武蔵大学人文学会雑誌』32 巻 2・3 号
- 市川 孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 糸井通浩・半沢幹一編（2009）『日本語表現を学ぶ人のために』
- 糸井通浩（1985）「文章論的文体論」『日本語学』4-2
- 糸井通浩（1985）『日本語表現を学ぶ人のために』「第 2 章第 1 節 表現の視点・主体」
- 伊土耕平（1999）「「陳述の連鎖」について—『裸の王様』と『1973 年のピンボール』—」『表現研究』69
- 井上 優（2001）「現代語の『タ』—主文末の『…タ』の意味について—」『「た」の言語学』ひつじ書房

- 今井文男（1975）『文章表現法大要』笠間書院
- 尾上圭介（1982）「現代語のテンスとアスペクト」『日本語学』1巻2号 1982年12月
『文法と意味Ⅰ』（2001）くろしお出版所収
- 尾上圭介（2001）「動詞終止形と不変化助動詞の叙法論的性格」文法懇話会発表資料（1997）
『文法と意味Ⅰ』（2001）くろしお出版所収
- 亀井秀雄（1980）は「写生文の意味するもの—文学における『意匠』と『労働』の自覚」『國文学』第25巻10号
- 川端康成・三島由紀夫（1997編）『川端康成・三島由紀夫往復書簡』新潮社
- 神郡悦子（1990）「焦点化についての考察」『文藝言語研究文藝編』18
- 北住敏夫（1973）『写生俳句及び写生文の研究』明治書院
- 北原保雄（1991）「表現主体の主観と動作主の主観」『國語學』165 国語学会
- 金水 敏（1989）「『報告』についての覚書」『日本語のモダリティ』（pp. 121-129）くろしお出版
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 工藤真由美（2004）『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』「第7章 現代語のテンス・アスペクト」朝倉書店
- グレマス・A・J 著、田島宏、鳥居正文訳（1988）『構造意味論』紀伊国屋書店
- 顧 那（2005）「一人称小説における自由直接話法と自由間接話法」『表現研究』82 表現学会
- 小林英夫（1956）「漱石の文体について」『國文學』1(6)1956年10月
- 小森陽一（1983）「裏表のある言葉—『坊っちゃん』における〈語り〉の構造—」『日本文学』1983・3～4
- 小森陽一（1996）『出来事としての読むこと』東京大学出版会
- 小森陽一（1988）『文体としての物語』筑摩書房
- 小森陽一（1988）『構造としての語り』新曜社
- 西郷竹彦（1998）『文芸学講座Ⅰ 視点・形象・構造』「西郷竹彦文芸・教育全集14巻」恒文社
- 佐久間鼎（1952）『現代日本語法の研究《改訂版》』厚生閣（1983 くろしお出版復刻）
- 佐久間まゆみ（1995）『表現学大系各論篇第28巻 随筆・紀行の表現』教育出版センター
「第十二章向田邦子」
- 佐藤和代（1995）「漱石とジェイン・オースティン—自由間接話法をめぐる—」『人文科学的研究』新潟大学人文学部
- 佐藤武義（1991）「漱石の文体—文末表現を中心として—」『文章研究の新視点』明治書院
- 清水孝純（1985）「方法としての迂言法」『人文論輯』31号
- 清水孝純（1993）『漱石 その反オイディプス的世界』翰林書房
- シュタンツェル・F 前田彰一訳（1989）『物語の構造—〈語り〉の理論とテキスト分析』岩波書店
- ジュネット・ジェラルド 花輪光・和泉涼一訳（1985a）『物語のディスクール 方法論の

- 試み』水声社
- ジュネット・ジェラルム 和泉涼一・神郡悦子訳 (1985b) 『物語の詩学 続・物語のディスクール』水声社
- 鈴木 泰 (1999) 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析』ひつじ書房
- 鈴木 泰 (2009) 『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
- 鈴木康志 (2003) 「思考・発言再現における人称の変換 (I) —第3人称小説・1人称小説・2人称小説の場合—」『愛知大学文学論叢』第127輯
- 鈴木康志 (2007) 「体験話法 (自由間接話法) 文献一覧—1993 年以降—」『愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文化』第16号
- 砂川有里子 (1989) 『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体 (上)』「引用と話法」明治書院
- 砂川有里子 (2003) 『朝倉日本語講座 5 文法 I』「第7章 話法における主観表現」朝倉書店
- スティーブン・千種キムラ (1995) 『「三四郎」の世界 (漱石を読む)』翰林書房
- 相馬庸朗 (1986) 『子規・虚子・碧梧桐—写生派文学論』洋々社
- 立川和美 (2002) 「テキストにおける結束構造に関する一考察」——文段成立のマーカースとしての「のだ」文の機能——『文体論研究』48
- 谷口秀治 (1997) 「テイル形に関するムード的側面の考察」『日本語教育』92
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 土部 弘 (1973) 『文章表現の機構—国語教育の実践原理を求めて』くろしお出版
- トドロフ・ツヴェタン著、野村英夫訳 (1971) 「文学の理論」『ロシアフォルマリスト論集』理想社
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』山田書院
- 徳沢得二 (1965) 「体験話法のもたらすもの」『文芸研究』明治大学文学部紀要第14号
- 永野 賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 中村 明 (1987) 「言語表現における視点の問題」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第33輯 文学・芸術学編
- 夏目漱石 (1907) 「写生文」『読売新聞』(1907. 1. 20 付)
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』くろしお出版
- 丹羽哲也 (1992) 「過去形と叙述の視点」『国語国文』61-9 京都大学文学部国語国文研究室
- 丹羽哲也 (1996) 「ル形とタ形のアスペクトとテンス—独立文と連体節—」『人文研究』第48巻第10分冊大阪市立大学文学部
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』和泉書院
- 根岸正純 (1985) 「「写生文」の原質」『近代作家の文体』桜楓社
- 野田春美 (1997) 『「の (だ)」の機能』くろしお出版
- 野村眞木夫 (2000) 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房

- 野村眞木夫（2007）「テキストのタイプと人称のタイプ—願望表現と二人称小説を視座として」上越大学研究紀要 26
- 野村眞木夫（2008）「コミュニケーションの組織とテキストにおける人称」上越大学研究紀要 27
- バフチン・ミハイル著・北岡誠司訳（1980）「言語と文化の記号論」『ミハイル・バフチン 著作集 4』新時代社
- 林 四郎（1965）『漱石の読み方』至誠堂
- 林 四郎（1998）『文章論の基礎問題』三省堂
- 林 四郎（1962）『『坊っちゃん』の会話構成』『言語生活』1962 年 8 月号
- ハンブルガー・ケーテ著、植和田光晴訳（1986）『文学の論理』松籟社
- 福田嘉一郎（2001）『『タ』の研究史と問題点』『言語』12 月号
- 藤井貞和（2001）『平安物語叙述論』東京大学出版会
- 藤井貞和（2004）『物語理論講義』東京大学出版会
- 藤井俊博（2003）「物語文の表現と文末形式—芥川作品を通して—（上）」『同志社国文学』59 同志社大学国文学会
- 藤井俊博（2003）「物語文の表現と文末形式—芥川作品を通して—（下）」『同志社国文学』60 同志社大学国文学会
- 藤井俊博（2005）「物語テキストの視点と文末表現」『日本語学』第 24 巻第 1 号
- 藤城浩子（1996）「シテイタのもうひとつの機能—感知の視点を表すシテイター—」『日本語研究』88)
- 藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
- 船所武志（2005）「文章表現の場面論」四天王寺国際仏教大学紀要第 40 号
- プリンス・ジェラルド著、遠藤健一訳（1997）（初版は 1991）『物語論辞典』松柏社
- プロップ・ウラジミール著、北岡誠司訳（1991）『昔話の形態学』水声社
- ブース・ウェイン著、米本弘一、服部典之、渡辺克昭訳（1991）『フィクションの修辞学』書肆風の薔薇
- 保坂宗重・鈴木康志（1993）「日本語における体験話法」『体験話法（自由間接話法）文献 一覧—わが国における体験話法研究—』茨城大学教養部
- 前田彰一（2004）『物語のナラトロジー』彩流社
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志（1997）「表現の主観性」『視点と言語行動』くろしお出版
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 三尾 砂（1948）『国語法文章論』三省堂（『三尾砂著作集 I』2003 ひつじ書房）
- 三谷邦明（2002）『源氏物語の言説』翰林書房
- 三谷邦明（1996）『『羅生門』の言説分析—方法としての自由間接言説あるいは意味の重層性と悖徳者の行方』『近代小説の〈語り〉と〈言説〉 双書〈物語学を拓く〉2』有精堂
- 三島由紀夫（1974）『作家論』中央公論（初出は 1964）
- 南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 望月奈良江・熊倉千之（1987）「日本の近代小説に於ける語り手の視点」『日本語学』1987. 11

月号

- 森田良行（1989）（初出は 1977）『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行（1995）『日本語の視点』創拓社
- 森田良行（1993）『言語活動と文章論』明治書院
- 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 森田良行（2001）「確述意識を表す『た』」『言語』12月号
- 守屋三千代（1992）「小説の中の視点と文法一時制と相を中心に一」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』4
- 山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山岡 實（1997）「物語理論における「視点」再考」『感覚変容の記号論（記号学研究 17）』東海大学出版会
- 山岡 實（2000）『「語り」の記号論 日英比較物語文分析』松柏社
- 山口明穂（1972）「過去の助動詞」『品詞別日本文法講座 8 助動詞Ⅱ』明治書院
- 山口明穂（1989）『国語の論理』東京大学出版会
- 山口佳也（2011）『「のだ」の文とその仲間一文構造に即して考える』三省堂
- 山田良治（1957）「現代作家と代行描写」『言語生活』1957年9月号
- 山本雅子（1997）「パースペクティヴを反映する言語表現—前景・後景の表示マーカーとしての「タ」「ル」—」『表現研究』第66号 表現学会
- 吉田金彦（1971）『現代語助動詞の史的研究』明治書院
- 吉田茂晃（1988）「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15 神戸大学文学部国語国文学会
- 余弦・門倉正美（2000）「日本語の『話法』考」『横浜国立大学留学生センター紀要』7
- リクール・ポール著、久米博訳（1987）『時間と物語Ⅰ』新曜社
- リクール・ポール著、久米博訳（1988）『時間と物語Ⅱ』新曜社
- 研究社（2003）『応用言語学辞典』